

きみにとどくまで

3

Dolce

笹竹颯夜

1994年夏――。

ヒカルはたった今家まで送ってくれた勇斗と別れ自室に上がってきたばかりだ。

妹の久美子も高校生になり、姉妹で使っていた共同部屋はヒカル専用の部屋になり、久美子には別の一室を与えられた。六帖部屋のヒカルに対し、自分は納戸として使われていた四畳半部屋という待遇に最初は文句を並べていた久美子だが、今は初めての個室ライフを満喫しているようだ。

ヒカルも最初は広くなった部屋にのびのびしていたが、今夜みたいな日にはありすぎる空間がやけに寂しい。

カーテンを開き向かい側を見ても当然明かりはないし、遠くの空で星が数個キラキラしているだけだ。

「大久保くん、アパートについてかな...」

言葉と同時にため息も一緒に漏れた。朝のため息は幸せが逃げるけど、もうすっかり夜だしいいよね、と自分に言い訳をしてヒカルはもうひとつため息をつく――。

今日は久しぶりにあかねと約束をして、あかねが通う音大近くのレストランで一緒に食事をした。

高校卒業以来、電話はしていてもなかなか互いの新生活が忙しくて会えなかった。だから本当に久しぶりに会ったというのにあかねの顔が相当に暗かった。再会の喜びもそこそこに、食事の席はあかねの人生相談に移行していったのだ。

原因は颯土だった。

神戸に行った颯土は大学に通いながら光創社大阪支社勤務になっている純平の下でアシスタントの仕事を平行してやりはじめたが、それが不規則で忙しいようだ。あかねが颯土の学生寮に電話をしても、いつもつかまらないらしい。

学生寮の電話は緊急の時以外は夜10時までしかとりついでもらえない。いつかけても颯土はその時間はまだ学生寮に戻っていないのだ。

それなら颯土の方から連絡をくれてもいいものを、そこまでマメな性格でもない颯土とは5月のゴールデンウィーク以降、音信不通になってしまっている。

それだけではない。

「群竹くん、夏休みに帰って来ないんだって...」

あかねはつぶやいてベソをかいた。

「だって、夏休みには帰って来るからって約束してたじゃない？」

「純平さんとベトナムに行くらしい...」

「ベトナム？」

「何かの取材について行くみたい…。麻耶ちゃんから聞いたの。信じられる？夏休みっていったらもうすぐなのよ。それなのにそんな大事なことを連絡ひとつよこさないんだから…！麻耶ちゃんからそれを聞いた時の私の気持ち、ヒカルちゃんは分かる？！」

最初は感情を抑えていたあかねが、話をするにつれてだんだん激昂していった。

「分かるよ、分かる。私もヒビク先輩のアメリカ行きを雪乃先輩から聞いて知った時、今のあかねちゃんと同じ思いをしたから…」

あかねをなだめながらヒカルは、颯土が神戸に発つ前、あれだけマメに電話をしなよと釘をさしておいたのにしょうがないなあ…。とため息をついた。

「私は群竹くんに話したいこといっぱいあるのに、群竹くんは私に話したいと思うことないのかな」

と、あかねはショゲる。

「そんなことないよ。ただ、今は何もかも初めてのことばかりで忙しいだけだよ」

「それは分かっているけど、電話の一本も出来ないほどなのかな…。ヒカルちゃんは風間先輩に会えなくて寂しい？」

「そりゃ寂しいよ…」

響がアメリカに行って1年3ヶ月が経っていた。その間、ヒカルと響とは文字どおり全くの音信不通状態が続いている。ヒカルは響が今どこで何をしているのかを全く知らない。

「ヒカルちゃんはこのまま風間先輩を待ち続けることが出来る？何の連絡もくれない風間先輩を…」

あかねにそう言われてヒカルは一瞬戸惑った。やっと1年3ヶ月が過ぎたばかりで、響が日本に帰ってくるまではまだ4年近く待たなくてはならない。それも確かなものではなく、もしかしたらもっと先になるかもしれない。夢を持ち夢を追い旅立った響が、それを叶えたときに高校時代の響のままでいるとも限らない。

時の流れの中で人は変わって行くものだから。

「…今はまだヒビク先輩を信じてる。だから待っていたい」

響がくれた『Shine』と、卒業の日に「ヒカルの所に帰って来るから」と約束してくれた言葉を抱きしめて――。

「やっぱりヒカルちゃんは強いね。私はダメだな…。こんな状態のままじゃ寂しさに耐えられない…」

あかねの方は目を伏せてうつむく。

卒業して颯土との遠距離恋愛が始まって以来、きつとずっとこんなふうに沈みっぱなしなのだろう。

「もう少し群竹くんに時間をあげて。あかねちゃんの気持ちが分からない群竹くんじゃないはずだから」

「そうかな…。永遠に分かってもらえない気がするんだけど…」

確かに言えてるかも...と、こっそり同意するヒカルだったが、  
「大丈夫だよ！群竹くんだってあかねちゃんに会いたいが決まってるんだから！」  
力強く、まるで自分にも言い聞かせるように励ました。

だが、沈んでしまうあかねの気持ちはよくわかる。

離れていればいるほど会いたい想いはつのる。

ヒカルも何度もそんな想いをつのらせて時を刻んできた。今まで当たり前のようにそばにいた人、当たり前のように声が聞けた人。そんな人が手の届く場所からいなくなってしまう、会いたい想いに焦がれた時にそれが長い間叶わなければ、想いだけが先を走り自分はどこかに取り残された気持ちになってしまう。そうなった時はへこんだ気持ちを再び膨らませるのに相当なエネルギーが必要で、その繰り返しに心が疲れてゆく。

そうやって頑張っている時、ほんの一言でも声が聴ければ落ち着くのに...

――あの群竹くんじゃ、そーゆーの、気がつかないか...

あかねと別れて色々な想いを巡らせながら地元駅の改札口を出ると、

「ヒカルちゃ〜ん？」

後ろから声をかけて来たのは勇斗だった。

勇斗は大久保家を出た後、本城高校近くのアパートで一人暮らしを始めていた。以前、牛乳屋の前の横断歩道で助けたことが縁で出会った老婆、稲葉トメが経営する『ときわ荘』だ。勇斗の人柄に好感を持っていたトメは勇斗の境遇を心配して家賃は出世払いでかまわないからと、空いてる部屋を貸してくれたのだ。

「大久保くん」

「久しぶりだね〜。今日は随分遅い帰りなんじゃな〜い？」

勇斗とは近くに住み同じ駅を利用しているわりにはあまり会うこともなかった。勇斗は夜学の大学に通っているため、駅に降りるのはヒカルよりもずっと遅いし、朝は横浜まで通うヒカルの方が有楽町でアルバイトをしている勇斗よりも早く出る。

「あかねちゃんと会ってきたの。大久保くんはいつもこの時間なの？」

時計はまもなく11時を指すところだった。

「そうだよ〜。今日はまだ早い方なんだ。月、水、金、土は大学終わってからもう一働きしてくるから終電だし...」

「もう一働き？」

「そ。居酒屋で皿洗い」

「が...がんばるねえ」

ヒカルは感心した。学校に通いながらアルバイトをふたつ掛け持ちの勇斗は、もしかしたら颯士以上に忙しいのではないだろうか？駅に降りるのも早くてこの時間ということだし、夜の10時に颯士が寮に帰っていないというのも、勇斗を目の前にしたら納得できる。

「学費は奨学金でなんとかあったけど、いくら家賃タダでいいって言われても、やっぱりそーゆーわけにはいかないからね...」

と言いながら、勇斗はふらふら～とヒカルの方に倒れ込んで来た。

「ちょっと、大久保くん？大丈夫？疲れてるんじゃない？」

勇斗を支えたヒカルは無意識に勇斗の額に手を当てて熱の有無を確認した。

「大丈夫だよ～。疲れてるんじゃないんだ...。ハラへっちゃって...」

ヒカルちゃんやっさし～、と勇斗は自分の額にあるヒカルの手を両手で包んだ。

「ハラへった？大久保くん、食べてないの？」

ばしっ、と勢いよく勇斗の手を振り払い、顔だけは心配な表情で訊くヒカル。

「今日で3日目...。バイト代入るのあさってなんだよね」

勇斗はムゲにされた自分の手をさすりながらアハハ...と笑った。

「信じらんない！あさってまで食べないつもりなの?!」

ヒカルは一度は振り払った勇斗の手をつかんで駅前のコンビニに引っ張って行った。そして、いいよ、という勇斗を脇に押しつけ、弁当と菓子パン数種類とカップラーメン数個と牛乳を買い込んだ。

「女の子のサイフを見るのは嫌いなんだよ～」

「こんな時にカッコつけてもしょうがないでしょ！」

ヒカルはそのまま勇斗のアパートに向かった。

勇斗の部屋は六帖一間に猫の額のような台所がついていて、置いてあるものと言えば、粗大ゴミから拾ってきたような冷蔵庫と机だけだった。

「こんな時間に男の部屋に上がり込んだりして、ヒカルちゃんてば勇氣あるなあ...」

「相手が大久保くんじゃなきゃ私だってためらうわよ」

「ど～ゆ～意味だよそれ～？」

男として認められてないってことー？とわめく勇斗をあしらい、ヒカルは言った。

「とにかく、みそ汁ぐらい作るから大久保くんはそこに座って今すぐお弁当を食べて！お味噌はある？」

「冷蔵庫にたぶん干からびたのがあると思う」

冷蔵庫を開けると、言われた通り干からびてパックにへばりついている味噌がポツンとあった。その他に入っているものといえば、チューブのわさびとソースとキャベツだけだった。

「調味料しかないじゃない...」

「キャベツにソースかけて食いつないでたの」

「悲惨...」

ヒカルは味噌汁の具にキャベツを刻んだ。

「悪いね、ヒカルちゃん...」

勇斗はうつむきながらつぶやく。そんな姿はまるで勇斗らしくない。

ヒカルの心が痛んだ。

「いいよ。その代わり帰り送ってね。こんな時間に一人で帰るのが怖いから」

「了解！そんなことならお安い御用だ」

とりあえず交換条件に納得し、勇斗は弁当にかじりついた。そして一気に食べまくる。味噌汁が出来上がった時には、空になったパックがほうり出され、勇斗はパンの袋を開けていた。

「もっとゆっくり食べないと胃に悪いよ」

「分かってるんだけど体が要求するんだよ～」

勇斗はまた食べまくる。ヒカルは思わず苦い笑いを浮かべた。

「そうそう、あかねちゃんは元気だった？」

「ううん、元気じゃなかった...」

もちろん、`元気だったよ、という答えが返ってくるものだと思って質問した勇斗は、  
「へ？」

口にパンを持っていく途中の状態に固まっていた。そんな勇斗にヒカルは颯土のことを簡単に説明した。

「ふ～ん。群竹ちゃんもしょうがないな～」

勇斗は再びパンをかじる。

「でも男ってのはたぶんみんなそうだけ。何かに夢中になってたら待ってる人のことなんか忘れちゃうよ」

「うそお、大久保くんの言葉とは思えない」

どんなものよりも女の子が一番大事な勇斗なのに！

「ヒカルちゃんはボクのことをすご～く誤解していると思う」

そんなことはない。見かけや言動によっていない勇斗の本質は分かっているつもりだ。自分の信念のために3日もキャベツだけでしのぐ勇斗だ。今日、ヒカルに会わなかったらあと2日、キャベツだけの生活をするつもりだった勇斗だ。女の子が大好きということとそれとはあまり関係がないけれど。

「けど、音信不通はよくないよな。電話出来ないなら手紙とか...」

勇斗はそこで言葉を止めた。

「...よけい書くわけないか。群竹ちゃんじゃ...」

「大久保くんなら？」

「ボクなら書くよ？どうしても電話が出来ないって状態ならさ」

「あれ？大久保くん、なんか感じが違う...」

「ボク？」

「そうそれ！ボクなんて言い方、大久保くんじゃないみたい」

出会ってから卒業まで、勇斗の一人称は`オイラ、だったはずだ。

「一応大学生だしね。生まれ変わるためにも`オイラ、はやめたんだ。たまに間違えるけどね」

勇斗は、えへへと笑った。

生まれ変わるために、と言った勇斗の言葉が、笑顔とは対照的に重く感じた。

「帰ってこないのか、群竹ちゃん。夏休みのみんなでの再会はなくなっちゃったんだな...」

勇斗が視線を向けた先には、卒業式の日には颯土が写した背に翼を広げた記念写真が飾られていた。

たった3ヶ月の時が流れただけなのに、もう卒業式のころのあかねや颯土や勇斗じゃなかった。

いつまでも同じままじゃられない。そんなことは分かっている。

けれど、早すぎる。

あんなに仲が良かったあかねと颯土なのに、今は音信不通で颯土はあかねに何も告げずに純平とベトナムに行こうとしている。

勇斗は食べていくのもままならない生活をしている。夜学に通いながら昼も夜も働いて、それでも給料日前にはキャベツだけでしのがなくてはならない生活をこれからもしなくてはならないのだ。それが大久保家を出た代償だとはもちろん分かっているだろうし、だから平気なふりを見せていたが、ふっと伏せた目と体からにじみ出る雰囲気は孤独な寂しさを訴えていた。勇斗も相当参っている。

生まれ変わるために、と勇斗は言った。生活は変わっても生まれ変わる必要なんかない。勇斗は勇斗、あかねはあかね、そして、颯土は颯土のままでいい。

そのままいて欲しい。

そして――。

――男ってというのは、何かに夢中になってたら待ってる人のことなんか忘れちゃうよ。

そうなのだろうか。

だから、響はハガキ一枚も未だにしてくれないのだろうか。

響を待っている自分のことを、もう忘れてしまったのだろうか...。

勇斗が言った意味は違ったのだろうが、ヒカルは言葉そのものがショックだった。響から連絡が来ないわけを、ヒカルは今まで深刻に考えなかった。ただ夢中で夢を追いかけているのだろうと、そう信じているだけで――。

でも、

――ヒビク先輩の心の中に、もうあたしはいないのかもしれない...。

夢中になりすぎて、もしかしたら別の理由で...、待っている自分のことを忘れてしまったのか

もしれない――。

「そんなことはないよ...っ」

ヒカルは気を取り直し、サッと窓を開けて夜の風を部屋の中に招き入れた。そしてさっきからついているため息の分まで深呼吸をする。

向かいは颯土の部屋。

明かりのない真っ暗な部屋――。

「群竹くん...、あかねちゃんを忘れちゃったわけじゃないよね...？」

ヒカルは自分に言い聞かせるように一人そうつぶやいた。

三宮駅から異人館通りの方に向かうゆるやかな上り坂を少し歩いた所に、近専の男子学生寮はある。マンション形式の学生寮は玄関がオートロックになっていて門限というのはとくに規制されていない。玄関ロビーの横には管理人室があり、夜10時までは管理人が学生にかかってくる電話を取り次いでくれる。だが、10時以降は管理人も仕事を終え自室に戻り、電話も緊急用のナンバーに転送されてしまう。もちろん学生達も管理人室の電話が使用出来なくなるのだ。寮の中に食堂はあるが夜8時までしか営業していない。だが学生たちは、バス、トイレと冷蔵庫つきの個室を与えられているので、食堂や電話の利用時間さえ合えばかなり快適な寮生活が出来るはずだ。

午前0時30分――。

颯土は管理人室横にある伝言ボードに自分宛のメッセージメモが貼り付けられているのを見ると、それをボードから外して二階の自室へと向かった。

[――9時50分、ミズサワさんよりTEL有り。コールバックして欲しいとの事――]

メモには管理人の文字でそうあった。

机にカバンを投げ、そのままベッドに転がった颯土は腕時計の時間を見てため息をついた。

こんな時間じゃ今日もかけ直せない。

純平のアシスタントを始めてから息つくヒマもないほどの忙しい毎日が飛ぶように過ぎて行く。正確に言えば写真部のアシスタントであり、純平だけの手伝いをしているわけではない。4月5月は光創社が出しているスポーツ雑誌の夏の高校野球特集のため、大阪市、神戸市内にある高校の野球部を取材して写真を撮る仕事で忙しかった。そして6月から現在にいたっては大阪市内食べ歩きマップという企画雑誌の取材撮影の手伝いをしている。そして今月の下旬からはまた別の雑誌の取材でベトナムに同行することになっている。

学生と両立させるのはハードな毎日であり、自分が望んで写真科に入り望んで始めたアシスタントの仕事だとは言っても、一般的な生活から断絶されてしまっているような今の環境には颯土自身が一番参っていた。

あかねの声を聞かなくなって1ヶ月以上が過ぎてしまった。

毎日気にはなっている。だが電話をかける時間がない。寮に戻るのはいつも大体がこの時間で、もっと遅い日もしばしばある。夏休みに東京に帰れなくなったことも、ベトナムに行くこともあかねにはまだ話していない。

颯土は枕元のヘッドボードに飾ってある写真を手に取った。

卒業式の日、仲間たちと撮った写真だ。晴れやかな笑顔の仲間たちの背中には、薄いピンクの翼が羽根を広げている。

「あいつら変わらないかな...」

颯土はつぶやくと写真をヘッドボードに戻して目を閉じた。

大学が休みに入ったら東京に戻り、みんなと再会することになっていた。それを楽しみにして

いたのだ。

あかね、ヒカル、みんなの顔を見るだけできつとへこみにハマリ、道が分からなくなりそうである自分の軌道修正が出来るような気がしていた。

俺は、こんな毎日をこれからも続けて行くカメラマンになりたいのか――？

こここのところ毎日のように自問している。

記者と組み、与えられた取材の仕事に向かうだけのカメラマン。それがここでの現実だった。

純平は自分のテーマを持っているが、実際は自分の写真が撮れる余裕はないようだ。2年前の沖縄旅行は転勤を前にした有給休暇の消化として、奇跡的に取れた時間だったらしく、あれから純平も自分の写真展への夢には近づけていない。

まだやっと3ヶ月が経ったばかりだというのに颯土の心には早くも陰りが見えはじめている。

2年前の沖縄のような写真が撮りたい。自然にレンズを向けたくなるような被写体に出会いたい。風景でも人でもいい。自分が心から美しいと認め、言葉になるような写真を...

「あかね...」

あかねの声が聞きたい。

外に出て公衆電話から電話をしよう。時間は遅いけれどもかまわない。きっとあかねが真っ先に受話器を取るだろうから。テレホンカード、確か使ってないのが机の引き出しにしまってあったはずだ...

颯土は頭でそう考える。だが、体は起き上がろうとしてくれない。

さあ、行こう。

立ち上がってテレホンカードを持ってドアを開けてカギをかけて、あの角にある電話ボックスへ.....

颯土はそのまま深い眠りの底に落ちて行くのだった。

◇

「それはね、群竹くんがまだ自分がどんな写真を撮っていきたいのかというテーマが自分の中に確立されてないからだよ」

純平がタバコに火を点けながら言った。翌日深夜の資料室である。

「テーマがあれば、与えられた仕事の中でも自分の写真は撮れるものさ」

「そうですか？俺には純平さんにそんな時間があるとは思えないけれど」

颯土は写真を仕分けしていた手を止めて反論する。

「時間じゃないさ。自分だよ」

純平は煙を上吐き、あ、汽車ぽっぽが出来た、と笑った。

「自分...」

「そう。テーマがあればどんな時だって自分を見失わない。たとえ寝る暇がないほどに忙しく

ても、会社からあっち行けこっち行けと命令される取材撮影の仕事の中でもね」

「俺のテーマって...」

颯土はつぶやいてうつむいた。今までそんなことを考えたこともなかった。ただ、自分が撮りたいと思ったものを写真に撮ってきただけだった。ヒカルと響の写真も沖縄の風景もそれ以外に撮ってきた写真も全て...

「焦って探すこともないさ。たくさんの写真を撮っていろいろなことを経験して感性を磨いて、君という人間の厚みが増した時に、その触りの部分が君の琴線に必ず触れてくるから」

純平の言葉に颯土は考え込む。

「君は自分で意識してないだろうけど、もう何層も増して来てそのたびに自分のテーマに近づいているんだよ？」

純平はニヤリと笑った。

「ただ、それはまだ漠然としてる。見逃してる場合だってある。なかなか簡単には探せないさ」

颯土はうつむいた。純平の言うことが解かるようで解からない。そんな自分にイライラする。

「一朝一夕ってわけにはいかない。今はもがくしかないってこと」

はあ...、とおもむろに颯土はため息をついた。無理は分かっているが、すぐに答えを見つけない。そうしないと、このままペシャンコにつぶれてしまいそうだ。

「たとえテーマが見つかったとしても、それが最終地点ではないんだ。僕だってまだ試行錯誤を繰り返している。たぶん、これは一生続くね。僕は長い人生、最後の瞬間を迎えた時に、追ったテーマの自分なりの答えを見つけられればいいと思っているんだ。これは何もカメラマンとしてだけじゃない。人間として、ということかな」

純平が求める哲学がそこにあるのだろうか、と颯土は思った。純平が写真を撮るテーマは人間と人がいる場所。限られた空間で生きる人間を撮っているのだ。人が生きる場所には何らかの哲学がある。それを写真で表現したいということなのだろう。

颯土は今の自分を考えた。大学と光創社の仕事の両立という空間に生きている自分。ただ忙しいだけで心がどちらにもついていない自分。そしてそんな自分に空しさを感じている自分。そこに何の哲学があるのだろうか...

「大いに悩んだらいいさ。悩まない人間は成長しない。僕だって十代のころは群竹くんと同じだった」

「純平さんがですか？」

颯土は意外だというような顔をした。純平に悩みなんて言葉はまったくあてはまらない。

「僕だってただ無駄に年を重ねてるわけじゃないんだぜ」

純平はサマにならないウィンクを投げるのだった。

颯土がふと腕時計を見ると針は間もなく午前零時を指そうとしていた。しまった、今日もあかねに電話が出来なかった...、と颯土は思った。

だが、次の瞬間、

「純平さん、会社の電話使わせてもらってもいいですか？」

と、訊いていた。

今夜こそはあかねの声を聞こう。自分がそう決めなければいつまでたっても同じことを繰り返すだけだ。ベトナムに行くことも言わなければならない。

「いいよ。たまには彼女の声も聞かないとね。僕は編集部に行ってるからこの電話使いな」  
純平はデスクにあった電話機を颯土に寄せて、自分は資料室を出て行った。

ツーコール目であかねが出た。

『水沢です』

「俺...」

あかねの懐かしい声に癒されながらも、颯土は気まずい思いを隠せない。

『.....どちらさまでしょうか？』

あかねはわざと意地悪を言う。500kmも彼方の電話線の向こうで怒っているあかねの顔が目に浮かぶ。

「ゴメン...。ずっと電話できなくて...」

『.....』

「本当にゴメン...」

ただ、それしか言葉が出てこない――。

「...群竹くん、元気？」

意地の悪い言い方をして、あかねは少し後悔した。

毎夜、鳴らない電話機と睨めっこをしながら泣きたくなる気持ちと戦って来たが、今、久しぶりに聴いた颯土の声には張りがなく疲れている様子が伝わってきたからだ。ヒカルが言う通り、颯土は本当に忙しいのだろう。

『ああ。元気』

「それなら安心した...」

――ウソ...、心配でたまらない...。

『あかねは元気か？』

「うん。元気だよ」

――元気なわけじゃない...。つぶれちゃいそうに寂しかったよ...。

『俺、夏休みに帰れなくなった。純平さんとベトナムに行くことになって...』

「うん...、麻耶ちゃんから聞いている...」

『結野から？ああ...、純平さんか。なんだ...知ってたのか』

――そんな、安心したように言わないでよ...。

「どうしてベトナム？」

『トラベル雑誌の取材...らしい。ベトナムとカンボジアに行くんだ』

「危険な所じゃないの？」

『いや、そんなことないよ』

「どれぐらい行ってるの？」

『8月の半ばまでの予定らしい』

「そうなんだ...」

『うん...』

会話が途切れた。

颯土はそれ以上何も言わない。帰れなくなってゴメン、とか、ベトナムから帰ったら会いに行くとか、あかねが言って欲しい言葉は颯土の口から出て来ない。

通話口を手で塞ぎ、あかねは深いため息をついてから言った。

「残念だけどちょうどよかったかも。私も夏休み返上になりそうだから」

『え？』

「ミュージカル劇団の公演で売るCDで、ピアノを弾くことになったの。そのレコーディングが夏休み中にあるから」

『CD？すごいじゃないか、あかね』

「ぜんぜんすごくないよ。小さな劇団だから安く作りたいんだよ。ピアノ科に行ってる音大生を募集してたの。だから...」

——群竹くんが帰って来ない夏休みが長くて仕方ないから応募したの...。

『そうか。がんばれな』

「うん。群竹くんも気をつけて行ってきてね、ベトナム」

——帰ってきてよ...！寂しいよ...！会いたいよ...！

『また電話するから』

「うん。夜遅くても大丈夫だから電話して。声、聞きたいから...！」

『それじゃ、おやすみ』

「おやすみ...」

東京と大阪の受話器を置いた電話の前で、颯土とあかねは電話を見つめたままいつまでもたたずんでいた。

夕方になっても暑い陽射しが照りつけている。ただ、風が少し出て来たので日中よりは幾分涼しくなった。今年は例年にない異常な猛暑になるらしい。

ヒカルは被っている白い帽子が飛ばされないように手で押さえた。

明日から夏休み。このキャンバスとも、そして港の景色ともしばらくお別れだ。

隣のY大との境には緩やかな芝生の丘があり、その先からは遠くの港が見渡せる。

ヒカルはこの丘が好きだ。ここが気に入ったからこの短大に入ったようなものだ。ここから望める港の向こうに響がいる。果てしなく遠いけれど、でも繋がっている。そう思うことで、会えなくて寂しい気持ちが少しだけ休まる。

会えなくなって1年3ヶ月。

――ヒビク先輩は今ごろアメリカの生活になじんで自分の進む道をまっすぐに歩いているんだ。私のことはもう忘れてしまっているのかもしれない…。それでも、ヒビク先輩の夢が叶うのなら…。

遠くの港で出入りする船をぼんやりとヒカルは見つめた。

――そんなの嘘…。連絡が欲しいよ、会いたいよ、帰って来て欲しいよ、今すぐに！…って、本当の気持はいつだってこれだよ…。あたしも、あかねちゃんも…。

颯土が帰らない長い夏休みの時間を持て余すから、あかねはアルバイトでピアノを弾く。ミュージカル劇団のCD制作で8月はまるまるその仕事で埋まるらしい。

颯土が純平とベトナムに発つのはもうすぐ、今月の終わりだと聞いた。ベトナムに同行すると決めたのは颯土だ。行かないで、東京に帰ってこようと思えば出来ないわけじゃなかったろうに、颯土の心は自分の夢の方に向いている。

それは悪い事じゃない。夢を追うことはとても素敵なことだ。

けれど――。

「おーい、ヒカルー！」

手をふりながら丘の下から走って来たのは、同じ短大に在籍している石渡 海（いしわたりうみ）だった。

「やっぱここかー。ここ好きだよな、ヒカル」

海は、敷地を囲むフェンス前に立つヒカルの横に並んだ。

「さっき、中川亮太が探していたぜ」

海はジーンズのポケットの中から煙草を取り出し、慣れた手つきで火を点けた。

「中川くんが？なんだろ？」

「明日から休みになるからだろ？」

海はニヤッと笑う。

「何...、その笑い...」

と、ヒカル。

「しかし、あいつもオレの女に手を出そうだなんて100年早いぜ」

無然として言いながら、海は煙をヒカルに向かってフーッと吐いた。

170センチの長身で短髪。長い足にカッコよく決まっているジーンズ。男の子に見間違うが、海は女の子だ。

「もう、何言ってんだか、海ちゃん」

ヒカルはおもむろに右手を左右に降って煙を散らした。

「たぶんヒカルはここにいるな、って思ってたけど、亮太には教えてやらなかった」

入学式の日、女子しかいないはずの短大の講堂に、遅れて入って来たパンツスーツ姿の海はみんなの注目を浴びた。自分の隣に座った海を、ヒカルは遠慮なく見つめた。そんなヒカルに海は決まったウィンクを投げた。

『ここ、短大ですよ？Y大の講堂はあっちですけど...？』

ヒカルは海の惱殺ウィンクに少しドキドキしながら教えた。てっきり、大学の入学式に出る予定の男子が講堂を間違えたのだと思ったのだ。

『あ、いいのいいの。オレ、これでも女だから』

海は慣れた調子で答えた。

『え〜?!嘘っ!』

学長が挨拶をしている最中に、大声で叫んで立ち上がったヒカルだ。学長は、コホン!とヒカルに向かって咳払い。ヒカルはペコペコ頭を下げ、真っ赤になって座り直したのだった。

『プッ!』

と、海は噴出し、

『オマエ、めっちゃめっちゃ可愛いなあ〜!』

と、なった。それから海はヒカルのことを`オレの女、'と言っている。

海の本業は舞台役者だ。子供のころはCMにも出演していた。小さな箱からチョコレートボールを取り出し、上に投げて口に入れ、カメラ目線でニカッと笑うそのCMの中の`男の子、'がカッコよくて、ヒカルも小学生の頃はよく真似をしたものだった。

男の子よりも男らしくて恰好いい海に憧れのまなざしを向けている短大生が何人もいる中、ヒカルは海に`オレの女、'と呼ばれることに対して少しバツの悪さを感じている。

「明日から休みだけどさ、ヒカルの顔が見らんないと寂しいから電話してくれよな!」

「うん。でも、海ちゃんは稽古で忙しいんじゃない？」

「まあね。来月には公演もあるし。あ、ヒカルも見に来てくれな!」

海はヒカルの背中をぽーんとたたく。

「芝居かあ〜」

ヒカルは高校一年の文化祭を思い出した。高校の演劇部では色々なことをやってきたが、そこにはいつも傍に響がいた。

「...ライジングサンやっとな来た夜明けだから 昇ってゆこうどこまでも...」

響が作った歌をヒカルはつぶやくように口ずさんでいた。

「.....なんだい？その呪文みたいな歌は？」

音程というものがないヒカルの歌に、海はやや顔を引きつらせる。

「呪文ってヒドイ...っ！これは高校の演劇部で音楽劇をやった時のテーマ曲なの」

「ヒカル、演劇やってたの?!」

「うん。ちょっとだけね」

「嬉しいな！ヒカルが芝居をやってたなんて！」

「芝居ってほどのものじゃないよ」

「でも、嬉しいよ！さすがオレの女だ！」

「ちょっと海ちゃん、それマズイよお...。海ちゃんのファンの子たちの視線が突き刺さるんですけど...」

現に今も、丘の下で追っかけファンの子たちがこちらをじいっと見上げている。

「そんなの気にすんなっての」

海は豪快に言ってから丘の下に向かって惱殺ウィンク！きゃ〜っと黄色い声が青空に抜けていった。

「じゃ、オレはこれから稽古があるから先に帰るぜ。中川亮太につかまんなよっ！」

海はヒカルの肩をポンと叩いて丘を駆け下りて行った。その海とすれ違うようにして、ずっとヒカルを探していた亮太が丘を上がってきた。亮太が海に「よっ！、っ」と片手を上げる。海は後ろ向きで歩きながら、あ〜あ、という顔をヒカルに投げて、自分を通り越した亮太の背中に向かって、は一っと息をふきかけた拳を向けた。

「海ちゃんってば！」

「何？どうかした？」

亮太が振り向くと、海は大げさに両手を振りながらそのまま走り去って行った。その後を追っかけファンが追っていく。

「探してたんだせ、ヒカルちゃん」

亮太はヒカルの隣に立った。

「うん、海ちゃんから聞いた。なに？」

「明日から休みに入るだろ。だから、もう一度言っておこうと思って。しつこいようだけど、俺、ヒカルちゃんが好きだよ」

亮太は唐突に言って爽やかに笑った。亮太にこの言葉を言われるのは何回目だろう。今年の正月に一緒に行った初詣で初めて告白されたとき、ヒカルは自分の気持ちを亮太に伝えた。その時、亮太は入学してからまた告白すると宣言し、その言葉どおり入学式の日には再び亮太から交際を申し込まれた。だが、その時もヒカルの気持が変わっているはずもなく今に至る一一。

「こうやって毎日同じ大学でヒカルちゃんに会える事、俺はラッキーだって思ってる」

亮太の少し茶色がかかった髪が風に揺れる。顔は笑っているが目は真剣にヒカルを見つめていた。

「ありがと。でも、私はヒビク先輩が大好きなの」

大好き、という言葉に、ヒカルは心を込めた。離れていても会えなくても自分は響が大好きなんだ。その想いは高校時代からちっとも変わっていない。そればかりか、日に日に募っていく。

――まだ、こんなにもヒビク先輩が好き。

「ちえっ！まーたフラレたかあ！」

亮太は両手を頭の後ろに組んでふくれっ面をしてみせた。

「たいした奴だな、ヒビクセンパイは。一度会ってみたいよ」

「私だって会いたいよ...」

ヒカルはポロリと本音を口に出した。

「あのさ、それって俺にとっちゃツライひとことっす...。イジケちゃうっす...」

「ああ...、ごめん」

「なあんてね！俺はヒカルちゃんのそーゆー真っ直ぐなところも大好きだなあ」

亮太は笑った。真夏の太陽の下で亮太の顔は明るく輝いて見える。その爽やかな笑顔を見るとヒカルも何故か安心するのだった。

「まだ帰らないの？」

と、亮太。

「うん、もう帰るよ」

「じゃ、駅まで一緒に行こう」

ふたりは一緒に丘を降りた。時々港を振り返りながらヒカルは歩く。その横顔を亮太は見つめる。目をそらさずにひたすら見つめる――。

「もう...っ、穴が空く！」

ヒカルが頬を膨らませ、亮太より前に出て先を行った。

「しょーがないじゃん。見ていたいんだからさー」

「見物料取るよ？」

「シビアだなあ...、ヒカルちゃん」

軽口を言いながら後を追いかけても縮められないヒカルとの距離。毎日会えるけど、手を伸ばせばいつでも触れられるけどこんなにも遠い――。

――あいつに友達以上を求めるのはよせ。

いつか、颯土に言われた。それでもヒカルをあきらめられない。ヒカルの心はヒビクセンパイから離れることはないとわかっているけど、`好きだ、`と言わずにはいられない。

そんな自分が滑稽だから、笑ってごまかしてしまうけれど本当は――。

「あ～っ！」

ヒカルが突然叫んだ。

「え？」

ヒカルが被っていた白い帽子が風に飛ばされコロコロと転がって行った。亮太は素早く身を翻すと、転がる帽子の後を追いかける。

――待ってくれ！

心の中で叫ぶ。

だが風は悪戯にヒカルの帽子をさらっていく。まるで見えない手が捕まえているように。

亮太が手を伸ばしてつかもうとしたその時、白い帽子はふわりと空に舞い上がると、柵を越えて港のある空の方に飛んで行った。

猛暑と言われるだけあって8月になってからの暑さはひどいものだった。毎日の気温が36度を越えている。おまけに水不足が重なり各地のプールは営業を自粛しているし、水まきでさえも自粛ムード。

日中は出歩けない程の暑さの中、あかねは毎日CDのピアノを弾くために青山のスタジオまで通っている。もともと痩せているあかねが、ここ一週間でさらに3kgも体重が落ちた。

CDに収める曲数は小曲も入れて20曲。その全てにピアノが入る。

楽譜を渡されてから実際の収録までに時間がかかる上に、なかなかOKを出してもらえないので一曲仕上げるのにまる1日かかってしまうこともあるのだ。それで日給が5千円だから割りに合わないアルバイトだが、あかねはそれでよかった。家にいても暇を持て余すだけだから――。

劇団員の歌と一緒に合わせて収録をするのかと思っていたあかねだったが、オーケストラと歌は既に収録してあった。ピアノは先に録ったそれらにかぶせて弾く。エンジニアやスタッフは別室にいるのであかねはたったひとりのスタジオでピアノを弾いた。

その日の機材室には、いつものミキサーともうひとり、アシスタントのような若者がいた。

それが、高校時代の軽音楽部の先輩だった田村優作だとあかねが気づいたのは収録が終わってからだった。

だが、田村の方はもちろん最初からあかねに気がついていて、大学生になって大人らしく、そして美しくなったあかねを機材室から見つめていた。

偶然の再会を喜び合ったふたりは、スタジオの側にあるレストランで一緒に食事をした。

テーブルの上にふたり分のパスタと田村が注文したビールが運ばれて来た。

「田村先輩がビール飲んでる…。嘘みたい」

あかねにとって田村は購買部や牛乳屋で珈琲牛乳を飲んでいて印象が強い。

「はは…。けど法律違反はしちゃいねーぜ？ハタチだから俺、あと一週間で…」

「先輩、それじゃ違反してますから…」

「あははっ」

「もう、先輩ったら、全然変わってないですね！」

照れくさそうに笑う田村を見て、あかねはホッとす。

昔からそうだ。田村が傍にいと安心する。

しばらくぶりに会う田村は、相変わらず肩まで伸びた髪の色を明るく染め、音楽に携わる仕事をしている人、という雰囲気漂っている。実際の田村はまだ、レコーディングエンジニアの専門学校に通う学生ではあるのだが。

「群竹とはうまくいってる？」

食事が少し進んだ頃、田村はやや唐突に訊いた。

「はい。おかげさまで」

「それはよかった…。あかねが幸せそうで安心したよ」

「田村先輩…」

高校時代、田村はずっとあかねを想っていた。だが、それをひとも口には出さなかった。颯士を想うあかねをじっと見守っていたのだ。

「しかし、こんな再会も不思議だなあ…」

ビールグラスを空にしてから田村はポツリと言った。本当にそう思った。再会の場所はレコーディングスタジオ、自分の畑だ。まさか、あかねが弾くピアノのレコーディングを自分が手伝うことになるなんて思ってもいない偶然だ。

「本当ですね。でも、私はそんなでもないかも」

「え？」

「だって、田村先輩がミキシングの学校に行ってることは知ってたから、ミキサーという言葉を知ると、一番最初に思い出すのは田村先輩のことだもん」

「へえ…。そいつは嬉しいな」

「だから、今回のバイトでも機材室を見るたびに田村先輩もこういうことやる人になるんだな～って思ってた」

パスタをスプーンの上でクルクル巻くあかねの仕草を、田村は優しい眼差しで見つめる。

「あかねが俺のことを忘れないでくれたなんて嬉しいぜ」

「忘れるはずないじゃないですか。軽音の先輩たちのことはみんな…、」

と、言いかけて、あかねは響が今どこで何をしているのか、親友の田村ならその消息を知っているかもしれない、と思った。

「田村先輩…、あのね…、」

あかねは、田村たちが卒業してから現在までのことを話した。ヒカルは響からももらった曲を大切に心に抱きしめ、ずっと響の帰りを待っている、ということも。

「そうか…」

最初の数ヶ月は響から時々田村のところに便りがあったという。だが、ここ1年連絡は取り合っていないらしい。

「あいつはあっちの音楽スクールに入ったんだよ。あいつのピアノは独学で覚えたものだったから親父さんに勧められたって言ってたぜ」

響がアメリカで音楽の勉強をしようと思ったきっかけになったのは、高校3年の夏休みに参加したジャックのコンサートツアーだった。一流のアーティストである父親を目の当たりにして大きな刺激を受けた響は、ジャックのいるアメリカで音楽を磨き、ピアニストになる夢を持った。その時ジャックに未熟な技術を指摘され音楽学校への入学を勧められたらしい。

「その音楽スクールって？」

「ボストンにある音楽学校さ」

「ボストン…、もしかしてエバ・グレイスの？」

「ああ、何て学校だったかなあ、確か…」

「ボストン音楽アカデミーですよ？ジャズピアニストだったエバ・グレイスが設立した学校」

「そうそれ！さすがあかね、詳しいな」

「何年か前にはうちの大学からも留学した先輩たちがいたみたいですから」

ボストンには他にも音楽大学があるが、ボストン音楽アカデミーは多くの人気アーティストを輩出しているという学校で有名なところだった。アメリカに行った響がそういう学校にいるということは、あかねには物凄く自然なことのような気がした。

「風間先輩はまだそこにいるんですね？」

「たぶんな」

「風間先輩の住所、教えてください！」

あかねは身を乗り出した。一刻も早くヒカルに教えてあげたい！

「それはいいけどさ、あかね...、」

田村はあかねの顔を見つめた。そして、

「俺に聞けばヒビクの居場所は分かるなんてこと、ヒカルは分かってたんじゃないかな」

と、つぶやくように言った。田村もヒカルがすぐに響の消息を聞いてくると思っていた。だが、卒業してから今までヒカルからは一度も連絡がない。

響のアメリカ行き知ったときのヒカルは取り乱し泣きながら自分の元にやってきた。だが、あの粉雪の舞う歩道の上で抱き合ったヒカルと響は、あの瞬間に互いのその温もりを信じて未来に生きようと決めたに違いない。響は、あえてヒカルという光を断ち切っていつか田村に語ったように自分を磨くために夢を追い、ヒカルはそんな響の想いを受け止めて。だから、ヒカルから自分のところに響の消息を訊ねる連絡がないのだろう、と田村は思っている。

田村の言葉にあかねはハッとした。

そうだ...

ヒカルが望んでいるのは響の方から届く便りなのだ。夢を追ってアメリカへひとり発った響の成功と帰りを、ただただ、ヒカルは待っているだけの立場であるということを...

「ヒカルちゃんはあるのに風間先輩のこと信じて待っているのに...。1年以上も便りをくれない風間先輩を...」

自分のことではないからこそ、余計に焦（じ）れる。

あかねは手にあるスプーンとフォークを、そっと皿の上に放した。

「...まあ、ヤツにはヤツの考えがあるんだろうがな。とりあえずヒビクの居場所は教えておくよ。俺からもヒビクに連絡してみる。ヒカルが待ってるってこと、ヤツに教えてやらにゃ」

「おねがいします」

田村と響のような親友同士なら、たとえ長い間音信不通になっていたとしても焦がれる寂しさなど募らずに、それでもかけがえのない者同士として信頼し続け合えるのだろう。

なのに、どうして恋人だとそうはいかないのだろう、とあかねは思った。信じていても、会えないのはつらい。寂しい。不安につぶされそうになる。

それはヒカルだって同じはずだ。

でも、待つと決めたのはヒカル。響は待っていてくれ、と言ったわけじゃない。見えない、手

の届かないところにいる響を、ただ何年も待ち続けることを選んだのはヒカル自身…。

それをヒカルが一番よくわかっているから、田村から響の連絡先を聞き出そうとはしなかったのだろう。

「なんてせつないんだろう…」

あかねは今の自分とヒカルの気持を重ねて辛くなった。颯土だって先月ベトナムに発ち、今、そこで毎日をどう過ごしているのかわからない。それ以前から颯土とは連絡も滞りがちで心がかみ合っていない寂しさをずっと感じている。

ただ、自分はまだいい。

颯土は今月中には日本に帰ってくるし、神戸の居場所も、そこで颯土が何をして生きているのかも分かっているから。

ただ、会いたいときに会えないというだけで…。

「あかね…」

あかねの顔をのぞきこむようにして田村が言った。

「お前…、大丈夫か？何かあったんじゃないか？」

高校の時から変わらない、優しい田村の目――。

「…先輩、」

「ん？」

「風間先輩、ヒカルちゃんを忘れちゃってるわけじゃないですよ？」

忘れて欲しくない。いつまでもずっと、あの時のままの気持でい続けて欲しい。

響も、そして颯土も――。

「当たり前だろ。ヒビクがヒカルを忘れるはずないさ。それだけは自信持って保証できるぜ」

響のヒカルへの想い、そして苦悩を田村は知っている。ヒカルのために、ヒカルを本当に抱きしめるために響はアメリカに行ったようなものだ。

田村の言葉があかねに少しの勇気と自信を蘇らせた。会えなくても心が離れてしまっているわけじゃない。今は、信じて待てよう。辛くても、寂しくても…。

あかねは田村を見てにっこりと微笑んだ。

「ヒカルー、本当に出かけるの？この暑さよ」

午前中だというのに、気温は既に30度を越えていた。冷房の効いた部屋の中でさえも汗ばむ程の暑さの中、額に汗をにじませながら外出の支度をしているヒカルに母親が言った。

「うん。海ちゃんと久しぶりの約束なの」

昨夜海から、午後から時間が空くから会おうという誘いの電話があった。2週間前、海の舞台公演を見に行っていて以来だった。今、海は新しい舞台の稽古に忙しい毎日を送っている。その稽古が終わる午後3時に、稽古場近くのバーガーショップで待ち合わせをしている。

「ちゃんと帽子を被って行きなさいよ。今朝の新聞にも日射病で亡くなった人の記事が載ってたんだから」

「わかってるって。あ～、でもお気に入りだった帽子がこの前飛ばされてなくなっちゃったからなあ...」

「ゴムをつけてないからよ」

「通園帽じゃあるまいし、つけないでしょ、普通...」

と、ヒカル。

「あらそう？私の帽子には全部ゴムがついてるわよ」

「そりゃ、いつも自転車で駆け回ってるお母さんの帽子にはねえ...」

「貸してあげようか？」

「いえ、遠慮しておきます」

ヒカルはニマッと笑うと、身支度の続きをはじめた。

いつもバタバタとにぎやかだった浅倉家も、こここのところ随分と落ち着いてきた。大学4年になった兄の剛は今就職活動の真っ最中で朝早く家を出るか、そうでないときは一日中寝ている。妹の久美子は高校1年生になり毎日体操部の部活に忙しい。弟のやんちゃな哲平も小学2年生になってだいぶんお兄さんらしくなってきた。本当なら毎日区民プールに行きたいところだが今年の水不足でプールも営業を自粛中。仕方がないから学校のプールで我慢している。

「そういえば、この間、颯土くんのお母さんと久しぶりにお茶したのよ」

「おばちゃん、元気だった？」

居間の鏡の前で顔にパフを当てていたヒカルは、鏡ごしに母親の顔を見た。

颯土の父親は2年前からずっと単身赴任中であるため、春に颯土が神戸に行ってしまうから隣の家では母親がひとりで暮らしている。さぞかし寂しい思いをしているだろう、とヒカルは思っていた。が、

「元気元気！ひとりの時間を十分楽しんでいるわよ、颯土くんのお母さんは」

という、母親の言葉に、

「え？」

ヒカルはパフを顔に当てたまま、しばしその動きが止まった。

「いつまで続くか分からないひとりの時間を大事に使いたいんだって。最近になって点字を習い始めたらしいの」

「点字...？」

「本を点字に訳すボランティアをやるんですって」

「どうしてまた？」

「そろそろボランティアという活動をやらなければいけない年齢に達した、なんて言ってたわよ」

「すごいな、おばちゃん。お母さんも一緒にやったら？」

「あらそうねえ。やってみようかなあ...」

母親はたった今、気がついたように言う。

「ひとりの時間を大事に使うか...」

独り言のように呟いてから、ヒカルは途中で止まっていた化粧の仕上げをするのだった。

家の外に出ると、息がつまりそうなほどの空気がヒカルを襲った。

「あつーい...」

ヒカルは肩を落として空を見上げながらつぶやいた。駅まで歩いて行くのがおっくうになり、自転車を出そうとしていたとき、

「あら、ヒカルちゃんじゃない！」

張りのある明るい声で声をかけてきたのは颯土の母親だった。颯土の母は、今外出から帰ったばかりでヒカルとは逆に自転車を家の門の中に押し込めようとしているところだった。

「おばちゃん！」

隣に住んでいながらも、ここのところ全くといっていいほど顔を合わさなかった颯土の母は、白いブラウスに白い帽子を上品に被り、だが顔は暑さのために真っ赤にほてっていた。それがまた、健康的に明るく見える。

「元気にしてた？たまには遊びにいらっしゃいよ」

「はい。でも、おばちゃんも忙しいってお母さんから聞いたよ」

「ふふ。最近点字を習いはじめたのよ。今日も行ってきたんだ〜」

颯土の母はにっこりとほほ笑んだ。そんな笑顔を見て、ヒカルはうれしくなった。

「もう年だしね、今までは自分の家のことだけで精一杯だったけど、そろそろ人の役に立てる何かをやらなきゃって、突然思いたっちゃったのよ」

「それがすごいよ、おばちゃん。うちのお母さんだったらそんなこと思いつかないと思うよ」

「それはそうよ。だって、ヒカルちゃんの家にはまだまだ手のかかる哲平ちゃんがいるんだもん。私だって颯土が小学生のころはこんなことやろうなんて思いもしなかったわよ」

確かにそうかも...、うちのお母さんが自分の時間を自由に使えるようになるのはあと何年先かな、とヒカルは思った。

「ひとりって寂しいなって思っていたんだけど、今はすごくありがたいの。こんな時間をくれた

旦那や颯土に感謝しなくちゃね」

ありあまる時間を無駄に過ごすのも価値ある時間にするのも自分自身、と、颯土の母の笑顔が語っていた。

「おばちゃん、すごくキレイだよ！」

「うふふ。そうでしょう？」

ふたりは同時にけらけら笑った。

◇

「海ちゃん遅いなあ...」

約束の3時を30分も過ぎていのに海はまだ現れない。飲んでいたアイスコーヒーの紙コップが、生ぬるい水滴をつけてふにゃふにゃになっている。

海の稽古場は向かいのビルの三階にある。ヒカルは様子を見に行くことにした。

「いしわたりーっ！」

階段を三階まで上りきらないうちに、男の厳しい怒鳴り声が踊り場まで響いてきた。ヒカルは立ち止まって思わず肩をすぼめた。

「このへボ役者っ！お前なんかやめちまえーっ！」

――なんてひどいことを言う男だろっ！

ヒカルは腹が立ち、足音を忍ばせながら階段室からフロアに出た。

稽古場のドアには小さなガラスがはめ込まれていて、そこから中が見えるようになっていた。殺風景なピータイルの床の上に長机がひとつ。その前に男がひとり座っている。サメのような目付きの悪い、いかにも意地悪そうな顔の男だった。

真っ黒なTシャツとスパッツ姿で汗だくになった海が、その男の目の前に突っ立っていた。他の劇団員たちは少し離れた後ろのほうにかたまり、じっと海を見守っているようだ。

「お前は不感症か？！もっと感情をぶつけてみる、ばかやろうっ！」

「オレはオマエが好きなんだ――っ！」

海は全身を震わせながら叫んだ。

「だめだめだめ！ただ叫べばいいってもんじゃないだろ！それじゃただガキがカッコつけてるだけだ！バカっ！」

男は台本らしきものを海に投げ付けた。それが海の左頬をパシリッと打った。

「海ちゃん！」

ドアの外で見ていたヒカルは思わずガラスに顔を押し付けていた。

「今日はもうやめだ！」

男はガタンと椅子を蹴って立ち上がり、隣の部屋に行ってしまった。海はその場でうつむいた

まま動かない。肩が小刻みに震え、両手の拳を固く握り締めている。劇団員たちはそんな海の肩をポンとたたきながら、さっき男が入って行った部屋に消えて行った。それでも海は立ったまま動かなかった。

「海ちゃん...」

「オレはオマエが好きなんだ——！」

突然、海が叫んだ。そして、激しく首を振りもう一度、

「オレはオマエが好きなんだ————！」

と、叫ぶ。

何度も何度も同じ台詞を叫ぶ海。

「クソ！」

海は拳で空気をたたき、がっくりと膝間づいた。

普段、大学で会っている海とは全然違う海がそこにいた。怒鳴られても台本を投げつけられても前に出ようともがくそんな海の姿を見て、ヒカルは自分の心のどこかがうずくのを感じていた。それが何なのか、どうしてなのか、説明のつかないその感情。

海はヒカルには気がついていない。ひとりきりになった稽古場の、床についた両手の上にぽつりぽつりと涙の粒が落ちる。

「泣いてんじゃねーぞ、オレ！」

海は自分自身に言って気合を入れ直すと、もう一度さっきの台詞を叫んだ。その真剣な海の姿を見ていたヒカルも涙が溢れた。たったひとりで汗まみれになって、たったひとことの台詞を何度も繰り返す海。

「海ちゃん、私、海ちゃんが来るまでずっと待ってるね...」

ヒカルはそっとつぶやいて稽古場をあとにするのだった。

「ごめん、ごめん、ヒカルー」

海がやってきたのはそれから1時間ほどしてからだった。

「ずっと待っててくれたんだな！サンキュー！」

海はヒカルの向かいの座席に座った。

「稽古が長びいちゃってさ！ほら、何たってオレ今度の舞台の主役だから！...って、待たせすぎだよな。ホント、ゴメン！」

鼻の下を指ですする海はいつもの海だった。

子どものころから続けて来た芝居で、ようやく手に入れた初めての主役だと海は昨日の電話でうれしそうに言っていた。

だが、夢だった主役をつかんでもそれで終わりじゃない。まだまだ悩み、苦しみ、悔し涙を流しながら、それでも必死に前に進もうとしている。

——夢って何だろう？

ヒカルはふと思った。

響も颯土も、自分の夢に向かって旅立って行った。やりたいこと、自分の可能性、将来の自分...、それぞれの目標が夢なのだろうか。

今までただ漠然と「夢、という言葉聞いていた、ということにヒカルは気がついた。時間が経てばそれは手に入るものだと思っていた。いや、思っていたわけじゃないが、そう信じて疑っていなかったのかもしれない。

けど、そうじゃない。

そんな簡単に夢は手に入るものじゃない。それをさっき海の姿を目の前にして実感した。叶うまで、何があってもどんな屈辱を受けても涙を吞んで耐えて続けてひたすら前に進んでゆく。

それが、本当に夢を追う、叶える、ということ——。

「ヒカル、どうした？」

海がヒカルの顔をのぞき込んだ。

「海ちゃんはさ、どうして役者をやってるの？」

「どうしてって...、何だよ、急に？」

「うん。ちょっと聞きたくなかったの」

うーん...、と海は腕を組んで考え込んだ。キッカケは幼い頃に親に入れられた劇団だが...

「自分がキライだからかな...」

海は少しさみしげにほほ笑んだ。

「海ちゃん、自分がキライなの...？」

ヒカルは少なからずのショックを受けた。元気で明るい海が自分をキライなどと言うなんて、

と。

「ヒカルはさ、自分が好きだろ？」

「うん。そりゃ、嫌なところだってあるけど、キライだって思ったことはない...かな」

「ソレ、すごくよくわかるよ。ヒカルはヒカルのままで魅力的だもん！だからオレはヒカルが好きなんだ。でも、オレはさ...、」

海は煙草に火をつけた。

「オレはオレのままじゃ、すっげーつまらない人間なんだ。っていうか、オレのままのオレってどういう奴か実はわかんない。そんな自分がキライなわけ」

ヒカルは、立ちのぼる煙草の煙の行方を目で追いかける。

「役者ってさ、いろんな人間になれるだろ？こないだやった芝居なんかさ、登場人物が全部ペンギンだったじゃん？」

「うん」

ヒカルがはじめて見に行った海の芝居は、現実社会をペンギンが生きていたら、という仮定で作られた芝居だった。

「普通、ペンギンの気持ちなんか考えて生きてないだろ？あん時の芝居はおもしろかったなあ。オレ、毎日ペンギンのつもりで生きてたもん。こんな時ペンギンだったらどう思うのかな、とか考えちゃって」

海はアハハと笑った。

「自分を探すって言っちゃカッコつけすぎてるけど、芝居をやって役者をやりつづけて行く先にオレの本当の夢があるんだと思ってる。そこに本当のオレもいるような気がする」

夢――。

「私も夢見たいなあ...」

「ヒカルはヒカルのままで夢だと思うけどな。周りを照らす太陽ってとこかな！」

「それとおんなじこと、前に言ってくれた人がいた...」

――ヒカルは周りをうんと照らしながら後戻りしないで昇って行く太陽だな。

響が言った言葉を思い出す。

「でもさ、ここ最近のヒカルはさ、ちょっと元気がなかったから心配してたんだよね」

海は煙草を灰皿でもみ消してヒカルを見た。

「え？私、元気がなかったかな？別にいつもと同じだったけど...」

海の言葉に驚いたのはヒカルだった。海に心配をかけるほど、元気がなかったつもりは全然ない。

「ヒカルは正直だけどさあ、どっか無理してるところがあるよな。ここ最近のヒカルってちょっと寂し気だったぜ。理由なんか聞くんもりはないけどさ！」

海の言葉にヒカルは思わずうつむいた。響に会えない寂しさと連絡がない不安。それがいきなり押し寄せてきたのは夏休みに入る前に、勇斗が言った言葉を聞いてからだ。

――男ってというのは、何かに夢中になってたら待ってる人のことなんか忘れちゃうよ。

考えてもみなかったその言葉を聞いた時のショック。それからの不安な毎日…。今まで以上に響のことばかりを考えていた自分だった。今、どこで何をしているのか、何を思いどんな生活をしているのか、と。

だから、ボストンの有名な音楽学校にジャックの紹介で入り、今もそこで学んでいると、あかねが田村から聞いてくれた消息に安心した。響はちゃんと夢を追い、夢に近づいているんだ、と――。

あかねから手渡された響のアドレスに、手紙を出そうと思えばいつでも出せる。寂しくて寂しくてどうしようもなくなったら、いつでも出せる。

でも、それは――。

ヒカルの目から一粒の涙がこぼれ落ちた。

「ヒカル...?!」

驚いた海が、半分腰を浮かして叫んだ。

待ってる人を忘れるぐらい夢中にならなければ夢にはとどかない――。

響から便りが無い理由がヒカルには分かったような気がした。さっきの海のように響もアメリカでひとり、涙を呑みながら時間を忘れるくらいにピアノに向かっているのかもしれない。アメリカに行ったからといって有名な学校に入ったからといって、簡単にピアニストになれるわけじゃない。そこにどれほどの苦悩があるのか自分はまったく知らない世界のこと――。

ただ待っていれば、5年経てば響は帰ってくると、ピアニストになって自分のところに帰ってくるって思っていた。響が帰って来た時には高校生の時のままの自分で響の胸に飛び込みたいと思っていた。それがヒカルが見ていた`夢、だった。

でも、多くのハードルを乗り越えた時の響は、きっと昔の響じゃない。変わっていないのは時間を止めているのはたぶん自分だけだ。

このまま、ここで立ち止まったままで待っていちゃいけないのかもしれない。

待たない方が、互いのためかもしれない。

涙が溢れて止まらない――。

「...海ちゃん、ごめんね。いつか話すね。でも、今はまだ言えない...」

ヒカルは溢れる涙を払った。今は海に何をどう言ったらいいのかわからない。自分の気持ちに自分の心がついていかない。

でも、今、気がついてしまったから、わかってしまったから....、

――もう、ただ待つのはやめよう…。

ヒカルはそう自分に言いきかせた。心の中から響がいなくなるとは思えないけど、いなくなって欲しいとは思わないけど、でも、ここで自分が止まっていたら、響が帰って来た時にはきっと大きな壁が出来ている。

時間をただ過ごすのも、価値あるものにするのも自分自身…。

――ヒカルは周りを照らしながら昇って行く太陽だな！

響が言ってくれたこの言葉どおり、いつもライジングサンの自分でいよう。後ろを見ないで前を見つめて…。

ヒカルはそう思いながら、最後の一粒の涙をこぼした。

「あいつ、落としたらしいぜ」  
「最近、すさんでるよな、あいつ」  
「付き合いも悪いし、何考えてんだ？」  
「あの噂は本当なんじゃないのか？」  
「まさか、だったらもう少しマシなはずだぜ」  
「噂をすればなんとやら...」

ヒソヒソ話すその一団が視線を一箇所に向けた。前かがみにうつむきながら、足元に落ちている何かを探るように歩いていた響は、自分を見つめている集団に視線を上げた。だが、すぐに顔を背けてその横を通り過ぎようとした。

「おいキョウ、今夜のパーティーには出席するんだろ？」  
集団の中にいたロジェが響の腕をつかんで立ち止まらせた。  
「パーティー...？」  
「進級パーティーだよ」

響の目が鋭くロジェを刺した。  
「何言ってるんだよ、ロジェ。キョウは進級できてないんだぜ」  
「ああ、そうだった！悪かったな、キョウ～！」  
ロジェは大げさに自分の頭を叩いてから響の肩をポンと叩く。  
「ま、追試もあるらしいから力を落とすなよなっ！」  
ロジェの言葉を最後まで聞かずに響は歩きだした。後ろではロジェたちがくすくす笑っている。響は思わず拳を固く握りしめていた。

ボストン音楽アカデミー――。

元国際的ジャズピアニスト、エバ・グレイスが学長を勤め、ヴォーカル科、ピアノ科、サクソ・フルート科、ギター科、作曲・編曲科を構成する音楽学校だ。30年の歴史の中で多くの有名人気アーティストを輩出しているため、世界各国からアーティストを目指す若者たちが学びに来ている。

響が在籍しているのはピアノ科のマスターコース。基礎から実践までのカリキュラムを最短2年で修了し、その後は実技をより強化するセレクトティブコースに進み1年間を学ぶ。各カリキュラム終了時には当然試験があり、その試験に合格できた者のみが次のカリキュラムに進級できるシステムになっている。

今、響は現実の厳しさを実感していた。今まで自分がやってきた音楽は子どもだましかったということも思い知らされていた。ここに集まっている連中のレベルの高さは半端なものではない。

天才と言われていた自分が滑稽だった。自分ぐらいの人間はごろごろいるし、それ以上の実力者の方が圧倒的に多い。

ずっと独学でピアノを弾いてきた響にとっては、基礎と言われるものについていくことでさえ容易ではなかった。この1年半の間で何人もの学生が挫折して辞めていった。マスターコース修了の最短期間は2年。カリキュラム単位を落としたのは今回が初めてではなく、響は既に3ヶ月の遅れをとっている。このままではセレクトティブコースに進むのにあと1年もかかってしまう。響の心には焦りと不安、そして挫折感が充満していた。

そして。

自分がジャック・ベリーの息子であるという事実は、響もジャックも公表していない。それが最近になって学内で噂されはじめている。ジャックはボストン音楽アカデミーの卒業生でもあり、学長のエバはジャックの師だ。響にこの学校を紹介したのはジャックであり、そういう話はどこからともなく広まる。

ジャック・ベリーに隠し子が？

大きなスキャンダルまでの発展はしていないが、学内では広範囲で囁かれている。ジャックと響を知る者は、ふたりを見れば親子であるということがわかるくらい響はジャックによく似ているのだ。それは顔形だけでなく、鍵盤を叩く姿勢や指を運ぶ癖までも…。

「キョウ！」

ぼんやりと歩く響の後ろから走って来たのは、ヴォーカル科のニコルだった。

「やあ、ニコル…」

響は抑揚のない声で応えた。

「サムを見なかった？」

「いや…？」

「どこ行っちゃったのかな、サム。一緒にパーティーに行くことになっているのに…」

言ってからニコルは自分の失言に気がついて口を手で押さえた。

「ごめん、キョウ…」

「いや、いいんだ…。おめでとう、ニコル。サムにも宜しく言っておいてくれよ」

響は寂しく微笑み歩きだす。

「…待って、キョウ！」

「ん？」

「私はキョウのピアノが好きよ！あの曲も大好き！だから、頑張ってね！」

ニコルは必死な顔で言う。その言葉に同情や嘘はないということは響にもわかっていた。

「サンキュ、ニコル！」

響は笑顔を見せて踵を返す。

「キョウ...」

うつむき歩き去る響の後ろ姿を、ニコルはじっと見送った。

アカデミーに入学して3ヶ月ほどたった頃、ニコルはピアノ科に在籍する恋人のサムを介して響に出会った。

「凄い奴がいるんだよ！」

サムは響のことをニコルにそう話していた。ニコルはサムに連れられて響のアパートに行ったのだ。

アパートの前に立つと響が奏でるピアノのメロディーが聴こえていた。それは、胸がしめつけられるほどのせつなく甘く、そして優しい旋律だった。

こんなにせつないピアノを弾くカザマ・キョウとはどんな人間なのだろう？と、ニコルは一瞬あとに出会うことになっている響の姿を想像した。

窓から射し込む光をレースのカーテンが受け止めていた。ぼんやりとした乳白色の陽だまりの中でピアノを奏でていた金髪の青年が、ふと顔を上げてドアの前に立つ自分たちを見た瞬間、ニコルは思わずそのビジュアルの美しさに呆然と見とれてしまった。

グランドピアノが一台。

響の部屋にはそれだけしかなかった。そしてピアノの上には可愛らしい異国の少女の写真が飾ってあった。

響がピアニストを目指して日本からひとりでやってきた、ということを知った時、ニコルはピアノしか置いてない部屋に、響の覚悟と決意の強さを感じた。そして、そこにたった一枚だけあった写真の意味も。

さっき、響が弾いていた曲は『Shine』という曲名だときいた。もう一度聴かせて欲しいと頼んだが、人に聴かせる曲じゃない、と響は首を振った。

たった一度、それもほんの一瞬しか聴いていないメロディーが、美しいビジュアルとともにニコルの心に鮮やかに、そしてせつなく焼きついた。響が弾くピアノはサムのピアノとはまったく違う音色で響いていた。サムが凄い奴、と言っていた意味が分かった。響のピアノは確かにピアニストとしては技術的にまだ粗い。だが、音を感じ、それを指に伝える感性は誰にも負けていない、とニコルは思っている。

「ニコル、どうした？」

立ちつくすニコルの背中を叩いたのはサムだった。

「サム、私、キョウに悪い事を言ってしまった...」

ニコルが見つめる彼方に響の姿はもうない。

「パーティーのこと...」

「あいつ、何を焦っているんだろうな」

「焦ってる？」

「ああ。あいつには絶対に才能がある。なのに、ムラがありすぎるんだよ、あいつのピアノには」

サムの言わんとしていることがニコルには何となく理解できた。

「キョウが弾いていたあの曲...」

「ニコルにもわかるだろ？あいつは自分を全部注ぎ込めるものに対しては誰にも真似できない感性を発揮する。けど、それ以外のものにはその感性が輝かないんだよ。いや...、」

輝かないのではなくて、輝かせようとしていないのだ、とサムは思う。

「焦りか...」

と、ニコルはつぶやいた。

「だけど、あいつはこのままじゃ終わらない奴さ。心配することないよ」

サムはそう言って、ニコルの肩を抱いた。

◇

アパートに戻った響は、ピアノの前に座り頭をその前面に押しつけた。

夜からのバイトまでにはまだ小一時間ある。いつもならすぐにピアノを開けてバイトの時間がくるまでレッスンをするが、今はそんな気分にもなれなかった。

——君は本当にジャック・ベリーの息子なのかね？

今日、講師におもむろに訊かれた。

...そんなことどうでもいいだろ？俺は俺だよ。

と言いたい言葉を呑み込んで響は首をふった。事実を知られるのは嫌だし、世界のジャック・ベリーの名にも傷がつく。ジャックはそんなこと気にする必要はない、と言うが、そんなジャックだからこそ彼の名に傷はつけられないし、何よりも、偉大すぎる父親の光の下を歩くことが嫌だ。自分は自分のまま、自分の音楽を磨きたい。

だが、こここのところ毎日のように同じ質問を色々な人間からされる。どこでどうやって噂に火がついたのかは不明だが、学校中の連中が自分に注目している視線を感じる。ジャックの息子だったらもう少しマシなピアノを弾くはずだ、とその目たちは言っている。

他人が自分をどう思っていようと、そんなことはどうでもいい。ただ満足なピアノが弾けない自分が悔しい。

何のためにアメリカまでやってきたのか——。

響はピアノの上に飾ってある写真を手に取った。文化祭の後の打ち上げビリヤード大会で撮った、自分とヒカルのツーショットだ。

「ヒカル...」

この写真を撮った直後に、響はヒカルを想う自分の心に鍵をかけた。それからはずっとただ見つめるだけ。ただのヒビク先輩。そう思ってきたが、粉雪の卒業式でヒカルの言葉を聞いてから…。

——ヒビク先輩がだいすきっ！

そう叫んでくれたヒカルの顔。声。そして抱きしめた温もりが、ひとりアメリカに来てからの自分を大きく支えてくれていた。会えなくても、触れることができなくても、ヒカルのあの言葉だけがビタミン剤だった。

昨日、田村からエアメールが届いた。手紙には、あかねとしばらくぶりに再会したこと、レコーディングエンジニアになる夢に近づき、毎日が忙しく充実しているということ、それから——。

——ヒカルに連絡してやれ。あいつはずっと、お前からの便りを待っている。お前を待っている——。

田村の手紙を見る前から、何度もヒカルに連絡をしようと思った。ヒカルが高校を卒業する日は、ひとこと祝ってやりたくて受話器を耳にまであてた。

けれど！

——何て言えばいいんだ？！今の俺が、ヒカルに何て便りをすればいいんだよっ！

響はふいに沸きあがってきた激しい感情を鍵盤に叩きつけた。ここ（アメリカ）に来てから何ひとつ成長できていない。自分の納得のいくことがひとつもやれていない。そんな自分が、今、ヒカルの声を聞いたら、ヒカルとの距離を近づけてしまったら、挫折して辞めて行った連中と同じ道をたどりそうで怖い。

「……磨けないんだ」

ジャックの息子がどうか、進級パーティーがどうか、そういうもの全部が煩わしい。そんなことにかまってる暇はない。落としたカリキュラム単位を取り戻し、1日でも早くマスターコースを修了してセレクトティブで実技を磨きたい。そしてそのあとは何でもいからピアニストとしての仕事をしたい。

そしてそのあとは——。

「ヒカル、ごめんな…。今はまだ、便りは出せない…」

響は写真のヒカルに向かってつぶやくように言った。

颯士がベトナムから帰ったのは8月の半ば過ぎだった。

ベトナム全域とカンボジアに渡っての旅だった。つい最近まで戦争をしていた国、ベトナム。そしてカンボジア。その名残が国のあちらこちらに未だにしみ込んでいた。都市は栄え観光客も多かったが、内紛を経験し多くの血と涙を流した国に刻まれたものは何年経っても簡単には拭えない。

颯士はアンコールワットで撮影してきたガジュマラの木の写真に見入っていた。20年前、カンボジア内紛の最中のアンコールワットを目指し、還らぬ人となった戦場カメラマンの遺灰の一部がその下に埋葬されているという。

『群竹くんはこのカメラマンの名前を聞いたことがあるかい？』

アンコールワットで純平が言った。その時の颯士はそのカメラマンを知らなかった。

『ほんの数年前までここは戦場だったのは知ってるよな？』

カンボジアで内紛があったということだけは知っている。だが、それがどういった紛争だったのか颯士は解かっていなかった。興味を持った事もない。

アンコール遺跡ではまだ小さな子どもたちが観光客を相手に土産物を売って働いていた。おそらく10才前後の子ども達だ。彼らは白い歯を見せ、ニコニコ笑いながら傍に寄ってきて土産物を勧めて来た。その笑顔は暑いカンボジアの太陽の下で生き生きと輝いていた。颯士の常識では過酷と言える子どもたちの環境にも関わらず、だ。颯士の何かがうずいた。

純平がベトナム戦争の概要を語ってくれた。そして、そこで生きた多くの戦場カメラマンたちの話も聞いた。その中に激戦の最中、アンコールワットを目指しその半ばで横死した当時25、6才だった日本人のカメラマンがいた。

自分とたいして年も変わらなかったこのカメラマンは命をかけてアンコールを目指した。彼の目的が果たされたのかどうかは彼自身しか知らない。

今の自分にはとうてい出来ない、そして無い想い。カンボジアの暑さと同じ、それ以上に熱い想い。汗と血がいくら流れようとも、求める何かに賭ける想い、情熱...

テーマが欲しい、と思った。

自分にも全てをかけられるテーマが欲しい。このカメラマンのように、そして純平のように、何があっても迷うことなく自分の足で歩いていくためのテーマ。

カメラマンとしてだけじゃない、人間として...

颯士は机の上にある一通の手紙を手にとった。

—群竹くん、お元気ですか？

綺麗な文字で書き出されたあかねからの手紙だ。

3日前、ベトナムから帰った日に管理人から手渡されたその青い封筒を見た時、颯士は何だか

分からないしこりを心に感じた。嬉しく、懐かしく思うはずなのに、封を切るのにためらいを感じている自分がいた。

手紙には8月に入ってからのあかねの近況が書かれていた。毎日レコーディングスタジオに通っていること、そこで田村と偶然再会したこと、そして、田村から響の居場所を聞きそれをヒカルに知らせたが、ヒカルはあまり嬉しそうではなかった、ということ…。

その手紙を読んだ時、いつかヒカルに自室の窓に消しゴムを投げつけられ、あかねに寂しい思いをさせるな、と言われたことがあったことを思い出した。ヒカルは響を恋しく思い、あんなことを自分に言ったということが分かったから、あの時は、分かっている、寂しい思いなどさせないと答えたが、実際に遠く離れてみて実感することは、それは無理だ、ということ…。

ベトナムに行く前までの自分は、自分でもわけが分からなくなるくらいに忙しくて時間がなくて、連絡を待っているあかねのことを、分かっているが、どうしても出来ない状況だった。

今はその頃の気持ちとは少し違う。前に進もう、進みたいと思う気持ちが先にある。あかねに会いたいと思う気持ちよりも、今、少しだけつかみかけている自分にとって大事な何かを、それが遠のかないうちに手にしたい、と思っている。

だから…。

手紙の最後には、『会えなくて寂しいよ…』と、書かれて結ばれていた。寂しい、という言葉が颯土には重く感じた。

—分かってる。分かっているけれど…。

夏休みはまだ半月近く残っている。東京に帰ろうと思えば帰れる。だが、颯土は残りの休みをここで自分の写真を撮りに歩くことにした。神戸はとても魅力的な街だ。春に来てから今まで、港にも異人館にも行ってないし、ゆっくり自分の住んでいる街を歩いたこともなかった。純平の言うようにたくさん写真を撮って感性を磨いて、自分のテーマを探そうと颯土は決めた。

颯土は手紙を机の引き出しの奥にしまった。

その時、

「群竹くん、管理人室に電話が入ってます」

天井のスピーカーから管理人の声が聞こえた。管理人室に電話が入るとこうして各部屋直通の放送がある。

颯土は腕時計を見た。

午後4時半。まだまだ陽はある。

颯土は立ち上がり、カメラを手に取ると、そのまま部屋を出て一階の管理人室に向かった。

◇

「水沢さんだよ」

初老で人のよさそうな管理人が受話器を颯土に渡した。

「どうも...」

颯土は無愛想に頭を下げると、ためらいがちに受話器を耳にあてた。

「もしもし...」

『群竹くん、お帰り！』

弾むあかねの音が、どこか遠くから響いてくるような感覚だった。

「ただいま...」

『どうしたの？元気がないみたい？何かあったの？』

「いや、ちょっと疲れてて...。大丈夫さ」

管理人がチラッと颯土の顔を見た。颯土はとっさに管理人に背中を向けた。

『...手紙、とどいた？』

「あ、ああ。読んだよ」

『夏休み、あと半月あるけど...、やっぱり帰ってこないの...？』

あかねの音がだんだんと小さくなっていく。颯土は無意識に心の中でため息をついていた。

「ああ...、うん...。こっちでやるのが色々あって...」

言いわけじみた言い方をしている自分に腹が立った。だが、帰れないはっきりとした理由があるわけでもない。

『そうか...。私も、月末までは忙しいんだけど...』

「だろ？」

『...そっちに行く』

思い切ったようなあかねの言葉だった。

「え...?!」

思わず颯土は訊き返していた。

『私がそっちに行く。今月の末には今のバイトも終わるから、そしたら群竹くんに会いに行く。いいでしょ？』

「それはかまわないけど...」

『迷惑そう...』

「そ...、そんなはずないだろ！来いよ！寮の近くのホテルを予約しといてやるよ」

『ほんと?!ありがとう!』

8月最後の週末に、とあかねと約束をして颯土は受話器を管理人に戻した。管理人はニコニコしながらそれを受け取った。

「水沢さんからの電話をやっと群竹くんに繋げられたよ」

颯土は苦笑いを返し寮の外に出た。

あかねが来る一一。

さっきまでの心のしこりは現金にも晴れている。

あかねと一緒に街の写真を撮り歩くのもいいかもな...、と、思いながら、颯土は異人館の方へと歩きだした。

会社の暗室で颯土は自分が撮影したフィルムを現像していた。

——ダメだ…。違う…。これも、これも…。

次々と浮かび上がる写真を見つめながら、颯土はため息をついていた。

異人館、港、街並み——。

神戸の町を歩き回り、たくさんの写真を思うがままに撮ってみた。だが、現像された写真には、これまで何度か経験した自分の心に還ってくる手応えのようなものはなく、言葉はおろか何も投入されていないように感じた。

「はぁ…」

全てのネガの現像を終え、颯土は部屋の明かりをつけた。

「まだまだってことだよな…」

ひとりつぶやいた時、ドアをノックする音が聞こえた。

「終わった～？入っていい？」

「あ、はい、どうぞ」

ドアを開けて入って来たのは記者の日向瑠璃（るり）だった。瑠璃は会社の中で颯土が話せる数少ない人間の中のひとりなのだが…。

「どう？いい写真あった？」

瑠璃はツカツカと颯土の元にやってくると、バットの上で乾燥させている写真たちをおもむろに眺めた。

「いや…、どうしてですか？」

颯土はやや不審な目つきで瑠璃を見た。

「結野さんから聞いたの。群竹くんが街の写真をたくさん撮ってきたって」

瑠璃は次々と写真を確認しながら言う。

「これは個人的に撮ったもので…」

「個人的に撮った写真を、会社の経費を使って現像してるってわけね？」

「いや、あの、それは…」

痛いところを突かれて、颯土はしどろもどろに答えた。

——このヒトは苦手だ…。

「ふふ。別に苛めてるわけじゃないから安心して。ちょっと写真を探しているの」

「写真を？」

「そ。今度会社に出す企画のプレゼンでちょっと使いたかったから。でも、残念だけどいいのがないわ」

瑠璃はシャキシャキと写真をバットに戻した。

「不採用か...」

颯土はボソッとつぶやいた。

「そ。不採用」

瑠璃はクスリと笑う。

「自分でも満足してないから仕方ないか...」

「ちょっとそれ、生意気よ。満足なんてそうそう出来るもんじゃないわ」

確かにそうだ、と颯土は思った。

「プロだってそうなのよ？あなたはプロのカメラマンを目指しているんでしょ？」

瑠璃に言われて颯土は顔を上げた。心の痛い部分を突かれた気がした。

——俺は本当にプロのカメラマンになりたいのだろうか。

颯土はバットの上に並ぶ写真をぼんやり見つめながら思った。自分自身にテーマは欲しいと思う。だが、それは漠然とした思いだ。純平を追ってこっちの大学に来て、そうすることによってたくさんのリスクを背負った。だから、やらなければ、何としても形にしなければ、と焦っている自分が一番ではないのか。写真が撮りたくて、カメラマンになりたくてがむしゃらに頑張っている自分は、たぶんここにはいない。

——それを言っちゃ、みもふたもないだろ。

颯土は心の中でつぶやいた。

「あらら？この写真は結構いいかもね？企画には使えないけど」

瑠璃が手にとった写真を颯土は見つめた。

「あ...、それは...」

颯土は瑠璃の手からその写真を奪い取った。

「なによ...」

「...もういいでしょ？俺の写真は不採用なわけだし、他をあたってくださいよ」

「気になるけど、ま、いいわ。頑張っている写真撮ってね、学生さん！」

キビキビと瑠璃はドアに向かって歩き出す。そして、取っ手に手をかけて外に出ようとした時

「あ、群竹くん」

思い出したように振り向いた。

「明日、時間とれる？」

「明日は...、」

あかねが来る。

「無理です...」

「そっか…。じゃあ、今夜は？」

「……」

「ううん、いいや。ちょっと取材に付き合っただけだけどやっぱり群竹くんじゃ役不足だわ」

なんなんだ、それ…。と、颯土は憮然とした。

「じゃね」

瑠璃は今度こそドアの外に消えて行った。

昨日のこと。

颯土はいつものようにカメラを持って寮を出た。

昨日までの間に港にも行ったしポートアイランドも行った。異人館は最初に行ってみたし、だが、そのどれにもこれといって心を動かされるものに出会えなかった。たくさんの写真を撮って自分の感性を刺激して磨いて…、と思っていたけれど、現実はそう簡単にはいかないようだ。あの時、手が届きそうなものはなんだったのだろうか？今は、その影すら見えてこない。

あさってにはあかねが来る。4ヶ月ぶりにあかねに会える。それまでに、一步でも前に出ていたいと思っていたけれど…。

ガス燈が立ち並ぶ閑静な通りを何気なく歩いていた颯土は、道端ではしゃいでいる少女を見つけて立ち止まった。

「ね、ね、ね、いいやろ？ここで写真撮ろうよお！」

少女は傍らに立つ少年の腕をかなり強引に引いていた。

「？」

颯土は少女たちが立つ脇の店を見た。

「……」

写真館だった。貸し衣装と着つけをセットにして格安な値段で記念写真を撮ってくれるスタジオだ。

「あのウェディングドレス、キレイやなあ～。なあなあ、いいやろ～？」

おそらく恋人同士だろう。彼氏の方はあまり乗り気じゃないらしい。だが、彼女の方はもう勝手に決め彼氏の腕を引っ張ってスタジオの中に入って行く。

夏の太陽を浴びて笑う少女の顔。

どこかで見たことがある懐かしい笑顔。

「……」

颯土は少女たちが入った写真館の前に立ち、ウィンドウから中を覗いた。バーにかかるたくさんの衣装を少女は楽しそうに選んでいる。はちきれそうな笑顔だった。

どう見ても高校生。それも1年生ぐらいだろう。動作が幼く可愛い。  
颯土は思わず微笑んでいた。

――あんな笑顔でいつも傍にいた奴がいたな。

心に湧きあがったのは強烈なノスタルジー。

少女は純白のドレスを選び彼氏にタキシードを着せ、一枚3千円の写真に仲良くおさまった。  
彼氏は始終照れ臭そうに頭をかき、少女は始終笑っていた。

ふたりが出てくると、ウィンドウの前に立つ颯土を少女は一瞬だけ見た。

だが、そのまま彼氏の腕をとり、颯土に背を向けて軽くステップを踏むように歩きだした。少女のセミロングの髪がふわふわと踊る。颯土は思わず、ふたりの後ろ姿をカメラにおさめていた。

さっき、瑠璃が手にとった写真がそれだ。

幼いカップルが歩き去る後ろ姿――。

颯土はその写真をじっと見つめ、ジーンズの後ろポケットに無造作に入れた。

「おつかれさん！」

最後の一曲のレコーディングが無事に終わり、機材室から降りてきた田村があかねの肩をポンとたたいた。

「先輩もお疲れ様でした」

「大変だったか？」

「それはもう…。毎日この暑さだし…」

田村は微笑んであかねを見る。

「どうだ？これから一緒に晩メシでも？」

「そうですね…」

答えてあかねは時計を見つめた。

午後4時30分。

今から行けば、9時過ぎには着ける…。

本当は明日行く予定だが待ってられない。今すぐ颯土に会いたい。今夜、9時45分に颯土の寮に電話をする約束をしている。寮のすぐそばから電話をしたら颯土は驚くだろうか？喜んでくれるだろうか？あかねは颯土の反応を想像して思わず笑みがこぼれた。

「すみません。私、これから神戸に行くんです」

「神戸…？」

田村は少し驚いて訊き返した。

「はい。群竹くんのところ…」

「あ…、そ、そうか。じゃ、また今度にしような…」

田村はぎこちなく言って思わずあかねに背中を向けていた。毎日あかねと一緒に仕事をしていて、蘇っていた昔の想いだったけれど…。

「先輩？」

「あ、いや、うん…」

「仕事は終わったけれど、また、会えるといいですね。今度はヒカルちゃんも一緒に」

「あ、うん、そうだな…」

「先輩がいてくれて楽しかったです。ありがとうございました」

あかねはペコリとお辞儀をした。

「あ、うん。いや…、俺のほうこそ楽しかったよ」

「それじゃ、先輩。また！」

あかねはにっこりと微笑み、足早にスタジオを出る。

――心は既に神戸の群竹クンへ行ってるか…。

田村は苦笑いをしながら見送っていた。だが、すぐに後を追いかけてスタジオを出た。

「あ...、あかね！」

玄関の手前で田村はあかねを呼びとめた。

「はい？」

「あ、いや...たいしたことじゃないんだけどな...」

「なんですか？」

「んとさ、何か困ったことがあったらいつでも言ってこいよな」

「え...？」

田村の唐突な言葉にあかねは少し戸惑った。

「いやなに...、ほら、昔みたいにさ！あかねはいつも俺んところに相談しに来ただろ？部活のこととか、群竹のことなんかもさ...。なんか...懐かしくて...」

「先輩...」

「...だから、たいした意味はないんだぜ！先輩として、いつまでもあかねのことは可愛って思ってる...、親みたいな...兄貴みたいな...、だ——っ！何言ってんだ、俺！」

田村は自分の頭をくしゃくしゃとかき乱しながら叫んだ。自分で何が言いたかったのか、先の言葉が行方不明になってしまい、混乱する。

「先輩、ありがとう」

あかねは真っ直ぐ田村を見て、ふんわりと微笑んだ。

「...あかね」

「それじゃ、また！」

玄関のガラス扉を開け、通りの向こうに歩き出したあかねの華奢な後ろ姿を田村はいつまでも見送っていた。

◇

午後7時、大阪一一。

颯土は暗室を出て純平のいる資料室に行った。

「純平さん、終わりました。ありがとうございます」

棚から資料を次々と出して見ては、テーブルの上に積み上げながら何かを探している純平の背中に向かって颯土は声をかけた。

「はいよ。いい写真撮れてたかい？」

「いえ、ダメです...。全滅。会社の経費、無駄に使いました...」

「あはは！さては瑠璃っぺに何か言われたな？」

「.....」

純平は手を止めて颯土の方に向きなおった。

「まあ仕方ないさ。あきらめずに撮り続けることだ。キミにとっての時がやってくるまでね」

「時か...」

またよくわからない事を言う...、と、颯土は内心想う。颯土は無意識にポケットに入れていた

写真を取り出した。

「ん？それなに？」

「あ...、これは...」

見せて、と純平は颯土の手から写真を取る。

「ふーん...、いいじゃない、これ。なんか、色んな言葉が聞こえてくるよ、この写真」

「マジメに言ってますか、それ？」

颯土は少し顔を紅潮させながら純平を睨んだ。

「もちろん！僕はいつだってマジメさ。キミが思いを込めた分だけ言葉がここに映し出される。

キミがこのカップルに何を見たのか、僕にははかり知れないけどね」

颯土はますます赤くなって写真を再びポケットに入れた。

「この資料の山は？何してるんですか？」

「いや、瑠璃っぺに頼まれてね、ちょっと探しもの。彼女、今度の企画決めで自分の企画を取り上げてもらうんだと今必死なの」

「でも、何で純平さんが？自分でやればいいじゃないですか...」

「使えるものは社長でも使うってのが瑠璃っぺのいつものスタイルだよ...。僕も暇だったからべつにいいさ」

純平は再び資料をあさりはじめた。

「カメラマンと組んで動けば彼女も楽なんだろうけど、今、ここには人材に余裕がないしね。ひとりでよくやってると思うよ」

「...俺、あの人苦手です...」

颯土は苦笑した。

純平の（瑠璃の）仕事を手伝い、資料室をあとにして颯土がロビーに出ると、玄関脇のエレベーターからちょうど瑠璃が降りてきた。

「あら、群竹くん。帰るの？」

「...はい、帰ります」

「私も今日は終わりなの。食事にでも行こうよ！」

「...純平さんは日向さんの仕事やりましたよ...？」

「あ～～、うん、まあ、いいじゃない？私だって結野さんの仕事手伝う時あるし、お互い様ってことで！ね？」

――ずいぶん自己中人...。

「今日はちょっと飲みたい気分なの」

「飲みたいって...、俺、一応まだ未成年なんですけど...。それに、さっきは取材に行くみたいなこと言ってませんでした？」

「……取材は中止。いいじゃない、堅いこと言わないの！私がおごるから行こう！」

瑠璃は颯土の腕を引いて会社の玄関をまたぐ。9時45分には寮にあかねから電話がかかってくることになっている。明日はあかねが来るから今夜の電話はすっぽかすわけにはいかない。

「…日向さん、待って！」

「なに？」

颯土の腕を引きながら先を歩いていた瑠璃が立ち止まって振り返った。

疲れた顔。

いつも会社で見る瑠璃の顔と違った。

「いや…」

颯土が思わず躊躇している間に、

「ほら、行くよ！」

瑠璃は再び颯土の手を引きズンズン歩き出す。颯土は自分にため息をついて引きずられるまま瑠璃についていった。

午後9時――。

颯土は腕の時計を見てため息をついた。

あかねからの電話があるまでにもう45分しかない。今すぐにここを出たとしても、寮に帰るまでに急いでも40分はかかる。だいいち、今すぐ出られそうにもない。

「群竹くん、もう一杯！」

瑠璃は完全に目が座ってる。

「日向さん、もうやめた方がいいですよ」

無駄だとは思ったがとりあえず言ってみた。

「うるさーい！」

瑠璃は空になったジョッキを高く持ちあげ、颯土の目の前にどんと置いた。

――やれやれ、まいったな…。

ジョッキ一杯のビールを飲み干してすぐに、瑠璃はこの状態になった。もともと飲めるクチではないのだろう。

――何で俺が……。

手を上げて店員を呼び中ジョッキ一杯の追加を頼むと、颯土はもう一度時計を見た。  
9時5分。

――どうしよう。

「どこ行くの？逃げる気？」

立ち上がろうとした颯土の腕を取って瑠璃が言った。

「ちょっと電話をかけてきます」

「彼女と約束でもあったの？悪かったわね～」

口ではそう言いながら、全然「悪かった」と思っているようには見えない。瑠璃は颯土の腕を握ったままもう片方の手で今来たジョッキを取る。

颯土はおもむろにため息をついた。

「ほんと、もうやめた方がいいですよ。今、タクシー呼びますから帰りましょう」

「あら、ダメダメ。群竹くん、朝まで付き合いなさい！」

瑠璃は横に立つ颯土の腕を引っ張って無理やり座らせようとした。その弾みで瑠璃の体はバランスを失い、手にあったジョッキからビールがこぼれた。颯土のジーンズも瑠璃のスカートもビールに染まった。

「いいかげんにしてください。俺にも予定があるんです。日向さんが帰らなくても俺は失礼させてもらいます」

颯土は冷たく言い放ち、再び立ち上がろうとした。

「...あ〜あ〜、こぼしちゃった...。染みになっちゃうなあ、お気に入りのスカートだったのに...」

颯土の言葉を見殺しにして瑠璃はスカートの方を気にしている。

「.....」

颯土は再びため息。時計は9時10分を過ぎた。

「――彼女と、約束？」

「寮に電話が来るんです」

でも、もう間に合わない。

「何だ、そんなこと。こっちから電話したらいいじゃない。今夜は帰れそうにない。す・ま・ん、って」

すまん、を無駄に強調しながら瑠璃は艶やかな視線を颯土に向ける。

「帰りますよ、俺は」

「...つまらない男。こんなに綺麗なお姉さんが誘ってあげてるのに...」

瑠璃はブツブツ文句を言いながらスカートの染みをタオルで拭きはじめた。どっちにしたってもう間に合わないことだけは確かだ。あかねに電話をいれよう。約束の時間に寮に戻っていたかったけれど。あかねはいつも管理人に伝言を伝えるから。いつも寂しい思いをさせているから...。

「とりあえず電話してきます」

居酒屋の公衆電話では周囲が煩さすぎる。颯土は建物の外に出た。

いつの間にか外は小雨がパラついていた。久しぶりの雨だ。建物も道路も道路を走る車も優しい水滴を輝かせていた。

道路脇に電話ボックスを見つけ、颯土は走って飛び込んだ。受話器をとったのはあかねの父親だった。

「群竹といいますが...」

『群竹さん...?』

怪訝そうな声が返ってくる。

「あかねさん、ご在宅でしょうか...?」

『あかねは今日は帰りませんが』

父親は無愛想に言った。

「帰らない...?」

『友人の家に泊まるとか。家内が申しとおりました』

「友人...?」

颯土が訊き返すまもなく通話は一方的に途切れた。

「友人って...」

明日、朝一番の新幹線であかねはこっちに来るのにいったい何処に泊まりに行ったのだろう。電話はその泊まり先からよこすつもりでいるのか...

ますます困った。これじゃ、あかねと連絡のとりようがないじゃないか...

「浅倉...」

颯土は手帳を開き、ヒカルの家ナンバーを探した。

『うそーっ！群竹くんっ？』

懐かしい元気な声を受話器の向こうではじけた。4ヶ月ぶりに聞くヒカルの声だ。

『元気にしてる？ベトナムに行ってたんだって？アルバイトも忙しいみたいだね！そうそう、あかねちゃんに電話してないんだって？あれだけ言ったのにダメじゃない！あかねちゃん寂しがってるよー！』

――まるで機関銃のようだ。

颯土は思わず微笑んだ。ちっとも変わっていない。相変わらず明るくて張りがあって、真夏のひまわりが目に浮かぶ。

まぶしい笑顔――。

目に浮かんだだけのその笑顔で不思議と気持ちが優しくなる。だが、今は懐かしがっている場合じゃない。

「あかね、そっちに行っていないよな...？」

ためらうように颯土は言った。

『あかねちゃん？来てないよ。家にいないの？』

「ああ。友人のところに泊まってるらしいんだけど...」

『何やってるんだろうね、あかねちゃん。せっかく群竹くんが電話してきてるのに！』

「いや...」

ヒカルはあかねが神戸に来ることを知らないようだ。颯土はあえて言わなかった。

「わかった。いいよ」

『ちょっと、もう切っちゃうの？久しぶりなのに～！もっと色々話したいのに！』

「...あまり時間がないんだ。今度ゆっくり電話するよ...」

『ほんと～？あんまり期待しないで待ってるね！』

――期待しないで、か...。

戻した受話器を見つめ颯土は苦笑した。耳の中にヒカルの明るい声の余韻が残っている。

「……」

ヒカルのところにはいないとなるとあとは麻耶のところしか思いつかず、電話をしてみたがあかねはいない。麻耶にはいきなり、あまりあかねに寂しい思いをさせるな、と叱られた。こっちは変わっていない。

颯土は電話ボックスのガラスに背をあててため息をついた。

——こんな日に、いったい何処に行ったんだ、あかね…。

明日、朝一番の新幹線で来ることはわかっている。今夜連絡が取れなくても新神戸駅まで迎えに行く約束は前にしている。だが、あかねが寮に電話をしてきた時に自分がいなかったら、また余計な寂しい思いを抱かせてしまうことは必至。こんなにも一本の電話が大事だと思ったことは今までにない…。

——こんな日に、こんなところにいる俺が悪い。やっぱりあの時、帰るべきだった。

……。

と、今更後悔したところでどうにもならない。颯土は再び受話器を取った。

『はい、北野寮です』

「群竹です。202号室の…」

『はい、群竹くん。どうしました？』

管理人は少し驚いたように聞き返した。

「俺宛に…、電話ありましたか？」

こんなことを聞くのは少しバツが悪い。

『いいえ、ないですよ』

「こんなこと、お願いするのは申し訳ないのですが…」

『水沢さんからかかってくるのですね？』

管理人はよくわかっている。颯土は一瞬言葉に詰まった。

「はい。実はまだ大阪なんです。明日時間どおりに駅に行くから、と伝えてもらえますか？」

『はいはい、明日時間どおりに駅に…ね。わかりましたよ。水沢さんに伝えておきます』

管理人はメモをとったのだろう。

「すみません。よろしく願います…」

受話器を戻した颯土は雨粒が流れる電話ボックスの中で、何とも後味の悪い思いをかみしめていた。

◇

午後9時40分。

あかねは小雨のパラつくゆるやかな坂の通りを歩いていた。三宮駅から北野寮まではこの坂道を登って5分ぐらいだと颯土から聞いていた。

4ヵ月ぶりに颯土に会える――。

最初は普通に電話をしよう。きっといつもの管理人が出て颯土が電話口に来るまで約1分。管理人は気さくな人だからその間ちょっと世間話して。颯土が出てもいつもと変わらず明日の話をして、最後に、ほんとは今寮の近くの電話ボックスにいるのと言ったら…。

――きっと群竹くんは訳がわからないね。反応があるまで10秒はかかるかな。それから、寮の玄関を駆け足で出てきて、私を見つけて…。

最初にどうするだろう。頭をかいて笑うだろうか。それとも、ぎゅっと抱きしめてくれるだろうか――。

想像しただけで涙が溢れた。早く颯土のぬくもりに触れたい。4ヶ月分のぬくもりを感じたい。

通りの角に電話ボックスが見えた。寮はその先にある。レンガ造りのマンションのような建物。街の雰囲気とその外観はとてもよく似合っていた。あの202号室に颯土はいる。

あかねの胸はときめきと期待と少しの不安が入り交じり高鳴る。電話ボックスに入り、ナンバーを押す。その手は微かに震えていた。

電話ボックスを出ると雨足はさっきよりも増していた。颯土は両手で頭を雨から庇い10メートルほど先の居酒屋に駆け戻った。ホールの明りの下で腕時計を見ると、針はもうすぐ9時45分を指すところだ。今ごろあかねから寮に電話が入っているだろう。

心が痛んだ。

元いた席に戻ると、瑠璃は待ちくたびれたのかテーブルにつっぷして眠っていた。

——このヒト、どうするよ…。

颯土は瑠璃の後ろに立ち、その背中をゆすった。

「日向さん、起きてください。日向さん」

うーん、と唸ったまま瑠璃の瞼は開かない。

颯土は心の底から情けなくなった。

——何やってんだ、俺…。

あの時、瑠璃が一瞬見せた疲れた顔に騙されてついてきてしまったのが運のツキだ。こんなお人よしじゃなかったはずなのに、いったいどうしたんだよ俺、と、颯土は心でつぶやく。

瑠璃の寝顔は子どものように無防備であどけなく、会社で見る顔ともさっきまでの顔とも違う。完全に夢の国に行ってしまったようなのだ。

「はあ…」

颯土はあきらめてどっかりと座りこんだ。

わっはっはっ〜！と、衝立の後ろの座席にいる若者のグループが大声で笑っている。食器のぶつかる音、喋り声、店員が走る音…。にぎやかな空間が空虚に感じる。自己嫌悪とわけのわからない苛立ちが颯土を襲った。瑠璃が飲んでいたジョッキにビールが半分以上残っていた。颯土はそれをグッとつかみ取ると、一気にビールを喉の奥に流しこんだ。

——あかねちゃんが寂しがってるよ！

さっき聞いたヒカルの声の余韻がまだ残っている。

——あかねに寂しい思いをさせるんじゃないわよ。

麻耶のシビアな物言いも蘇る。

寂しい思い——。

――...させたくてさせてるわけじゃないのに、どうしてそうやって俺を責める？仕方ないだろ？離れているんだから。いつもそばにいてやれないのだから。

あかねがどんな思いをしているのか、わからないわけじゃない。こんなに電話が大事に思うのも、約束の時間に寮にいないということだけで、またあかねの心を傷つけてしまうとわかってるから....。

わかっているのに....。

...どうして、瑠璃の誘いを断れなかったのだろう。こうなることは、最初からきっとわかっていたはずなのに――。

「...なんか...冗談じゃないわ...」

突然、瑠璃がつぶやいた。

「日向さん？」

だが、瑠璃は起きたわけではないようだ。相変わらずテーブルに突っ伏している。

「日向さん、そろそろ帰りましょう」

颯土はもう一度瑠璃の背中をゆすった。

「...結婚したら...」

「ケッコン...？」

――何、言ってんだ？

颯土は近くにいた店員を呼び会計を済ませた。それからうわごとのように`結婚、とか`仕事、とか何度も同じことをつぶやく瑠璃を抱き起こすと、背中に乗せて居酒屋を出た。

外は雨――。

瑠璃の長い巻き毛が首をくすぐる。ほんのり甘い香りと雨の匂いが混ざり合う。

「タクシー乗り場までちょっと濡れますよ、いいですね？」

瑠璃はコクンとうなづく。なんだ、意識あるじゃないか...、と、ため息をつき颯土は瑠璃を背負ったまま雨の中を走り出した。

タクシープールに到着し、颯土は待機していた車に瑠璃を乗せた。

「どちらまで？」

運転手は無愛想に言う。

「日向さん、家はどこですか？」

「...玉造（たまつくり）」

瑠璃はうつろな声で告げた。

「玉造のどこや？」

「...玉造い！」

瑠璃は叫んでシートに横になる。

「お客さん、これじゃ困ってまうで。一緒に乗ってくれな。そやなかったら送れんわ」  
運転手は車の外で立つ颯土に向かって、うんざりといった顔をしながら言う。

——やれやれ...。いつになったら帰れるんだ、俺は...

颯土は仕方なくタクシーに乗り込んだ。車は颯土の見知らぬ街を30分ほど走った。そろそろ玉造の駅だと運転手がバックミラー越しに言う。

「日向さん、家は何処ですか？」

颯土は自分の肩にもたれて眠る瑠璃を揺り動かす。

「あ...、駅の北側、茶色いマンション...」

瑠璃はけだるそうに、でもさっきよりはしっかりと話した。

「あそこやな」

運転手は目標を見つけ、車をマンションの玄関につけた。そしてふたりを下ろすと再び来た道に戻って行く。

「ひとりで歩けますね？」

マンションのロビーの前まで瑠璃を送り、颯土は支えていた手を離した。

「うん...、だいじょ...」

歩き出そうとした瑠璃の膝がガクンと折れた。おまけに突然の嘔吐に襲われたようで、口を押さえてその場にうずくまる。

「大丈夫ですか？日向さん」

「...ダメらしい...。気持ち悪い...」

「当たり前ですよ！飲みすぎです。飲めないくせに...」

「.....！」

地面にペツタリと座りこんで瑠璃は苦しみと闘っている。そんな瑠璃を雨が頭から容赦なく濡らし、髪から雫がポタポタと落ちる。

「なんだってこんなにまで飲むんだか...」

颯土は、もう何回目かわからないため息をついて瑠璃の腕を自分の肩に回した。

◇

『明日は時間通りに駅に行くから、との伝言がありましたよ』

「...群竹くん、いないんですか...？」

『ついさっき電話があって、まだ大阪にいるそうです』

あかねは全身の力が抜けてしまう感覚に襲われた。

——約束したのに…。9時45分に電話するって約束したのに…。今日は絶対に寮にいるからって…そう言ってたよね？明日は時間どおりに駅に行く…って、たったそれだけの伝言。凄く事務的な言葉…。忙しいんだね…。仕方ないね…。明日の約束はちゃんとしてあるのだから今日の電話に間に合わなくても問題はない…。私がここにいるってこと、知らないのだから…。群竹くんは全然知らないのだから…。

でも…、

どうしていてくれないの?! どうして伝言なの? こんな日に…!

受話器を握る手が震えた。

「…群竹くんに伝言をお願いします…」

三宮駅近くのホテルS。

颯土が帰ったら、どんなに遅くてもいいから必ず来て欲しい——。

あかねは、管理人にそう伝言を頼んだ。シャワーを浴びて、着替えて颯土の到着を待つ——。窓の外は、街の光が雨に霞んでぼんやりと揺らめいている。

——群竹くん、早く来て…。必ず来てね…!

あかねは大阪の方角をずっと見つめていた。

洗面所にこもった瑠璃が苦しみの原因を全て吐き出している間、颯土は玄関の前で膝を抱えて座りこんでいた。

午後11時30分。

こんな時間にひとり暮らしの女性の家に上がりこむ勇氣はない。瑠璃が回復したら居酒屋代とタクシー代をしっかりと返してもらって帰るつもりだ。なんたって今日は、私がおごるから、と言う瑠璃に無理やり付き合わされたわけだから。タクシー代を払って財布の中は小銭が数枚残っただけ。このままでは帰りたくても帰れない。

「はあ...しんどかった...」

洗面所の扉が開き、憔悴しきった瑠璃がようやく出てきた。颯土は玄関に座ったまま瑠璃をじろりと睨んだ。

「...俺も、さんざんでした」

「そんなところで体育座りしてないであがればいいじゃない」

「こんな時間にあがれませんよ。もう大丈夫みたいだし今度こそ帰りますよ」

単調に言って颯土は手のひらを瑠璃に向かって出した。

「別にとって食おうなんて思ってやしないわよ。年下の男には興味ないし。口直しにお茶入れるから飲んでいきなさいよ」

颯土が出した手のひらを上から下に下ろさせて瑠璃は言う。

「そういう問題じゃなくて...」

「あんた、若いくせに老成しすぎてるわよ。もう少しきゃぴっと、お茶飲みます～嬉しいな～、ぐらい言いなさいよ」

「別に嬉しくないですから...」

と言うより迷惑だ。こっちはとにかく早く帰りたいのに...と、颯土が心の中でブツブツ反論している間に、瑠璃は颯土の手を引いて立ち上がらせ、自分はさっさと部屋の奥に行ってしまった。

――どこまで自己中なヒト...。

「ほら、早くあがってきなさいよ！お金、返さないよ！」

――それは困る！

颯土は渋々と靴を脱いだ。

LDKの瑠璃の部屋は女性の部屋らしからず、シンプルというよりは殺風景に近かった。クリーム色のカーテン。クリーム色の壁。机がひとつにソファがひとつ。角にあるテレビの他に

は何も置いてない。

「そのソファに座ってて」

ケトルを火にかけてから瑠璃はウォークインクロゼットの中に消えた。

颯土は言われた通りソファに座り、何気なく机の上にある写真に目を向けていた。瑠璃と男が写っている。男の顔は知っていた。会社の間人だ。そう言えば、瑠璃はさっき結婚がどうか言っていたな、と、颯土はぼんやりと考えていた。

部屋着に着替えた瑠璃がクロゼットから出てくると同時にケトルの笛が勢いよく鳴いた。

「私さ、群竹さんに迷惑かけなかった？」

紅茶を入れながら瑠璃は真面目に訊いてきた。今、この部屋に自分がいるという状況にどうしてなったのか、それを全く意識していない瑠璃のその発言に、颯土は心の底から呆れ果てた。

「...かけられました。ものすごく...」

おかげで大事な約束がパァだ。

「...ごめんね。こんなつもりはなかったんだけど...」

「日向さんにひとことだけ言ってもいいですか？」

「...なに？」

「己を知るのは大事です」

自己中です、と言いたいところを颯土は我慢した。

「.....はい」

瑠璃は素直に言うと、ティーカップを颯土に手渡した。

「群竹さんと会社のロビーで会う前にね、カレとやっちゃったのね」

そう言って瑠璃は両手の人差し指を交差させた。

「カレのこと知ってる？」

瑠璃は机の写真に視線を投げながら言った。

「見たことはありますよ。直接は知らないけど」

「いい男なんだけどね、堅いのよ...。結婚したら女は家庭に入るべきだってずっと言われてて、今日もまたそれで喧嘩」

——その憂さ晴らしに使われたのが俺か...

と、颯土はため息。

——そんな痴話喧嘩のために...

「なんか、腹立ちます...」

「そうでしょ？」

「...いや、そういう意味ではなくて...」

「私はね、仕事がやりたいの。一生やりたいの。でも、カレも記者だからこの仕事の大変さとか

身を持って知っててね、結婚したらやめろって言うのよ」

「はあ...」

颯土は曖昧に相槌を打つ。そんなことよりも早く返すものを返して欲しい。

「仕事をやめるぐらいなら、結婚なんてしたくない...」

「彼氏にそう言えばいいのでは？」

「...言えない。好きだから」

——何だよ、それ...。

「なら仕事やめて結婚すれば？」

「やだ。仕事はやめたくない...」

「俺には何も言ってあげられません。日向さんたちの問題だし...」

「...重い...」

——...え？

「彼の気持ちが重く感じるの...」

「重い...？」

颯土の心に微かな電流が走った。

「彼のこと好きなんだけど、いつも一緒にいられれば幸せなんだけどね、ときどき彼の存在がすごく重く感じる。彼がいなければ私は好きな仕事を思いっきりやれる。煩わしいこと考えずに思いのままに、ね」

少し前に、`重い、気持ちを意識したことがある。一瞬だったが、それは確かに自分の中にも存在した感情...。

颯土は瑠璃の気持ちと自分の気持ちを重ねた。

「カレの気持ちを重いだなんて思ってしまう自分に罪悪感があって、結局カレの望むとおりにしようって思っちゃうのよ。だけど、それは私の望みじゃない...。イタチごっこなのよね...」

ふう...と瑠璃は息をつく。

「女が好きな仕事をずっとやり続けるには何かを犠牲にしなきゃいけないのかな。その犠牲が愛っていうのは悲しいね...」

——あかねちゃん、寂しがつてるよ。

——あかねに寂しい思いをさせるんじゃないわよ。

——会えなくて寂しいよ...。

寂しいよ——。

たった一本の電話の約束のためにこれほどまでに気を使っている自分。

あかねに寂しい思いをさせたくないから...、...それは、`寂しい、という言葉聞きたくないから。それに引きずられる自分が苦しいから...

こんなにも自分があかねの想いを重く感じていたなんて...、それに気がついて、颯土は愕然とした。

罪悪感があるから望み通りにしようと思う。けど、それは自分の望みとは違う一一。

一一余裕がないんだ、全てに。大学も会社も自分の気持ちにも。

自分にとって何が大事なのかそれすらも見つけれない。大学で勉強することなのか、写真を撮ることなのか、あかねなのか...

「...で、日向さん、どうするんですか？」

「...それがわかれば悩まない。心と気持ちは別のところにあるから困ってるのよ」

心と気持ちは別のところにある一一。

「俺、そろそろ失礼します。電車なくなるし...」

颯土は立ち上がった。

「つきあわせちゃってごめんね。彼女に謝っておいてね」

「.....」

返事を返さず颯土は瑠璃の部屋をあとにした。

雨一一。

駅まではほんの数百メートル。今日、何回目かの雨に打たれて颯土は駅まで走った。

ちょうどホームに入って来た列車に滑りこみ、列車が動き出してから腕の時計を見ると午前0時20分だった。三宮に帰る電車の最終は確か0時28分。

間に合わない...

「あっ！」

瑠璃に、立て替えた分を返してもらうのを忘れた。と、いうことはタクシーにも乗れない...

「純平さん、まだ会社にいるかな...」

情けない思いで大阪駅から会社に電話をいれると、幸運なことに純平はまだ残業をしていた。

『群竹くん、どうしたのこんな時間に？』

「すみません...。今日、会社に泊めてください...」

颯土は再び雨に濡れながら会社のビルへと走った。

ベッドの上で膝をかかえ、あかねはドアを見つめていた。知らない街のホテルでひとりきりで過ごすのははじめてのことだった。薄暗い部屋の中は静まり返り、心細い。怖い。未だに現れない颯土を心待ちにしながら不安ばかりが募る。管理人はちゃんと伝言を伝えてくれたのだろうか...

午前1時30分。

——どうして、来てくれないの...?もう終電もとっくに着いたはずなのに、寮に帰っていれば伝言が伝わっているはずなのに。

カーテンを開いて窓の外を見ると、街も静寂に包まれ窓にポツポツとあたる雨音だけが物悲しげに響いている。

——こんなに近くに来て、やっぱり遠いんだね....。

北野寮のそばの電話ボックスで颯土が玄関から走ってくる姿を夢見ていた時間が遥か昔のことのように感じた。ヘッドボードに埋め込まれたデジタル時計の数字がカチカチとめくられていくスピードを感じた。もう、このまま二度と颯土に触れることが出来ないような気がした。

01:58... 01:59... 02:00

街の灯りがひとつふたつと消えていく。それも霞んでよく見えない。雨と、そして涙で。

あかねは部屋の受話器を取った。そして、ためらいがちにボタンを押す。1回、2回、3回...。呼び出し音はそこで終わった。

『はい、もしもし?』

少しかすれた声。

「.....」

『...もしもーし?』

「.....先輩」

『...あかね?!』

田村の声が変わった。すぐに、あかね、と名を呼んでくれたことがとてつもなく嬉しかった。

『どうした?こんな時間に』

「...すみません。声が...誰かの声が聴きたくて...」

『...泣いてるのか?』

「.....」

『...話してみる。何があった?群竹のここ、行ってるんだよな?』

「...はい」

『聞いてやるから、話してみろ』

電話の向こうの田村が煙草に火を点けたのがわかった。あかねは今の想いを田村に全てぶつけた。不思議と何でも言えた。田村はただ聞いてくれる。何を話してもただ聞いてくれる。昔とちっとも変わらない。困ったことがあった時に泣きながら田村の元に走っていた頃と何も変わっていない。

『群竹を信じろ、あかね』

あかねの話を黙って最後まで聞いていた田村が、話が途切れた後にしばらくしてから言った。

『遠いってのはそれだけでリスクになっちまうんだろけど...』

「先輩...」

『でも、信じるんだ。お前は群竹が好きなんだろ？』

好きだから信じたい。だけど...。

「好き...です」

ふう...と、電話の向こうで田村は長い息を吐く。ため息なのか、煙草の煙を吐き出したのか分からなかったが、あかねは何故だか少しだけ胸が痛かった。

『今夜はもう寝ろよな。明日になれば群竹はちゃんとあかねのところに来るさ』

「...はい」

『悲観ばかりするのはあかねの悪い癖だぞ』

「...はい。そうですね...」

『それじゃ、おやすみ』

「おやすみなさい...。夜遅くに、ほんとうにすみませんでした...」

あかねが受話器を置こうとした時、

『あっ、あかね、』

受話器の中から田村の叫び声が聞こえた。

「...はい？」

『――...俺は、いつでもお前の味方だからな』

田村はそう言って受話器を置いた。

「...ありがとう、先輩」

あかねは静かに受話器を置き、部屋の明かりを消した。

◇

戻した受話器をしばらく見つめていた田村は、ため息をついて部屋の明かりをつけた。

今日は疲れた一日だった。

スタジオであかねと別れたあと、自分でコントロールのできなくなった感情をどうにかしたくて、元軽音楽部の柏木と双子を引っ張り出して飲んで騒いで歌って、ついさっき部屋に戻り、倒れるようにしてベッドにもぐりこんだばかりだった。

ずっと、見守るだけ。

それが田村優作だった。

けれど...

出来ることなら、今すぐあかねの元に飛んで行きたい。そして、昔のように、よしよし、よく頑張ったな、って頭を撫でてやりたい。自然に...あかねの先輩として自然に...

——何が先輩として、だ。笑っちゃううぜ。

「ヒビク、お前ならどうする...？」

田村はつぶやいた。

『田村の気持ちはどうなんだよ』

『俺はいいんだ。あかねの幸せってやつを黙って見守ってるだけで...満足』

——よくもまあ、あんなことを言ったな....

田村は昔、自分が言った言葉を思い出して苦笑した。夜の公園での響との会話だ。結局、自分も響と同じだったあの頃。想いを伝えず見つめるだけ。響は己自身を磨くために、磨いてヒカルに見合う己になるためあえて想いを断ち切ろうとし、自分は颯土を想うあかねをまるごと包みたかった。見守ることが自分のあかねに向けた想いだった。

『人生悟りきった大人みたいだ。欲しいものは欲しいって素直にダダをこねろよ』

自分が響に投げた言葉だ。

——欲しいものは欲しいって、素直にダダをこねられたら....

「どんなに楽だったかな、ヒビク...」

考えても仕方のないことだ。現実、あかねは颯土のもと、神戸にまで行っている。

そして、今、泣いている。

——泣いて、俺に電話をよこした....

「群竹え、しっかりしてくれよなあ...」

思わず頭をかきむしやる。

すっかり眠気が覚めてしまった田村は、冷蔵庫から缶ビールを取り出しひとり思いにふけるのだった。

「そろそろ起きないとヤバイんじゃないの？」

資料室の長椅子で寝ている颯土の体を、眠い目をこすりながらの純平が揺り動かした。

「ん...、もうちょっと...」

夢うつつの颯土は寝返りを打とうとしてコンクリートの床に転げ落ちた。

「いってえ...」

頭を押さえながらようやく起き上がり、颯土は辺りを見回した。いきなり目に飛び込んで来たのは無精髭の純平の顔だ。

「おはよう...」

あくびをしながら純平は言う。頭の回転が正常に戻るまで何十秒かの時間が必要だった。そして、颯土は突然弾かれたように立ち上がった。

「今、何時ですか?!」

「もう8時過ぎたよ～」

「ヤバイですっ!」

颯土は6時半にセットしておいたはずの腕時計のアラームを確認した。しっかりと止めてある。

――なんてこった!

昨夜会社に戻ってくると純平はまだここで仕事をしている。瑠璃に頼まれた写真の資料を探し、それを編集していたのだ。随分早く帰った颯土が夜中1時近くに雨に濡れて戻ってきたのは瑠璃のせい、ということを知った純平は、自分の手元の資料と颯土の顔を見比べて笑った。

それから颯土は純平の仕事を手伝い、ふたりがこの資料室の長椅子に転がったのは午前3時近かったのだ。

あかねは東京を6時出発の新幹線に乗ってくる。新神戸に到着するのは9時過ぎ。あと1時間しかない。昨夜はさんざん雨に打たれ髪も服も汚れたままだ。一度寮に戻ってシャワーを浴びて着替えをしたかったが、その時間がもうない。

「4ヶ月ぶりに会う彼女かぁ。いいなぁ～。青春だなぁ～」

純平は呑気に言う。

「ああ、もうっ!俺はどこまでバカなんだっ!」

颯土は叫んで資料室を飛び出し、純平は驚いて固まった。

昨日からの雨はまだ降り続いていた。

「傘!」

玄関脇の傘立てを物色し、いかにももう持ち主はいない、というような青いビニール傘を選ん

で颯土は会社を飛び出した。

このまま新神戸駅に直行するしかない。4ヶ月ぶりの再会だというのに髪はボサボサ、服はよれよれ、おまけに一文無し。キャッシュロビーに寄る時間も考えると、もうギリギリだった。

電車に乗っている時間以外は全て走って新神戸駅についたのは9時5分。新幹線はまだホームに到着していない。ほっと胸をなでおろし、颯土は新幹線のホームに上がっていった。

◇

ヘッドボードの時計が9時を表示しても颯土はまだ現れない。昨夜はとうとう一睡も出来なかった。田村に電話をしたあとは少しだけ心が軽くなったが、不安がなくなったわけではなかった。もしかしたら颯土は自分が一日早く来たことを喜んではいないのではないかと…。どんなに遅くなってもいいからホテルに会い、なんて伝言を管理人に告げたことを、もしかしたら迷惑に思ったのかもしれない…。

――きっと、群竹くんは伝言を聞かないまま眠ってしまったんだ…。そして、今朝も寝坊しているだけ。あともう少し待っていたらここに来てくれる…。

あかねはそう思ったかった。だが、この4ヶ月の間で出来てしまった溝の深さを、今痛いほどに感じている。

颯土の帰りが毎夜遅くて、あかねが電話をする時間に寮に戻っていないのはいつものこと。でもそれなら颯土の方から自分とコミュニケーションをとる努力をしてくれてもいいのに…。公衆電話、電話ボックス、日本中のいたるところに電話はあるのだから…。というのはあかねの本当の気持ちだった。でも、それを颯土に求めたらきっと余計に遠くに行ってしまうようで怖かった。颯土の重荷にはなりたくない。颯土は平気なのだ。音信不通でも、声を聞かなくても…。

――けれど、私はそれでいいの…？

それは、会えないこの4ヶ月間、ずっと、自分に問いかけてきたことだ。会えなくても音信不通でも颯土の気持ちを信じていたい。心まで離れてしまわないように、颯土のことをいつも想いつづけていたい。そう思って、自分の本当の気持ちに蓋をしてきた4ヶ月…。

昨日、颯土には何も言わず一日早く神戸に来たのは、少しでも早く会いたかったのと、心に生まれかけたラビリンスに迷い込む前にそれを消したかったからだ。颯土の思いも寄らない再会をして愛されている確信がしたかった。抱きしめてもらいたかった。

――ずっとずっと、朝まで抱きしめてもらいたかったのに…っ！

アシタハ ジカンドオリニ エキニ イクー。

何の気持ちも心もこもっていないように感じた伝言。

こんなに近くにいて同じ神戸の空気を吸っているのに、今まで以上に遠く感じてしかたがない。どんな理由があったとしても昨夜の約束だけは守って欲しかった。裏切られたような、何か大切なものを失くしてしまったような、せつない、せつないこの気持ちは何だろう…。どうしてこんなふうになってしまったのだろう…。

あかねはベッドサイドの受話器を取った。0発信してプッシュボタンを押そうとして、再びゆっくりと受話器を戻した。

自分から電話をするのはやめよう。颯土の到着を待とう。来てくれるまでここでずっと待っていよう…。

あかねはベッドにころんと横になり目を閉じた。

◇

予定の新幹線がホームを離れてしばらくたった。颯土はホームの端から端までを走ってあかねの姿を捜した。だが、どこにも見当たらない。

「あいつ、もしかして乗り遅れたんじゃないか…？」

朝6時発の新幹線に乗ってくるなんて早すぎると思った。限られた時間の中で少しでも長く会いたいとあかねが言うから反対はしなかったが…。

颯土は次の列車を待つことにした。

そして――。

三本の列車が行き、そのどれにもあかねの姿はなく、ホームの時計は10時を回ってやはりはおかしいと颯土は思う。

一本ぐらいの遅れならありえるかもしれない。だが、これ以上遅れるということはあかねに限って考えられないことだ。何かが起こって出発できなくなったのだろうか。昨夜あかねは友人の家に外泊している。そこで何かあったのだろうか。昨夜、あかねから寮に電話はあったのだろうか。管理人は伝言を伝えてくれたのだろうか。

颯土はホームの公衆電話から寮に電話をかけた。

「そんな?!」

『昨夜、帰ってこなかったんですね。伝言メモが貼り付けたままだ』

管理人の言葉を聞いて颯土は呆然となった。あかねはずっと、昨夜からずっと自分の到着をホテルで待っていたというのか…。

雨の中を、ホテルSまで走る――。

――あかね。何だって急に、俺に何も言わないで…。

こんなすれ違い…意味のないすれ違い…。

泣いているだろうな。俺を恨んでいるだろうな。

部屋のチャイムを鳴らす。

扉は開かない。

もう一度鳴らす。何度も鳴らす。

鍵が外れる音がしてようやく扉が開いた。

「――あかね…」

真っ白なブラウス姿のあかねが颯土を見つめた。必死に笑顔をつくろうとしているが目は真っ赤だ。そんなあかねが、まるで寂しがり屋のうさぎのように見え、心が締め付けられる颯土――

。

「やっと…来てくれたね」

あかねは笑った。

「伝言、今聞いたんだ」

肩で息をしながらの颯土の言葉にあかねは首を振る。

「うん…」

「ごめんな」

あかねはそっと颯土に抱きついた。

「もしも、伝言を昨日聞いていたら、来てくれた…？」

雨と汗の匂いの染みついた颯土のシャツに顔をうずめてあかねは言った。

「…あたりまえだよ」

顔を上げたあかねは颯土の肩をじっと見つめ、

「――…うそ…」

消え入るような声でつぶやいた。

「あかね？」

颯土の腕があかねを抱きしめる前に、あかねは颯土からそっと離れると窓辺に立ち外を見つめた。

「雨降ってるね…」

窓の外は霞んでいる。色とりどりの傘が行き交う道…。

「ああ…」

「今朝、窓の外を見て思ったの。街が蒼いなって」

「蒼い？」

「うん。神戸に降る雨は蒼い色してるよ」

「...そう、かな...」

雨に色があるならば、昨日から振り続いているこの雨の色は確かに蒼。青でも藍でもない、蒼...、と颯土は思った。

「やだ。久しぶりだねって、あいさつするの忘れちゃったね！」

目を指でこすりながらあかねは言った。

「あ、ああ。久しぶりだな...」

ぎこちない再会。

心苦しい再会。

こんなはずではなかったのに.....。

「群竹くん、何か臭うよ」

あかねは颯土のシャツをくくん嗅いでくすくす笑う。

「臭う...？」

颯土は自分のシャツの匂いを確かめた。

「汗と煙草の匂い！煙草吸ってるの～？」

「いや...」

——昨夜の居酒屋だ....。

「昨夜は寮に帰らなかったんだ？不良になっちゃったんだね～」

「不良って...」

「外泊すること多いんだ？群竹くん」

「いや...」

昨夜は思いもよらないアクシデントが重なって...、と言いかけて颯土はやめた。

「シャワー浴びていいよ。私の服でよかったら貸してあげるし。着替えれば？」

あかねはまた笑う。

「あかねの服じゃ、いくら何でも...」

「——着替えてよ...」

あかねはつぶやくように言った。

ここから寮までは歩いて5分だ。颯土は一度寮に戻ることにした。1時間後に再び下のロビーで落ちあう約束を交わし颯土は部屋を出た。

「...群竹くんのばか.....」

あかねは颯土の背中につぶやいた。涙かぼろぼろと頬を伝う。颯土のシャツの肩に微かについていたピンク色はルージュ。――。

――私が暗い部屋で不安と寂しさと闘っている間に、あなたは誰をその肩に寄り添わせていたの...？恋人と再会する前日に電話の約束を破ってまで、あなたはその人と一緒にいたかったの？

押さえていた感情が一気に破裂した。

声を上げて泣く。

窓ガラスを叩く。

遙か下を歩く青い傘の颯土に向かって叫ぶ。

けれど、颯土は振り向かないし見上げない。

けだるそうな足取りで、坂の道を登っていく後ろ姿は霞んだ空気に溶けてやがて見えなくなった。

あかねは後ろ手にサッとカーテンを引いた。

1時間後、着替えをすませた颯土がホテルのロビーに戻るとあかねの姿はなかった。フロントから部屋に電話を入れてもらうように頼むと、

「水沢様でしたら、さきほどチェックアウトされました」

フロント係が事務的に言う。

「チェックアウト...？何かの間違いでは...？」

「いえ、確かに」

颯土は玄関を飛び出した。

――どこ行ったんだ、あかね？！

通りの左右を見回してもあかねの姿はない。

――あかねを傷つけた...。俺はまた、あいつを傷つけてしまった...

何も告げずにチェックアウトをし、姿を消したあかねの決意が颯土には苦しいほどに伝わっていた。

――駅へ。新神戸駅へ！今行かなければ、もう...！

だが、走りかけた颯土の足が、ゆっくりと止まる――。

「――...疲れたな、俺...」

そうつぶやいて颯土は立ち止まったまま空を見上げた。蒼い雨が顔の上で小さなしぶきをあげ、その欠片がキラキラと舞いながら空中に飛んだ。

アスファルトの上で木の葉たちがカサカサ喋りはじめた。近所の幼稚園からは、今行われている運動会の軽やかな行進曲が乾いた風に運ばれて届く。そして部屋の中では、途切れ途切れの『人形の夢と目覚め』が、派手な不協和音を響かせたあとに唐突に中断された。

「再来年の今頃は、私もどっかの幼稚園で子どもたちとかけっこしたり出来るかなあ…」

そうつぶやいてヒカルは窓の外に目を移した。

保育科に通って半年。とりあえず順調に過ごしている。ひとつの科目を除いては…。

目の前のソレを見つめヒカルは思わずため息が出た。並ぶ黒と白の鍵盤が先が見えない果てしない階段のように思える。

明日は試験。それも追試。その課題曲がエステン作曲の『人形の夢と目覚め』なのだ。

基礎科目は教育心理学も保育研究もその他もだいたい優秀な成績をおさめているヒカルだが、専門科目のピアノだけはどうしても苦手。

「ヒビク先輩やあかねちゃんはなめらかに滑るように指を動かして心地よいメロディーを奏でられるのに、何で私はいつまでたってもブツ切りの音しか出せないのかなあ……」

ヒカルは休めていた指を再び動かし始めた。だが、右手と左手が一緒に動いてくれない。原曲はいったいどんな曲なのか、はじめて聴く人には絶対にわからないだろう、と、自分で弾きながら思うヒカルだった。

「ヒーねえ、電話だよ！すごい珍しい人！」

妹の久美子がコードレス電話の子機を握って、勢いよく部屋に駆け込んで来た。

「だ、誰？」

ヒカルは指を止めて久美子が持つ電話機に注目した。

――もしかして、ヒビク先輩？！

ヒカルの胸は躍り、顔は輝く。

「ぶー、残念！ヒビク先輩じゃないよ！」

久美子はそんなヒカルの顔色を見て意地悪く言った。

「もう！早くかきなさいよ！」

ヒカルは久美子の手から子機を奪い取って耳にあてた。

「もしもし？」

『…ヒビクセンパイじゃなくて、悪かったな…』

控えめにボソボソと言う声のあるじは、

「群竹くん？やだ、ほんと珍しい！」

「あたしだってソージくんの声聞くの久しぶりだったのに、ソージくんったらすぐに『姉貴にかわってくれ』って言うんだよ、まったく…」

久美子はぶつぶつ文句を言いながら階下に下りて行った。

「どうしたの？あ、もしかして夏に一度電話くれたときのつづき？」

『まあな…。期待しないで待ってるって言われたから、それを裏切ってみた…』

それにしても、日曜日の昼下がりにあの颯土が電話をよこすなんて珍しいこともあるものだ。あかねにはちゃんと電話をしているのだろうか。電話の向こうの颯土の声に張りがないように思うのは気のせいだろうか、ということ、ヒカルは一瞬の間に思った。

「元気ないみたい？何かあったの？」

『…相変わらずの、消化不良を起こしそうなピアノを電話越しに聴いちゃったんで、ちょっと…な』

「何よ、それ！失礼ね！」

そう言いながらヒカルの顔は真っ赤になっていた。以前にも颯土には『消化不良を起こしそうだ』と言われた。その時からピアノの腕前はちっとも上達していない。

「明日、追試なの…。これでも必死なんだよ…」

情けない声を出し、ヒカルは言った。

『まあ、誰にだって不得意分野はあるさ…。けど、それじゃ幼児たちが…な』

「もう、何回も同じこと言わないで！」

電話の向こうの颯土に向かってヒカルは思わず手を上げる。

『今、俺をぶとうとしただろ？』

「え？何でわかったの？」

『電話線の中に見えた…気がした』

そう言ってから、颯土はしばらく沈黙した。

「…どうかした？」

『…みんな、元気か？大久保や伊藤なんか』

「うん。元気だよ。と言っても、高校を卒業してからは全然会えないんだけどね」

勇斗はヒカルの家の近くにアパートを借りてひとり暮らしをしている。時々駅でバッタリ会うこともあるが、夜学に通いながらいくつかのアルバイトを掛け持ちしている勇斗はいつも疲れている様子だった。それは、今の颯土と状況が似ているのかもしれない、とヒカルは思っている。もちろん、ヒカルに会った時の勇斗は相変わらずおちゃらけてはいるけれど…。

祐輔は大学に入っても剣道一筋、らしい。卒業後は一度も会っていない。時々祐輔と同じ大学に通っている麻耶から噂を聞くだけだ。その麻耶とも、もう何ヶ月も会っていない。

『あいつら、どうなったんだ？』

「あいつら？」

『大久保と結野…』

「ああ、どうにもなってないよ…」

高校時代、麻耶は祐輔を想っていた。そして、祐輔に贈るためのタペストリーを作っていた。それを昨年9月の祐輔の誕生日に渡しそびれて、ようやくこの7月に渡した、ということ、ヒカルは麻耶から聞いていた。だが、祐輔は麻耶の気持ちまでは受け取らなかった、らしい。

麻耶ははじめての失恋に傷つき、その時はかなりへこんでいたが今はもう立ち直っているだ

ろう。いつまでもくよくよしている麻耶じゃない。

祐輔が麻耶の気持ちに応えなかったのは、麻耶を想う親友の勇斗のためだろう、ということはヒカルにも予想はついている。祐輔はどこまでも律儀で融通のきかない剣士なのだ。

『ん？』

「大久保くん、今はそれどころじゃないみたいだし。生きていくのが精一杯って感じだよ...」

『そうか...。あいつも大変なんだな...』

颯士の言葉の語尾があやふやに途切れた。

「やっぱり変じゃない？なんかあったんでしょ？じゃなきゃ、群竹くんが私に電話してくるなんてことないんじゃない？」

『...何もしゃ電話しちゃいけないのか？』

「そういうわけじゃないけど、あかねちゃんとケンカでも、した？」

『.....』

「群竹くん？」

『...あかねとは別れた...。浅倉、聞いてなかったのか...』

聞いていなかった。

あかねとはしばらく会っていないし電話もしていない。あかねが颯士に会いに神戸に行ったことも、神戸でふたりの間にあったことも、ヒカルは今、颯士から聞くまで知らなかった。

『この間、あかねから手紙が来た』

「何て書いてあったの？」

——私は、いつもそばにいられる人じゃないとダメみたい...。

毎日会って触れ合っていたい。今まで誤魔化してきたけれど、これが私の本当の気持ち...。

それでも、群竹くんを信じていたかった。神戸であなたに会うまでは。

ごめんなさい。全部私のわがまま。

今まで、ありがとう。

いつかまた昔のように、`仲間、`として再会できる時が来ることを...——

「群竹くん、あかねちゃんにちゃんと言いついたの？寮に戻れなかったわけをちゃんと話したの？」

『いや...』

「このままでいいの？このまま別れちゃっていいの？」

高校時代の颯士とあかねがヒカルの胸に次々と蘇ってきた。最初から最後まで、あかねは颯士だけを見つめていた。ふたりはあんなに仲がよかったのに、どうしてたったの4ヶ月会えないだけで別れなくてはいけないほど心が離れてしまったのだろう。ふたりの間は変わらないでいて欲しかった。離れていても思い合っていて欲しかった、というのはヒカルのささやかな願いだったのだ。

『俺、やっぱり人と付き合ったりするのに向いてない...』

「群竹くん！何でそんなこと言うの?!」

『...今、あかねと別れたって現実に向き合っているけど、それほどショックを感じていないんだ、俺...』

颯土は言葉を選びながら、それでもハッキリと言った。

「そんな...」

『そういう自分にすごいムカつく。あかねを傷つけておいて平気である自分に腹が立つ。こんなんじゃないかって思う。でも、やらなきゃいけないこと、考えなきゃならないことがたくさんあって、わけがわかんねえ...っ!』

しばらくカメラにも触っていない。カメラを持つのも写真を撮るのも苦痛に感じている。提出しなきゃならないレポートは後から後から追いかけてくる。単位もとらなければいけない。毎日が目まぐるしくて、何もかも全て投げ出したいと思ってしまう、と颯土は言った。

『けど、ひとつだけ、言えることは...、』

颯土は一度言葉を止め、

『...それでも、俺はやっぱり何かを見つけないかと思っているってこと...』

と、つぶやくように言った。

『それが...今の俺の全部』

ヒカルは、卒業式にみんなで撮った写真を机の上から手元に引き寄せた。薄いピンクの翼を背にみんなが笑っている。

「...群竹くんは、たぶん間違っていないよ」

ヒカルは写真を見つめながら、かみ締めるように言った。

『浅倉...?』

音信不通が続く颯土を信じきれず寂しい思いを募らせ、待つことに疲れてしまったあかねの気持ちはヒカルには痛いほどわかる。恋人とはいつも一緒にいたい。少しだって離れていたくないと思うのはあたりまえのこと。

でも....

「私ね、ヒビク先輩を待たないことにしたの...」

『え...?』

颯土が驚いたように訊き返す。

「最近になって気がついた。夢って簡単に手に入るものじゃないってこと。ヒビク先輩も今の群竹くんと同じように、迷ったり悩んだりして苦しみながら自分の夢に向かって必死に歩いているって思うんだ...」

『...ああ、そうだろうな』

「だからね...、そんな先輩が夢を叶えて帰ってきたとき、私が止まったままじゃいけないって思った。私も私の道を歩いて進んでいたい。待っているだけじゃ進めないから」

いつまでも繋がっていたい心。けれど、それに囚われてしまっただけ思い出にしがみついただけになってしまう。自分も響も生きている。時間は未来に向かって流れているから一一。

「ヒビク先輩のことはこれからもずっと好き。忘れられないと思うし先輩を応援してる。でも、もう、高校時代の思い出に囚われないで、この場所から繋がる夢とか未来に歩いて行こうって思うんだ」

しばらくの沈黙。

『なんて言っているかわからないけど、たぶん...』

慎重に言葉を捜している颯土をヒカルは感じた。

『たぶん、風間先輩もそんな浅倉でいてくれた方がいい、と思う...。俺だったら...、ただ俺のことばかり考えて待っていると焦るし重くなるから』

「やっぱり、そうなんだね...」

そうだろうとは思っていても、ハッキリと言葉にして突きつけられるとやはりツライ。ヒカルの心の中に一瞬の矛盾が駆け巡ったが、すぐにそれを沈めた。

『俺は、あかねのこと、嫌いになったわけじゃないんだ。別れたかったわけでもない。でも...』

颯土の途切れた言葉の先をヒカルは自分で繋いだ。

颯土は追いかけてなかった。あかねはきっと追いかけてもらいたかったに違いない。そして、颯土が追いかけていれば別れはなかったのかもしれない。

だが、それがふたりの解決になったかどうかは分からない。颯土もあかねも互いにそれぞれの立場で同じ思いを引きずったままの毎日を過ごしていたかもしれない。

傷ついても傷つけても、自分で決めたことに向かって進まなければいけない時があるとしたら、颯土は今がその時なのかもしれない。

卒業式の写真。

この頃の寄り添い笑う颯土とあかねは、もういないのだ。

それが現実。

現実は移り変わっていくもの一一。

「ずっと、同じ気持ちじゃられないんだね...」

ヒカルは写真を机に戻し、裏返しに伏せた。

『ああ...、そうだな』

「でもさ、前に進もうね。未来を見て歩こうよ」

ヒカルの目の前にはいつか颯土と亮太と三人でつけた背比べの傷がある。その一番上の傷をヒカルは指でそっとなぞった。

『おう...。そうだな』

颯土の声にも少しだけ張りが戻ったようだ。

「群竹くん、焦らないでね」

受話器を持つヒカルの手に自然と力がこもった。

「私は写真のことは全然わからないけど、群竹くんの写真にはいのちがあると思うの」

『一一いのち...?』

文化祭での自分と響を撮ってくれた写真も、沖縄で撮ったという写真の数々も言葉ではうまく言えない、生きている何かを感じたヒカルだった。

風、匂い、空気。そして、想い――。

写真を見ただけではわかるはずのない感触を身近に感じる事が出来る颯士の写真。それは、颯士が被写体の生命（いのち）を感性で撮影しているから、とヒカルは思っている。

「群竹くんが思うがままに写真は撮り続けて欲しいと思う」

『思うがまま...か』

「うん。だから、焦らないで頑張て！」

『...サンキュー。お前も頑張れよ。まずは、そのピアノ...』

電話の向こうで颯士は笑った。

「わかってるわよ！」

言葉はつっけんどんに返しても、颯士が笑ってくれたのがヒカルは嬉しかった。

『...それじゃ、また』

「うん」

ヒカルが言葉を返すとすぐに電話は切れた。

いつまでも、同じ気持ちではられない――。

悲しいけれどこれは現実。

この現実と向き合いながら未来を見つめて朗らかに歩き出そう。

ヒカルは再び鍵盤を眺めた。さっきまでの憂鬱な気持ちはどこかに消えて果てしないと思った階段にも終わりがあるように思えた。

受話器を置いても颯土はしばらく立ったままだった。

ここは寮のそばの電話ボックス。

目の前の小さな公園では幼児たちが高らかに声を上げて遊んでいる。それをぼんやりと眺めながら耳に残る言葉の余韻から、覚えている半年前のヒカルをイメージしていた。

「幼稚園の先生か...」

これ以上はまるものはない、と思えるほどヒカルらしい選択だ。子どもが生まれてはじめての師と呼ぶ相手に、これほどふさわしい人物もいないだろう、と、颯土は思う。

――何で俺、あいつに電話したんだろうな.....。

ふと考えておかしくなった。別に用事があったわけじゃない。電話をかけようと思ってここに来たわけでもない。たまたま通りかかり、公園の子どもたちの笑い声を耳にした時に、ふと、ヒカルを思い出したただけだ。

颯土は電話ボックスの地面にスルスルと座りこんだ。

あの日、雨に打たれながら考えていた。今追いかけていなければ、あかねは自分の前から消えてしまうだろう...と。

だが足が動かなかった。心も動かなかった。前日からのトラブル続きで疲れていたということもある。けれど、それだけじゃない...

好きだったはずなのに――。

別れたことにショックを感じていない、とヒカルに言った言葉は半分嘘だ。あかねからの手紙はショックだった。

自分はあかねをどこまで傷つけてしまったのだろうと。大切だったものが手の中からすり抜けて行ったのを実感して涙が込み上げた。それは、悔し涙だ。

人はいつまでも同じではない。どんなに大切だと思っけていてもいつかは離れてしまう。その時に絶望することを自分はあるに恐れていたのではなかったのか。なのに、それすらも感じ取れないくらいに鈍くなってしまった己の心に愕然とした。

あかねが去ったのは誰のせいでもなく自分のせいだ。追いかけていければ、再び抱きしめることが出来たかもしれないのに――。

――でも、俺は頑張った...。真剣にあかねと付き合った。自分に無理もたくさんした。その時その時の気持ちにも決して嘘はなかったはずだ。

だから、いいよな...とあの日からずっと、誰に問いかけるわけでもなく心の中でつぶやき続け

ていた。そう自分を励ましていないと辛かった。

だから....

——群竹くんはたぶん間違っていないよ。

この一言に救われた。あれほど想っていた、いや、今も深く想っている響を「待たない」と決め、それを言葉にするまでにはヒカルだってきっと多くの涙を流したに違いないのに。

そして、それでもなおそんなヒカルに愛されている、愛され続ける響をどこかで羨ましいと感じた。

「群竹くんの写真にはいのちがある...。思うがままの写真を撮り続けて...か」

目が覚めた気がした。

この言葉の向こうにきっと探しているものがある。今まで解りそうで解らなかったもの。その糸口が漠然とではあるが見えたように思う。

冷静になってもっと見つめなければいけない。自分が本当に望んでいること。望んでいるもの....

自分がこれから何を、どんな写真に撮りたいのか、それがわかった時にその答えが出る気がする。カメラの「カ」の字も知らなかった自分が、純平と出会ってからどんな時にシャッターをきってきたのか、己をもう一度見つめ直したい。そして、見つけたい。この迷路の先の出口を。

「あいつは太陽だな...」

思わずつぶやいて颯土は笑った。

◇

数日後の光創社の資料室。

「純平さん、ちょっといいですか？」

颯土は作業中の純平に後ろから声をかけた。

「ん？どうしたの？」

純平は手を止めて振り向いた。

「俺、大学辞めようと思います」

「...自分で決めたの？」

「はい。決めました」

考えに考えて出した結論だ。今の自分には大学で学ぶことよりも思うがままの写真を撮り続けたい。それには学校に縛られている時間が心身共に大きなりスクになる。大学で学ばなくても自分にはこの道を教えてくれた純平という師がいるのだ。

純平は颯土をじっと見つめた。そして部屋の隅のポットから、ふたつの紙コップに珈琲を淹れ、ひとつを颯土に渡した。

「あ、どうも...」

颯土は紙コップを受け取った。

「僕もね、学校中退したんだ」

純平は子どものようにあっけらかんと笑った。

「そうだったんですか...」

「群竹くんと同じように写真科に入ったんだけどね、一年で辞めちゃった」

「どうしてですか？」

「たぶん、君と同じ理由だと思うよ。若かったくせに妙に焦っちゃってたからね」

純平は珈琲をズルズルとすすった。

「あちっ！何だってこんな熱い珈琲をポットに入れておくんだよなあ。僕、猫舌なんだよねえ...」

「...、純平さんも...」

「君も猫舌なの？」

「そーじゃなくて...！」

純平はあははと笑って颯土に長椅子に座るように促がした。

「群竹くんと一緒にいると、ほんと面白いよ！」

「俺が？面白いですか？」

颯土は少し慚然とした。

「君のそういうところ。悩んで出口探して必死になってさ。不器用なんだけど凄く輝いてるよ」

純平はまた笑った。

「輝いてなんかいいですよ、俺は全然...」

昔からネクラのムラタケと言われてきた男だ。どんよりオーラは出していても輝いてるわけないじゃないか、と颯土は心の中で反論する。

「君は、なんていうか、僕が昔に落してしまったものを拾ってきてくれるんだ。君をこの道に強引に誘ったのは間違いじゃなかったって思うな」

純平は自分の言葉に酔いしれるように、うんうん、とうなづいた。

「よくわからないけど...、俺も写真を撮ろうと決めたことは後悔してません。でも今、ここにいる自分は違うように思うんです」

「うん。その価値は自分で決めていい、自分で判断していい、と僕は思う」

純平はポケットから煙草を取り出し火を点けた。

「僕は大学を辞めてからアルバイトをしながら写真を撮りまくったよ。色々な人と出会い、色々な風景と出会い、それらを思うがままに撮って歩いた。そしてあらゆる出版社、新聞社に投稿しまくったんだ。ほんと、がむしゃらにね」

颯土は『ここは禁煙！』と書いた貼り紙と純平の煙草を見比べながら話を聞く。

「その中の一枚が小さな賞を取って、それがきっかけでようやくカメラマンとしての仕事ができ

るようになった。でもね、これが目的じゃないんだよ、僕は」

「はい」

「まだまだ僕も自分で決めなくちゃいけないことがある。安定した生活に慣れてしまってその決意が先延ばしになっていたけれど…」

純平は灰皿を探して部屋中をキョロキョロし、どこにもないとわかると、手に持っていた紙コップの中で煙草の火を消した。そして、

「僕もそろそろ決めるかな」

と、颯土を見た。

「何を…ですか？」

「群竹くんは大学辞めたらどうするんだい？このままここで見習いとしてやっていくのかい？」

颯土の質問には答えずに純平は言った。

「そのつもりです」

純平を尊敬している。師匠だと思っている。こっちの大学にきたのも純平がここにいたからだ。学校を辞めても純平の下で見習いカメラマンとして写真を撮っていこうと思う気持ちまでは変わらないし、そうすることが目的だった。

ところが――、

「近いうちに、僕はきっと会社を辞めることになると思う」

「純平さん?!」

思いがけない純平の言葉に、颯土は長椅子から勢いよく立ち上がり、その弾みでテーブルにおもいきり足をぶつけた。

「痛っ！」

「おいおい、そんなに驚くなよ。ずっと前にも言ったろう？僕には夢があるんだって」

純平は自分の撮る写真にテーマを持っている。そのために歩き、人と会い、取材をしながら撮影をしている。それは会社の仕事とは無関係であり、純平自身のライフワークなのだ。会社の仕事の合間を縫いそれらの写真を撮り集め続け、いずれは結野純平というひとりの写真家としての個展を開催したい、と颯土は昔純平から聞いた。

「はい…」

「君も決意したんだ。だから、僕もそろそろ自分の夢のための決断をしなくちゃ」

「でも…」

こんなに急に決めなくても…、と、颯土は思った。

「実はね、ベトナムに行った頃から考えていたんだ。僕もそろそろ日本を出て世界の写真を撮る頃かなって、ね」

そう言って、純平は決まらないウィンクを投げる。

「世界？世界に行っちゃうんですかあ～？」

颯土は、心底途方に暮れたような声で叫んだ。ベトナムで純平から聞いたある戦場カメラマンの話の思い出す。彼も己が見る夢のためにひとり戦時中のカンボジアに渡り、そこで命を落とした。自分の命を懸けてまでも撮りたかった写真、その熱い思いに衝撃を受けたのはつい最近の

ことだ。

純平にもそんな熱い思いがあり今の生活を捨てて写真に懸けるといのか…。

だが、今、純平という師を失ったら自分はこの世界ではやっていけない。自分にはまだまだ純平という師が必要だ。

やっと見つけかけた何かが、スルリと手元から滑り落ちてしまったような感覚に颯土は陥っていた。

唐突すぎる展開――。

「俺はどうすれば…」

「目の前が真っ暗になってる？」

うつむく颯土の顔を下から覗きこみ純平は面白そうに笑う。

「…、俺も一緒について行ったらダメですか？純平さんと一緒に世界に…」

と言う颯土の口の前に純平は手を出し、

「それはダメだ。これは僕のライフワークであって群竹くんには群竹くんが決めるべきワークがあるはずだからね」

やや厳しい眼差しを刺した。

「俺のワーク…」

あるのだろうか？自分にも、純平やあの戦場カメラマンのように、全てを捨てても懸けたいと思えるワークが…。

――群竹くんの写真にはいのちがある。

ヒカルの言葉が蘇った。

「僕と違って群竹くんには天性の才能がある。自分を信じてみな」

「才能なんてないですよ…」

「こらこら、勝手に自分で自分を計っちゃダメだよ。僕は君が羨ましくて仕方なかったよ」

純平の目は真剣に颯土を見ていた。

「君という人間と2年ばかり付き合ってみて、君の中にある歪んでいない目に触れるたび僕は君に嫉妬したぐらいだ」

「歪んでいない目…」

「君ほどわかりにくく見えてわかりやすい人間もいないよ。君の写真は一片の曇りもなくそれを映し出す。君が語らないものが全て写真の中にある。これほど純粋なカメラマンを僕は他には知らないよ…」

颯土は言葉が出ない。純平の目をただ見つめて話を聞く。

「僕にもあったはずの『歪んでいない目』を、君と君の写真を見るたびに僕は少しずつ思い出すことが出来た。一緒に沖縄に行っただろ？」

「はい...」

「あれはね、君の写真を見たからなんだよ。ピクチャーライフに僕が投稿した写真ね。あれを見た時にあの旅行を思いついた。あの頃の僕は自分の写真に鬱々としていたんだ。壁にぶち当たっちゃってたわけね。そんな僕には君が必要に思えた。君と一緒に旅をすることが僕の出口だったんだ」

「でも俺は純平さんが写した沖縄の風景の写真に魅せられてずっと憧れていたんです、沖縄に...」

颯土がはじめて写真というものに心を奪われたのは、雑誌に掲載されていた沖縄の風景であり、それを撮影したのは純平だった。

「嬉しかったよ。君の雑誌が自然にあの写真のページが開くほどになっているのを見た時はね」

そう言って、純平はまた決まらないウィンクをする。

「君にはまだまだ未開墾の畑が眠ってる。それを耕すのは自分しかない」

純平は颯土の肩に手を置いた。

「でも、俺はこれからどうすれば...。純平さんがいなくなったあと、どうすれば...」

「僕が去ってから君がどうするか、君自身が決めることだ。ここで見習いを続けるのもいいし、他に行ってもいい。君が本当に写真を撮りたいと思うなら選択肢はいくらだってある」

「はい...」

また一から考え直さなくてはならないのか、と、颯土は途方に暮れた。

「僕は君にきっかけを与えただけであって君の師ではない。今、僕にこの決断をさせてくれたことを思ったら君の方が僕の恩師みたいなもんだよ」

「そんな...！」

ありえるはずがない。純平がいなければ何も出来ない。純平がいたからこそ、今自分は写真を撮っているのだ。そして、今こんなにも揺れている。

純平はもう一本の煙草に火を点けようとして、『ここは禁煙！』の貼り紙に気がつき、仕方なくそれをしまった。その代わりにポケットからキャラメル箱を出し、ちまちまと包みを開けて口に放り込んだ。

「君はガリコキャラメルは好きかい？」

「え...？いや、子供の頃は好きでしたよ？オマケが楽しみでよく買ってました」

「このオマケは何だろ？わくわくするなあ」

と、純平は箱のオマケを開ける。思わず颯土も覗き込んでいた。

「おっ！飛行機だ！世界を目指す僕にとってこのオマケは明るいぞ！」

子どものようにしゃく純平を見て、颯土は苦笑する。

「なあ、群竹くん、このオマケを手に入れるためにはガリコを買わなくちゃならないだろ？ガリコがあつてのオマケだよな？」

純平は飛行機を眺めながら言った。

「...そうですね」

「僕たちは今オマケなんだ、互いにね」

純平はそう言って笑った。

「オマケですか...？」

「うん。君は僕のオマケ。僕は君のオマケ。僕たちはまだまだ写真に対して一人前じゃないんだよ。写真あつての僕たちになろうぜ？ガリコになろうよ」

純平は一粒を颯土の手の上に乗せた。

「...はあ」

颯土は間の抜けた返事を返す。

「よく分からないんですけど...」

言いたいことは何となく分かるが、核心に触れないのがいつもの純平談だ。

「人間だよ、群竹くん。互いが砥石になりながら磨かれていくのが人間。これは僕の哲学でワークの行きつくところでもある。この言葉を君にも贈るよ。僕は君を尊敬しているし信じている。いつまでもオマケをやってちゃいけないだろ？僕たちはさ」

「...純平さん」

砥石になりあいながら磨きあえる相手。そういう相手がそばにいるのといないのとでは、得るものと人生の深みと生きている意味が全く違うのだろう。人と関わることを拒絶していた頃の自分ならきっとこうは思えなかった。

「君の決意が僕に決意をくれた。そして、僕の決意によって君はもうひとつ決意しなくちゃいけない。わかるね？」

「はい。わかります」

純平が去ったあとの自分の道――。

今、考えられることはたったひとつだけ。

「ま、残務があるから年内いっぱいはまだいるよ。君もゆっくり考えればいいさ」

「はい。でも、俺、もう決まりました」

颯土は微かに笑った。

「え？さっきと言ってることが違うぜ？随分決断が早いこと...」

純平は複雑な顔をする。

「ま、いいか、決まったんなら！じゃ、僕もさっそく辞表を書かなくちゃ！」

純平はそう言うと、あたふたと資料室を出ていった。どっちが早いんだか...、と、颯土は苦笑した。

やがて訪れる純平との別れは考えてもいなかった展開だ。だが、それによってひとつの決断が導き出された。

東京に帰ろう。

あの家のあの部屋に。

自分の居場所はあそこしかない。

あの場所から再び出発しよう。

あの場所こそが、今ある自分の原点だから。

ヒカルがいる、東京こそがー。

ピアノの追試も終わり、どうにか無事に難関を通り抜けてから3週間が過ぎた。

街はそろそろ冬支度。道行く人々も厚手のコートを纏いはじめている。港が見える学校の庭も枯葉色に染まり、潮風は冷たくヒカルの頬に当たった。

「最近、海ちゃん来ないな？」

隣りに立つ亮太が言った。

「公演の準備で忙しいのよ。初めての主演だし、多分毎日必死に稽古をしているんだと思う」

海が主演を務める舞台『現代版ロミオとジュリエット』の初日が1週間後に迫っていた。海が所属する『劇団夢飛行』は、若い役者を使って斬新かつアクティブな舞台を演出する劇団として最近少しずつ名が知られてきている。脚本と演出を手がけているのは鮫島コウという劇団長で、以前ヒカルが稽古場を覗いた時に海を怒鳴りつけていたその人であり、最近をよくメディアにも登場する人物だ。

海はこの舞台でロミオ役に抜擢されていた。海の話によると脚本でのロミオはマフィアのボスの息子で、ジュリエットはマフィアを追う捜査官の娘。相容れぬものたちの恋の悲劇の物語、らしい。批評家、評論家を招待しての初舞台。海にとっては大きな転機になりそうな予感がしているヒカルだった。

「いよいよ初日かあ。ヒカルちゃんはもちろん観に行くんだろ？」

「うん、行くよ。初日と千秋楽と両方チケット取った」

「おっ、偶然だなあ～！俺も同じ日にチケット取ったんだよ。一緒に行こ！」

そう言って、亮太はにこっと笑った。

「偶然かなあ...？」

「偶然、偶然！」

もちろん偶然なんかではない。海に頼んでヒカルと同じ日のチケットを回してもらったのだ。

「ふーん、偶然ねえ…。じゃあ、一緒に行こ。私もひとりじゃ寂しいなって思っていたから」

目を細めて笑いながらヒカルは言う。

「そうだろ？ひとりじゃ寂しいよな？これからもっと寒くなるし、俺が毎日隣りに寄り添ってあげるよ？」

亮太はヒカルの隣りにピタッと張り付いた。が、

「ありがと！よっぽど寒くなったらお願いするね。私、これでも寒さには強いほうなんだあ」

と、ヒカルはそれをサラリとかわす。

「ちえっ！相変わらず頑固だなあ」

亮太は頭をかきながら苦笑した。

毎日冗談のように言い合っているが、ヒカルには亮太の一途な想いはわかっている。だが亮太の求愛をまともに受け止めたら、自分も亮太も辛い思いをするだけ、ということも知っている。響を待たないと決めたといっても、すぐに他の男の子を見つめることなどヒカルにはできない。

亮太の想いは率直で爽やかだ。毎日『好きだ』と言われていても不思議と重く感じない。このまま友達の関係で付き合っていくことができるなら、亮太はずっと一緒にいたい友人。

けれど、それでいいのかどうか今のヒカルには答えが見つからなかった。

「今日はこれから予定ある？食事にでも行かない？」

亮太は木枯らしが寒そうに首をすくめて足踏みをしながら言った。

「これからあかねちゃんと約束してるの」

「あかねちゃん？懐かしい名前だなあ。彼女元気？颯とはうまくいってんだろ？」

「...別れちゃったよ、群竹くんとあかねちゃん...」

「ええ？！だって、あんなにふたりは...」

「たぶん、今日はその話だと思うの」

ヒカルは颯士からの電話でふたりの別離を知った時、あかねに連絡をしようとしたが、とどまった。何かあると真っ先に話してくるあかねが、夏以来すっかり連絡をしてこなくなったのにはきっとわけがあるのだろう。あかねが話したくなかった時は必ず連絡をしてきてくれるはずだと待っていたのだ。

そして昨夜、その電話がやっと鳴った。あかねから、明日会えないか、という電話だった。あかねは大学の帰りに日比谷に用があって立ち寄るといっているので、駅で待ち合わせる約束をしたのだ。

「そっか...。じゃあ、俺は邪魔だな」

「ごめんね」

「いや、いいさ。ヒカルちゃんとのデートは海ちゃんの初日まで楽しみにとっておくよ！」

亮太は笑った。

◇

午後5時の日比谷駅。

改札の外で待つヒカルを見つけてあかねは走って来た。

「ヒカルちゃん、久しぶり！」

明るい笑顔だ。数ヶ月振りに会うあかねは少し痩せたように見える。だが、頬も唇もピンク色に輝いて生き生きしていた。そんなあかねにヒカルは少しだけ違和感を覚えた。心のどこかで颯士との別れを後悔しうつむき加減で現れるあかねを想像していたのかもしれない。

「あかねちゃん、キレイになったね！」

「そう？でも、ヒカルちゃんだって一段とキレイになったよ！」

ふたりは再会を喜び合ってから、日比谷シャンテの中にある珈琲ショップに場所を移した。オーダーを済ませ落ち着いてからあかねは言った。

「ずっと、連絡もしないでごめんね」

「それはお互い様でしょ！」

「そうだね。卒業しちゃうとなかなか高校時代みたいにはいかないね。毎日そんなに忙しいわけ

でもないのに...」

ウェイトレスが置いていったおしぼりで、ゆっくりと手を拭うあかねの左薬指には小さなピンクの石がついたリングがはめられている。ヒカルはやや不審に思いながら、

「うん、そうだね...」

と応えた。

「ずっと、ヒカルちゃんに言わなきゃって思ってて、なかなか言い出せなかったことがあるの...」

あかねはそこで言葉を切り、微かなため息をついた。ヒカルはそんなあかねをじっと見つめた。

「私ね、群竹くんと別れちゃった...」

言って、あかねはうつむく。

「うん。聞いたよ...」

「え？誰に？誰にも言ってないのに...」

あかねは驚いた目でヒカルを見た。

「...群竹くんから」

「そっか...。群竹くん、ヒカルちゃんに電話したんだ...」

少し寂しそうにあかねはため息をついた。

「どこまで聞いた？」

「...だいたいのこと全部話してくれた。あかねちゃんが神戸に行った日に寮に帰れなかった理由も、ね...」

ヒカルはあかねを真っ直ぐに見つめた。

「あの日ね、群竹くんからうちに電話があったんだよ。あかねちゃんを探してた」

今思えば、電話などかけてきたことがない颯土から少しせっぱ詰まったような声で電話があったあの日こそ、あかねが神戸に発った日で、そんなこととは知らない颯土はあかねと連絡を取るために必死に駆け回っていたのだ。あかねはそんな颯土の努力を知らない。

「ヒカルちゃんには何でも話すんだね、群竹くん。昔からそうだった...」

「群竹くん、今、自分探しに必死なんだよ。毎日目まぐるしくて体に心がついていかない状態で、そんな時のあかねちゃんからの別れの手紙はショックだったと思う」

それほどショックを感じていない、と言った颯土の言葉を、ヒカルはそれが颯土の本心だとは思えなかった。ただ、感情の表し方が不器用なだけで本当は誰よりも繊細な心を持っている颯土だ。どんな形であっても颯土とあかねは高校時代の3年間を恋人同士として共に過ごしてきたのだ。

ショックじゃないはずがない。だから、自分に電話をかけてきたのだろう――。

ヒカルの口調には、心なしかあかねを責めるような色が現われていた。

「...私が悪いんだよね、わかってる。群竹くんを信じきってあげられなかったんだから...」

――でも…。

あかねは心の中で呟く。

颯土は追いかけて来なかった。雨の新神戸駅でずいぶん待ったが、結局颯土は来なかったのだ。

新幹線の中で飛ぶように変わる景色と一緒に、今までの颯土との3年間も飛んで消えた。

ホームルーム合宿の五色沼で足をくじいて颯土に背負ってもらったことも、部活の合宿の中禅寺湖畔で手を握ってくれたことも、学校帰りに自転車の後ろに乗せてもらったことも、はじめてのキスも、抱きしめてくれたことも全て、彼方に流れ飛んでいった。

「私が今日、ヒカルちゃんに言いたかったことはね…」

あかねは一息をつき、決心したように再び口を開いた。

「私、今、田村先輩とつきあってるの…」

「田村…先輩と…？」

思ってもみなかったあかねの告白にヒカルの動きが止まった。

「どうして…？」

ヒカルはあかねの薬指を思わず凝視してしまう。

「どうしてそんなにすぐに別の人と付き合えるの？群竹くんと別れてまだ1ヶ月ちょっとしか経っていないのに、そんなにすぐに心は変わるものなの？」

ヒドイよあかねちゃん、という言葉はグッと呑みこんだ。けれど――、

「あかねちゃん、田村先輩のこと本当に好きなの？好きで付き合ってるの？これでいいの？」

「…うん」

一瞬の間があき、あかねはうなづいた。

「…群竹くん…、」

ヒカルはうつむいて呟くように言った。

「必死なんだよ…。自分が何処に向かえばいいのか必死に模索して、遠い場所でひとりで頑張っていて、あかねちゃんのこと全然考えてないわけじゃなかったのに、ちょっと会えないから寂しいってだけで、そんな群竹くんの心をわかってあげようとしなくて、あかねちゃん…！」

ヒカルの声は段々と激しくなり、最後は震えていた。

「私なりに精一杯我慢したよ…。連絡がないことも会えないことも寂しくて心がひきさかれそうな夜も我慢した。でも、それじゃ本当の私じゃないの。群竹くんを理解するために、彼に気に入ってもらうために、すごく無理をしてる自分に気がついた。それは群竹くんも同じだと思う。群竹くんも無理してたと思う…、ずっと…長い間ずっと…」

あかねはきゅっと唇を結んでヒカルを見る。それはいつもの優しい眼差しではなく、どこかヒカルを責めるような目だった。

「でも、だからってすぐに田村先輩と付き合うなんて…。田村先輩は群竹くんじゃないんだよ？」

「…わかってるよ、そんなこと！」

とうとうあかねも叫んだ。

「分かってる…。田村先輩を群竹くんの代わりだなんて思ってないよ…」

「あかねちゃん…？」

ヒカルはやや落ち着きを取り戻し、コップの水をコクッと飲みこんだ。

「神戸から帰ってきちゃった日、田村先輩ね…、」

颯土と別れたあの日、新神戸駅から思わず田村に電話をしてしまった。だが涙があとからあとから溢れて声も一言の言葉も出せずにそのまま受話器を戻した。

なのに、東京駅のホームに田村は立っていた。昔と変わらない優しい微笑みを携えて待っていてくれた。

ひとことの言葉を出さなくても、電話口から漏れた微かなホームのアナウンスで全てを察し、何時間も駅のホームで待ち、一番そばにいて欲しい時にそこにいてくれた田村。

『お前、群竹が本当にそんな奴だと思っているのか？お前との約束をすっぽかして別の女と夜を明かすような奴だって、本気で思って帰ってきたのか?!』

と、田村には叱られた。

『どうして奴に言い訳させてやらなかった？きっとわけがあったはずだ。あかねが、ちゃんと納得する理由があったはずだ。今からでも遅くない。群竹のところに帰れよ！このままじゃお前たち、本当に終わっちゃうぞ!』

『…いいの。もう、終わりに…する…』

『あかね!』

『昨夜の群竹くんのことは私だって疑っていない…。でも…』

――追いかけて来なかった。2年前のあの日、校舎の中を泣きながら走っていった人のことは必死になって追いかけて、ずっとずっとそばにいてあげた群竹くんなのに――。

『…群竹くんの理想の女の子になろうって頑張った。ずっと高校の時から頑張ってきた。でも、もうダメ。私は…』

『…?』

『…私は、やっぱりヒカルちゃんみたいにはなれない!』

『あかね…』

『ヒカルちゃんのような女の子になりたかった。明るくて強くて優しい女の子に…。だから、ヒカルちゃんの真似をして生きてみた。ヒカルちゃんのようになれば…って頑張ってきた。けれど…!』

『…真似する必要なんかない。ヒカルはヒカル、あかねはあかねだ』

『でも…!群竹くんはずっと…、ずっと!』

『…わかった。もういい』

田村はそっと頭を撫でてくれた。

『よしよし。よく...、がんばったな、あかね』

『...田村先輩』

『俺はな、そんなふう頑張っていたあかねが高校の時からずっと...、ずっと好きだったよ...』

そう言って抱きしめてくれた腕の中は広くて温かくて安心できた。迷子になって彷徨っていた心が自分の家に帰り着いたような気がした。

「田村先輩はずっと、私を想ってくれていたの...」

あかねは薬指のリングを愛しむようにそっと触った。

「みんな少しずつ変わっていく中で、先輩だけが昔のまま変わらないでいてくれた。それが凄く嬉しかったし安心できたの」

「あかねちゃん...」

「そんな田村先輩の愛に、私は応えたいって思ったの。私は、私を心から愛してくれる人と一緒にいたい。いつもそばにいたい。それが、本当の私...、水沢あかねなの」

「じゃあ、本当にもう...」

ヒカルの言葉にあかねはゆっくりうなづき微笑んだ。

「群竹くんとはいつか、何年か経ったあとにまた再会したいと思う。昔の懐かしい友人として...」

その微笑みを受けてヒカルの心のわだかまりがときほぐれていった。

「そうか...。今、あかねちゃんは幸せなんだね」

「うん。やっと、自分に戻れた気がする...」

「...よかったね、あかねちゃん」

ヒカルも微笑んだ。

「ありがとう。ヒカルちゃんに話せてスッキリした...。ひどい女って責められる覚悟はしてたけどやっぱり勇気が出なくて...」

「ひどい女なんて思ってないよ。ただ、ちょっと悲しかっただけ。あかねちゃんと群竹くんはずっと変わらないで欲しいって願っていたから、ね...」

離れていても、心が通い合う恋人たち。

その実証を、颯土とあかねに託していたのはヒカルの勝手な思いだった。だがこの間の電話で颯土の心を知り、今あかねの言葉を聞き、ヒカルの中で微かに繋がっていた颯土とあかねは完全に決別した。互いに振り返らずに背中合わせに歩き出すふたりの姿がヒカルの中でカタチとなる。

「これからここに田村先輩も来るの」

「え？本当？」

「先輩の学校、この近くの。ヒカルちゃんを誘って一緒に食事に行こうって前から先輩と話していたの」

あかねはふんわりと笑った。

田村がやってきて、『よお、ヒカル！久しぶりだったなあ！元気にしてたか？』とヒカルの肩をたたいた。高校の時とまったく変わらないその口調と仕草にヒカルも何故だかホッとした。

そして、田村の傍らに自然に寄り添い微笑むあかね。心から安心感を携えた笑顔。田村を信頼しきっている笑顔。

愛されているという自信があかねに絶対的な幸福感をもたらすのだろう。見ているヒカルまでもが不思議と心が温まるふたりのほのぼのと温かい光景だった。

――本当に、幸せなんだね、あかねちゃん。

三人で食事をし、駅でふたりと別れヒカルは帰路についた。体のどこかで何かが疼くような想いを携えながら、月明かりの中をひとり歩き自宅の門の前に立つ。

――田村先輩の想い勝ちだね。

何があっても何が変わっても、ずっとあかねだけを見つめてきた田村。

変わらない想い。

そんなふうになんか人を愛せるって素晴らしい――。

愛されるって、素敵……。

――ヒビク先輩は…？

一瞬心によぎり、すぐさまそれを否定する。

まだ、そんなことを考えてしまう自分が悲しくなった。

「群竹くんにはあんなこと言たくせに…」

あかねと田村と自分がいる場所には、今まで必ずいた人――響がない空間をこんなにせつなく想ったのは粉雪の別れ以来はじめてかもしれない。

ヒカルは思わず隣家の部屋の窓を見上げた。半年前から灯りのつかない窓。部屋の主は遠い空の下で今ごろ何を思っているのだろう…。こんな時、あの窓に消しゴムを投げられたらいいのに。

そして、

『お前、この間、前に進もうって、未来を見て歩こうって俺に言ったよな？』

『言ったけどさ、たまにはくじけるときだってあるわよ、私だって』

『ふーん。案外意気地無しなんだな、お前も』

『ふんっ！悪かったですね！』

――…なんて、互いのことをけなしあいながら明るく話せばいいのに…。

「はあ…。群竹くんと喋りたい……」

こんな日は、隣の窓に立つ無愛想な顔が恋しくなる。

――気持ちで思うことと心で想うことってどうしてこんなに違うのかな。もう振り返らない、立ち止まらないって決めたはずなのに。

キメタ、ハズナノニ…――。

12月に入り、海の舞台の初日。

ヒカルは亮太と三軒茶屋駅で落ち合い、開演1時間前には既に劇場に到着していた。

チケットブースではチケットを求める人々が列を作っている。ヒカルはその中の数人の顔に見覚えがあった。同じ短大の学生で海のファンの女の子たちだ。だが当日券は完売で彼女たちはチケットを手に出出来なかったようだ。『劇団夢飛行』は最近になって人気が上がってきた劇団で海の人気も劇団のそれに比例している。ヒカルと亮太は海から前売りチケットを買ってある。前から九列目の比較的いい席だ。

「……」

劇場の入り口にあるベンチでヒカルとチケットを照らし合わせながら亮太は絶句していた。

「中川くん…？」

「海ちゃんって、けっこう意地悪…？」

亮太は自分のチケットをじっと見つめながら、やや啞然としていた。

「確かに俺、ヒカルちゃんと同じ日のチケットをちょうだい、って言ったただけだけどさ…」

「どうしたの？」

「見てくれよ、これ。俺の席、ヒカルちゃんと同じ列なのはいいんだけど…」

亮太が差し出したチケットと自分のチケットを見比べヒカルは思わず苦笑した。

「なにもわざわざ、こんなに席を離さなくてもいいじゃんかー！」

亮太の席は九列目の50番。ヒカルの席は25番になっていた。

「海ちゃん、マジでヒカルちゃんに惚れてるんじゃないだろうな？」

亮太の大声でチケットブースに並んでいた短大生が一斉にヒカルを凝視した。

「ちょっと、中川くんったら！」

皆の視線に刺され、ヒカルはうろたえた。

「隣同士の席が空いてなかったただだよ。変なこと言わないで！第一、私と同じ日にチケットを取ったのって偶然だったんじゃないのー？」

「やべっ！墓穴掘った…」

亮太は肩をすぼめて舌を出した。

「芝居が始まれば舞台に集中するんだから席が離れてたって関係ないでしょ？」

「まあ、そうだけど…」

と、納得はしつつも、芝居よりもヒカルとのデートに重点を置いていた亮太にしてみれば、海の措置はずいぶんと気に入らないのだった。

そんな亮太の不満をよそに、ヒカルは開演時間が刻々と近づくにつれて汗ばむくらいの緊張を感じていた。まるで高校時代、演劇部の舞台にはじめて立った時のような気持ちだ。

夏に覗いた稽古場で見た海の悔し涙。演出家の鮫島に台本を投げつけられ、罵声を浴びせられ、ひとり残されたフロアでたった一言の台詞を何度も何度も繰り返していた海。叩かれても怒鳴られても必死に夢に食らいつこうとする、あの時の海の姿を見た時にヒカルは響を待つばかりで

いるのはやめようと決意をしたのだった。

あれが、きっかけだった。

あれから4ヶ月が経ちようやく迎えた初日。

海はあの時の課題をクリアできたのだろうか――。

まるで自分のことのようにヒカルの緊張は増して行く。

――頑張っ、海ちゃん...！

祈るような気持ちで、ヒカルは何度も心の中で呟いていた。

◇

午後6時。

開場になりヒカルと亮太は劇場内に入った。

最前列には批評家、評論家、見たことのある舞台俳優、見たことのある演出家など招待客たちがいかめしい面持ちで座席についている。

「...、じゃ、俺はあっちだから...」

亮太は恨めしげな顔をして自分の座席に旅立って行った。ヒカルとはちょうど通路から通路の端と端の席である。ヒカルも内心、『やっぱり海ちゃんわざとやったのかも...』と思っていた。

開演のブザーが鳴り場内が暗くなった。そして、突然響く鉄砲の音と共に幕がゆっくりと上がって行く。舞台の上では黒づくめのスーツを着た男たちと警察官の銃撃戦がいきなり展開されていた。

マフィアと警察との闘い。決着はつかずにその場は散開。設定が変わり、豪華な広間でのダンスパーティー。仮面をつけた長身の男が登場する。ロミオ役の海だった。

黒のタキシードをまとい、金色になびく長髪のロミオを見てヒカルは一瞬胸が締め付けられた。響の雰囲気似ていたからだ。

舞踏会のフロアでロミオとジュリエットは互いの身分を隠したまま出会い、一瞬のうちに恋に落ちる。ロミオと手を取り合い踊るジュリエットに思わず嫉妬してしまうほど、海のロミオは素敵だと、ヒカルは思った。

「オレはオマエが好きなんだ――っ！」

互いの立場からひきさかれ、永遠に叶わない恋の相手にロミオが叫ぶ。

劇中、もっともせつないシーン。

ヒカルは自分が海の友人であるということを忘れ、ひとりの観客として芝居の世界にのめり込んでいた。まるで自分がジュリエットになったかのような、せつなく胸を締め付けられる恋の物語....

初日は大歓声と拍手の中、幕を閉じた。会場が明るくなっても、しばらく座席に座ったまま余韻に浸っていたヒカルのもとに亮太がやってきた。

「カッコよかったなあ、海ちゃん…。女にしとくのがもったいないよ」

「うん…。恋しちゃいそうだよ…」

ヒカルはまだ呆然としている。

「おいおい！冗談だろ？」

当然、亮太はうろたえる。

「海ちゃんのところに行こう。この花束届けなきゃ」

ヒカルの手には綺麗にアレンジされた花束がずっと握られていた。

「楽屋に？入れるの？」

「うん。海ちゃんから入ってきていいって言われてる」

「ラッキーだなあ、俺たち！」

ヒカルと亮太は会場を出て楽屋へと向かった。

楽屋に続く狭い通路は花束を持ったファンでごった返していた。皆、役者たちが着替えを済ませ出てくるのを待っているのだ。会場に入れなかったさっきの短大生たちもそこにいた。人の波をかき分けながら、皆が入りたいと思っていて関係者以外入れないそのドアに向かうヒカルたちを、彼女たちは鋭い視線と密かな陰口で見送っている。

ヒカルと亮太は背中に突き刺さる視線を感じながら入り口のドアを開けて楽屋の中に入った。

「海ちゃん、どこにいるんだろ…」

いくつもの部屋がありそのほとんどの扉は閉められていた。役者たちがそれぞれメイクを落としたり着替えたりしているのだ。

ヒカルは扉に貼ってある名前を確認しながら通路を奥へと進む。一番奥の部屋の扉にようやく海の名前を見つけ、ヒカルはドアをノックした。

「…はい」

間の抜けたような、小さな声で返事があった。

「海ちゃん？私だけど…」

ヒカルは思わず亮太と顔を見合わせた。海の声の感じがいつもとちょっと違うような気がしたのだ。

しばらく沈黙があり、

「入っていいよ！」

と、返事が返ってきた。

「俺もいるんだけど…」

亮太は控えめに言う。

「ああ、入っていいよ。着替えは終わったから」

ヒカルと亮太は扉を開けて部屋の中に入った。

海は鏡の前でメイクを落としていた。コールドクリームを顔中に塗りたくっている。何もこんなにつけなくてもいいのに、と思うほど、顔中真っ白になっていた。

「ひどいぜ海ちゃん。チケットの座席...」

亮太が海の横に立ち、まずはじめに苦情を述べた。

「ああ？悪かったなあ。隣同士の席取れなくてさあ！」

海は鏡越しからヒカルにウィンクを送る。

「まさか千秋楽の時も離れ離れじゃないだろうなあ」

「千秋楽は隣同士を取ったよ。残念ながら今日ほどいい席は取れなかったけどね」

せっせとメイクを落としながら海は言った。

「今日海ちゃん、とてもよかったよ！私、感動しちゃった...。初日は大成功だね！」

海は手を止めて、

「...いや、全然ダメ...。オレのロミオ、不評みたいだ...」

鏡に向かっていた体をクルリと椅子ごと回し、ヒカルたちに向けた。

「どうして...？」

「さっき、鮫島先生がやってきてそこら中ひっくり返していった...」

見ると、パイプ椅子が数個転がっている。

——そっか、海ちゃんは泣いてたのか...。あの時みたいに。ひとりで...

「オレが先生の言うことをちっとも理解してないって怒ってた...」

「たとえばどんな？」

と、亮太。

「オレのロミオはジュリエットを観念でしか愛してないって。オマエが好きなんだーっていう叫びはロミオじゃなくただ役者のオレがコトバで叫んでるだけだって...」

海の話聞きながらヒカルはひっくり返っている椅子を元に戻す。あの鮫島が怒鳴り散らしながらこれらを蹴飛ばして転がした光景が目に見えるようで腹が立った。

「オレ、頑張っただけどな...。必死に稽古してさ」

そう呟いて海は思い出したようにティッシュで顔のクリームを拭きとった。

「そういうことじゃないんじゃないかな、きっと...」

亮太が鏡の中の海に向かい、ぽつりと言葉を発する。

「稽古とかじゃないんじゃないかな。俺はなんとなく、その鮫島先生って人が言いたいことがわかるような気がする」

「なんなんだよ、亮太。どういうことだよ？」

海は怪訝な顔を亮太に返す。

「俺だったらきっと、心からのロミオの叫びができるかも。せつないせつない想いを毎日抱き続けてるし！」

亮太はヒカルを見、あはは、と笑った。

「...、そういうことなのか、やっぱり...」

海は鏡の自分をじっと見つめた。

「オレはロミオの本当のせつなさやジュリエットを想う愛しさなんかはわかってない、ってことなんだな...」

海は深いため息をつく。

「あ、いや、ごめん。やっぱわかんないぜ。芝居のことは俺全然！第一、海ちゃんは女の子なんだし男のロミオになるってのは最初から無理だろ？」

プロの役者を前にしてマズイ発言をしてしまったと、亮太は焦っていた。だが海は亮太の言葉を真摯に受け止めたようだ。

「いや...、与えられた役柄の人物像に、いかに迫れるかってのが役者にかせられる使命...。女が男役をやろうがその逆だろうが関係ないさ...。要はオレの役不足...」

と、呟いた。

「私はロミオのあの叫び、好きだけどな。本当に心が締め付けられるくらいにせつなかったよ...」

ヒカルはうつむいた。

「本当に好きな人にあんな風に叫ばれたら...せつなすぎて死んじゃうかも...」

そんなヒカルを横目で見つめ、亮太はためらいがちに口を開いた。

「...、ヒビクセンパイから連絡はきた？」

「おい亮太、あんまり立ち入るなよ」

海は亮太を諭す。

「いいんだ、海ちゃん。ヒビク先輩からは連絡はないし、私はもう先輩を待ってないから...」

ヒカルは顔を上げて微笑んだ。

——え.....？

亮太を包む空気が変わった。

「——待って、ないの...？それって、あきらめたってこと？」

亮太の身が無意識にヒカルに詰め寄る。

「だからってすぐにヒカルとつき合えるなんて思うなよな！」

すかさず海が釘を刺した。

「でも、それじゃどうして...」

と、言いかけて亮太は口をつぐんだ。

「確かに亮太ならロミオの気持ちもわかるか...」

と、海は苦笑した。

「明日、オレ、できるかなあ...」

海は再びためいきをつく。

「海ちゃんは海ちゃんていいよ！」

「ヒカル...？」

「鮫島センセイには怒られちゃうかもしれないけどさ、海ちゃんが等身大で演じきるロミオが素敵なんだよ！鮫島センセイが何て言おうと、実際に海ちゃんの芝居を見て感動したあたしが言うんだから間違いはないっ！」

海はプッとふき出し、

「サンキュー、ヒカル！」

と、笑った。

「でも、オレはプロだから自分に足りないものはとことん追求したいと思う。いや、しなくちゃいけないよな？」

「それはもちろんっ！」

「うん！ありがと、ヒカル！とりあえず千秋楽までの2週間、オレは頑張る。毎日違ったロミオを観客に見せてやるぜっ！」

突然元気を取り戻した海は顔を輝かせ、コールドクリームをふき取ったティッシュを勢いよくゴミ箱に投げ捨てた。

「その意気だ！海ちゃん、ガンバレ！」

「おう！」

海は顔に残っているクリームをさらにぐしゃぐしゃと拭き取って鼻をすすった。

手にしていた花束を海に手渡し、ヒカルと亮太は部屋を出た。

亮太はずっと黙り込んだままヒカルの後について歩く。響を待っていない、と言った自分の言葉に亮太が揺れている、ということヒカルは察していたが、あえて何も言わずに先を歩いた。海が言った通り、だからといってすぐに亮太と付き合うなんてことは出来ないしそんな気持ちにもなれない...

楽屋口の扉の前で、鮫島が何人かの招待客らしき人物たちと雑談をしていた。

「あの人が鮫島センセイだよ」

ヒカルは亮太に耳うちした。

「え？ああ、あの人がそうなのか...」

考え事をしてきた亮太は心半分にヒカルの言葉を聞いた。

「...、私、ちょっとあいさつしてくるね！」

言うなり、ヒカルは口を一文字に結び、ツカツカと鮫島の元に歩きだした。

「え？あいさつって、ヒカルちゃん?!」

亮太がうろたえている間にヒカルはもう、鮫島の元にたどりついていた。

「鮫島センセイ、こんばんは！」

ヒカルが鮫島の背後から声をかけると、鮫島は雑談を中断し、くるりと振り向いた。

「はじめまして！私、浅倉ヒカルっています」

「浅倉ヒカルさん...？」

やや呆気にとられたような顔をして鮫島はヒカルを見る。

「今日の舞台、凄く凄く、感動しました！昔、私はなにわ弁のロミジュリをやったことあるんですけど、シェークスピアのロミジュリがこんな現代劇になるなんて素晴らしいです！」

「あ、ありがとう...。光栄です。なにわ弁というのも...なかなか興味深いんですけど...ね」

そうですか？とヒカルは答え、

「また千秋楽に観に来ます！」

と、一方的に言った。

「それは、どうも...」

ヒカルのペースに鮫島は戸惑いを隠せない様子で相槌を打つ。

「で！ひとことだけ、鮫島センセイに言いたいことがあるんです！」

鮫島はきょとんとした顔をしてヒカルを見つめ、

「お聞きしましょう」

と、穏やかに言った。

「私、保育科の学生なんですけど、」

明らかに鮫島はヒカルを『ちょっと変な子』といったレッテルを貼り付けたような顔をして見ている。そばで見守る亮太は手に汗を握っていた。

「幼児教育の基本は、褒めて育てる、と、子供を決して否定しない、なんです」

「ほう...」

「自分の感情を丸出しにした叱り方を一度でもしてしまったら、その子の心には一生の傷が刻まれてしまいます。その傷はその子の中で知らないうちに膨らんで、大事な成長の芽を食いつぶしてしまうこともあるのです」

鮫島はヒカルをじっと見つめた。

「ふむ...」

「幼児だろうが大人だろうが、人間には変わらないですよ？基本は同じだって私は思います」

鮫島の口元に微かな笑みが浮かんだ。

「なるほどね...」

「では、私はこれにて失礼いたします！これからも頑張っていていい劇を作ってくださいね」

ヒカルはぜんまいかけの人形のように右足を軸にしてくるっと回ると、指をくわえておろおろしている亮太の元にスタスタと戻ってきた。

「行こ！」

「あ、ああ...」

亮太が振り向くと、鮫島はじっとヒカルを見ている。亮太が会釈をすると鮫島も深々と会釈を返してくれた。一緒にいた客たちはくすくす笑っている。

「あ、浅倉ヒカルさん！」

鮫島が右手を上げてヒカルを呼び止めた。ヒカルはピタッと止まると、恐る恐る振り返った。

「千秋楽、お待ちしてますよ！」

鮫島はひとこと言うと、客たちに別れを告げて楽屋の中に消えて行った。

「名前、覚えられちゃった…」

ヒカルは今頃になってやや怖気づいたように身を縮めた。

「そりゃ、突然あんなこと言い出す子ってあんまりいないと思うし…」

と、亮太。

「だってさ、あの人の叱り方、ほんとキライなんだもん、私…。ヒドイ言葉と乱暴な態度でさ、ただ脅かして萎縮させるだけだよ、あれじゃ…」

「けど、相手は演出家だしね…」

と、亮太は苦笑する。

「そうだよね…。幼児教育うんぬんじゃないよね、やっぱり…」

と、ヒカル。

突然亮太はブハッと笑い出す。向こうではさっきの客たちも笑っている。

「ちょっと、そんなに笑わないでよ…」

それでも亮太の笑いは止まらない。

「亮太っ！」

ヒカルは思わずそう叫んだ。亮太の笑いがピタッと止まり、嬉しそうにヒカルを見た。

「いいなあ、その響き…」

「なにが？」

「ヒカルちゃんに、『亮太』って呼んでもらえて嬉しいってこと。いつまでも『中川くん』じゃ、なんかよそよそしくて寂しいなあって思ってたんだ」

亮太はにっこりと笑った。にくたらしいほどに嫌味のない爽やかな笑顔だ。

「い、今のはたまたまだよ！」

ヒカルはやや赤くなってスタスタ歩きだした。

亮太との距離を近づけちゃいけない。今はまだ、亮太の気持ちに对应られない。いや、今だけじゃなく、これからもきっと…。

亮太とは、このままがいい。

——ずっとこのままが…、いいの——。

そう、心で呟きながら…。

短大は今日から冬休み。新年を迎えるまでにはまだ2週間もあるが、ヒカルは少しずつ部屋の大掃除をはじめることにした。整理整頓が大の苦手であるヒカルの机周りには、もう使わないようなファイルや本などが山積みになっている。本棚には書物が押し込められ大きさもバラバラに並んでいる。まずはそれらをキレイに整頓することからはじめた。

「これ、高校の時の教科書じゃない...」

1年近く放りっぱなしにしてある棚の中から、数学や古文といった懐かしい教科書が出てきた。何気なく数学の教科書をめくると、可愛く折りたたんだ手紙がポロリと落ちた。

「うわ、懐かしい...」

ヒカルはそれを開いてみた。

——ヒカルちゃん、教科書ありがとー！助かったよ！

今日はね、放課後群竹くんが駅まで送ってくれるって。

久しぶりだからドキドキしちゃう。

なんかさ、群竹くんって、本当に私でいいのかな...？て、時々考えちゃうんだ。

ヒカルちゃんはいいなあ。群竹くんちの隣りに住んでいて。

群竹くんはいろんな話をいつもヒカルちゃんにいっぱいして...。

ヒカルちゃん、群竹くんをとっちゃダメだよ。

なーんて、心配は全然してないよー！だって、ヒカルちゃんはいつまでも風間先輩ひとすじだもんね！

あ～、次は大キライな物理だ...。数学と物理が続くなんてサイアクー！

じゃあね♪

寂しがり屋のあかねより——

ちょうど1年前の今ごろの手紙だ。よくこんな手紙をやりとりしていたことを思い出す。

恋のこと進路のこと、さまざまな悩みを授業中にレポート用紙に思いつくままの言葉で綴り、クラスが違うあかねや麻耶と交換して——。

あかねからの手紙はほとんど颯土のことだった。この手紙のように付き合っているながらもいつも不安を募らせていたあかねだった。そして、自分はいつも響のことを書いていた。

——ヒビク先輩、今、どこで何をしてるのかな？

もう、ピアニストにはなれたかな？

可愛いアメリカの女の子と浮気してないかな...。

ちゃんと、帰ってきてくれるよね...。——

いつも同じようなことを書いてはそれを小さく可愛くたたんで、休み時間にあかねのもとに届

けていた。そんな時は『お前らも好きだよなあ。こんなめんどくさいことしないで、喋っちゃった方が早いんじゃないの?』と、同じクラスだった颯土にはよく言われていた。

ふと、窓の外に目を向けヒカルは向かいの颯土の部屋を見つめた。この窓から向かいの窓に消しゴムを投げつけると、颯土はいつも面倒くさそうにカーテンを開け、またか...、といった顔をのぞかせた。

あかねの不安をそれとなく颯土に伝えたり（伝わったかは謎だが...）、自分の不安をそれとなく話してみたり（これも伝わったかは謎だが...）、意味もなくただひとりでいるのが寂しくて窓を開けさせたこともある。

颯土とそんなやりとりをしていたのは、仲良くなるうぜ祭りから仲良し祭りに変わっていった高校2年の終わりごろからのことだったが、颯土とは昔からの幼馴染のような気がしている。

ヒカルは部屋の柱に刻まれた5本の背比べの傷を見つめた。

颯土の本当の幼馴染は亮太。この家に昔住んでいた亮太だ。幼い頃の颯土と亮太がつけた傷と、去年自分も加わって三人でつけた傷。

あの時、颯土と亮太と本当の幼馴染になれたような気がして嬉しかった。この柱の傷は幼馴染の証明みたいなもの...

今日は海の芝居の千秋楽一一。

初日の時と同じく、三軒茶屋駅で夕方5時に亮太と待ち合わせをしている。だが、ヒカルの心はいつになく重い。今まで、亮太には毎日『好きだー』と言われ続けていても、こんなふうを感じなかったのに、2週間前の海の楽屋でのことから、亮太の態度が変わったように思うのは気のせいじゃない。

昨日、キャンパスのいつもの丘で亮太はじっと遠くの港を見つめていた。木枯らしが吹きあれ、亮太の少し長めの茶髪は全部後ろに流れているのに、冷たい風に自分から頬を差し出すようにして、ひとりで、ずっと。ヒカルが近づいても振り向きもしないでずっと...

いつもの爽やかな笑顔がなかった。

思いつめたような、つらそうな背中だった。

『あの時のヒカルちゃんの白い帽子、どこに行っちゃったんだろうな...』

ふいに亮太が呟いた時、ヒカルは理由がわからない涙がこみ上げて来た。亮太に対して今まで自分がとってきた態度は間違っていたのかもしれない。付き合えないけどずっと友達でいたいなんて虫が良いすぎる話だ。

だが、亮太にはそれが通じると思っていた。亮太とふたりで合格祈願に行った今年の正月に、はじめて亮太の気持ちを聞き自分の気持ちを伝え、互いの心をストレートに言い合ったあの時からずっと、亮太とは爽やかに付き合っていたらと思っていた。そしてそれは間違いではなく、ついこの前まではふたりの間にしこりなんてひとつもないと思っていた。

だが、きっと今までのそれは亮太にとっては精一杯の態度だった。そして自分の態度はそんな亮太をずっと傷つけてきたのかもしれない。

――でも、失いたくない友達だから…。

ヒカルは柱の傷をじっと見つめる。

そうじ  
りょうた  
ヒカル

傷の横に刻まれている名前が今はとても悲しい。この傷をつけた時のように、また三人で本当の幼馴染のように笑うことができるのだろうか…。

こうやってひとりで何かを思い、先が見えなくなった時に気持ちの転機を求めてしてきたことは――。

ヒカルは机の引き出しから消しゴムを取り出し窓を開けた。

部屋の暖気が瞬く間に失われていく。今夜は都内でも雪になるかもしれないと、テレビのお天気お姉さんが言っていた。

消しゴムを握ったまま、ヒカルは少しの間、向かいの窓を見つめた。

――投げたって窓は開かない。そんなことはわかってるけど…。

今、ヒカルが消しゴムを投げようとしたその時、向かいの部屋のカーテンがサッと開いた。

「え?!」

ヒカルは驚いて、窓から身を乗り出した。

「まさか、群竹くん、帰ってるの?!」

思わず声に出していた。

「あら、ヒカルちゃんじゃない! どうしたの? そんなに乗り出しちゃって」

窓から顔を出したのは颯土の母親だった。

「…なんだ、おばちゃんかあ…」

ヒカルはおもむろにガッカリしたように呟いた。

「あら、なによ。私じゃ凄く不満みたい?」

「そ、そんなことないよ! 群竹くんの部屋の窓が開くなんて珍しいから」

「たまには換気してるのよ。掃除もしておかなきゃ颯土が…、」

と、母親が続きを話そうとした時、

「ヒーねえ! 電話だよー!」

下で哲平が呼ぶ声がした。

「おばちゃん、またね!」

と、ヒカルは窓を閉める。向かいの窓から颯土の母が、ヒカルちゃん、ちょっと…! と呼び止

めた声は聴こえなかった。

「いしわた、りうみって人」

哲平は受話器をヒカルに渡した。

「いしわた、りうみじゃなくて、いしわたり、うみ。人の名前はちゃんと聞かないと失礼なんだよ、哲平くん」

「へんな名前～、うみなんて。りうみの方が可愛いや」

哲平は電話口で大声で言う。

「こら、哲平！」

「ふーん、だ！」

哲平はそそくさと逃げて行った。

「まったく…。もしもし？海ちゃん？」

『変な名前のいしわた、りうみです！』

海はケラケラ笑っていた。ヒカルと哲平のやりとりを電話の向こうでずっと聞いていたのだろう。

「うっ、ごめん…」

『人の名前はちゃんと聞かないと失礼なんだよ、なんて言うヒカル、カッコいいなあ。そのまま幼稚園の先生になれそうだ！』

と、海は言ってから、

『あんまり時間がないから手短に話すな！今日の舞台、ヒカルと亮太をVIP待遇でご招待することになったから！』

「どういうこと?!」

『チケット代はいらない、席は二列目のS、ってこと』

海は本当に手短に言う。

「ど、ど、ど、どうして～?!」

『オレもよくわからんっ！たった今、鮫島先生から言われたんだ。とりあえず伝えたぜ。詳しいことはあとで聞いとくよ。劇場にきたら楽屋に来てくれな。チケット渡すから。んじゃ！』

電話は切れた。

「ちょっ、ちょっとー！」

電話口に向かって叫んでみても、もちろん返事など返って来ない。

――鮫島センセイがなんで?!

ヒカルの胸に不安が広がった。この間の「あいさつ」を快く思っていない鮫島が、何かをたくらんでるのだろうか。

でも、チケット代なしで特等席というのは素直に嬉しい待遇ではある、と、ヒカルはすぐさま

考えを改め亮太に知らせる電話をかけた。

『どうしてそんな待遇？』と、亮太を仰天させて夕方5時の三軒茶屋駅。ヒカルが改札口を出ると、亮太は既に到着して待っていた。

こげ茶色のジャケットにジーンズ、という、普段と変わらない亮太のスタイルだが、立っている様子を見るだけでもやっぱり何か足りない気がして胸が痛くなる。

街はクリスマスの飾りつけがなされ、街路樹ではイルミネーションがキラキラとまたたいている。あちこちから流れて来るクリスマスソングに心が躍るはずなのに、ヒカルは何か後ろを引かれているような気がしてならなかった。

「今夜は雪になるかもって、天気予報で言ってたね」

白い息を吐きながらヒカルは言った。

「え？あ、そう？」

と、亮太はそっけない。

今までの亮太なら、『雪降る街でヒカルちゃんとデートかぁ！』なんて軽口をすぐさま返してきたはずなのに、真っ直ぐ前を見て歩く亮太の横顔を見ていると、こうして横に並んでいることにも小さな痛みを感じるのだった。

◇

劇場に到着すると、千秋楽というだけあってたくさんの人が開場を待ち並んでいた。

「この間とちょっと雰囲気が違うね...」

2週間の公演を経て、芝居の評判はリアルタイムで流れている。鮫島の演出も海のロミオもまずまずの評価をされている、ということが今日の雰囲気からして伺えた。

「楽屋にチケットを取りに来て、って言われてるの」

「じゃあ、俺はここで待ってるよ」

「一緒に行かないの？」

「今、忙しいだろうし、邪魔になっちゃ悪いから...」

そう言って、亮太はロビーのベンチに向かってひとりで歩きだした。その背中を見てヒカルの心にまた痛みが走る。

「...、じゃ、行ってくるね」

ひとりで楽屋に向かいながら、亮太に対して自分は何をどうすればいいのかを考えてしまうヒカルだった。

公演前の楽屋はバタバタと活気づいていた。小道具を持って走り回るスタッフたちと台詞を言い合う役者たち。海の楽屋のドアも開け放たれ、中から発声をする海の声が聞こえていた。

「海ちゃん！」

ヒカルはドアの前から声をかけた。

「おー、ヒカル！入ってこいよ。あれ？亮太は？」

海は手招きをしてヒカルを部屋の中に呼び入れ、亮太が一緒でないことに首をかしげた。

「うん、外で待ってる...」

「そっか。これ、今夜のチケットな」

海は白い封筒をヒカルに手渡した。

「ありがとうございます。何が何だかよくわからないけど、ありがたくご招待をお受けいたします」

「オレだって何が何だかわからないさ。いきなり鮫島先生が、『浅倉ヒカルさんってお前の友達かー？』って、チケットよこしたんだから。ヒカルと先生が知り合いだったなんて、ちっとも知らなかった！」

「知り合いていうか...」

ヒカルは初日の公演後に、鮫島にあいさつしたことを話した。幼児教育のことはさすがに海には言えなかったが...

「ふーん...。じゃあ、あの時先生が言ってた『面白い子』って、ヒカルのことだったんか」

海の話によると、初日公演後の食事の席で鮫島は『面白い子に変なこと言われた』と、にこにこしながら語っていたそうだ。

「変なこと言われた、って言ってるわりに、顔は嬉しそうだったから、おかしいなって思ってたんだ。ヒカルがどんな変なことを言ったのかあとで先生に聞いてみよう」

ニヤニヤと笑う海に、聞かなくていい、とヒカルは焦り言った後に、

「いよいよ最後だね！頑張ってるね、海ちゃん」

と、激励の言葉を贈ると、海は、

「オレのロミオ、初日の時と比べてどう違うか、よく見てくれよな！」

白い歯を見せて笑った。

ヒカルがロビーに戻ると、亮太はベンチから立ち上がりヒカルのもとに歩いてきた。

「席、となり？」

亮太は笑顔で言った。久しぶりに見たような気がする亮太のその笑顔が嬉しくて、ヒカルは海から手渡された封筒を開けてチケットを確認する。

「うん。今度はとなり」

ヒカルも笑った。

「...じゃ、行こうか」

と、亮太はヒカルの手を握った。

――え...？

ヒカルは思わず、握られた手を引こうとした。だが、亮太はその一瞬に握る手に力を込めた。

「中川くん...」

亮太は何も言葉を返さずただヒカルの目をみつめた。何かを心に決めたような真っ直ぐな亮太の目だ。

「...行こう」

ヒカルを引っ張るようにして亮太は劇場内に進んで歩く。人で溢れざわついていた空間から、突然自分の周囲だけを切り取られて静寂の中に放り出されたように、ヒカルの目には自分の手を握って前を歩く亮太の背中しか見えなくなった。ゆっくりとスローモーションのように時間が流れ、絨毯を踏みしめて歩く亮太の足音まで聞こえるようだ。痛いくらいに強く握られた手を伝い、亮太の想いが自分の中に吸い込まれて行く。

――だけど……。

亮太の行為に対して自分がどうすればいいのかの答えが見つけれないまま、ただ繋がれた手を見つめて歩くことしかできないヒカルだった。

千秋楽の舞台。

初日とどう違うかよく見てくれと言った海の意味が、ヒカルにはその瞬間にわかった。  
「オレはオマエが好きなんだ……！」

ロミオの叫びは声を張り上げる叫びから、心を張り上げる叫びに変わっていた。初日の時よりも心に迫る深いせつなさを舞台のロミオと共有し、2週間前には出なかった涙が溢れた。

初日のロミオが激しい感情をぶつける剛の人だとしたら、今日のロミオは深い愛を心に宿した柔の人。だが、悲しみは柔の中からじわじわと伝わって来る。

鮫島が海に求めていたものはこれだったのか、とヒカルは思った。初日の時には想像も出来なかった役者としての海の可能性。それを2週間の公演の間に、海は自分で開花させたのだ。

「ヒカルと亮太のおかげだよ」

公演後の楽屋で海は言った。

「私たち？」

ヒカルと亮太は顔を見合わせた。

「亮太が言った心からの叫びって言葉と、ヒカルが言ってくれた等身大のオレが演じ切るロミオって言葉でオレは目が覚めた」

海は清々しく笑った。

「等身大...、ありのままのオレの心からの叫びって何だろ？って考えたらさ、答えはすぐそばにあったんだ...」

その時、楽屋のドアがバタンと開き鮫島が入ってきた。花束をたくさん抱え前が見えない状態で鮫島はドアを勢いよく蹴飛ばしたようだ。ドアは壁に激突しその勢いで跳ね返り再び鮫島に当たり、もう一度蹴飛ばされた。

「おい石渡、これちょっと受け取ってくれ！」

「あ、はい」

海は鮫島の手から花束を半分受け取りテーブルの上に置いた。

「やあ、浅倉ヒカルさん！」

やっと視界が広がった鮫島は額に汗を滲ませていた。

「鮫島センセイ、今日のご招待ありがとうございました」

ヒカルが言うと、亮太も続いてお礼を述べた。

「いやいや」

鮫島は笑っていた。以前、稽古場で見た顔とは全く違う顔をしている。あの時は心底意地悪そうに見えたが今日の鮫島はにこやかだ。

「この間はなかなか興味深い話をありがとう」

「い、いいえ！とんでもありませんっ！」

亮太はプッと吹きだした。

「次の台本（ほん）のテーマを、キミからもらった気がしたよ」

「次の台本って、先生？」

海は体を前に乗り出した。

「書くのはまだこれからだが...」

鮫島は海からヒカルに視線を移して言った。

「キミをモデルに書かせてもらう」

「うそっ?!」

と、ヒカル。

「マジ?!」

と、亮太。

「どんな芝居になるんだー?!」

と、海が同時に叫んだ。

「まだ構想の段階だけどタイトルは決まってるんだ」

「どんな？」

海は興味津々、瞳を嬉々と輝かせて鮫島に詰め寄る。

「『The sun in the rain』」

と、鮫島が言うと、

「The sun in the rain...、雨の中の太陽...」

亮太はヒカルを見た。

「主人公は教師なんだ。今回はちょっと、いやかなりシリアスな台本になるかも、な」

前々から書いたみたいと考えていたモチーフがある、と鮫島は言う。鮫島は手に持っていた花束を全部テーブルに下ろし、椅子を乱暴に足で引くと大きな音を立てて座りながら煙草に火をつけた。

「その教師のモデルがヒカルってわけ？」

「ああ」

鮫島はヒカルを見て微笑んだ。

「そんな！私なんてまだ幼稚園の先生にもなってないのに、教師だなんて、そんなんっ！」

「いや、モデルというか人物像の着想をキミのキャラクターから得た、ということかな。何も、キミをそのまま台本の中で使うわけじゃないから安心して」

鮫島は苦笑しながら言い変えた。

「ヒカルのキャラって言うと...？」

「正邪を立て分け思い込んだら真っ直ぐ直進。逆境の中でも太陽のような明るさを失わずに他人に対して、特に弱い立場の者子どもや老人には女神のように優しいが悪に対しては非常に厳しく追求する...」

と、鮫島。

「まるでヒカルそのまんまだ...」

と、海。

「主人公を教師にしたのはキミが幼児教育の基本を非常にわかりやすく俺に説いたところからひらめいた」

「幼児教育？何、それ？」

海がヒカルに顔を向けると、ヒカルは顔を紅潮させて『なんでもないよ！』と手を左右に振った。

「次回のニューヨーク芸術祭にエントリーしようと思ってるんだ」

「芸術祭？！本当ですか！」

海は興奮して叫んだ。芸術祭はニューヨークで2年に一度行われている。世界中から有名無名のアーティストが集まり、音楽や演劇、舞踊など、文化交流を目的として開催される、優劣こそないが芸術のオリンピックのようなフェスティバルだ。

「そのエントリー作品のモデルがあたしー？！いいんですかー？」

「それで、今日のご招待だったわけですか…」

と、亮太が言った。

「いや、今日のことは他にもいくつか理由はある…。ま、俺の感謝の気持ちとして受け取ってもらえれば」

「感謝されるようなこと何もしてないけど…」

と、ヒカルが言うと、

「失礼はしてもね」

と、亮太があとにつけ足した。

「それじゃ、俺はもう一弾袖に置きっぱなしの花束を運んでこなきゃならないから」

鮫島が灰皿に煙草を押しつけ部屋を出ようとする、手伝いますと、亮太があとを追う。『助かるよ』と鮫島は亮太を連れて部屋を後にした。

「…びっくり。心臓がドキドキしちゃったよ…」

一気に脱力したヒカルは心臓を押さえながら深呼吸をする。

「先生は人を瞬時に観察する能力があるんだ。きっとヒカルの内面に惹かれたんだな。じゃなきゃ、実在の人間をモデルにして自分の台本を書くような人じゃないよ、あの人は」

ペンギンもロミジュリも、よそにモデルがあったわけではない、と海。

「雨の中の太陽か…」

海は鮫島が無造作に置いていった花束たちをまとめながら呟くように言った。

「ヒカル…、鮫島先生は、オレの、お袋違いの実の兄さんなんだ…」

「え…？」

「先生…、兄さんは、オレが4才の時に家を出てしまってさ。雨が降ってた日だったってこと、今でもよく覚えてる。それから10年以上、会ってなかった」

「どうして…？」

「オレのお袋、鮫島先生を嫌って苛めてさ、それであの人は高校を卒業してすぐに家を飛び出し

たんだよね...」

海は言いにくそうに話す。鮫島の産みの母親は鮫島が子どもの頃に亡くなり、海の母は父親の後妻として石渡家に嫁いだらしい。

「オレは小さかったからあんまりよく覚えてないけれど、確かにお袋は兄さんを嫌ってた。よく喧嘩してたよ、お袋と兄さん。でも、オレには凄く優しい兄さんだった」

ヒカルは黙って海の話を書く。

「兄さんの顔を描いてさ、あげたことがあるんだ。兄さんの誕生日だった。『上手だなあ、海！よくできたな！』って褒めてくれた。凄く喜んでくれた。オレ、それが嬉しくてすぐにまた描いたんだけど、兄さんは誕生日の次の日にはもう家を出てしまっただけ...」

海は天井を見上げてから目を閉じ、

「鮫島先生の劇団にオレが入ってからは、一度もオレを名前では呼んでくれないし、『兄さん』とも呼ばせてもらえない...」

と、鼻をすすった。

鮫島が『夢飛行』の旗揚げをしたのは3年前だ。海はその頃、子どもの頃から所属しているタレント事務所にいた。そこを辞めて独断で夢飛行のオーディションを受け、兄妹であることは忘れる、という条件つきで劇団員になった。

「鮫島先生はオレにだけは最初からキツかった。なんでこんなにキツイのかって思うぐらい。今もずっとそう...」

「海ちゃん...」

「オレのこと恨んでるのかな。あの人は家を出てからひとりで血を吐くような苦勞をして生きてきたからさ...」

「違うよ、海ちゃん！」

ヒカルは叫んだ。

「違う...？」

「鮫島先生は海ちゃんを愛してるよ！だから、だからあんなに厳しく...」

「ヒカル...？」

鮫島の乱暴な態度や言葉は、義理の母に愛されずに家を飛び出した鮫島が、ひとりで生きてきた十数年の間に自分を守るために身につけてしまったものに違いない。それは、さっきの足で乱暴に蹴飛ばすドアの開け方を見てもわかる。

だが、その言葉や態度の裏には海を思う演出家としての、そして兄としての深い愛情が隠されている。今日の舞台、そしてさっきの鮫島のにこやかな笑顔を思い、ヒカルはたった今鮫島の心を感じた。鮫島が何度も何度も怒鳴り散らし、きつく当たり、その中から海に体得してもらいたかったことはきっと、鮫島自身の心だったのではないだろうか...。

「海ちゃんのこと、恨んでなんかいないよ、絶対に！鮫島先生は絶対に！」

「ヒカル...。オレ、鮫島先生...、兄さんが大好きだったんだ。お袋の大反対を押しきって鮫島先生の劇団に入ったのは、先生に、兄さんに認めてもらいたかったからなんだ...。いや、昔みたいに褒めてもらいたかったんだ。『よくできたなあ、海！』って...」

「海ちゃん...」

「前にヒカルは俺に訊いたよな？ どうして役者やってるんだって。オレ、あの時は自分がキライだからって答えたけど本当はこんな単純な理由。一流になること、名声を得ること、役者としてさまざまな目標はもちろんあるけど、オレの本当の夢はそれだってこと、その為に芝居をやってるってことに初日のあとに気がついた」

ずっと秘めていた海のせつなる想い。それが柔の心の叫びに結びついたのだ。その叫びはずっと海の芝居を見てきた鮫島には伝わったはずだ、とヒカルは思った。

「まだ先生からは褒めてはもらえないけれど、これからもオレはその夢を持ち続けながら鮫島先生のもとで役者をやるよ」

「素敵だよ、海ちゃん。その夢、凄く素敵！」

ヒカルは目を輝かせながら叫んだ。そんなヒカルの目を見つめ、海は笑った。

「ありがとう。ヒカルにはいつも元気をもらえるよ。ほんと、太陽だな、オマエ。たとえ雨が降ってても、輝いてる太陽だ」

海の言葉にヒカルは急にうつむいた。

「どうした...？」

「そんなことないよ...。私は太陽なんかじゃない。ジメジメしててどうしようもない雨降り女だよ...」

「ヒカルはさ、いい子すぎるんだよな。周りを照らしてばかりで自分のこと忘れてる」

高校生の頃は何をやるにしても進むことしか考えていなかった。笑わないでいるなんて考えられなかった。全てに一生懸命で何でも良い方向にとらえてがむしゃらに、自分のすべき事以外の事までにも、手と口を出して毎日が楽しくて明るくて...。

何かが欠けている。ずっと欠けている。その欠片はどこにあるのだろう...。

「自分のことは見えないもんだけど、ヒカルはその典型ってやつかもしれないな！」

と、海は笑った。

◇

亮太と共に劇場をあとにして三軒茶屋駅に向かう頃は午後10時を過ぎていた。空気はあっそう冷え込みを増し、コートを着けていても体は芯から凍える。黙って歩いても唇がカチカチと震え、いっそ雪になった方が寒さも和らぐのではないか、と思うほどだった。

亮太はポケットに両手を突っ込んでうつむき加減にヒカルの斜め前を歩いている。さっきのように強引に手を握ることもしない。

もう、すぐそこは駅。いつものように、『おやすみ』って別れて、また大学で会ったら『おはよう！』と声をかけあって、何もなかったように、今までと同じように笑いたい...、と、ヒカルは思っていた。

駅の改札が近づくとつれづれ亮太の歩調がだんだんと遅くなった。そして、街路樹のイルミネーションの下に差しかかったとき、亮太は立ち止まり振り返った。

「...さっきはごめん。ヒカルちゃんの気持ちも考えずに手を握ったりして...」

いきなり亮太は言った。

「...うん」

「俺、この間からずっと考えてたんだ」

「うん...」

「...俺とつきあってくれないか？」

「え...？」

「俺と、つきあって欲しい」

亮太はもう一度言った。

「中川くん...」

ヒカルは体中の力が抜けて行くのを感じた。足がガクガクと震え立っていることもつらい。

言わないで欲しかった言葉。避けたかった現実。もう、今までのように冗談として流せない。

流しちゃいけない...。

「...つきあえないよ...」

ヒカルは声を搾り出すように言った。

「つきあうことなんてできないよ...！」

「俺が嫌いだから？」

「そうじゃない！そんなはずない！中川くんのごときは大好きだよ！」

「じゃあ、どうして？ヒビクセンパイのごときはもう待ってないって言っただろ？」

亮太はヒカルの両肩をつかんだ。

「待ってないけど、だからってすぐに...」

「じゃあ、いつになったらいいんだ？本当は待ってるんじゃないのか？そうだろ?!」

「違うよ！」

ヒカルは亮太の腕を振り払って叫んだ。

「だったら！俺のことをちゃんと見てくれよ！俺がキライじゃなかったら、俺のごとき大好きだって言ってくれるんだったら！その言葉が嘘じゃないなら、つき合えない理由はどこにあるんだ？待ってないんだろ？」

亮太に言われて、ヒカルは立ちすくんだ。

亮太の言う通り、つき合えない理由なんてない。

響を本当に待っていないのなら...。

――でも...！

「ごめん...！」

駆け出そうとするヒカルの腕を亮太はしっかりとつかんだ。

「俺だって言っちゃいけないって思った。ヒカルちゃんには『しつこい中川くん』って思われてるのが一番いいんだ、って思ってたさ、ずっと！でもここまで来てしまったら、もう後には引

けないんだ！」

亮太は手を離そうともがくヒカルをじっと見つめながら叫んだ。

「ごめん、ごめん...！」

「キライって言ってくれよ...」

亮太は握っていたヒカルの腕をそろそろと放した。

「中川亮太はキライだって、そう言ってくれよ！」

そして亮太はヒカルに背を向ける。引導を正面で受け止める勇気がない。

震える亮太の背中を見つめながら、ヒカルは思う。

『キライ』って言わなければ互いに救われないのかもしれない。そう言うことが互いのためなのかもしれない。

だけど、あの柱の傷は...、幼馴染の証明は...嘘じゃないから...

「...言えないよ...。キライだなんて言えない！言えるわけじゃない！」

「ヒカルちゃん！」

「中川くんのこと好きだもん！嘘は言えないよ！」

「じゃあ、俺はどうすればいいんだよ！」

「わからない...、わからないよ...！」

とうとうヒカルは駆け出した。

「ヒカルちゃん...！」

亮太の力ない叫びが響く。

わからない。どうしたらいいのかわからない。ただ悲しくてせつなくて、誰に対する想いから溢れるのかわからない涙がとめどなく流れ出る。

——俺、帰ってくるから。ヒカルのところに帰ってくるから...！

2年前、そう言って旅立って行った響。

——俺のこと、ちゃんと見てくれよ！

そう叫んだ亮太。

待ってないと言ったのは自分。

つきあえないと言ったのも自分。

どれが本当なのか、もうわからない...

涙が乾いて跡になったころ粉雪が舞いはじめた。家の中は明りも消え、静まり返っていた。

重たい足を引きずりながら二階の自室に上がり部屋の明かりをつけると、いきなり目に飛び込

んで来たのは柱の背比べの傷。

そうじ  
りょうた  
ヒカル――。

乾いた涙がまた溢れ出す。  
こんな夜はひとりじゃられない。  
真っ暗な闇の中に吸い込まれてしまいそう。

――誰か、たすけて...っ！

部屋の真ん中で膝間づき、ヒカルが心の中で叫んだ時、コトリ、と窓に何かがぶつかる音がした。ヒカルはビクッと体を震わせ、ゆっくりとカーテンを開いた。

黒いタートルセーターを着てたたずむ姿が向かいの窓にあった。はにかんだように、口元を少し右上に上げて微笑み、こちらをじっと見つめている人――。

8ヵ月前に比べると背も髪も伸びて、そして少し痩せた。けれど、窓のそばに立つ位置もこっちを見る視線も変わっていない。

「...群竹くん！」

ヒカルは窓を開け放った。

「よっ...！」

颯土は右手を軽く上げた。

「ずいぶん遅いお帰りだな、不良娘」

「群竹くん、群竹くん...！」

ヒカルは涙をぼろぼろこぼしながら何度も颯土の名前を呼んだ。

「...どうか、したのか...？」

ヒカルの涙に戸惑い、颯土は窓から身を乗り出した。真っ白な粉雪が颯土の黒いセーターの上に舞い降り、瞬く間に消えていく。

「おい、浅倉...？」

「...群竹くん、おかえり...。おかえり...っ！」

それだけをやっというと、とうとうヒカルは声を上げて泣き出した。

まさか一番に見るヒカルの顔がこんな泣き顔だとは思っていなかった。

「浅倉……」

２メートル先の窓の中で泣き続けるヒカルを、颯土は困惑しながらただ見つめる。

母親がヒカルには自分が帰ることを伝えているとばかり思っていたのに、

『言う暇がなかったのよ～』

と、言われた時には脱力した。今夜はヒカルを家に呼んで8ヶ月分の話でもしようと思っていたのにヒカルの部屋は明りが消えたまま。

カーテンの隙間から何度も向かいの窓を覗いて、明りが点いたら今までとは逆にこっちから消しゴムを投げてやろう、とたくらんでいた。そして、窓を開けたヒカルからはじめに返ってくる反応は、

『やだ、群竹くん！帰って来たの？！うわ、久しぶりっ！懐かしい！何で連絡しないのよ！あー、驚いた～！』

と、機関銃のようにはつらつと言葉を連発する姿だったのに…。

ヒカルの泣き顔を見たのはこれで三度目。

はじめは高校1年の体育祭のあと。そして、2年前の春。追いかけて間に合わなかったあの時――。こんな泣き顔、もう二度と見たくないって思ったあの時…。

「下りて来いよ」

まるで子どものように両手を両目にあてて声を殺して泣くヒカルに、窓から身を乗り出したままの颯土は言った。

「うん…」

「ちゃんと上着を着て来いよ、雪降ってるから」

「うん…」

ヒカルはうなづくとも窓を閉めた。

ヒカルの行動を確認してから颯土も上着を羽織って下におり、ふたりは同時ぐらいに家の外に出た。

「お前、それ…」

ティッシュ箱を抱えて出てきたヒカルを指差して颯土は呆れたように笑った。

「だって、涙拭いてくる暇がなかったんだもん…」

ヒカルは抱えたティッシュ箱から2、3枚を引き抜くと、チン、と鼻をかんだ。

「帰って来ていきなり泣かれたんじゃないなあ…」

「…ごめん」

ヒカルはティッシュを抱きしめてうつむく。

覚えていたヒカルと違う。校庭の梅の木の前で写真を撮った頃のヒカルと違う。自分の知らな

い8ヶ月の間にずいぶんと女らしくなったもんだ、と、颯土は思った。

「とにかく、少し歩こうぜ」

颯土は傘をさした。

途中の自動販売機で温かい缶コーヒーを買って、家のすぐ目の前の墨田公園まで歩いてきた。

颯土はベンチに腰かけようとして、

「つめてえっ！」

と、立ち上がった。

「だって、雪...」

ヒカルは持っていたティッシュでベンチを拭く。

「役に立ったな、それ...」

颯土は苦笑した。

川の対岸、浅草の街が雪の中でぼんやりとした明りを輝かせている。東武電車の最終列車が駅を出発し、ゆっくりと橋を渡って来た。

「なんかあったんですか？お嬢さん」

膝の上で両手を組みやや体を前屈させた姿勢で座っている颯土が、なおもティッシュ箱を抱えながらぼんやりと橋の上を走る電車を見ているヒカルの顔を下から覗き込んだ。

「あったけど...、いい」

ヒカルは颯土を見下ろす形で合った目線をそっと外した。

「いって何だよ、いって。いきなり人の顔を見るなり泣いといて」

「それは...、だって群竹くんが帰ってるなんて思ってなかったから、つい...」

「嬉しくて涙が出た？」

「...うん」

「そうじゃないだろ...！」

まったく...、と颯土はためいきをつく。

「いろいろありすぎて何から話していいのかわからない...」

「じゃあ、最初から順番に話せよ」

「夜が明けちゃうよ...」

「...いいじゃん。今、聞いておかないとお前は自分の中にしまい込むだろ、きっと」

ヒカルはまた涙が溢れた。

「ほら、ティッシュ、ティッシュ」

颯土はヒカルが抱えているティッシュ箱から抜き取って渡す。

——群竹くんって、こんなに優しくかったっけ...？

隣でティッシュの残量を気にしている颯土にどこか違和感を募らせるヒカルだが――。  
全部話してしまおう、颯土に。聞いてもらおう、8ヶ月分の話を。  
そう決めて、ヒカルはぽつぽつと話はじめた。

随分長い時間が経ちティッシュ箱も空になった。缶コーヒーはすっかりと冷たくなりいつのまにか粉雪も止んでいた。

「亮か...」

亮太のヒカルに対する想いは知っていたけれど――。

「キライって言え...か」

亮太の真剣な想いを知りショックを受けたことは否定できない。

「あいつ...そんなことお前に言ったのか」

「中川くんとつきあえない理由なんて...たぶん、ない...。でも、ダメなんだよ...。だからといってキライなんて言えない。言いたくないの...！」

「浅倉...」

「もう...、中川くんとは今まで通りの友達ではいられないよ...」

――友達。

ヒカルは昔からこの言葉もそのものも大切にしていた。男も女も関係ない。ヒカルの周りに集まる人間は全て友達。

ただひとりを除いては...。

「この間の電話で群竹くんにはあんなに偉そうに言ったくせに、こんな私でごめんね...」

涙と寒さでヒカルの鼻は真っ赤になっていた。

「.....」

颯土は言葉を返さずにジーンズのポケットから小銭を出しながら立ち上がり、ベンチのすぐ後ろ、道路を隔てた向こう側の自動販売機に走って行った。

「珈琲でいいかー？」

「紅茶がいい...」

「う...」

いいかと訊きながら既に珈琲のボタンを押してしまっていた颯土は一瞬固まってからそれをポケットに入れ、新たに出した紅茶をヒカルの真っ赤な鼻に当てた。

「ありがと...」

「なんつーか...」

颯土は自分の缶コーヒーを開ける。川と雪で辺りに漂う水の匂いが珈琲の香ばしい香りに覆われた。

「それが普通なんじゃないかな、って思うぜ」

「え...？」

「そんなに簡単に割り切れないだろ、普通...」

「群竹くん...」

ヒカルは颯土の横顔を見つめた。

「それに浅倉の場合、風間先輩から何かを言ってきたわけじゃないし、2年前に別れた時のままお前の気持ちが止まっても仕方ないって思う...」

「でも、私は決めたのに。もう待つだけはやめて、私も私の未来に目を向けようって...」

確かにあの時の電話ではそう言っていた。そんなヒカルであった方がきっと響にとってもいいのではないか、とあの時の自分は思ったけれど....、

「...お前の未来って何だ？」

颯土は肘をついた姿勢でヒカルの顔を下から覗き込んだ。

「私の...未来...？」

「浅倉が一番望んでる未来」

颯土はヒカルの目をじっと見つめる。

「それは...！」

ヒカルは絶句した。自分の望む未来を言葉にしたことがなかった。ただ漠然と未来を見つめたいと思っていた。昔のようにいつも前を見て歩いていた頃のように...。

「私の望む未来は...」

海の望む未来は鮫島といつかまた兄妹として生きること。大好きな兄に褒めてもらいたいという、ささやかな心からの夢。その夢に向かって芝居をするんだと言い切っていた。

そして、あかねは自分の望む恋愛に歩きだした。

自分の一番望んでいる未来の姿は――。

「無理すんなよ。浅倉が一番望んでいる通り、正直になれよ。結果を先に気にしていたら、どこかでなにかが歪んでくるんじゃないか？」

「群竹くん...」

「俺、大学辞めてきたんだ...」

ヒカルは目を見開いた。

「本当...なの？」

「ああ。随分考えたしこの先どうなるかわからないけど、とりあえずやってみることにした。俺が一番望んでいることを望んでる形で」

颯土はヒカルを見る。

「群竹くんが望む形って...？」

ヒカルの言葉に、颯土はただ、

「あの時、浅倉が励ましてくれなかったら、きっと俺はまだ決められなかったと思うけど、な」と、だけと言った。

「群竹くん...」

「ほとんどのことが考えてる通り、理想どおりにはいかない。でもやらなきゃ何も始まらない。

お前は人のこと考えすぎて自分の感情とか望みとかを我慢しすぎだと思う」

颯土に言われて、またヒカルは涙が溢れた。

「ありのままでもいいんじゃないか」

「ありのまま...」

「自分のままってこと。お前、俺に言ったろ？思うままの写真を撮れってさ。お前も思うまま正直に生きてみろよ」

颯土の言葉ひとつひとつがヒカルの心に浸透する。遠い場所でひとり、悩んで努力して自分を探し、恋人との別れを乗り越え多くの痛みを知った颯土は、明らかに8ヶ月前の颯土とは違った。自分が知った痛みの分だけ颯土は確実に優しくなり大人になった。

「...私は、ヒビク先輩に...」

ヒカルはうめくように呟いた。

「.....」

「私はヒビク先輩に会いたい...！」

今、ヒカルはその一言を心の底から叫んだ。

「ヒビク先輩じゃなきゃダメ。中川くんじゃ、ダメなの...っ。傍にいたいのは、触れたいのは、いつもいつでもヒビク先輩ひとりだから！」

「.....」

颯土は心で深く息を吐いた。そして、

「それが...、浅倉の一番の望み...だろ？」

ヒカルは大きくうなづいた。

「...じゃあ亮のことなんか気にするな。あいつはあいつの思うがままのことを言っただけだ」

「でも...！」

「全ての周りを照らせるわけじゃないんだぜ！」

颯土は少しだけ声を張り上げた。

「一番大事なものは自分だろ?!自分の望みを大切にしないでさ、誰かをほんとに思いやることなんて出来ないぜ！」

言いながら、颯土の心に鈍い痛みが走る。

「群竹くん...」

ぼろり、とヒカルの目から涙が零れ落ちた。

「...お前はひとりしかいないんだ。周りにいるみんながお前を求めても、浅倉ヒカルって人間はこの世でたったひとりだけしか！」

颯土はヒカルの腕をぎゅっとつかんだ。

「たったひとりの浅倉ヒカルができることなんて、ほんのわずかだろう?お前の心は一個しかないんだから」

「うう...っ」

「その、たったひとりの浅倉ヒカルの気持ちを大事にしろよ」

颯土の手の力強さでヒカルはスーッと心の中の重たい荷物が降ろされたような気がした。そし

てその場所にずっと自分から欠けていた欠片が戻ってきたような気がした。

その欠片は隣に住む颯土。

颯土がいなかった8ヶ月を思えば、いつも心にぽっかりと穴があいていた。

今、颯土が帰って来てくれてこんなにも心強い。

こんなにも――。

「目を覚ませよ、浅倉ヒカル！」

颯土はヒカルの肩をポンッとたたいた。

「群竹く...颯土くん！」

ヒカルは颯土の腕をパンパン叩きながら泣いた。いて一よ、と颯土は苦情を言うが、ヒカルはダダっ子が親に甘えるように颯土を叩き続けた。

ティッシュ箱が空になってもまだ足りないくらいに溢れるヒカルの涙。

もう二度と、本当に二度とこいつのこんな泣き顔は見たくない。

太陽のように明るく、ひまわりのように朗らかに、自由に駆け回りいつも真夏のような笑顔でいて欲しい。

――たった今わかった俺の一番の望み。

ベンチの上で膝を抱え丸くなるヒカルを、颯土は自分の上着の中に包んだ。

「あったかいよ、颯土くん...」

「...そうだろ？」

辺りは静寂に包まれ街の明りもずいぶん消えた。午前1時を過ぎた冬の住宅街に人影があるはずもない。雲の中でぼんやりと霞む月だけがそんなふたりをずっと見ていた。

颯土も東京に戻って来たことだし、懐かしいメンバーを集めて忘年会をやろうと言い出したのは勇斗だった。本当なら夏休みにみんなで集まる計画を立てていたのが、颯土はベトナムに行きあかねもバイト、勇斗や祐輔たちもそれぞれ時間がとれなくなり流れてしまっていたからだ。勇斗は自ら幹事を引きうけ皆に連絡をした。

が...

「あかねちゃんも麻耶ちゃんも来ないってさ...」

と、勇斗はしょげまくる。今夜は颯土の部屋に勇斗は上がり込んでいる。

「.....」

颯土は言葉を返さずにインスタントコーヒーにポットの湯を注いで勇斗に渡した。

「はあ〜。久しぶりにみんなで集まりたかったのに...」

「伊藤は？」

「ゆうちゃんは来るんじゃないかな？ヒカルちゃんもOK」

「じゃ、4人でいいじゃないか」

「...まあ、あかねちゃんが来ないのはわかるけど...」

と、勇斗は颯土をチラッと見、颯土はフンと顔を背ける。

「なんで麻耶ちゃんまで？ボクに会いたくないのかなあ？」

「そうじゃないか？」

「相変わらずキツイね〜、群竹ちゃん」

勇斗が苦情を言うと、どっちがだよ...、と颯土は呟き、

「...あかね、どんな様子だった？電話したんだろ？」

勇斗を見ずに自分のコーヒーを淹れながらぼそりと呟くように訊いた。

「群竹ちゃんが帰って来たことには驚いてたけど、声は元気だったよ」

「そうか。ならよかった...」

颯土の顔に安堵の色が広がった。

ちょうどその頃、ヒカルとあかねは勇斗が言い出した忘年会のことで電話をしていた。

颯土が東京に戻ってきたことをあかねに最初に話したのは幹事の勇斗だ。ヒカルに電話をかけてきたあかねは、やはり驚きを隠せない様子だった。

『群竹くん、本当に帰って来たんだ...。もう、神戸には行かないんだ...』

「うん。光創社の本社で見習いは続けるみたいだけどね」

『そっか...。そうなのか...』

あかねは半ば呆然と呟く。が、

「あかねちゃん...、もしかして揺れてる？」

と訊くヒカルには、

『ううん』

と、即答した。

『群竹くん、よく帰ってくる決意をしたな、って思って...』

「...もっと早く決めてくれていれば、って思ってない？」

『思ってないよ。群竹くんが決めたのは私とのことも含めて色々あったからだって思うから、これでいいんだよ。私は大丈夫。揺れたりしないから安心して』

あかねの言葉を聞いてヒカルは安心してうなづいた。

「でも、忘年会には来ないでしょ？」

『ちょうどその日から私、お正月まで田村先輩とスキーに行くの...』

「それで来られないんだ...」

『うん。でも、そうじゃなくてもたぶん行かなかったと思うけど...』

ヒカルはまたうなづいた。やっぱりまだ、あかねと颯土が昔のように会うには別れてからの日が浅すぎる。たとえ、あかねも颯土も後ろを振り返らずにいたとしても...

「わかるよ、あかねちゃん...」

海の千秋楽から1週間がたち、既に大学も冬休みに入っているためあの日から亮太とは会っていない。だが、また大学が始まればきっとキャンパスの何処かで顔を合わすことになるだろう。その時自分はどうしたらいいのだろう。あんな別れ方をしてしまった亮太に対して何を言えればいいのだろう。顔を合わせているのに避け合ったりするのだけはいやだ。

『どうしたの？急に黙っちゃって』

「なんでもないよ！あかねちゃんがスキーだなんて笑っちゃうね！田村先輩のこと、ストックで叩かないでよ」

ヒカルはケラケラ笑った。

『ちょっとそれ、どういう意味？凄い失礼じゃない？』

「だってさ～、あかねちゃんってば...、」

運動音痴だし...、と言いかけた時、窓に何かが当たる音がしてヒカルはカーテンを開けた。向かいの窓に颯土が立って何か言っている。

ヒカルは子機を指差して、『ちょっと待ってて』の合図を颯土に返し、

「じゃ、あかねちゃん、スキー楽しんで来てね！」

電話を終わらせてから窓を開けた。

「何？どうしたの？」

「今、大久保が来てるんだ。お前も来いよ」

颯土が言うそばから勇斗が顔を覗かせ、

「なんかいいね～、こういうの。群竹ちゃんとヒカルちゃんって、いつからこんなことやってんの？」

と、口を出した。

「いいでしょ～？こういうの。幼馴染みたいで」

「消しゴムは無駄に使うけどな」

窓に当たった消しゴムはそのまま家の軒下に落ちる運命にある。

「じゃあ今度から消しゴムはやめてビービー弾にでもする？」

と、ヒカル。

「ビービー弾？」

「おもちゃの鉄砲の弾だよ。プラスチックで軽いから窓が傷つく心配もないし。哲平がいっぱい持ってるの、あとでちょっと盗んでくる」

ヒカルがニマツと笑うと、

「おう。バレないようにな！」

颯土も笑った。そして、勇斗は、

「ふーん…。なんかさ、ヒカルちゃんと群竹ちゃんを感じ、変わったね」

ぼそっと呟いて笑った。

忘年会はヒカルと颯土、勇斗と祐輔の4人で勇斗のアパートに集まっておこなった。祐輔とはヒカルも颯土も高校を卒業して以来の再会だった。高校時代の懐かしい話で盛り上がったり、互いの夢の話で盛り上がったりとそれなりに楽しい時間が過ぎて行ったが、あかねと麻耶がいないサークルはどこか形もいびつだった。

勇斗のアパートからの帰り道、ヒカルと颯土は肩を並べて夜更けの街を歩く。勇斗のアパートは母校のすぐ近くだからその帰り道は3年間も通った道だった。

「この道懐かしいね。あの頃は自転車だったけど」

「ああ、そうだな」

「たったの9ヶ月しか経ってないのに、随分昔のように感じない？」

「そうだなあ。かなり昔のように感じる」

「颯土くんは密度の濃い9ヶ月間だったもんね～」

ヒカルは笑った。

「そうだなあ…」

颯土は腕を頭の後ろに組んだ。

――たった9ヶ月しか経っていないんだな…。

「変わっていないようで皆少しずつ変わってるよね。何か今日の忘年会はそんなことを感じちゃったよ」

颯土はうなづいた。

「結野が来なかったのはやっぱり伊藤？」

「たぶんね…」

「そっか…」

颯土はため息をつく。

「颯土くんはさ、今あかねちゃんに会える？」

「...どうだろ？会えないことはないと思うけど、気まずくはなるだろな」

颯土は星空を見上げた。そんな颯土を見てヒカルもため息をついた。

「気まずいのは嫌だね...」

と、呟くヒカルの横顔を颯土は黙って見つめた。

◇

1995年正月一一。

明けて今日は3日。何も予定がないヒカルはたいくつな三が日を過ごしていた。

和室では父親と兄の剛が寝転がって正月テレビを見ている。久美子は友人とスキーツアーに出かけているし哲平は二階の剛の部屋でテレビゲームに昂じている。

「お正月はキライだー！」

ヒカルはわめいた。

「なんだよ、いい年してうるせーなあ」

剛が顔だけをヒカルに向けて言った。

「年なんか関係ないでしょ。たいくつなんだもんっ！」

「颯土くんでも誘って初詣にでも行ってきたら？」

正月でも台所に立っている母親が言った。

「まだ寝てるよきっと...。朝寝坊は相変わらずだもん」

「哲平に起こしに行ってもらえばいいじゃないか」

剛は無責任なことを言う。

「ボクやーだよー！」

台所にみかんを取りにおりて来た哲平は再び二階に駆け上がって行く。

「じゃあ、ピアノの練習でもしてたら？新学期早々追試なんてことにならないように」

「お母さん、お正月早々すごい意地悪...。もういい。散歩でもしてくる！」

正月からピアノの練習なんてとんでもない。ヒカルがそそくさと家の外に出ると玄関の前で颯土とバッタリ出会った。

「あれ？今日は随分早いじゃない？どこか行くの？」

てっきり朝寝をしていると思っていた颯土が、寝癖もなくすっきりとお出かけ支度を整えていることにヒカルはビックリだ。

「ああ。ちょっと写真でも撮ってこようと思って」

颯土は肩に提げたカメラを見せた。

「わ～、私も一緒に行っていていい？たいくつでしようがないの！」

鼻を膨らますヒカルを見て颯土はプッと吹きだした。

「また今度な！今日はちょっと他にも用があつてさ」

「うそ～！今度っていつ？」

ヒカルは情けない声を出す。せっかく退屈がまぎれると思ったのに颯土は冷たい。  
「ん～、そのうちな！どっちにしても近いうちに連れてってやるからさ！」  
そう言って、颯土はさっさと行ってしまった。  
「冷た～っ！」  
颯土の背中に向かって、ヒカルは叫んだ。

ヒカルの叫びを背中に受け颯土は駅に向かって歩きだした。思わず顔がほころぶ。

――この感じ...。  
こんな、何でもない日常がいい。  
このままでいい。  
ずっと、このままでいい...。  
騒々しく明るいヒカルの顔を見ているだけできっと...。

電車を乗り継いで横浜へ――。  
10年前に一度だけ地図と住所を頼りに来た街だ。  
「確かこの辺だったよな...」  
なだらかな坂の道を登りながら颯土は辺りを見回した。  
閑静な住宅街。小学校があり、確か10年前はここで道を尋ねた覚えがある。この角を曲がって  
すぐから三軒目。  
中川、という表札は昔と同じだった。颯土は表札の横のインターホンを押す。  
「はい？」  
すぐに応答があった。亮太だ。  
「あ、俺。群竹」  
「颯ちゃん?! え?! 待って、すぐあけるよ!」  
その言葉どおりすぐさまドアが開き、亮太が飛び出してきた。  
「本当に颯ちゃんだよ!」  
「突然悪かったかな? こっちについでがあったから寄ったんだ」  
「嬉しいよ! あがって、あがって!」  
亮太は颯土を家の中に招いた。  
10年前は目の前で冷たく閉じられたドア。しばらくそのドアを見つめてから、颯土は家の中  
に入って行った。

颯土は二階の亮太の部屋に案内された。亮太の母がお茶を運んできてくれた。年は取ったが物心がついてから7歳までの間、自分の親と同じように思っていた人の笑顔は変わっていない。

「颯ちゃん、ずいぶん大きくなって」

亮太の母はしみじみと颯土を見つめてお茶を勧めてくれた。

「大学生？」

「いや、大学は辞めました」

「颯ちゃん、大学辞めたのか？じゃあ、もう神戸には...？」

亮太は驚いて聞き返す。

「ああ。東京に戻ってきたんだ」

「そっか...。じゃあ、またあの家にずっといるんだな...」

亮太の母が『ゆっくりして行ってね』と部屋を出て行った途端、亮太は、

「ヒカルちゃん、元気...？」

と訊いてきた。颯土は亮太をにらみ、

「...泣いてたぜ」

と、答えた。

亮太はため息をついた。母親が置いて行ったコーヒーを手に取り両手で包むようにして背中をまるめる。

「前に颯に言われたよな。ヒカルちゃんを泣かすようなことするな、って」

「ああ。言ったな。確かに言った」

「泣かせちゃったんだな、俺...」

「そうだな。亮がヒカルを泣かせたんだ」

厳しい口調で言う颯土を見て亮太は微かに笑った。昔、同じ幼稚園に通っていた頃、颯土は正義の味方だった。いじめっ子が女の子を泣かすと飛んで行ってそのいじめっ子を『成敗』する。あの頃の颯土の顔が今そのままにある。

「それで、颯は俺に文句を言いに来たんだ...」

と、亮太は笑う。

「ああ。`成敗、しに来た」

颯土も笑った。

「ヒカルちゃんとはさ、絶対につきあえないって思ってたよ、俺も。彼女のヒビクセンパイへの想いを打ち破る事なんてできないって...」

亮太はまるまった姿勢のまま話しはじめた。

ヒカルがずっとヒビクセンパイを想い続けているから、反対に亮太はいつも『好きだ〜』と言い続けてきた。おちゃらけて笑って『中川くん、しつこいよ』と言われても、そんなヒカルとの時間さえもが亮太にとっては輝いていたのだ。

だが、海の初日の楽屋からは今までのそれが出来なくなった。ヒカルへの想いが溢れすぎてそ

んな冗談な態度を取れなくなってしまったのだ。

待たない、と心に決めながら、自分を恋愛の対象として見ようとは最初から思っていないヒカルの内を現実として知った時、限界を感じた。このままでは自分もヒカルも傷ついて気まずくなるだけだと思った。

ずっと考えた。

千秋楽の日まで、ずっと考えていた。

いつまでもおちゃらけてはられない。けれど想いは抑えきれない…。だから――。

「ヒカルちゃんに引導を渡してもらいたかったんだ、俺…」

「引導…？」

「キライって言ってもらいたかった。じゃないと俺、これから先もっとヒカルちゃんを傷つけちゃいそうで…」

「亮…っ」

真剣すぎるほどにヒカルを想っているからこそ亮太がとった行動。

それは颯土にもわかる。けれど…、

「言えるわけないだろ、あいつが…」

颯土はつぶやいた。

「あいつは、亮とはもう友達ではいられなくなる、って泣いてたんだぜ」

好きな相手に、『友達』と言われることほど辛いものはない。好きだからつきあいたい。特別な人になりたいのだ。

「…仕方ないよな、それは…。颯には最初にヒカルちゃんに友達以上を求めるなって言われたけど、人の気持ちは頭で思い描くようにはいかない…」

「それは…、」

颯土にも身に染みて分かる。

「しばらくは…、いや、ずっとかもしれないけど、たぶん俺はヒカルちゃんを避けるだろうな…」

「自分が辛いからか？」

颯土は亮太を見た。鋭く刺すような颯土のまなざしを受けて亮太は一瞬ひるみ、

「…ああ、そうだ」

と、答えた。

「じゃあヒカルはどうすんだ？亮とずっと友達でいたいって思ってるヒカルはどうすればいい？お前に避けられて気まずくなって、それでもあいつはきっとお前と友達でいたいって思い続けるぜ」

「なら俺にどうしろって？！今までと同じようにヒカルちゃんの前でおちゃらけるとでも言うのかよ！」

亮太は声を荒げて叫んだ。

「そうだよ！おちゃらけてろ！」

颯土は言い切った。

「なんで?!俺の気持ちはどうするんだよ!」

「ヒカルんちの柱には俺たち三人でつけた背比べの傷があるんだよ」

颯土は亮太の胸倉をつかんで立ち上がらせた。

「背比べ...?」

亮太は高校3年の夏に、昔我が家だったヒカルの家を訪れ颯土と三人でヒカルの部屋の柱に背を比べた傷をつけたことを思い出した。

「あいつは毎日その傷を見てるんだ!これからだってずっと見るんだ!俺たち三人の名前が書いてある傷をな!『幼馴染の証明』だって思いながらさ!」

「幼馴染の証明...?」

本当の幼馴染でもないのに、どうしてそんな...、と亮太は思う。

「そして、見るたびに泣くんだ...」

「颯...」

「風間先輩を待たないって決めたのはあいつの本心からじゃない。自分のことより先輩のことを考えて、あんな...決めたふりをしてただけだ」

「それは分かってた...。けど、そこに付け入ってしまったんだよ!俺の本当の気持ちが俺自身を無視して勝手に...!」

「亮は何でヒカルが好きなんだ?」

颯土は亮太の顔を見据えた。

「何でって...。明るくて優しく、一緒にいるだけで温かくて懐かしい気持ちがして...。とにかく全部が好きなんだよ、文句あるか!」

赤くなる亮太を颯土はニヤニヤ笑いながら見つめる。

「いいや、文句なんかないよ」

「お前、まさか...」

啞然と自分を見つめる亮太に颯土は苦笑した。

「おい?!」

亮太は叫んだ。

「俺たちライバルなのか?」

「違うさ...」

狭い部屋に突っ立ったままのふたりは、どちらからともなく座りなおした。

「俺は今、亮が言った通りのヒカルにずっと助けられてきたんだと思う。見えるところも見えないところでも」

と、颯土は呟いた。

「...それは、俺だって同じだよ」

修学旅行で颯土と10年振りに再会した時の気まずさを、ヒカルの明るさに助けてもらった。あの時のヒカルの笑顔が忘れられなくて同じ大学に入った。そして毎日ヒカルに会えるだけで元気が出た。太陽の光を浴びて光合成をする植物のようにヒカルのそばにいただけで...

だから、あんなおちゃらけた毎日でも輝いていたのだ。

「ヒカルを苦しめないで欲しい」

「颯...」

「泣かさないでくれよ。亮の苦しみはヒカルの引導じゃなく自分で乗り越えろ。お前だって正義の味方をやって来ただろ！」

幼稚園の頃のふたりは共にヒーローに憧れていた。弱いものを助け悪に立ち向かうヒーローだ。いじめられて泣いてる女の子を助けて笑顔を取り戻すと、腰に手をあてて「わっはっはっ！」と笑って...

今、幼い頃のヒカルの顔が亮太の目に浮かぶ。そしてそれを助ける幼い颯士も浮かんでくる。本当の幼馴染でも同じ幼稚園でもなかったが、幼いヒカルの泣いた顔が太陽のように輝く笑顔に変わる瞬間をハッキリとイメージできる。

「幼馴染...、友達か...」

亮太は呟いた。

「それも、いいかもな...」

颯士はゆっくりうなずいた。

「...でもさ、ヒカルちゃんは何で、出会ってまだほんの少ししか経ってない俺なんかのことを、幼馴染のような友達だって思えるんだろう...」

と、大真面目に首をかしげる亮太に、颯士はハッと笑った。

「出会ってほんの少ししか経ってないヒカルのことを、真剣に好きになれる亮と同じだろ？」

「そっか...」

9才の時に、颯士にあんな思いをさせて気まずいまま10年間を別々に生きてきた自分と颯士が、今こうやって再び『幼馴染』として再会できるのもヒカルのおかげだ。

そんな自分と颯士の空白を埋めた間に強引にヒカルが入ったいびつな幼馴染もどき。

それでも、あの柱にはしっかりと証明が刻まれ一生消えない。やっぱりそんなヒカルとは、最初から友達以外にはなれないんだな...と、亮太は心を決めた。

「颯は、ほんと、正義の味方だな...」

ただ、幼稚園の頃と違うのはたったひとりの女の子を守る正義の味方に変わったこと。

ヒカルのために、ヒカルの笑顔を守るためにここまで来て...

——俺には無理難題を言い放ってさ...。でも、その無理難題はきっと、颯も同じ。同じ思いをかみしめているんだな、俺たちきっと...

少し冷めてしまったコーヒーを、それでも美味しそうに飲む颯士を見つめながら亮太は苦笑した。

◇

冬休みが終わり、大学の朝のいつもの丘に、いつものようにヒカルが立っている。その隣では

煙草をくわえた海がフェンスに肘をあてていた。

亮太は少し安堵した。ヒカルがひとりじゃなくてよかった...、と。

さあ、いつものように。

今までどおりに...

「おはよう、おふたりさん！」

亮太は背後から声をかけた。

「おう、亮太！こないだは公演観に来てくれてありがとな！」

海が真っ先に返事した。だが、ヒカルは驚きを隠せない顔を亮太に向けて立ち尽くしている。

「ヒカルちゃん、どうしたの？食当たりでもしたような顔してさ！」

亮太は笑った。

今までと変わらない亮太の爽やかな笑顔を見てヒカルは呆然とした。たった今まで亮太に会ったらどんな顔をしてなにを言おうか考えていたからだ。

「食...当たりなんかしてないよ...？」

——いつもの中川くん...。いつもと同じ『おはよう』だ...

でも、どうして...、とヒカルはやや混乱するが、

「新年明けましておめでとう！今年も去年と何ら変わらず、よろしく頼むよ、おふたりさん！」

「何ら変わらず、を強調して言った亮太の言葉に、

「こ、こちらこそっ！」

ヒカルは満面の笑みで答えたのだ。

——この笑顔...だよな。やっぱヒカルちゃんは...

「ヒカルちゃんがモデルの台本進んでるの？」

「今、鮫島先生書いてるよ！3月から準備稽古に入って秋頃初日の予定。稽古前に配役のオーディションがあるんだ」

「へえ～。で、まさか、海ちゃんは...」

「もちろん、ヒカルを狙ってるさ！」

「やだなあ！私がおのまんま台本になるわけじゃないって、鮫島センセイが言ってたじゃない」

「いや、やっぱモデルはヒカルなんだから、役づくりはヒカルを研究させてもらうよ」

と、海。

「海ちゃん、何気にもう主演のつもりでいる？」

と、突っ込む亮太。

「当たり前だって！ヒカルの役は絶対にオレがやる！」

「じゃ、その時はまたヒカルちゃんと一緒に見に行くからチケット頼むよ！今度はちゃんと隣同士でね」

亮太と海のいつもの風景。

そして、自分と亮太の変わらない風景。

もう二度とこんな風景には出会えないのかと思っていたのに…。

「亮太くん、ありがとう」

唐突に自然に出た言葉。

「え？あ、どういたしまして…」

何となく条件反射で答えた亮太だったが、ふと気づいて目を見開いた。

「え？今、ヒカルちゃん何て呼んだ？亮太くんとかって聞こえたけど…？」

聞き間違いじゃないよな？とひとりでたった今の記憶をぐるぐる思いめぐらせる亮太に、ヒカルはにっこりと微笑んで、亮太くん、ともう一度かみ締めるように呟いた。

颯土の家の梅の花が満開に開き、ヒカルの部屋の窓の側まで小さな薄いピンクの花びらを伸ばしている。

1年前の今日は高校の卒業式だった。校庭の真ん中で梅の木を背景にして写真を撮ってからちょうど1年。そして、響の卒業式からはちょうど2年。

あの日は粉雪が舞っていた。満開に咲く隣家の梅の木にうっすらと雪が降り積もっていた光景は未だ心に鮮明に残っている。

――ヒビク先輩、だいすきっ！

声を大にして叫んだあの時、雪の歩道で「ヒカルのところに帰ってくるから」と約束してくれた響。

だが、2年の月日が経ってもハガキ一枚来ない。響と別々の時間を過ごしていることが時々無性に悲しくなる。それは、本当に時々襲ってくる感情。

「今日は襲われてるのだ...」

ヒカルは単調に呟いた。

「2年間もどーしてハガキも電話もないんだー！ヒビク先輩のばかやろー！」

ヒカルは颯土が写した文化祭の写真に向かって思いのたけを叫んだ。言葉に出してはいけないと思っていた本当のキモチを、今素直に叫ぶことが寂しさの中の少しだけの救いだ。

机の上には『ヒビク先輩の思い出3点セット／命名ヒカル』が並んでいる。写真。音符の形のペンダント。そして響がくれた『Shine』の楽譜だ。

「ヒカルちゃん、俺に会いたかったらその曲弾けるようになってごらん？」

と、楽譜が響の声で言ってるような気がした。

「どこまでも意地悪な先輩だ...っ」

ヒカルは楽譜を見てため息が出た。今まで何度も挑戦してみた『Shine』だが、8分音符、16分音符、bなど記号の羅列...

さっぱりわからない。

響の作曲はいつも頭の中とテーブルの上だったことをヒカルは思い出していた。よく物思いにふけたように遠くを見ていることがあった。頭に浮かんだフレーズを整理している、と、そんな時、響は言っていた。そして、何の楽器も使わないで指でテーブルを叩くだけでスラスラと音符を楽譜に書いていた響。夏の合宿でも、音楽室でも...

「音を出さないで音楽を作る先輩はやっぱり天才だ。ベートーベンみたいだ...」

とりあえず有名な作曲家はベートーベンしか知らないヒカルだ。ヒカルはベートーベンのような響が作曲した楽譜をキーボードの譜面立てに乗せてみた。そして楽譜を読みながら右手でメロディーを弾いてみる。

「あれ...？」

音符が繋がっている。

今まではどういう曲なのかわからない音しか出せなかったのに、今日はちゃんとメロディーになっている！

「私って、凄いかも！」

特訓も追試も無駄ではなかったようだ。ヒカルのピアノも確実に進化している。それでもまだ『Shine』はヒカルにとっては難解な曲だった。まだとてもじゃないが演奏はできない。

「これが完璧に弾けるようになるには5年ぐらいかかりそう...」

言葉に出してから、

——だから5年なのか...。

と、ヒカルは思った。

じゃあ、今すぐ弾けるようになったら今すぐ会える？

単純かもしれない。

だが、今のヒカルにはそれしか希望を繋ぐものはなかった。自分で作った響に会えるおまじないのようなものだが...

「弾けるようになってみせる！」

そう心に決め、再び鍵盤に手を乗せたとき、窓がパチンと鳴った。

「何よ？また消化不良とか何とか言うんでしょ？わかってるんだから！」

まだ颯土が何も言っていないうちにヒカルは窓を開けると同時に喚いた。

「何いきり立ってるんだよ...」

いきなり文句を言われた颯土にしてみれば啞然とするしかない。

「写真を撮りに行くからヒカルちゃんを誘ってやろうと思っただけなんだけどなあ...」

「え？本当?!」

「でも...、なんか機嫌悪いみたいだし、今度にするかあ...」

颯土はヒカルを横目で見ると、

「あー！行く行く～！前に今度って言われて3ヶ月も待ってたんだからあ！」

ヒカルは窓から身を乗り出した。

「じゃあ、10分後に下でな」

颯土の部屋の窓が閉まると、ヒカルは『Shine』の楽譜に向かって言った。

「今日は颯土くんと行って来る！明日から頑張ってるから覚悟しなさいよ！」

そして、去年の夏からずっと外したままでいた音符のペンダントを首にかけて部屋を飛び出した。

◇

「どこ行くの？」

今日は陽射しも暖かく風もない。写真を撮りに歩くのには抜群の日よりだ。

「どこ行こうか？」

颯土は呆けて考える。

「え？決まってないの？」

「ああ、決めてないよ」

「あのさ、何が撮りたいとか、どういう写真を撮りたいとかってないの？」

「ない」

あっさりと言う颯土にヒカルの開いた口がふさがらなくなった。

「じゃあ、私を何処に連れてってくれるつもりだったの？」

ヒカルは、颯土はもう目的を決めて海や山などに写真を撮りに行くのだとばかり思っていた。

「俺さ、まだ自分のテーマって何だかわからないんだよ。だから目的地がないわけ」

「でもさ、颯土くんの写真にはどれも同じテーマがあるような気がするよ。いのちがあるっていうか...」

と、ヒカル。

「ヒカルがそう感じてくれたってことは今まで通りの写真の撮り方してていいんだな、って思うのさ」

「今まで通りって？」

「ただ、何となくぶらぶら」

そう言って颯土は笑った。

「ただ、何となく、ぶらぶら...、の中にきっと輝きがあるんだね」

「まあ、そういうことかな。だから今日もぶらぶら行こうと思ってさ！」

颯土は墨田公園を指差した。

「じゃあ、颯土くんのぶらぶらにつきあうよ！」

ふたりは川沿いの墨田公園を歩きはじめた。

桜の芽が膨らんでいる。川は静かに流れ、ときどき水上バスが通ると波が立つ。犬を連れた人、老人、ベビーカーを押している若いママさんたちがのんびりと歩く春の昼下がり。

颯土はそういった日常をカメラに収めていた。ヒカルは、そんな颯土の横や前や後ろをチョロチョロとついて行く。何かを感じてファインダーを覗く時の颯土は素敵だな、と思ったりしながら。

ベンチの上に二匹の猫が寄り添って日向ぼっこをしていた。

「見て見て、逃げないよ」

ヒカルは声をひそめてそっと近づいた。そして猫の横に座り背中を丸めて寄りそう二匹に話しかけた。

「キミたちは恋人同士なの？」

そんなヒカルに颯土はカメラを向けた。寄りそう二匹の猫と無邪気に話かけるヒカルがアングルにおさまった。

「ねえねえ、仲良すぎだよ？ピツタリ寄り添いあえていいなあ...」

レンズを通したヒカルが少し寂しげな顔をする。猫はジロリとヒカルを見て みゃ〜あ と鳴いた。

「はいはい、お邪魔虫は消えますよ。いつまでもふたり仲良くね」

ほわっとヒカルが笑った時、颯土はシャッターをきった。

「颯土くん、この猫ちゃんたち撮ってよ」

「今、撮ったよ」

猫だけじゃないけどな...、と、颯土。

「いいね、こういうの。こういう何でもない日常を写真に撮るって凄くいいよ...。私、颯土くんのぶらぶら撮りに賛成だな！」

「ぶらぶら撮り...って...？」

ヒカルの命名はいつもどこかおかしい。だが、的を射ている、と颯土は思い苦笑した。

のんびりと歩きながら長い川沿いの墨田公園を歩き、言問橋から白髭橋までやってきた頃、  
「ひゃ〜、こんな遠くまで来ちゃったね。二駅分歩いちゃった。気が付けば足がパンパン」  
ヒカルは前かがみになって自分の太腿をたたいた。

「ん？そうか？」

颯土にしてみれば時間が瞬く間に過ぎたという気がしていた。フィルムは二回も入れ替えたし、ずいぶん歩いたのは確かだけど...

「たいしたことないだろ、これぐらい」

「カメラマンの足に敬意を表するわ...」

「はっ」

ここまで来る道すがらでたくさんの写真を撮った。

木々の緑から漏れる木漏れ陽や、道端に咲く野花や、川に浮かぶボートや、道行く人達...。  
何でもないものばかり。

それでも感じる充実感と手ごたえ。

きっと今まで撮ったどの写真よりも、

――今日の写真の中で俺は喋っているだろう...

写真に言葉がある、という意味が最近少しずつわかりかけている。

近所の公園の昼下がりに。

ヒカルと一緒にのんびり歩きながら、時々訪れる『撮りたい気持ち』の瞬間にカメラを向ける。ぶらぶら撮りとヒカルは命名したが、その瞬間は颯土の心は緊迫する。一瞬しかない、もう二度と同じ光景には出会えないその瞬間を逃してはいけない、と...

「空が青いね～！」

ヒカルが空を見上げた。

「……ヒビク先輩、なんで連絡くれないのかな…」

空を見上げたまま、ヒカルは言った。抜けるような青空の清々しさに反して、さっき颯土から呼ばれるまで襲われていた悲しい気持ちが突然蘇ったのだ。

「私のこと、もう忘れちゃったのかな…」

「そうじゃないだろ…」

ヒカルを忘れるなんてことはありえない…、と颯土は思った。

「きっと、まだ自分が納得できる結果が出せないでいるんじゃないかな…」

「そういうもんなの？」

「…俺が風間先輩だったら、きっとそうだと思う」

好きな女の子には結果を持って会いたい。そのために後ろを振り向かないで突き進む。そして少しでも、1日でも早くその結果を出そうともがいて、焦って、先が見えなくなって、そして…

——タイミングを見失う…。

「…颯土くん？」

黙りこんだ颯土に、ヒカルは不安な目を向ける。

「…ヒカルから手紙を出してみたらどうだ？」

颯土は川を望む手すりに背をあてた体勢に変えながら言った。

「…できないよ。今、手紙を書いたらきっと寂しいって書いちゃうもん。それはヒビク先輩にとったら重荷になっちゃうでしょ？」

確かに…。

と、颯土は思う。

「だから待つ。やっぱり待つ。それしか私に出来ることはないから」

と、ヒカル。

「ねえ、あのひこうき雲、手が届きそうだよ！」

澄み渡る青空に白い直線が彼方に伸びていた。

「じゃ、手を伸ばしてみろよ。届くかもしれないぜ！」

颯土の言葉にヒカルは素直に応じて思いっきり背伸びをした。

「とどけ——っ！」

首にかかっていた音符が手を伸ばす瞬間に揺れた。颯土はカメラを自分の胸の位置に抱え、青空とひこうき雲と、そして両手を空に向かって大きく伸ばしているヒカルを下から見上げるような形でそのままシャッターをきった。

この一瞬。

トドケ、ヒカルノオモイ  
カザマセンパイノ　モトニ...！

「あの雲を作った飛行機はどこに飛んで行ったんだろうね...」

ヒカルは手を下ろしながら言った。

「どこだろな？」

「届きそうに届かないね...」

ヒカルはもう一度空を見上げた。

「...届くさ」

と、颯土は微笑んだ。

帰りの長い道を歩いている間に辺りはすっかり夕暮れ色に染まった。隅田川の水面が夕日を浴びてキラキラ揺れている。ヒカルの顔も颯土の顔もオレンジ色に包まれた。アスファルトに長く伸びた影さえも夕日色に見える。

颯土は立ち止まりふたつ並んだ影を見つめた。

「どうしたの？」

「いや...」

颯土はカメラを影に向けた。自分の影がカメラを構えた格好になる。ヒカルは手を上げたり足を上げたり、いろいろなポーズを影にさせている。

「道の中で人が踊ってるみたいだね」

「ヒカル、笑ってみろよ」

「笑ったって影は関係ないじゃない」

「いや、変わるさ」

ヒカルはおおげさに「わっはっは～！」と笑った。すると影も笑う。

颯土はレンズを覗くのをやめ、さっきのひこうき雲と同じように、胸にカメラを当てた。

笑うヒカルとその横で微笑む颯土の影。

ふたつの影が同じ形の笑顔になった時、カシャッという、きれのいい音が夕焼けの墨田公園に響き渡った。

ヒカルは毎日キーボードの電源を入れ『Shine』のレッスンに励んでいる。今、この曲を響が贈ってくれたことに感謝しないではいけない。『Shine』は自分と響を繋ぐ唯一のカタチになったものだ。それは離れて2年が経ってようやく実感したことだった。少しでもピアノを弾くということをかじったおかげで気がついた思いだった。今まで苦痛でしかなかったピアノの練習が今はとても楽しい。

右手のメロディーはどうか弾けるようになったがまだ左手は追いついて来ない。左手だけならどうか弾けるが右手と一緒にだとトチ狂う。

けれどこれが両手で弾けるようになった時、響は帰ってくると心の底から信じているヒカルなのだ。

窓にビービー弾がパチンと当たり、続いて「おーい」という颯土の声が聞こえた。ヒカルは手を止めて窓辺に立った。

「ずいぶん上達したんじゃないか？ピアノ」

窓の向こうで颯土がニヤニヤしている。

「ほんと？」

ヒカルの顔が輝いた。今まで颯土にはずっと消化不良を起こしそうだ、と言われ続けて来たピアノだ。

「ああ。なかなかステキな曲じゃん？」

「...この曲ヒビク先輩が私の為に作ってくれた曲なんだ。『Shine』っていうの」

「ふーん...」

「弾くのは凄く難しいんだけど、これが弾けるようになった時に先輩に会える気がして」

それで毎日毎日同じ曲を練習しているのか...、と、颯土は心で呟いた。

「頑張れよ。1日も早く弾けるように祈ってやるから」

「ありがとう！」

ヒカルの笑顔を見て颯土は一瞬の間たたずみ、

「この間の写真が出来たんだ。見に来いよ」

今日、光創社で現像してきた写真を見せた。

「ほんと？今、行く！」

ヒカルはすぐさま部屋を出、そのまま隣家へと向かい、

「おばちゃん、お邪魔しまーす！」

リビングにいる颯土の母に声をかけてから、階段を上った左側の颯土の部屋をノックした。

「入れよ！」

「どれどれどれ！」

ヒカルは転がり込むようにして部屋に入り、颯土が手に持っていた写真を奪い取った。

順番に写真を眺めているヒカルを横目に、颯土は一枚の写真をそっとジーンズの後ろのポケッ

トにしまおうとした。ところが、

「ねえ！あの写真は？」

と、ヒカルが顔を上げたので、ぎこちないまま動作が止まった。

「あの...写真って...？」

「二匹の猫ちゃん！撮ってねって言ったじゃない」

颯土はギクリとしてヒカルを見た。

「あ、その顔！昔から颯土くんがその顔する時は何かヤバイことがある時だ。後ろに隠してるの出しなさいよ」

——鋭い！

颯土は仕方なくポケットから隠した写真を取り出した。

「これ、あんまりよく撮れてなくてさ、ヒカルちゃん、怒っちゃうだろ～なあ～って思ってさ...」

と、言いわけをする颯土に、

「いいから見せなさい！」

と、ヒカルはピシャリと言う。

「はい...」

颯土は渋々と写真をヒカルに渡した。

木漏れ陽の中で二匹の猫が寄り添っていた。だが、猫たちよりも写真のスペースの多くを占領しているのはその猫に話し掛けているヒカルだった。笑顔のヒカルに焦点が合い猫は横でオマケのようにして写っている。

ヒカルは颯土を見た。

「あのさ、」

「だから、それはさ、ちょっと手元が狂って...」

「ここに写ってるのがあたしだってことを忘れたとして言わせてもらうけどさ」

「あ、ああ...」

「これ、すごくいいよ！」

ヒカルは笑った。

ありふれた日常の中のワンシーンが飾らずに自然に表れている写真。どこか懐かしくなるような、暖かい陽射しの中に包まれているような、そんな心のどこかがくすぐられる思いがする写真。颯土の写真はどれをとってもそういう情景がある。柔らかな木漏れ陽。道行く普段着の人達。

そして———。

「このひこうき雲...」

ヒカルは一枚の写真を手にした。

「とどいてる...」

写真の中のヒカルの手はひこうき雲に届いていた。下から上を仰ぐように颯土が写したからだ。

「だから届くって言っただろ？」

と、颯土は笑った。

トドケ、ヒカルノオモイ

カザマセンパイノ、モトヘー。

あの時、そう思って撮った写真...。

「颯土くんさ...」

ヒカルはもう一度はじめから写真を見直しながら言う。

「名カメラマンだね！」

心がある。いのちがある。優しさがある。そして、言葉がある...。

何気ない日常の中の一瞬の輝きときらめきを瞬時にとらえる颯土のいのち。

写真と颯土のいのちが共鳴している。颯土の写真は生きている。

「よせよ。まだまだこんなもんじゃ...」

「いや！名カメラマンです！たくさんの人に颯土くんの写真を見てもらいたいなあ。知ってもらいたいよ。個展とかできないの？」

無邪気に言うヒカルに颯土は、

「あのな...、個展なんてプロのカメラマンだってそうそう簡単に出来るもんじゃないんだぜ」

呆れて言った。

「どーして？やっちゃえばいいじゃないの」

「あのね、そう簡単にはいかないの。莫大な金がかかるんだぜ。それに仮に個展を開いたとして、誰が俺なんかの写真を見にくるんだよ...」

師匠の純平でさえまだ個展への夢には届いていないのに...。

「そっか...。貧乏無名じゃしょうがないんだ...」

「ま、簡単に言ったらそういうこと」

「じゃあさ、貧乏無名なりのやり方で颯土くんの写真をいろんな人に知ってもらおうよ！」

ヒカルの目が輝いた。その目を見て颯土は高校時代を思い出す。ヒカルがこういう目をする時は、何か突拍子もないことを思いついた時――。

「蚤の市に出よう！」

「のみのいち？」

「フリーマーケットだよ！明治公園とか代々木公園でやってるフリーマーケットにはすんごいたくさんの人がくるし、そこの墨田公園でもときどきやってるじゃない？それに出て颯土くんの写

真を買ってもらおうの！」

「売れないよ」

颯土はあっさり言った。

「え～？何で？」

「俺はプロのカメラマンでもなんでもないんだぜ？そんな奴が撮った写真、誰が買うんだよ…」

まったく、ヒカルだよなあ…、と颯土は呟いた。

「写真が好きな人…」

ヒカルは口を尖らせる。

「有名じゃなくてもプロじゃなくても、颯土くんの写真が好きだって思ってくれる人を買ってもらおう」

いや、たとえ買ってくれなくても颯土の写真をたくさんの人に見てもらいたい。それだけでもいい、とヒカルは思っている。

颯土は無言でヒカルを見る。あまり乗り気がなさそうだ。そんな颯土を見て、ヒカルは、

「も～、私がプロデューサー兼営業部長をやってあげる！」

と、颯土の肩をバンと叩いた。

いってえなあ…力の加減なしかよ、と叩かれた肩をさすりブツブツぼやいてから、

「…ま、何もやらないよりは、ヒカルの案でも試す価値はあるかもな」

と、颯土。

「そうそう…、っておいっ！ヒカルの案でもってヒドインじゃない？」

「いやいや、よろしく願います、プロデューサー様…」

フリーマーケットに出るなんて考えもしなかった。そもそも、自分を売り込もうなどとも颯土は考えていなかった。ただ、自分は自分の思いのままの写真を撮り続けていきたいと思っていただけだ。

だが、大学を辞めてまで帰って来た東京で、今の自分がやれることできること、どんなことでもやってみなければ何の結果も出ないことだけは確かなこと。

「とりあえず低コストで出来てお客さんが手軽に手を出せるポストカードを作ろうよ！」

と、ヒカルの目は星のようにキラキラ輝く。

「…じゃあ俺、明日一枚どれぐらいで出来るか印刷屋に聞いてくる」

「私はそこのフリマがいつあるか調べて来る！」

ヒカルはニマッと笑った。

◇

墨田公園の青空市は4月29日に開かれる。ヒカルはさっそく出店の申し込みをすませた。

海と亮太に話をすると、ふたりとも、

「楽しそうだから仲間に入れて！」

と、申し出てきた。

海はヒカルがよく言っている『颯土くんの写真』がどんなものなのか興味があるし、亮太はふたりの『幼馴染』として自分もこの企画に参加するのは当然だと思った。

スペシャルサンクス隊も揃い、あとはフリマに出すポストカードの制作を急がなくてはならなかった。もう3週間しかない。

「会社のコネの印刷屋に訊いたら一枚のコストは約50円ぐらいだって」

「約？」

「トータルの枚数で値段が出てるらしい。無理言って10枚単位でやってもらえるように交渉してきたけど、何枚ぐらい作ればいいんだ？」

颯土には見当もつかない。

「十種類ぐらいををあわせて200枚は欲しいな」

「そ、そんなにっ？誰が買うんだ？」

「お客さん」

「だから、その客って誰！」

「もちろんフリマに来るお客さんに決まってるでしょ？」

絶対に売れるわけがない、世の中そんなに甘くない、と颯土は思った。だが隣で笑うヒカルを見ると、とてもそんなことは言えない。

「それよりも写真を選出しよう。今まで颯土くんが撮った写真を見せて」

ヒカルはパッパと指図を出してくる。本当にプロデューサーみたいだ、と颯土は自分のファイルを取り出した。そしてふたりはファイルの中からポストカードにする写真を選ぶのだが、膨大な数の写真の中からたった10枚を選ぶ作業は難しい。ヒカルにとってはどの写真も全て採用したいと思う。颯土はヒカルにまかせきりで自分で選ぼうとはしない。ファイルを繰りながら写真を一枚一枚吟味するヒカルを呆けた顔で見つめている。まるでひとつごとのように。

――ヒカルだけでいいのかもな、俺...

一瞬、颯土の心に湧きあがった言葉だ。きっと多くの人に見てもらうことよりも、思いのままに写したものをヒカルが見てくれるだけでいいと思っている。

そして、その思いのままの写真も全て――。

昔から自分が撮りたいと思ってレンズを向けてきた時は、全てヒカルが心のどこかにいた。そのことに気がついたのは大学を辞める決意をする直前だ。あんなに目が回るような思いをして大学に行って見習いやっての生活の中から必死に自分を探し出そう、自分のテーマを見つけようともがいていたが、いつも戻ってくるところは自分は写真家になりたいわけでもカメラマンの仕事がしたいわけでもないということ...

闇の中にいた自分の心の中の言葉を、もう何年も前に引き出してくれたのはヒカル。ヒカルが傍にいる時、自分は闇から脱し光に沿う影として存在できた。自分にとって写真は、そんな口では言えない言葉を込める唯一の手段。

たった、それだけのことなのだ。

「颯土くん、どうしたの？」

呆然と自分を見つめている颯土にヒカルは手を休めて言った。

「いや...？決まった？」

「決まった？って、もう！颯土くんも選んでよ」

と、膨れながらも、もう10枚の写真がファイルから抜き取られ颯土の目の前に並べてあった。

卒業の日、教室を撮ったモノクロの写真。

家の前に停めてある赤い自転車とハンドルに止まる赤とんぼ。

腕を組み歩くカップル。

公園の砂場で遊ぶ幼児。

雨の中の電話ボックス。

太陽の光を浴びて空を見上げるひまわり。

緑の葉の間から漏れる木漏れ陽。

隅田川を走る船と水上の波。

夕日の中のふたつの影。

そして、ひこうき雲に届く手。

「これは、やめようぜ...」

颯土は最後のひこうき雲の写真を抜いた。

「どうして？これ、凄くいいのに！」

「これは人の手に配りたくないな、俺...」

ヒカルの想い。

そして、自分がこの写真に込めた言葉。

これだけは他人に触れて欲しくない...、と、颯土は心の中で呟いた。

「うそお。あたしはこれが好きだけど...」

「.....」

颯土の胸のどこかが微かにきしむ。他人に触れて欲しくないというのは間違っていないけれど、それとは別に――。

「でも颯土くんがイヤだっていうなら無理強いはしないでおくよ。じゃあ、あと一枚はどれにしよう？」

ヒカルは納得いかない面持ちだ。

「これがいいじゃん？」

颯土が手にしたのは猫とヒカルの写真だった。

「これ?!だって、私の顔が...」

自分の顔がおもいきり登場しているためヒカルは躊躇した。人目にさらすなんて恥ずかしい。

「これ、いい笑顔だぜ？横向いてるから微妙にヒカルだってわかんないしさ！」

と、颯土は笑った。

「そういう問題？」

「お前だってさっきいい写真だって言ってくれたじゃないか」

それはそうだけど...、とヒカル。

「けどなんか、一貫性がなくどうでもいいような写真ばかり選んだなあ」

「だからいいんじゃない。ありふれた日常の中のひとこま。気にしなければ通り過ぎてしまうような瞬間がここに切り取られて命を持って存在してる」

ヒカルは自分が選んだ写真たちをもう一度見つめる。

「素朴で純粹で涙が出るぐらい懐かしくて、凄くいい写真たち...」

「それって親馬鹿と一緒にじゃん？」

シビアに言う颯土に、

「あんたさ、自分のことわかってないよ。もっと自信もちなさいよ！」

ヒカルはやや強く言った。

「颯土くんの写真見て気がついた事なんだけどね、ありふれた日常の中に宝石のようにキラキラしてる言葉がいっぱいあるんだなって。平凡で素朴ってことが本当は一番輝いてることなんじゃないかなって」

ヒカルの言葉を颯土は自分の心の世界で聞く。

平凡で素朴な日常が神戸にいたころはどんなに懐かしいと思っていたことか。

そして、そのなつかしさと一緒にいつも瞼に浮かんでいたのは...。

「ポストカードに颯土くんの名前と私達のプロジェクトチームの名前を入れようよ！」

ヒカルの弾けるような声で颯土は自分の世界から帰って来た。

「プロジェクトチーム？」

「そ！写真家群竹颯土を知ってもらおうプロジェクト！」

目を輝かせ頬をピンク色に染めているヒカルを見て、颯土は笑う。

「ちょっと、何がおかしいの？」

「なんかさ、ヒカルの方が一生懸命だなって...」

「だって私はプロデューサーだし！」

「そうですね」

「名前、何にしよう？純粹、素朴...Pure...。うん！Pure企画！これがいい！颯土くん」

「ん？」

「印刷屋さんにちゃんと頼んでね。『Photo by Souji Muratake ピュア企画』って入れてもらうこと」

「あ、ああ、わかったよ」

と、颯土は答えた。

バタバタと準備を整える3週間が瞬く間に過ぎ、ピュア企画出陣の朝は晴れやかに澄み渡る青

空が広がった。

早朝からフリーマーケット開催を告げる花火が鳴った。海と亮太と一緒にヒカルの家に来てきたのは朝7時40分。

「颯は？」

亮太はまだカーテンが閉まっている颯士の部屋を見上げた。

「まだ、寝てるとか…」

ヒカルは颯士の家の呼び鈴を鳴らそうとしてとどまった。休日の7時ではまだ家族も休んでいるかもしれない。

「ちょっと待ってて。起こしてくるから！」

ヒカルは二階にかけ上がり、窓を開けてビービー弾を数個投げつけた。下でそれを見ていた海は、

「何やってんだ、あれ？」

と、首をかしげる。しばらくすると颯士の部屋の窓が開き、明らかに今起きたばかりです、といった颯士の顔が現れた。

「もう亮太くんも海ちゃんも来て待ってるよ！」

ヒカルが窓からわめくと、颯士の顔が下で待つふたりに向いた。亮太と颯士ははじめて会う長身で男の子のような海が颯士の顔を見上げていた。

「すまん。今すぐ支度するから」

颯士は一旦部屋の中に消え、ヒカルが再び下りて来た。

「あいつがヒカルがいつも言ってる颯士くんかあ」

と、海。

「なんか普通の奴だな。頭、くしゃくしゃだったし。ヒカルが言う名カメラマンには見えなかったよ」

海は見た印象をそのままハッキリ言う。

「海ちゃんもあとで写真を見ればわかるよ」

と、ヒカルは笑った。

支度を終えた颯士が出てきたのは8時。一行は荷物を手分けして持ち、フリマ会場へと向かったのだ。

ポストカードは儲け無し一枚50円で販売することにした。ひとりでも多くの人に手にしてもらおうのが目的だ。純粋に颯士の写真をたくさんの人に見てもらいたい、ただそれだけのためのフリマ出店。

ポストカードは選んだ十種類の写真を20枚ずつ、合計200枚用意した。そしてディスプレイ用に作ったパネルを3つ店先に飾る。ヒカルと猫の『笑顔と猫』、幼いカップルの『ふたり』、颯士とヒカルの影の『影ぼうし』。これらは一応非売品扱いだ。いくら値段をつけてよいのか見

当がつかないからだ。ちなみにタイトルのネーミングはヒカルである。

亮太と颯土でテントを張り、簡易テーブルに真っ白なシーティングをかぶせその上にカードを並べる。ただポストカードを売るだけのピュア企画のブースだ。だが準備が全て整った時、シンプルでささやかなその場所がきらめいて見えた。

「へえ…。なんていうか、いのちが洗濯されるような写真ばかりだな」

海は並べたポストカードを一枚一枚手にとって眺め感心した。

「オレ、かなり好きだぜ、ソージの写真」

「ど、どうも…」

と、颯土は頭をかく。

「だから言ったでしょ？」

海に颯土の写真を褒められてヒカルは得意気だ。

「んじゃ、参加させてもらったことだし、発声練習のつもりで…」

海は、あ～あ～あ～、と声を出したあと、

「ピュア企画プロデュース！写真家群竹颯土のポストカード販売中！一枚50円という安さ！ど一ぞ、覗いてってくださいーい！」

と、第一声を放った。腹の底から出る、海の大きな澄み渡る声に三人は顔を見合わせ、

「じゃ、俺はそこらをひやかして歩いてる客を呼んでくるよ」

と、亮太は営業に出て行った。

「私はここで接客する！」

と、ヒカルはテントの中で待機。

「俺は…」

颯土はただ呆然と立つだけだった。自分の撮った写真に値段をつけて売るなんてやっぱりまだ気がひける。

「群竹颯土って有名なの？」

テントの外のパネルを眺めていた年配の婦人が、そこで声を張り上げてる海に訊いてきた。

「そりゃもう…、」

と、適当に答えようとする海を制し、ヒカルは、

「いえ、全然有名じゃないです、すみません！」

と、答えた。

「でも、この写真はそこの川ね？よく撮れてるじゃない。近所だし、じゃあこれを一枚いただくわ」

婦人は隅田川の写真を手に取った。

「ありがとうございます。どうぞ、他の写真も見て行ってくださいね！」

「やったな、ソージ！」

海が、ぼーッと突っ立ったままの颯土の背中を叩くと、

「あら？この人が群竹颯土なの？まだ若いんじゃない」

婦人は颯土を舐め回すように見つめた。遠慮なくじろじろと見つめる婦人に対し、颯土は必死

に引きつった作り笑いを浮かべる。横でヒカルと海は顔を見合わせて笑った。

「いい目してるわよ、あなた」

婦人は他の写真も一枚ずつ手にとり、全ての種類を買ってくれた。

「ひゃ～、ありがとうございます～！」

ヒカルは大喜びで飛びはねる。頑張りなさいね、という言葉が婦人からかけられ颯土は照れ臭そうに頭を下げた。

「売れたよ、颯土くん！」

と、飛び跳ねるヒカルに、

「お情けだよ...」

颯土は冷めた口調で言う。

「お情けだってなんだって買ってくれたんだよ？あのおばさんの家のどこかに颯土くんの写真が飾られるかもしれないんだよ？嬉しいじゃない！」

顔中笑顔にしているヒカルの顔を見る方が、あのおばさんが写真を買ってくれたことよりも嬉しいかも...、と颯土は思ったが、そんなことはもちろん言わなかった。

「この調子でどんどん売ろう！200枚じゃ足りなかったかも！」

.....

...というヒカルの心配は無用だった。海のデモは効果をきたし、多くの人々がピュア企画のブースを覗いていく。皆、素敵な写真ね。いい風景だね。と口では言ってくれるが買ってくれたのは最初の婦人だけで、午前中の売上はたった10枚。

「たくさん人は来てくれるのになぁ...」

ヒカルはしょんぼりとした。

「だから言っただろ？売れないって」

颯土はまるでひとごとのように言う。いくら50円と言えども、興味のないものに人はお金を出さないものだ。写真ならとりあえずなんでもいい、というポストカードの蒐集家でもない限り、自分の写真になど手は出さないだろう、と颯土は最初から思ってる。だから期待もしていなければたいしてガッカリもしていないのだ。

海と亮太はふたりで他の店を覗いてくるとブースを離れてしばらく帰って来ない。ヒカルと颯土はテントの中で椅子に座りこみ、前を通る人々を何気なく見ている。

下町のフリーマーケットー。

子連れから老人まで、さまざまな人達が並ぶ店をのぞいて歩いている。昼時も過ぎ、売るのがつきて帰り支度をはじめた店もある。

「俺たちもそろそろひきあげようぜ」

と、颯土は言った。どっちみちあと1時間もすれば会場もお開きになる。

「たった10枚かぁ...」

ヒカルがため息混じりに呟いた時、店の前をひとりの壮年が横切った。ベレー帽をかぶりパイプをくわえ、のんびり散歩でもしているように出店ブースをひとつひとつ覗いている。

「あのおじさま、何か素敵だなぁ...」

ヒカルが呟くと、

「ヒカルちゃんは、おじさま好み？」

と、颯土がチャカした。

「そうじゃないよ～！素敵の意味が違うの！優しそうで芸術的センスがありそうで...。ちょっと行ってくる！」

ヒカルは言うが早いか、すぐさま立ち上がりテントを出て行った。

「...って、おい！」

颯土が立ち上がった時には既にヒカルは、

「おじさま、こんにちは！」

と、壮年の背後から声をかけていた。ヒカルに声をかけられてベレー帽の壮年は振り返った。白髪まじりの眉毛を下げ、優しそうなまなざしでヒカルを見つめ、

「やぁ、こんにちは、お嬢さん」

と、首をかしげて言葉を返す。

「私達ピュア企画っていうんですけど、よかったら立ち寄ってみてください。あそこで写真のポストカードを出しているんです」

壮年はヒカルが指をさす2メートルぐらい先のピュア企画ブースを眺めた。パネルの横に立つ颯土が軽く会釈をした。

「ほう。写真ですか...。どれ、拝見しましょう」

壮年はそう言うと、ピュア企画に向かって歩きだした。

テントの外のパネルを丁寧に見たあと、壮年はテーブルにある10枚の写真を一枚一枚手にとってゆっくりと時間をかけて眺めていた。時々思い立ったようにまた外に出てはパネルの写真を見て、再びテントに戻って、ということを繰り返しながらの間に、海も亮太も戻って来ていた。ヒカルは颯土の横に立ち壮年をじっと見ている。颯土もさっきまではまったくなかった緊張を感じていた。

——この人は真剣だ。

颯土には壮年が真剣に写真を見、その背景にあるものを理解しようとしていることがわかった。穏やかな中に気迫を感じる。それが、撮り手の颯土に伝わって来る。

「なかなかなものですよ...」

ひと通り見終わった壮年が颯土とヒカルを見比べながら言った。

「外のパネル、値段がついてないようですが、あれはひとついくらか譲ってくれますか？」

「あれは看板のようなもので、売るつもりはないんですけど....、」

と、言う颯土を押し退けて、

「買っていただけるのならいくらでも！」

と、ヒカルが言った。壮年はにこやかに微笑むと、

「では、あの3つをひとつ1万円で買しましょう」

と、こともなげに言った。

「い、1万円っ?!」

4人が同時に叫んだ。

「ダメです、そんなの！」

と、ヒカル。

「俺はプロじゃないし！」

と、颯土。

「そんな高価な値段では譲れません！」

と、4人同時に。

焦る4人を目を丸くしながら見回し、壮年は、はっはっはっ！と笑った。

「じゃあ、私が買ったらあなたはプロだ。そうでしょ？」

「それは...」

「高い安い、プロ、アマの問題ではなく、私は群竹さんの写真が気に入ったので是非とも欲しいのです。ここにある写真が全てパネルになっていたらきっと全て買いますよ」

壮年は颯土を見つめながら言う。

「どうして...」

「一目惚れです。群竹さんの写真と、そして、あなたに」

壮年は颯土からヒカルに視線を移した。ヒカルは『私?』と目玉をくりくりさせながら自分を指差す。

「私に声をかけてくれた時のあなたの笑顔にまず惹かれました。そしてこちらで写真を見てまた惹かれました。ダブルパンチです」

そう言って、壮年は笑った。

壮年の名は水月（みづき）正太郎。この春定年退職をしたばかりで、来月言問橋のたもとに珈琲ショップを開店する予定があり、今そのための準備をしている。新しい物よりも使い古した物をあえて好み、時々フリーマーケットや蚤の市を覗き店内の装飾品などを探していた。墨田公園の青空市も、朝からゆっくりと歩いて見て回り、収穫もなく帰ろうと思っていたところにヒカルから声をかけられたのだ。

「おじさま、こんにちは！」

張りのある瑞々しい声に振り向き、そこに立っていた笑顔のヒカルに出会い、もう何年も忘れていた素朴な安らぎを感じた、と水月は言った。そして、颯土の写真を見た時に同じものを感じたと言う。

水月は颯土に、店内に飾りたいから出品している10枚のポストカードを全てパネルにして欲しいと頼んだ。それらを全て1万円で買うと言うのだ。

さすがに颯土もそれには応えられないと断った。自分の写真を10万も出して買うという水月の真意がわからなかったのだ。現にフリーマーケットで売れたポストカードはたったの10枚。それもお情けで買ってもらった10枚だ。多くの人が写真を手に取って見ては行ったが、持ち帰ってもらえなかったということは、まだまだそれだけの写真であるということは颯土自身もよくわかっている。若い自分に情けをかけてくれるのはありがたいとは思う。だが、やはり自分にはまだ、写真で金を取れるほどの器も実力もない。

「群竹さん、50円のポストカードも同じですよ。このポストカードを50円でも高いと思う人だって中にはいるかもしれません。あのパネルに1万出しても惜しくないと思う人間もいるということです。価値観は人それぞれ違いますからね」

と、水月は言う。

「でも…」

「では、値段のことはあとで話し合うとして、私の願いを聞き届けてください。パネルを10枚、今週中に店の方に届けて頂けますか？」

水月は地図の入った名刺を颯土に渡した。

「わかりました」

颯土は名刺を手にとって頷いた。

「それでは私はこれで。今日はとてもいい出会いができました」

水月はベレー帽を脱いで頭を下げた。

「颯土くん…」

水月が去ってから、ヒカルは呟いた。

「ソージ、すごい...」

「すげえ...」

海と亮太も放心状態のまま水月が去っていった方角を見つめている。

「お店に写真を飾ってくれるなんて嬉しいねっ！」

ヒカルは真っ直ぐ前を向いたままの颯土の顔をのぞきこんではしゃいだ。

「それはそうだけど...」

颯土はまだ釈然としない顔をしている。

「水月さんは嘘なんか言ってなかったよ！本当に心から颯土くんの写真を気に入ってくれたんだよ！」

「あ、ああ...、それはわかるけど...」

「ね～、颯土くん、素直に喜ぼう！ピュア企画は大成功だよ！」

190枚のポストカードが余ったが、颯土の写真に心から感銘をしてくれた水月ひとりと出会えたことがヒカルにはなりよりも嬉しかった。

「...、ああ、そうだな！」

颯土もやっと笑顔になった。

「フリマ出店も無駄じゃないな。これからもどんどんやろうぜ」

と、亮太。

「ああ！オレもソージを応援する！」

と、海は颯土の肩をポンと叩く。

「あ、ありがとう...」

仲間達の心が嬉しい。

そして――。

「水月さんのお店には私も一緒に連れてってね！」

自分に笑いかけるヒカルの笑顔が眩しい。この笑顔を見る為なら、きっと自分はこれからもどんなことだってやってしまうのだろう...。と、思いながら颯土は苦笑した。

◇

5日後、写真の用意が出来た颯土はヒカルを伴い、水月が開店する予定の珈琲ショップに向かった。水月の店は言問橋のたもと、言問通りに面した墨田公園のすぐ側で、颯土やヒカルの家からは通りを挟んだ向こう側だった。

外装はほとんど出来ていて茶色のドアに小さなプレートが下がっていた。

「Deja-vu...」

ヒカルはその文字を読んだ。

「はじめてなのに、はじめてじゃないと思う記憶の錯覚って意味だよな？」

「ああ...」

ドアの横にレンガの花壇が備えられ小さな紫色の花が満開に咲いている。木の格子の窓からは

中の様子が見えるようになっていた。

「こんにちは...」

颯土はドアを開けて店の中に入った。

「やあ、群竹さん、お待ちしていましたよ」

カウンターの中で珈琲豆のブレンドをしていた水月は手を休めてフロアに出てきた。

「水月さん、こんにちは！」

「こんにちは、お嬢さん」

「あ、私の名前は浅倉ヒカルです。ヒカルって呼んでください」

水月に自己紹介をしていなかったことを思い出しヒカルは言った。

「ヒカルさんですか。ぴったりの名前ですね」

と、水月は微笑んだ。

フロアは外から見るとより広く、カウンターのほかにテーブルが10組、全て壁を背にするようにフロアの周囲に置かれていた。フロアの真ん中には大型テーブルがひとつある。

颯土は店内を見回してどこか違和感を覚えていた。落ち着いた雰囲気のお店ではあるが普通の喫茶店とはどこかが違う...

「群竹さん、写真を拝見できますか？」

水月に言われて颯土は我に返り、写真を包みから取り出して真ん中の大型テーブルに並べた。

水月はそれを一枚一枚眺め、飾るべき壁の位置を決めるように周囲に照らし合わせる。モノクロの教室はフロアの角、ヒカルと猫は格子の窓の横、腕を組むカップルはフロアの奥、と、水月は次々と場所を決めながら写真を壁に飾った。

「さあ、出来ました。私の店が完成です」

全ての写真を飾り終えて水月は嬉しそうに微笑んだ。

「颯土くんの写真が...」

ヒカルは思わず呟いた。颯土の写真がフロア全部を飾り、そしてその写真たちはちゃんと、自分達が収まるべきの場所にいる。

颯土は店内を見回し声も出せずにいた。自分の写真ではないような気がする。

「おふたりに今出来たばかりのブレンドをご馳走しましょう。どうぞお好きな椅子に座ってください」

水月はカウンターの中に入った。

颯土が窓辺のテーブルに歩いていくのでヒカルもその後に続いた。

「このお店、テーブルも椅子も全部違うんだ...」

ヒカルは椅子をひきながら店内を見回して言った。水月の店のテーブルと椅子は、全て種類も色も微妙に違い不揃いだった。颯土は自分が最初に感じた違和感はこのためだったのだ、ということに気がついた。

しばらくすると、淹れたての珈琲の薫りが店内に充満し、水月が珈琲をふたりのいる窓辺のテーブルに運んできた。

「このテーブルや椅子たちは全部蚤の市で揃えたんですよ。1年以上かかりました」

水月はフロアを見回しながら言った。

「私はね、きちっと揃った物や環境の中で今までの人生を生きてきたんですよ。大きな企業に勤めてましたからね」

どうぞ、と水月は珈琲をヒカルと颯土に勧めた。

「企業戦士、ってよく言いますが、まさに私は戦士でした。会社のために自分の命を投げ出すぐらいの気持ちで働いてきて、親の死に目にも、そして妻の最期にも立ち会えなかったんです…」

「そんな…」

「人として大切なものが自分の中から失われていることに気がつくのが遅かったんですよ」

ベストのポケットからパイプを取り出し、それをハンカチで丁寧に拭きながら水月は話を続ける。

「この店は私の第二の人生の始発駅でね。ここに来てくれるお客さんには自分の好きな場所で自分の好きな椅子に座って、のんびりとした時間をくつろいでもらいたいと思ひましてね、こんな不揃いのものばかりをせっせと集めたんですよ」

「…自分で選ぶ椅子と場所にずっと愛着が持てそうですね」

ヒカルは笑った。

「ええ、そうです。初めて訪れるお客様にも初めてだとは思えないような温かさを感じてもらえれば、と思ってるんですけどね。群竹さんの写真を見せてもらった時、この店の最後の仕上げはこの写真たちだ、と思いました」

颯土は顔を上げて水月を見た。今、水月に言われてその気持ちがわかるような気がした。水月の生きてきた人生と自分の人生では、重さも長さも全然比べ物にならないが、水月がこの店に込めている想いと自分の想いはきっと同種のものなのかもしれない。

「この店は、何でもない日常を切り取った空間にしたいのです。そしてそんな日常は決して何かに縛られたり形を揃えたりはしていない。群竹さんの写真たち、いえ、群竹さんが撮る写真もそうですね？」

「はい」

「だから私はあなたの写真に惚れました。あなたは立派な写真家ですよ」

「水月さん…」

「そして、私と群竹さんとはもうひとつ共通点があります」

水月はヒカルを見た。

「え？」

ヒカルはきょとんとして水月を見返した。

「不揃いな群竹さんの写真に込められた唯一が、私にはわかる気がします」

颯土はぎょっとしたように、ヒカルと水月を見比べて下を向いた。

「何ですか？」

と、ヒカル。

「それはね、お嬢さん…」

と、言う水月に、

「あ〜っ！水月さん！」

颯土は手を前に出して、自分が予想する水月の言葉を遮ろうとした。

「光への憧れです」

水月はそう言って颯土に目配せをした。

「私はずっと会社の影として生きてきましたからね。ヒカルさんのような笑顔がとても眩しいのです。その眩しさに今とっても憧れてるんですよ」

水月の意味深な言葉を颯土はひやひやしなから聞いていた。だがヒカルは、

「大丈夫ですよ！水月さんの笑顔もとっても素敵で眩しいですから！」

と、素直に受け取ったようで、ホッと胸を撫で下ろす。

「群竹さん、これを受け取ってくださいますね？」

水月はベストの内ポケットから白い封筒を取り出して颯土の目の前に差し出した。

「この間言った通りのものが入ってます」

颯土は封筒をじっと見つめていた。そして、

「ありがとうございます...」

と、頭を下げた。水月はにっこりと微笑み、

「これからもいい写真をお願いしますよ。まだまだ飾るスペースはたくさん空いてますから」

右手を颯土に差し出す。颯土はその手を両手で取り、

「はい」

と、答えた。

「颯土くん...」

くぐもった声に颯土が顔を向けると、横でヒカルが涙を拭いていた。

「なっ？！ヒカル！泣くなっば！」

「だって、嬉しいんだもん！」

と、言ったあとにヒカルはビービー泣き出した。嬉しくて止まらない。止められない。

「おやおや、ヒカルさん、珈琲をもう一杯淹れますか」

水月は笑顔で言うと、再びカウンターの中に入った。

――ヒカル。ヒカル。ヒカル。

颯土は心の中で何度も呟く。

――光への憧れ。

ずっと、憧れていた。

それは、高校時代から。

出会った時から――。

「お前さ、ずいぶん泣き虫になったよな...？」

颯土はヒカルの輝く涙にやや戸惑いながら、柔らかなヒカルの髪をくしゃくしゃと撫で、もうひとつの手はガッツポーズを決めてヒカルの顔の前に差し出した。

「嬉しい涙はいくらだって流せるんだよお...！」

ヒカルも笑顔でポーズを返す。

水月はカウンターで珈琲を淹れながら、ふたりを微笑ましく見守っていた。

水月の珈琲ショップが開店して2ヵ月。ブレンド珈琲が美味しいとかなり評判がいい。フリーマーケットで余った颯土のポストカードは、今カウンターの上に並べられ一枚100円で売られている。店内に飾られている写真と同じなので気に入った人がぼちぼち買っていく。

颯土は今、光創社の仕事が忙しい。神戸にいた頃と同じように帰りは終電だったり、帰れなかったりすることが多い。

ヒカルは試験の真っ最中で毎夜遅くまで机に向かっている。ときどき隣の窓を覗いてみるが、明りはいつも消えたままだでもう1週間ほど颯土の顔を見ていなかった。

「颯土くんも大変だなあ...」

神戸にいた頃も毎夜こんなに遅くまで仕事して、学校にも行っていて、当然テストもあっただろうし、以前颯土自身が言っていたように、何が何だかわからなくなるのも当たり前こと。それをひとりで克服していた颯土の8ヵ月は、どれだけ目まぐるしい時間だっただろう、と、ヒカルは改めて思う。

東京に帰って来て7ヵ月が過ぎ、神戸にいた8ヵ月とほとんど同じ時間が過ぎた。颯土にとってこの7ヵ月はどんな時間だったのだろうか、と、ヒカルはふと思った。

自分の望む未来を言葉に出来たのは7ヶ月前。颯土が心の荷物を降ろしてくれたあの、粉雪の夜からもう7ヶ月も過ぎた。

「何て早い7ヶ月だったんだろう...」

季節がめまぐるしく変わり再び夏が来ている。もう響を待たないと決めた去年の夏から颯土に再会した冬までの間は、とても長い時間だったのに。

ヒカルはペンを置き、代わりに楽譜を手を取った。

今、『Shine』を弾くピアノの腕前が少しずつ上達するにつれて、響との距離が近くなっていくような気がする。こんなにも自分の気持ちに素直になれたのは颯土のおかげだ。

隣に住んでいながら、なかなか心を開こうとしなかった出会った頃の颯土。あの頃は顔を見ては喧嘩を吹っかけて、颯土から返ってくる反応を確かめながらなんとかして友達になりたいと思っていた。

颯土の存在の大きさを知ったのは颯土が神戸に行ってしまった時だ。隣の部屋に毎日当たり前のように灯っていた明りがつかない、という寂しさが無くした欠片だった。

そして他人の荷物なんて背負えないと言っていた颯土が、神戸から戻ってきた時は荷物を降ろしてくれるぐらいの大きな手のひらを携えていた。

「颯土くんが帰ってきてなかったら、私はどうなっちゃってたんだろう...」

あの粉雪の夜の颯土との時間がなかったら、きっとまだ本当のキモチに蓋をして、自分の中で鎖に縛られた状態だったかもしれない。浅倉、群竹くん、と呼び合っていたのが、あの日を境にして自然にヒカル、颯土くん、という呼び方に変わっている、ということにヒカルはたった今気がついた。

——私たちって、すごくいい感じになったね…。

カーテンを開けてみたがやっぱり颯土の部屋に明りはない。

明日は七夕。そして、颯土の誕生日だ。何かプレゼントでもしようかな、とヒカルは星空を見上げながら思う。

「今日も顔見られなかったなあ…。おやすみ…」

窓に向かってひとりごとを言い、ヒカルは部屋の明かりを消した。

◇

「いしわたりーっ！このスットコドッコイ！」

相変わらずの怒鳴り声が階段室まで響いてきた、翌日の夢飛行の稽古場だ。

ヒカルは思わず首をすくめた。待ち合わせの時間を30分も遅れている海の様子をそっと伺いにきたヒカルだったが、やはり鮫島のしごきの真っ最中だった。

「いいか！太陽なんだよ！太陽！」

鮫島は台本をテーブルにバンバンと打ちつけている。

「鮫島センセイもあれがなければいい人なのになあ…」

ヒカルは思わず呟いた。その呟きが鮫島の地獄耳に届いたようだ。

「やあ、ヒカルさん！そんなところで覗いてないで、どうぞどうぞ！」

鮫島はドアのガラス窓から中を覗いているヒカルに向かって手招きをした。すると稽古場の役者たちが全員ヒカルに注目をした。

「いや！あの！私は！邪魔になっちゃ悪いし！」

焦ったヒカルはドアの小窓まで手を上げて機械のように振る。その仕草が不恰好でおかしかったのか、役者たちはみんな笑い出した。スットコドッコイと怒鳴られていた海までも腹を抱えて笑っている。

「遠慮しないで、さあどうぞ」

鮫島がわざわざ立ち上がり、ドアまで迎えに来てはヒカルも入らないわけにはいかない。

「お邪魔します…」

首をすくめながら稽古場の中に足を踏み入れた。鮫島はヒカルに椅子を勧め再び自分のもといた場所に戻った。そして、

「さっきの、もう一回！」

顔がいきなり厳しくなり、海に向かってぶっきらぼうに言う。今まで笑っていた海も一瞬で顔をひきしめ、

「たとえ現実が土砂降りの雨の中でも、心には輝く太陽を持ちましょう！さあ、みんなの太陽をこの真っ白な紙に描くのです！」

と、両手を広げて台詞を言った。

「悲壮感漂いすぎっ！太陽なんだよ、お前は！」

鮫島がまた怒鳴る。

「心に太陽を持ちましょう、と言ってる奴が雨女でどうするよ！頭空っぽにしてよく考えてみろっ！スットコドッコイ！」

血管が切れそうなほどの怒鳴り声は稽古場の空気を重くする。海は歯をくいしばり他の役者たちは皆うつむいている。

「あ、あの...鮫島センセイ...」

ヒカルは小さく手を上げて言った。

「なんですか？ヒカルさん？」

鮫島はヒカルにはにこやかに答えた。その変わり用は少し滑稽だった。

「幼児教育の基本は...」

と、ヒカルが言いかけた時、

「そうだ！ヒカルさん！ちょっとこの台詞を言ってみてくれませんか？このおたんこなすに教えてやってください」

鮫島は台本をヒカルの前で開いてみせた。

「そんな！出来ませんよお～！」

ヒカルは真に受けて叫んだ。

「私は高校時代演劇部でしたけど、大根大根って先輩達にも言われ続けて、全然演技が下手くそで、それで...」

パニックになったヒカルは誰も聞いてもいないことをペラペラと喋る。海は思わず プツ と吹きだし、

「ヒカル、冗談に決まってるだろ？」

と、爆笑した。その爆笑が緊迫した稽古場の空気の流れを緩め、他の役者たちにも笑顔が戻った。

「え？そうなんですか？鮫島センセイ？」

「わかったな？いしわたり。これが、The sun in the rain だ」

鮫島はそう言って微かに笑った。

「...はい、先生」

「じゃ、もういっぺん！」

ヒカルにはふたりの会話の意味がさっぱりわからなかった。だが、海の台詞はさっきまでのとは違った。鮫島はやっと満足したようにうなづき稽古が終了したのだ。

「ヒドイよ、鮫島センセイ...」

稽古場の前のバーガーショップでヒカルはアイスコーヒーをチューチューと吸いながら慄然とした。いい笑いものにされたような気持ちだったのだ。

「あれは先生流の指導の仕方だったんだ」

海は煙草に火をつけながら言った。

「どういうこと？」

「あの芝居の中身、かなりシビアでさ。オレの役はそんなシビアな中で希望を子どもたちに与える教師なんだ」

「うん」

「けど、オレはシビアをどうしても引きずっちゃってさ、自分の役の意味をわかってなかったんだよな、きっと」

あの稽古場の緊迫した雰囲気を一瞬で笑顔の空気に変えたあの時のヒカルの存在こそがこの芝居の核であり太陽の意味だということを鮫島は言いたかったのだ、と海はヒカルに説明した。

「完全じゃないけど、なんとなくわかったよ、オレ。先生が訴えたいThe sun in the rainが」

海は窓から稽古場の方を見つめる。

「この芝居の教師のような人がそばにいてくれたら...、って思いながら生きてきたのかな、兄さんは...。どんなに苦しい状況に自分がいても明るい太陽があれば人は頑張れるし苦しみを乗り越えられる。それが近ければ近いほどにね...。兄さんはずっとそんな太陽にあこがれてたんじゃないかなって思うんだ」

ヒカルは頷いた。

「暗闇も、その人がいれば一瞬にして明るい光に包まれ土砂降りの雨の中でさえもその輝きは失わない太陽の教師...。それって演技じゃなくていのちから溢れるものなんだな。ヒカルはそれをいつも身から発散させてるんだ。それをオレはあの先生流の指導法でわかった」

「海ちゃん...」

「オレ、この役に命かける。太陽になる。兄さんの...太陽になりたいよ、オレ」

「なれるよ！海ちゃんなら絶対になれる」

初日まであと2ヶ月。そして、来年春にはニューヨークの芸術祭に参加する夢飛行だ。

「海ちゃんの夢、鮫島センセイの夢、飛行船みたいに膨らむよ、きっとね！」

「サンキュー！で、ヒカルの夢はどうなんだよ？いつも人のことばかりでさ、たまには自分の夢でも語れば？」

と、海は笑った。

「私の夢かぁ...。私は海ちゃんや颯土くんのような才能は何もないし、王子さまが迎えに来てくれるのが今の夢かなぁ」

マジメに答えるヒカルに、海は吹き出した。

「太陽の夢は王子さまかぁ。太陽に慕われる王子さまってのはどんなお方なんだろうな？」

「お月さまみたいだよ...。絶対に同じ時間を過ごせない...」

ヒカルはため息をつきながら笑った。

「でもね、微かな希望はあるの」

それは『Shine』。響の心が詰め込まれた曲。それを奏でられるようになった時が再会の時...

「へえ〜。ほんとにおとぎばなしみたいだなぁ」

「私が勝手に決めているだけだけどね」

と、ヒカルは苦笑する。

「いや、それ叶うと思うよ。ヒカルの才能って奇跡を起こすことなんじゃないかなあ。オレ、ずっとそう思ってた」

海は半ば真剣に言った。ヒカルなら、たとえば太陽の光も月の影も同座させることが出来てしまうのではないか。ヒカルのピュアで一途ないのちなら…。

「ありがとう、海ちゃん。けっこう私もそれ、信じてるんだ」

「さーて、行きますか！ソージの誕生日プレゼント、選ぶんだろ？」

海は灰皿に煙草を押し付けて立ち上がった。

そうだった！

今日、海と待ち合わせをしたそもその理由は、颯土の誕生日プレゼントを一緒に選んでもらおうと思ったからだった、ということをヒカルは思い出し、呑気に王子さまの話をしている場合ではないことによく気がついて立ち上がった。

◇

その夜、ヒカルは水月の店に寄った。

「こんばんは、水月さん！」

「やあ、ヒカルさん、いらっしやい」

いつもヒカルが来る時はカウンターの席には常連がいるが、今夜はフロアに一組のカップルがいるだけだった。

「今日はここに座っちゃおう～」

ヒカルは水月の目の前のカウンターに席を決めた。

「これは嬉しいですね。ヒカルさんが近いところに来てくれて」

水月はカップの用意をしながら微笑んだ。

「あっちの窓際の席、はじめて来た時に颯土くんが座ったから私も何となくずっと座ってたけど、ほら…」

と、ヒカルは写真を指差した。

「自分の写真の前の席って何か恥ずかしくて～。今度からここにすっ！この椅子は私の椅子だからね、水月さん！」

ヒカルは、今自分が座っている白木の丸椅子を叩いて言った。

「そういえば、群竹さんはあれからずっとあの席ですよ」

水月は窓際の席に視線を向けた。

「颯土くん、たまに来るんですか？ここ最近全然顔を見ないんですよ。家、隣なのに」

「そういえば最近は見えませんが、前は2日に一度はおいでくださってましたよ。あの席で珈琲飲んで帰られるだけですけどね」

「ここの珈琲、美味しいですもんね！」

ヒカルは無邪気に笑う。水月は窓際の写真をじっと見つめ、淹れた珈琲をヒカルの前に置いた

。

ヒカルはカウンターの上にあるポストカードを手にとった。

「カード、買っていつてくれる人いますか？」

「ええ。この2ヵ月で半分は売れましたよ」

「わ～、嬉しいなあ！水月さんのおかげで颯土くんの写真も少しずつ歩き出せて、ほんとありがとうございます！」

一番人気がある写真は『笑顔と猫』らしい。そして『モノクロの教室』、『ふたり』と売れている。

「しかし、群竹さんは困った人ですよ。売上金はいらなくて受け取ってくれないんですからね」

水月は苦笑する。

「今時、珍しい若者ですよ。ほんとうに欲がない」

「そうですね。颯土くんは昔からそう。時々イライラしちゃいます」

と、ヒカルは笑った。

「でも、だからこそこういう写真が撮れるんだと思ってるんです、私」

ヒカルはカウンターの上の影ぼうしのポストカードを手にとって見つめる。この写真を撮影した日は颯土と初めて一緒にぶらぶら撮りをしていろんな写真を撮った。『笑顔と猫』もそうだし、ここにはないが手が届いている飛行機雲の写真もそうだ。

颯土は寡黙にレンズを覗いているだけのように見えるが、心の中には清らかで純粋な風がいつも吹いている。だからこそここにあるような写真が出来上がるのだ。

「ヒカルさんのような理解者がいて群竹さんは幸せですね」

水月は笑って頷いた。

「そうかなあ…。私は颯土くんのこと、結構振り回しちゃってるような気がしてるんです。ピュア企画のことも彼は本当はあまり乗り気じゃなくて」

ヒカルはペロッと舌を出した。昔から何かと言うと颯土を振り回し巻き込んでいる自覚は大いに有りだ。

水月はそんなヒカルを愛しむようなまなざしで見つめた。

「彼、高校を卒業してからしばらく神戸にいつてて向こうで大学に行きながらカメラマンの見習いをやってたんです」

「ほう、それは大変だったでしょう…」

「大学を辞めて東京に戻ってきて、自分の望んでいることを望んでいる形でやってみることにしたって言うただけだけど、私はそれを邪魔してないかな、って時々心配になっちゃって…」

ヒカルはもう一度、手にある『影ぼうし』に視線を落とした。

「幸せなのは私なんですよ、水月さん。颯土くんには本当に感謝してるんです」

「そうですか。羨ましいおふたりの関係ですね」

「はい」

ヒカルは答えて笑った。

水月の目が再び窓辺のヒカルの写真に向いた。そして、

「...ヒカルさんのあんな笑顔、きっと群竹さんだから撮影できたのでしょうね」  
と、呟くように言った。

最後の客がポストカードを一枚手にして帰った午後10時40分。そろそろ看板をしまおうかと水月がカウンターから出ようとしたとき、からんからんとドアのベルが鳴り入って来たのは颯土だった。

「あ、もう終わりですか？」

颯土は誰もいないフロアを見渡した。

「いえ。お客様がおいでになる間は営業中ですよ。どうぞ」

水月はにこやかに颯土を招き入れた。颯土がいつもの定位置に座ろうとしたとき、

「先ほどヒカルさんもみえましてね、今日はこちらに座ってくださいました」

と、水月は白木の椅子を指差した。

「え？そうなんですか？」

颯土は白木の椅子をじっと見つめた。カウンターに肘をついて水月を見上げるようにして語りをするヒカルの姿が目につかなくて、思わず笑みがこぼれる。

「じゃ、俺も今日はそっちに...」

颯土はヒカルが座ったという白木の丸椅子を引いた。

「最近忙しそうですね。ヒカルさんも全然顔が見られないって寂しがってましたよ」

——まさか...。あいつが俺に会えないからって寂しがるわけがない。

颯土はうつむいて笑う。

「この時期はなんでか忙しいんです。毎晩終電です。昨夜は帰れなかったし...。見習はコキ使われるんです...」

「それは大変ですねえ。でも、顔が明るいので安心しましたよ」

「まあ、疲れてないですから」

コキ使われて寝る暇も無いほどではあるが心には余裕がある。神戸にいた頃とは雲泥の違いだ。それは、学校がないから、というだけではないことぐらい颯土にもわかっていた。

「そうそう、今日は7枚売れましたよ、ポストカード」

「あ、そうですか...」

颯土は気の無い返事を返した。

「そろそろ補充していただかないと」

「もういいですよ。写真を飾ってもらってるだけで十分です」

颯土は頭をかきながらやや困惑した。

「それはダメです。ヒカルさん、凄く喜んでいましたから。群竹さんの写真が広く人の手に渡って行くことをね」

水月は珈琲を颯土の前に置いた。

「ヒカルさんの笑顔、私はずっと見たいですからね」

――う…。

「ここで売れた分です。今日は持って帰ってもらいますよ」

水月は封筒を颯土の目の前にやや強引に差し出す。

「だからこれは…」

「ヒカルさんに花束でも贈ってあげてください。群竹さんのことを一生懸命、全身で応援しているヒカルさんに」

「ヒカルに花束なんて…」

――花束なんか贈ったらきっと、目を丸くするだろうな、あいつ…。隣んちの颯土くんが何で私に花束?! ってさ…。

「それにね、群竹さんの写真が好きだっていうお客様がけっこういるんですよ。いつもあの角のモノクロの写真がある椅子に座る年配のサラリーマンがいて、その方はあの場所で二杯の珈琲を飲んでいきます」

仕事をやりながら定時制の高校に通っていたその昔は、仕事にも勉学にも情熱を注いで生きていた。年を重ねるごとに夢や希望を持つ心が薄れ、時代と時間に流されてしまっている自分があのモノクロの教室の写真を見ながら二杯の珈琲を飲む時間は当時の心が蘇える。色のない教室が古き青春時代の自分を呼び覚まし、それが明日への糧になるのだと、そのサラリーマンは水月に話したそうだ。

「そしてあの影ぼうしの写真のところに座るOLの方もいるんですよ。その方はポストカードを買っていかれました。恋人が遠い街にいるんだそうです。いつか恋人とあんな影を並べて毎日歩きたいって言ってましたよ」

颯土は珈琲を飲みながら黙って水月の話を聞いていた。

「それから…」

水月は窓辺のテーブルを見つめ、

「あの笑顔の写真の椅子に座る若者もいらっしゃいます」

颯土は『笑顔と猫』の写真を見つめた。

「ただ黙って珈琲を飲んでいかれるだけですけどね。その方はいつもあの場所で、どこかせつない目をしてヒカルさんの顔をじっと見つめていますね…」

水月は颯土を見た。

「それって…」

颯土は『笑顔と猫』の写真から視線を水月に移した。

「あなたですよ、群竹さん」

水月に言われて颯土はカーッと赤くなった。

「お、俺は別に…」

—そんなにもいつも見つめてなんか...

颯土は慌てたように珈琲を飲み干した。

「群竹さんとヒカルさんって、恋人同士ではないのですか？」

颯土は目を丸くして水月を見つめ、

「ちがいますよ...」

と、言ったまま凍結した。自分とヒカルが恋人同士だなんて、いったいどうしてそんなこと...

。

「あいつにはちゃんと恋人がいますから...」

「そうなの...ですか...？」

水月は、心底残念そうに、肩を落として呟いた。

「とてもお似合いで呼吸のあったおふたりだと思っていたのですが...」

お似合い、という水月の言葉に颯土の胸はつかまれたような痛みが走った。

「すみませんね。私、こう見えてもなかなかの詮索好きなものですから...」

と、水月は苦笑する。

「いえ...」

言ったまま颯土は黙り込んだ。水月は颯土のカップを下げると、新しいカップにもう一杯の珈琲を淹れてカウンターに置いた。

「これは、サービスです」

水月は笑い、自分の分の珈琲もマグカップに淹れ厨房の食器棚の横に置いてあったパイプを手を取った。

その様子をじっと見つめていた颯土は、

「光への憧れです...」

と、呟いた。

「前に水月さんが言った通りです」

「あれは自分のことを言ったまでですよ。あの時、群竹さんかあんなに慌てるものだから...」

と、水月は笑った。

「俺があいつと出会ってからあいつはずっと、ひとりの人しか想ってません。ビーム（光線）のような勢いであいつはその人を想ってます。ほんと、全身で」

颯土は笑った。

「俺はそれをずっと見てきて、その余光を受けてそして...」

—写真を撮るようになった...。

ヒカルの、響を想う輝きがきっかけだった、あの文化祭の写真。あの時からずっとその輝きに憧れていた。ずいぶん遠回りして気がつくのが遅かったけれど...。

「群竹さんも私と同じ、影でしたか...」

「影...」

水月はうなづいた。

「俺はずっと闇だったんです。けどあいつの光が闇の中の俺を引っ張り出した。もう二度と俺に闇は来ないと思ってます。だから...」

——影でいい。光に沿う影でいい。

颯土は窓辺の写真を振り返り、そしてゆっくりとまた水月に顔を向けた。

「俺はあいつが好きです...」

言ってしまうから颯土は少し戸惑った。どうしてこんなこと水月に話すのだろう。誰にも言わないつもりだったのに。ずっと、しまっておこうと思っていた自分の想いなのに...、と、頭で考えながらも、口が勝手に動く自分を颯土は止められない。

詮索好きのこの優しい壮年には、黙っていても心を見透かされてしまう。だがそれは決して嫌悪を感じるものではない。どこかで自分と水月が繋がっているような安心感のある温かさだ。

水月の前では不思議と素直になれる。この、日常を切り取った不揃いな空間のせいかもしれない。

「...あいつが側にいるだけで俺は自分の中に眠っている勇気や言葉や愛...みたいなのが溢れてくるんです」

「わかりますよ、私もそうですからね...」

水月がつけた煙草の葉が香ばしい薫りを放って淹れたての珈琲の薫りと混ざり合う。

「...あいつといる時間、あいつがここにいる日常、平凡で輝いてる瞬間を俺は写真にしている。ただそれだけなんです。だから...、」

颯土はカウンターの上にあるポストカードを手を取った。

「だから、そんな自分勝手な写真を水月さんやここに来るお客さんに褒めてもらうのが、俺は本当は...」

うつむく颯土の肩に水月はそっと手を置いた。

「だからこそ、私やお客様の心を捕らえるあなたの写真なんですよ」

颯土は顔を上げて水月を見た。

「群竹さんの写真の中には愛と言葉が溢れてます。それはフリーマーケットで初めて見た時から感じましたよ。たったひとりの人への愛が込められた写真なのかもしれませんが、それは私やお客様の心にも余波として届く大きな深いものなのです」

「そんなこと...」

「群竹さん、前言撤回します。あなたは光です」

水月は優しく、けれど言葉に力を込めて言った。

「俺が光...？」

「ヒカルさんが太陽の光なら群竹さんは星の光でしょうか...。星は闇の中に存在しその輝きは遠

くからは微かなものかもしれませんが、その小さな輝きは闇をひきたたせ道しるべになるのです。旅人は星の瞬きをたよりに闇の中を歩くのですよ」

「...」

「あなたの想いと言葉が込められた写真たちが、どこかで迷っている誰かの道しるべになっている...、これは確かなことですから」

「いや、」

と、颯土は呟いて、再び窓辺の写真を振り返った。

「もしも水月さんが言ってくれる通りだとしても、俺にその光をくれるのはやっぱりあいつだから...」

颯土はヒカルの笑顔を見つめたまま呟き、

「あいつのこと、守ってやりたいって思ってます。`影、ながら...ですけど」

と、笑った。

「...、まったく、群竹さんは...」

水月はため息をついて笑った。

「俺もずっとあいつの笑顔を見ていたいから」

と、颯土も笑う。

「今夜は七夕でしたね。お天気もよくて、天の川のおふたりは出会えたでしょう」

と、水月。

「七夕...？あ、俺の誕生日だ...。忘れてた」

と、颯土は呟いた。

久しぶりに日付が変わる前に家に帰れた。家の明りはもう既に消えていたが、ヒカルの部屋の明かりはまだあった。

颯土は門からヒカルの部屋の窓を見上げ、そのまま星空に目を移して天の川を探す。

「七夕かあ...」

自分の、しかも二十歳（はたち）の誕生日を忘れているなんて、成人になったとたんに老化したのだろうか、と颯土は苦笑いをしながら自分の部屋に帰った。

明りをつけた途端、窓でビービー弾の音が弾けた。

「よお、久しぶりだなあ」

窓を開けながら言うと、

「遅いっ！日が変わっちゃうところだったよ！」

ヒカルは少しむくれながら言い、

「投げるから受け取ってね！」

の言葉と同時に飛んで来たものを、颯土はキャッチした。青い包みに銀色のリボンがついた小さな箱だった。

「これ...」

呆然と包みを見て立っている颯土に、

「ハタチの誕生日、おめでとう！」

その言葉のすぐあとに、ヒカルの部屋の壁時計が午前0時の音楽を鳴らした。

「うわお！ギリギリセーフ！よかった～。言えて...」

ヒカルは胸をなでおろした。颯土は包みを破かないようにそっと開けた。

星のカタチをしたシルバーのロケットキーホルダー。

裏蓋に文字が彫ってある。

Dear SOUJI

Happy Birthday 20th

「アリガトウ...」

From HIKARU

1995 7 7

「アリガトウ...？」

颯土は首を傾げた。

「そう。アリガトウなの！」

と、ヒカル。

「どういう意味かわからないけど...、サンキュ！」

颯土はキーホルダーを持つ手を上にかかげた。ヒカルからプレゼントをもらうのはこれで二度目だ。高校2年の夏、沖縄に行く前夜にやはり窓から飛んで来た贈り物は派手なトランクスだったな...、と颯土は微笑む。

「何、ニヤついてんのよ？」

「いや、ちょっと思い出したことがあってさ」

「私さ、颯土くんのおかげで去年の冬からいろんなこと乗り越えてこられた。颯土くんがいてくれなかったら今の私はなかったかもしれない」

ヒカルは真っ直ぐ颯土を見つめた。そのまなざしと言葉を受けて、颯土は、

「な、なんだよ急に...」

と、うろたえる。

「会えなかった1週間、すごく寂しかったよ。忙しい毎日だけど体壊さないようにしてね」

颯土は言葉をなくし、ただ呆然と立ち尽くすだけ。

「颯土くんと出会えて、颯土くんと友達になれてすごく嬉しいの、私」

向こうの窓でヒカルが微笑む。

「...ヒカルらしくないこと言うなよ」

颯土は思わずヒカルから目をそらして星空を見上げる。

「ずっとね、言いたかったんだ、私。高校の時からずっと。私達、親友になれるような気がし

てた...」

親友――。

と、颯土は心の中で呟く。

「だから、ありがとう...」

ヒカルは微笑んだ。

「そっか...」

星空を見つめたままの颯土。

――やべっ、泣きそうだ、俺。

心の中で焦りながら颯土は必死にこみ上げるかたまりを飲み込んだ。

「それじゃ、おやすみ！今日も会えないかと思ったけど起きててよかった！」

「あ、ああ、おやすみ」

――このためだけに、眠い目こすって起きてたのか....。

「ありがとう、ヒカル」

「...うん。素敵なハタチになるといいね」

素敵なハタチ――。

――大丈夫さ、ヒカルがいれば。ヒカルが笑ってれば。昼も夜も、夏も冬も、きっといつだって `素敵、だぜ...。

・  
・  
・

――...って、あの時心から思ったさ。

秋になってヒカルの誕生日に花束贈ったら、やっぱりお前、

『颯土くんが花束ー?!』

って仰天したよな。俺はちょっとだけショックだったさ。花束買うの、結構勇気がいったんだぜ。花屋の店員に「彼女へのプレゼントですか？だったら薔薇にしましょう！」なんて言われてさ...。なんて言っていていいかわかんなくて...

でもあの時贈った薔薇たちは、キレイに乾かされて今もヒカルの部屋の窓辺にあるよな....。

海の公演を亮と三人で観に行った時は、お前感動して人目もはばからずにビービー泣いてたな。俺も亮も困ったよ…。おまけに楽屋では鮫島さんに海を褒めろってくっつかかってさ、鮫島さんもおろおろしてたっけ…。

冬になって幼稚園で実習やった時は、  
『はじめてヒカル先生って言われた！』  
ってはいしゃいで俺ンちにやってきた。おふくろもお前の手を取って「よかったわね〜！」なんて、まだ先生になったわけでもないのに一緒にはしゃいでさ。大騒ぎだった…。

試験の前日は、俺、遅くまでお前のピアノにつきあわされた…。  
必死だったよな、ピアノ。何度も何度も、「ねえねえ、大丈夫？こんなんでちゃんと曲がわかる？」ってさ…。

『受かったよ！』  
って、顔中笑顔にしてやってきた時、俺は思わずシャッターを押してた。お前のその瞬間をずっと覚えておきたいって思ってさ…。  
本当に飛び跳ねてたな、お前――。  
いつも俺の傍で笑って…、  
そして、いつも風間先輩を想っているヒカル――。  
高校時代と変わらない。  
俺たちの間に流れる空気は何も変わってない。

例の曲、ずいぶんと聴けるようになったよな。  
もう消化不良を起こしそうだなんて言わないさ。  
ただ少しだけ、胸が…痛むくらいかな…。

春――。  
今日から幼稚園の先生だな…。  
もう学生じゃないんだな、お前も――。

「おい、ヒカル！初出勤の写真撮ってやるから早く出てこいよ！」  
ヒカルの家の方の門の前にたたずんでいた颯土は、ひとつ深い深呼吸をしてから玄関をあけて叫んだ。

「時間がないよ〜！」  
と返してくるヒカルは、今、支度をしながら家の中をバタバタと走りまわっているようだ。  
「すぐ終わるから！そこの公園の桜の下！外で待ってるぜ」  
「わかった！今行く！お母さん、行ってきまーす！」

薄紫色のスーツを着たヒカルが玄関を飛び出してきた。朝の柔らかな光と薄紫色とヒカルから発散される輝きが見事に融合し、颯土は一瞬言葉を無くす。

「颯土くん、急いで～！時間がないの～！遅刻しちゃうよお～」

呆けて立ち尽くす颯土にヒカルは喚いた。

「お、おう！」

道路の向こうの墨田公園まで走り、桜の木の下にヒカルは立つ。桜のピンクと薄紫が鮮やかに映える。

写真を撮る時の決まり文句、『笑って笑って』という言葉はヒカルには無用だった。桜の花の隙間からこぼれる光を受け止めるヒカルは最初から笑っている。

この笑顔。

ずっと守りたい。

ヒカルの想い。

叶えたい――。

――それが、俺の一番望んでいること。

俺が望んでいるカタチ――。

颯土がシャッターをきった時、桜の花びらが一枚ひらりと舞って、ヒカルの薄紫色の肩に落ちた。

ヒカルが就職した幼稚園は、弟の哲平が通っていた『すずらん幼稚園』。

昔、颯土と亮太が通った幼稚園でもあり、高校2年の秋には人形劇サークルの有志たちと人形劇公演をした。その公演時、先生や園児達と一緒に撮影した記念写真が職員室には未だに飾られていた。

初めて職員室に入った日、その写真を見つけたヒカルは一瞬の間立ちつくした。せつなさが込み上げてもう一步のところで涙がこぼれそうになった。

写真には、劇をやったサークルの仲間のほかに『関係者』として一緒にいた響も写っていたのだ。

響は既にアメリカに往くことを心に決め、それを自分にはひとことも言ってくれずに、そして響の隣には雪乃が寄り添っていたあの頃…。ここでの公演時に響と一緒にいる空間を懐かしく思い、せつなくて胸が潰れそうだった高校2年の秋――。

まさか自分の職場で響の写真に出会うとはさすがに思っていなかったヒカルだ。

すずらん幼稚園は、年少クラス、年中クラス、年長クラスが各一クラスずつしかなく、園児総数も60人足らず。こじんまりとしたアットホームな幼稚園だ。

この春新しく採用になった先生はヒカルがただひとり。他に4人いる先生たちは皆、ベテラン先生ばかりである。

ヒカルが受け持ったクラスは年少たんぽぽ組の20人。3才と4才の子どもたちのクラスだ。ママと離れることが寂しくて、通園バスに乗る前に大泣きする園児に優しく手を差し伸べにっこり笑うと、泣いていた園児もヒカルの手を取ってバスに乗る。ヒカルせんせいが通園バスでお迎えに来る日は、出勤前のスーツ姿で我が子と`ヒカルせんせい、を見送るお父さんまでいる。『笑顔がとびきり可愛くて、優しく明るいヒカルせんせい』は、お父さんたちの間でもたちまち人気ナンバーワンになった。

毎日子どもたちとにぎやかに楽しく歌を歌い、お絵かきをし、かけっこをする日常が少しずつヒカルの中で確かな現実になった5月のある夜、

それは突然に、  
本当に突然に――。

「ヒカルーッ！」

窓にビービー弾も当たらず、颯土の怒鳴る声だけが夜の中にこだました。

「ど、どうしたの？」

園児の父母と毎日交換しているおたより帳を書いていたヒカルは驚いて窓を開けた。

「テ、テレビ！」

颯土は風呂上りの濡れた髪のまま、窓から身を大きく乗り出して叫んだ。

「テレビ？なに？」

「...風間先輩が、出てる！」

一瞬、ヒカルは耳を疑った。

「え...？」

——風間先輩...って、ヒビク先輩のことだよな...？

「え？じゃなくて、早くテレビをつけろよっ！」

イライラしたような颯土の言葉にヒカルはようやく頭の回線が繋がりに、転がるように階下に下りていくと、居間のテレビは父親が占領していた。

ヒカルは弾かれるように家を飛び出し、そのまま颯土の家に駆け込んだ。

「颯土くん！」

二階の颯土の部屋に飛び込むと、颯土がドアまで迎えに来てヒカルの手を引っ張りテレビの前に座らせた。颯土の頭にはまだバスタオルが乗っている。

夜、10時のニュース。

海外の話題を報道するコーナー。

外国人の記者たちに囲まれ、それを振り切るようにして歩く響がいた。

そして、何度も繰り返し流されるその問題の映像は——。

「ヒビク先輩...」

ヒカルはまだ半信半疑でテレビを見つめていた。

写真ではない、動いている響の姿。

胸が痛くなるくらいに懐かしい姿——。

変わってない。

髪型も歩き方も。

3年前と変わってない。

職員室に飾られている写真の頃と変わっていない。

けれど、その表情は.....。

ニュースキャスターが読み上げる言葉ひとつひとつが機械的に聞こえる。ヒカルは思わず首を振る。

「うそだよ...！ひどいよ...っ！」

見開かれたヒカルの中から涙がはらはらとこぼれ落ちた。

――こんな形で、ヒビク先輩の消息を知るなんて...！

「ヒカル...」

颯土はヒカルの両肩をぐっと掴んだ。報道の内容を知ってからヒカルに知らせれば良かったと、自分の性急だった行動を後悔した。

「どうしたらいい...？私、どうしたら...！」

ヒカルはそう呟いて颯土にしがみついた。

――また、この泣き顔。ヒカルのこんな顔はもう見たくなかったのに――。

こんなに唐突に待ち続けた人の消息を知ったヒカル。

それもこんな報道のされ方で...

このニュースできっと世界中の人間が風間響を知っただろう...

自分にしがみつき微かに震えるヒカルを抱きながら、颯土の胸は果てしなく痛んだ。

薄暗い白熱灯の光が注ぐフロアに物悲しいピアノのメロディーが流れる。

一曲、二曲、三曲と、メロディーは次々とノンストップで変わっていく。

フロアに集った人々は、しばし会話と食事の手を休め、ピアノの音色に耳を澄ませる。ため息が溢れそうな柔らかな時間。

フロアの片隅に置かれたピアノの前で、何かに取りつかれたように一心不乱に、次々と別のメロディーを弾（はじ）き出す金色の髪美しい青年は、まだ音楽スクールの学生。毎週水曜日の夜、このライブハウスでピアノを弾いている。人々は、彼のことを『水曜日の雨人—Rain Man on Wednesday』と呼んでいた。

30分のライブが終わり、フロアには明るい照明が灯り人々もそれぞれのアクションに戻る。『水曜日の雨人』は、次のステージまでバックヤードに下がるのだった。

1996年4月—。

ここまで来るのに3年かかった。

水曜日の雨人—風間響は、半年前によくボストン音楽アカデミーのマスターコースが修了しセレクトティブに進級した。当初の予定より半年遅れだった。

水曜日にこのライブハウスでピアノを弾きはじめたのは半年前。マスターが修了してすぐにオーディションを受けた。曜日ごとに違ったアーティストのライブを行うこのライブハウスは、ボストンで音楽を志す者が自分を開花させるための登竜門的な店であり、ボストン音楽アカデミーの多くの学生が、まずこのライブハウスで使ってもらうことを目標にする。

契約は2ヵ月。客を呼べないアーティストはすぐさま切られる、という厳しい競争の中、響はとりあえず二回の契約更新に成功していた。

週に一度のライブではあるが、ピアノを弾いてわずかでも報酬が得られるということに、ピアニストとしての第一歩を踏み出せた気はしている。ここ（アメリカ）に来て、今やっとピアノを弾くことがつらくなかった。

バックヤードの休憩室ではいつも、頭の中のメロディーを楽譜に書いていた。このやり方は昔から変わっていない。イメージからはじまり頭で音符を繋ぎテーブルの上で書く。半年の間に書いた曲もずいぶんとたまった。

ライブで弾く曲は全てオリジナル。

〴〵しとすと雨が降りてくる風景を連想させるようなせつない曲ばかりを作曲し、演奏するピアニスト、が、『水曜日の雨人』と呼ばれる所以なのだ。

—先輩って、もしかして天才なんじゃないですか？指でテーブルを叩くだけで音符を書いた！

響は音符を書く手を止め、懐かしい言葉を思い出していた。父親を恨み、人前でピアノを弾くことに抵抗を持っていたあの頃。

5年近く前の、あの夏の湖――。

楽譜の音符を目で追いながら響は思う。

あの笑顔振り払い、断ち切らなければ己は磨けないと思っていたのは自分を過信しすぎていたからだ。ひとりで己を磨けるほど、人はそんなに強くはない。あの笑顔があったからこそ、今あきらめずに頑張れる自分がここにいる…。

でも、

――俺、ヒカルのところに戻るから！

そう言ってヒカルを抱きしめたのは、もう3年も前のこと。ヒカルと一緒に過ごした月日を離れて暮らす年月が追い越した。

あの約束を、3年の間、一度も便りをしなかった自分との約束を、ヒカルがまだ覚えているとは思えない。

――…覚えてない…よな…。

響は目を閉じる。

あの時、5年と言ったのは確かなものがあったわけじゃなかった。ピアニストとして歩き出すまでには、ただ漠然と5年の月日が必要だと思っただけだ。逆に、5年の月日があればピアニストとしての自分を確立できると自惚れていただけだ。そして5年後に日本に戻ったとき、5年前のままのヒカルを抱きしめようと自分の頭で勝手に決めていた。

だが、今、3年の月日が実際に流れ、それは頭の中で流れた時間ではない。こんなにも3年という時間が長いものだとすることを、あの頃の自分は知らなかった。

仲間たちがどんどん進級していく中でひとり取り残され、押し寄せる挫折感と闘いながらも、ただただ、`ピアニスト、と自他共に認められるようになるために、文字通り突っ走ってきたマスター時代。それは、マラソンランナーがゴールまでの道のりを果てしなく感じるのと同じような、長く苦しい時間だった。セレクトィブに進んだ今、やっと本来の自分らしさが蘇ったように感じる。3年かかってやっと…。

「キョウ、そろそろ次のステージを頼むよ！」

休憩室の扉が開き、店のマネージャーが呼びに来た。

「水曜日はキョウのおかげで、日に日に客数が伸びてくよ！」

マネージャーはキョウの肩をたたく。

「次のステージも満席だ！水曜日の雨人は、半年で随分評判がついたなあ」

水曜日の雨人、と呼ばれることに対して響は少しの満足感がある。それは、自分のピアノを聴く客たちが誰からともなく呼び出した名誉称号のようなもの。

わずかでも認められ、ピアノを弾き続けていく自信はついた。だが、まだこんなものじゃない。まだ先は長い。もっともっと、実力をつけたい――。

フロアに入るとサムとニコルがピアノのすぐ側のテーブルについていた。

「やあ、キョウ！」

サムが握手を求めて立ち上がった。

「久しぶりだな、ふたりとも元気だったか？」

響はサムの手を握った。サムとニコルは予定通りに音楽スクールのカリキュラムを修了し、この春卒業した。ふたりは同じ楽団に入り、サムはピアノ、ニコルはコーラスをしている。

「水曜日の雨人の評判を聞いてね、やってきたんだ」

ニコルはサムの隣でうなづいた。

「俺は、キョウは絶対にやる男だって思ってたさ！」

「まだまださ…。カリキュラムもあと半年残ってるしな」

「落とした時点で辞めてく奴ばっかなのに、キョウはさすがだよ！」

サムがポン、と響の肩を叩くと、

「ストレートに卒業した奴に褒められてもなあ…」

響は苦笑する。

「今日はあの曲、弾いてくれる？」

ニコルがサムとキョウの話の間に入るようにして言った。

「…あの曲？」

響は眉間にシワを寄せてニコルを見る。

「いつか、キョウのアパートに行った時にあなたが弾いていた曲…」

初めてサムと共に響のアパートを訪ねた時、響が弾いていた曲。あの時の柔らかくせつない旋律と美しいビジュアルをニコルは忘れられない。人に聴かせる曲じゃない、と響は言ったが、たった一度しか聴いたことのないあの曲は、ニコルの心から離れなかったのだ。

「たしか、『Shine』…」

『Shine』はヒカルに贈った曲。あの頃の想いをあの一曲に託し、半年もかけてメロディーを繋いだ曲…。

「悪いな、ニコル。あの曲だけは弾けないんだ…」

響は目を伏せた。

「そう…。想いのこめられた曲なのね…」

「…」

ニコルの言葉に響は答えず、

「そろそろはじまるから、ふたりとも、ゆっくりしていってくれな」

と、ピアノに向かった。

二人のせつないピアノを奏でながら響は思う。

『Shine』――。

もうしばらく弾いていない。そのメロディーを奏でるとき、思い出を繋いで譜面を書いた時間が蘇ってくる。

出会いから別れまでの風景。そして、未来への希望――。

言葉に出来ない思い出を  
心にとじ込め僕は行こう  
君と出会えた時を明日へとつなぐために  
キラキラヒカル ぼくらの未来のために――

――痛い。

今はこのメロディーが痛い。

眩しい笑顔が己の全身を覆い、あの頃のイメージの中から弱い自分が顔を出す。

『想いのこめられた曲なのね...』

可笑しいぐらいに想いを込めすぎた曲だ。

だから弾けない。人前では決して弾けない。『Shine』は自分とヒカルを繋ぐ、ただひとつの約束のはずだった。

二人の奏でるメロディーは甘くせつなく、ライブハウスのフロアに響き渡り人々の心にせつない雨を降らせるのだった。

ライブハウスからアパートに帰ると見知らぬ人影がレンガ塀の陰から現れた。響は立ち止まり、怪訝な目をその影に向けた。

「ミスターカザマ？」

男は響の前まで歩いてきていきなり言った。響は答えずにじっと男を見つめた。

「あなたがジャック・ベリーのご子息である、という情報を得ましてね」

男は首に下げていたバッチを響に見せた。

B T M (ボストントップマガジン) 記者 ジェームス・T

—とうとう来たか…。

響は深いため息を落とす。もう随分前から学内では噂されていたことだ。ピアノ科のカザマ・キョウは世界のジャック・ベリーの隠し子だ、という噂が広く囁かれながらも、それが世間まで及ばないのは学長のエバが力を尽くしてくれていたからに違いない。ジャックは、隠す必要はないとも公表してしまってもいいとも言う。

だが響がそれを拒んでいた。今事実を公表すれば、どこに行っても何をしても、『ジャック・ベリーの息子』と言われることは必至だ。あまりにも偉大すぎる父親の光の下で自分の夢をつかみたくない。ジャックの名声を借りず、良くも悪くも自分のままのピアノを弾きたかった。今やっと、少しずつ階段を一段一段上るように、3年かかってここまできたのだから。

「ノー」

響はひとこと言うと、ジェームスの横を通り去ろうとした。

「待ってくださいよ、ミスター。我々も確かなところからの情報で動いている。取材させてもらえませんかね？」

ジェームスは響の歩く前に立ちはだかった。

「あなたが取材に応じてくだされば、我々も好意的な記事を書かせてもらえるんですがね」

ジェームスは不敵な笑みを見せて言う。

「ジャックは今確か、芸術祭の運営準備にご尽力だと思いますが？」

響の目がジェームスを鋭く刺した。来月ニューヨークで行われる芸術祭は、ジャックと数人のアーティストが運営執行をするアメリカでも大きなフェスティバルである。ジャックは営利ではなく文化交流を目的としたこの仕事を大事にしている。今ジャックのイメージダウンに繋がるようなスキャンダルが起これば、芸術祭のブランドにも傷がつく。ジェームスは脅しているのだ。

「どうです？協力していただけませんかね？」

「ノー…」

響は再びひとことだけを言って自分の前に立つジェームスを押しのけ自室に向かう。

「あなたが『水曜日の雨人』と呼ばれ評判なのは知ってます。我々は今後も張り付きますよ！」

ジェームスは響の背中に向かって捨て台詞を吐いた。

いつまでも隠し通せはしないだろう。だが今はまだそっとしておいて欲しい。まだもう少し、ピアニストとして自分の足が地につくまでは。

響は心の中で呟きながらアパートのドアを開けた。部屋の明かりをつけ、いつもそうするようにピアノの前に立つ。目線の下でヒカルが笑っている。

「ヒカルー」

響は写真を手に取り呟いた。この笑顔に何度救われただろう。『Shine』を弾かなくても、想心に鍵をかけても、この写真を伏せることだけはできなかったこれまでの3年間だった。

たったひとりで暮らすこの部屋で、焦りと挫折にまみれた夜を幾度となく過ごすとき、この笑顔は最高のビタミン剤になってくれた。

「ひとりで磨けるほど、人はそんなに強くない――」

響はまた呟く。

窓の外を見るとジェームスがまだそこにいて明りの灯った部屋をじっと見つめている。響は深いため息をひとつ吐き、視線をもどす。

「3年だよな...」

ヒカルに便りが出せなかったのは怖かったからだ。あのマスター時代にもしもヒカルと繋がってしまったら、二度と夢は追えないと思った。何もかも投げ出して日本に帰ってしまいたいと、あの頃は何度も思った。

そんな弱い自分が悔しいから、たとえ心は海の向こうにいる人にあっても、気持ちはここに無理やり置き据えて、ひとりきりで前しか見つめずにきた間に3年という長い時間が過ぎていた。

ポロン、と、鍵盤を撫でてから指がたどったメロディーは『Shine』。

その甘くせつない旋律が3年前の想いと記憶を蘇らせる。希望と想いを曲の中に全て詰め込みはしても、それでも言えなかったふたつの言葉。あの粉雪の卒業式に口に出して言えなかった言葉は――。

――だから今更もう、俺の知らないヒカルの3年間には戻れやしない。

あの約束は、このまま風のように空気の中にまぎれて消えてなくなって.....。

まだまだ続く本当のピアニストになるための道のり。

響はその長い道をこのままひとりで歩き続けることに虚しさを感じながらも、心の蓋には重い錘を乗せるのだった。

午後から雨になった。青々と茂ったボストン音楽アカデミー中庭の新緑が、瑞々しく輝く。今夜は『水曜日の雨人』。文字通りの雨――。

傘を開き構内を出て大通りへ。

街路樹が立ち並ぶ歩道を響はゆっくりと歩く。ライブハウスまでは少し距離があるが響はいつも歩いて行く。緑や街並みや空を見ながらの道すがらで曲が頭の中で繋がることが多い。今日はこの雨の中から、また新しい曲が生まれる予感もあった。

後ろからBTMの記者がついてくることはとっくに気がついていて、あの日からずっと彼は自分が言った通り響に張り付いていた。いつ出るかわからないスクープを狙っているのだろう。ジャックをネタにして書けば売れる。ジャック・ベリーはそれほどのアーティストなわけだ。なんと言ってもアメリカを代表する国際的ピアニストなのだから。

響はため息をついた。

偉大な父親。

世界中の人に愛されているピアニスト――。

ジャズを知らなくてもジャック・ベリーの名前は誰でも知っている。そんなジャックを尊敬し自分はそれを越えたい思いでここに来た。

だがジャックがいる同じアメリカで暮らしてみても、簡単に「越える」と言っていた自分を恥じた。越えるどころか、並ぶことさえもできない。あまりにも偉大すぎる。

富も名声も全てのものを手の中に収め、なおかつ音楽の才能もそして人格もジャック以上の人物はいないのではないかとさえ思う。いや、自分の知る中ではないだろう。そんな父を自分が越えられるはずがない。

それは響にとってひとつの挫折だった。ジャックの息子であることが今、重い。

これからの人生、もしもピアニストとして成功できたとしても、『ジャック・ベリーの息子』という肩書きは一生ついてまわるのだ。越えられない壁を目の前にしながらその肩書きはきっと自分を縛るだろう。

響は背後のジェームスを気にしながら考える。情報をジェームスに流した人間の察しはついていた。

ロジェはサムたちと同様、この春卒業していた。在学中からやたらと響に対抗意識を燃やし、響がジャックの隠し子だという噂を学内に広く流したのはロジェだった。

他人に蔑まれることには慣れている。子どもの頃からずっと屈辱を受けながら生きてきた響は、ロジェの仕打ちに対して応戦などしなかった。それが逆にロジェの勘に触った。

ロジェは今、響と同じライブハウスで金曜日にピアノを弾いている。だが、『金曜日のなになに』という呼び名は残念ながらついていない。

ここでジェームスを撒いたところでどうせ行き先は知られている。だから響はそのまま無視し

て歩き続けた。

◇

ライブハウスまであと何分、というところで雨は急に激しくなった。傘をさしていても雨は体にあたる。

ふと目が行った店の軒下にニコルが立っていた。壁スレスレの位置につま先で立ち、足元で激しく跳ねるしぶきを避けながら憂鬱な顔をして雨を睨んでいる。

「ニコル、どうしたんだ、こんなところで！」

響はニコルのそばにかけ寄った。

「キョウ！」

ニコルの顔に安堵の表情が広がった。

「よかった。これからキョウのピアノを聴きに行こうと思っていたの。そしたら急に雨が降り出して…」

「傘は？」

「朝はお天気だったから持って出なくて」

「ま、この降り方じゃ傘をさしていてもあんまり役に立ちそうもないから走るぞ！」

響は持っていた傘をニコルに渡し、ニコルの手を取って走り出した。自分は片手を頭に当てて

繋いだ手から伝わる響の温もりを感じ、ニコルは濡れることも恐れずに響の後を走った。

——このままずっと雨がやまなくていい。ずっとライブハウスに到着しなくていい。ずっとキョウとこうして雨に濡れていたい…。

隠してきた想いがニコルの中で燃え上がった。はじめてキョウに会った時から、陽だまりの中でピアノを弾くキョウを見てからずっと抱き続けてきた想い。サムという恋人がいながら、想うことはいつもキョウのこと…。

「あ～あ、びしょ濡れになっちゃった！」

ライブハウスに到着し、響は自分とニコルの姿を見て苦笑した。

「着替えないと風邪ひくぜ」

「うん、大丈夫。私はそんなに濡れてないわ。キョウが傘を貸してくれたから」

ニコルも笑った。

「キョウこそ大丈夫？これからライブがあるのに…」

「ああ、大丈夫さ。なんたって俺は『雨人』だからね。ほんとに雨に濡れたままピアノを弾くってのもなかなかオシャレだろ？」

響の金色の髪から銀色の雫が頬を伝いながら落ちていく。

「でも、風邪ひくよ...」

「平気平気」

「...そう」

キョウの金の髪が眩しく見える。銀の雫がせつなく見える。

「そう言えば、今日はサムと一緒にじゃないのか？」

「ええ。今日はひとりで聴きに来たの...」

ニコルはうつむいた。響がそう訊くのは当然なのに、今はサムの名を出して欲しくない。

「そっか。じゃ、俺はあっちから入らなきゃならないからここでな！」

響はニコルを正面のドアの前に残し、従業員が使用する裏口に駆けて行く。

「あ、キョウ！」

ニコルは響を呼びとめた。

「ん？」

「やっぱり、あの曲は弾いてくれないの...？」

『Shine』がキョウの大切な人、キョウのピアノの上に飾ってあった写真の少女に想いを馳せた曲だということはわかっている。

——けれど、だからこそ弾いて欲しい。聴きたい。キョウとあの子だけの曲にして欲しくない...

「悪い...。あの曲だけは弾けないよ」

響はやや冷えた声で答え、手を上げて裏口に消えて行った。

——そうだよな...。何考えているんだろ、私...

ニコルはうつむきたたずむ。

——でも、キョウが弾くピアノが好き。キョウが...、好き...

フロアの中は『水曜日の雨人』のピアノを聴くためにやってきた客でいっぱいだった。テーブルは全て埋まり狭い通路に立つ人もいる。前回サムと来た時よりも客の数は多い。ニコルは一番後ろの通路に立つしかなかった。

進級できずにロジェや他の学生たちから馬鹿にされていたキョウ。悔しさを飲み込んでひとりで努力していたマスター時代のキョウ。荒削りだったピアノも今ではキョウの味になっている。

厳格で名の通るボストン音楽アカデミーで進級を逃し、未来を諦めて挫折していくレッスン生は後を絶たない。そんな中で、何度も単位を落としながら耐えたキュウが目指したいピアニスト

とはどんなピアニストなのだろう、とニコルはあの頃から思っていた。

自分が一瞬でキョウの弾くピアノに惹かれたように、今ここに集まる『水曜日の雨人』のファンもキョウの奏でる繊細で甘くせつない旋律に心を奪われた人たちなのだろう。

——こんなに多く人の心をつかんでしまうキョウなのに、キョウの心にはずっとたったひとりの少女しか住んでいないの...？

片隅で暗いスポットを浴びているキョウを見つめ、ニコルはどうしようもない想いを秘めた一粒の涙をこぼした。

◇

響がバックヤードに戻るとマネージャーが紙切れを持ってやってきた。

「来月から金曜日も弾いてくれるかい？雨人ファンが多くなりすぎて水曜日はいっぱいいっぱいになってしまったからね」

マネージャーは契約書を響の前に差し出した。

「じゃあ、俺は来月からも？」

「もちろんだよ！今、水曜日の雨人に辞められたら困る」

「でも、金曜日はロジェが...」

「ロジェとは契約の更新をしないつもりだ」

ロジェの枠に自分が入ったと知ったら、またなんか仕掛けてくるのではないかと、響は少しだけ躊躇した。だが訪れるチャンスをひとつひとつ自分の物にしていくことが今の目標...

「了解。ありがとう」

響はそう返事をし、契約書にサインをした。

店を出ると、裏口のドアの横にニコルが立っていた。

「こんな遅くまでどうしたんだ？」

ライブは4ステージあり、初めにここでニコルと別れてから4時間以上経っていた。もう真夜中になる。

「ずっとライブハウスにいたのか？」

うん、とニコルは頷いた。

「この傘返さなきゃ、響が帰りにまた濡れちゃうでしょう？」

ニコルの手には、さっき響が渡した傘が握られていた。

「俺のことなんか気にしないでさして帰ればよかったのに」

響は空中に手をかざした。さっきまでの激しい降りはおさまったが雨はまだやんでいない。

「だからね、あいあい傘！」

ニコルは笑って傘を開いた。そのニコルの手から、開いた傘を響は取った。

「俺の方が背が高い。あいあい傘ならこうだ」

長身の響がさす傘の中にニコルはすっぽりと収まる。

「うん...」

自分に向けられたキョウの微笑みが優しい。

――今はあの子じゃなく、キョウは私に向かって微笑んでくれている...

ニコルは傘の中でぎゅっとキョウの腕にしがみついた。

「おいおいニコル、サムに怒られるぞ！俺も殺されるし！」

響は傍らのニコルを見下ろして冗談を飛ばした。

「...今は、サムのことなんか言わないでよ...」

ニコルは呟くように言ってうつむく。傘の中にふんわりと柔らかな香りが漂った。

「ニコル...」

横を歩くニコルの背の位置がちょうど自分の肩だった。いつもこの位置から自分を見上げ笑っていたのはヒカル――。

――ヒビク先輩、ヒビク先輩、ヒビク先輩。

色あせてないヒカルの声が、響の耳にこだまする。快活な動きとともにいつも香っていた匂いは石鹸水のような匂い。

君を見つめていた時が憂いてる  
耳をすませば聴こえるメロディー  
心に響く君の声が優しい旋律こだまのように  
キラキラヒカル 僕をせつなく包む

もしも願いが叶うなら  
最後に君を抱きしめたい  
遥かな想い覚えていたい君のぬくもり  
キラキラヒカル 永遠（とわ）に悠久（とわ）に...

3年前に紡いだ想いが勢いをつけてフラッシュバックする。

遥かな想い。

覚えていたい君のぬくもり。

――覚えている、抱きしめたヒカルのぬくもり。まだ、こんなにはっきりと。

響は自分の腕にしがみつきうつむくニコルを見下ろした。

なつかしい感触。

優しい匂い。

柔らかな笑顔――。

――ヒビク先輩、ヒビク先輩、ヒビク先輩。

次々と蘇る感覚から、突然降って湧いたように浮かんだメロディーを響は口ずさんだ。

「その曲、なに？」

と、ニコル。

「『The sun in the rain』 ...」

響はたった今一瞬で頭に浮かんだ言葉を口に出した。

「『The sun in the rain』か...。素敵な曲ね」

ニコルは響を見上げて笑う。

『水曜日の雨人』...、と響は心で呟いた。

雨人の中で輝く太陽。

どんなに遠くても時間が経っても、忘れられない輝き。

ずっと、輝きを失わない光。

たった今生まれた、『The sun in the rain』のメロディーが体中をぐるぐると旋回し、熱くなり、激しい想いが湧きあがる。

――まだ、こんなにも恋しい。こんなにも愛しい。今、ヒカルがここにいたら、きっと俺は...

！

響はうなだれて立ち止まった。

自分を見上げるニコルの笑顔が哀しい。

ニコルはヒカルじゃない。けど...！

「キョウ、どうしたの...？」

ニコルの声に弾かれたように響は傘を投げ出し、力いっぱいニコルを抱きしめた。

部屋の明りもつけず響はピアノの前にたたずんでいた。何故あんなことをしてしまったのだろうと、冷静になった今になってどうしようもない自己嫌悪に沈む。

ニコルは泣いていた。響が手を離してからもニコルはずっと泣いていた。

そして、

『I love you Kyo...』

ごくごく小さく呟いた。

それから、響の目を濡れた瞳で見つめ、目を見開いてニコルを見つめる響の唇に精一杯背伸びをしてキスをした。だが響の腕が再びは自分を抱かないことを知り、ニコルは雨の中を駆け出して行った。道端に残された響は追いかけることも出来ずに、ただ呆然とするしかなかった。

「最低だ、俺...！」

響は力任せに鍵盤を叩く。

ニコルの気持ちに気づきもせず、自分を想うニコルにヒカルを重ね、感情のままに抱きしめて傷つけてしまった自分が許せない。

――何が水曜日の雨人だ。雨に濡れているのは俺だけじゃない。なのに自分ひとりせつない雨に酔いしれて、それを客に押し付けて、少しの評判に思い上がって...

いつもそうだ。

自分のことばかりしか考えられない。ヒカルのことだって本気で考えてやっていない。

約束をしたくせに。あんな約束をしたくせに。

こんなじゃ、5年たとうが10年たとうが、同じことだ――。

ピアノの上のヒカルが笑っていた。

――この笑顔は、今はきっと...。もうこの笑顔を向けられる資格は俺にはない...

響が写真をつかみ、勢いよくゴミ箱の中に投げ捨てようとしたその時、電話のベルが鳴り響いた。響は上まであげた写真の手を力なく下ろし、受話器を取った。

「ハロー...？」

「キョウ！ジャックが...！」

ジャックのマネージャー、ビリーのせっぱつまった声。

「ジャックが...？」

「事故にあって...！」

――ジャックが...事故...？...って？

受話器を握ったまま、響は放心する。

「すぐに...、早くっ！」

なおも叫ぶビリーの声で覚醒し、響は受話器を叩きつけ部屋を飛び出した。

◇

「おや？どちらへ？」

アパートの前で、声をかけてきたのはジェームスだった。

響は答えずに走った。そのただならぬ表情からジェームスは記者の勘が働いたようだ。響の後を追う。

今はジェームスにかまっている場合じゃない。響は車を拾い、ジャックが運ばれたというメディカルセンターに直行した。

「キョウ！」

響が到着すると、ビリーが走って来た。

「ジャックは?!」

「こっち！」

ビリーは響の手を引き、手術室へと案内する。手術室の前では、緊迫した表情の医師とナースたちが走り回っていた。響の顔に不安の色が浮かぶ。

「ジャックさんの血縁の方はいらっしゃいますか?!」

ひとりのナースが手術室の前で叫んだ。

「今、兄弟たちがこっちに向かっています」

ビリーが答えると、

「どれぐらいで到着しますか？出血がひどくて血液が足りないのです...！」

「それが...、ミネソタから向かっているので...」

「ああ...！」

ナースが落胆の表情を浮かべた。

「お、俺...！」

廊下の向こうにジェームスがいる。じっとこっちを見ている。けれど...！

「俺、ジャックの息子です！」

「血液型は？」

「A Bです」

「じゃ、こちらへ！すぐにっ！」

響はナースと共に手術室に入った。

1ヶ月後に迫った芸術祭の準備のためにニューヨークに滞在していたジャックが、今日はボストンに戻り空港から自宅に帰る途中に事故に遭遇したのだった。

響から与えられた血液のおかげで一命をとりとめはしたが意識はまだ戻らない。このまま戻るかどうかもわからない、と医師は言う。

そして翌日の新聞、雑誌、TVはこの話題でもちきりだった。

[――ジャック・ベリー交通事故で意識不明の重態！発覚隠し子、血液提供！――]

スッパ抜いたのはもちろんBTM。あとに続くようにして次々と同じ見出しの記事が並んだ。

『ジャック・ベリー、23年前に日本で身重の恋人を捨てる』

『ジャズの神様、世界のジャック・ベリーは冷血人！』

『隠し子はボストン音楽アカデミーの落第生』

『ジャックの隠し子は、話題の`水曜日の雨人、！』

スキャンダルに拍車をかけるように、次々と響の周りが暴かれていく。『水曜日の雨人』がジャックの息子だったと明らかになったことで、ライブハウスは水曜日も金曜日も入りきらないほどの客がつめかけた。

「キョウがジャックの息子だったとはねえ。客を呼べて当然だな。これからは毎日キョウの枠を設けなきゃならんなあ」

マネージャーは戸惑いながらも喜んだ。

「偉大な父親を持つと何かと都合がいいな！」

響に金曜日の枠を奪われたロジェは晒（わら）った。

「...ああ。ジャックに感謝してるよ」

何をしても何処に行っても『ジャックの息子』と言われることが現実になった。

その日、5月4日は響の22才の誕生日だった。いつものようにジャックの病室を見舞うとビリーが大きな花束を抱えてやってきた。

「今朝、ジャックの自宅に届いたんだよ。ジャックはずいぶん前から、今夜キョウを招いてバースデーパーティーをやる計画を立てていたんだ...」

響は花束をビリーから受け取り、その中に挿し込まれたカードを手にとった。

――22才おめでとう、キョウ。キミの未来が輝かしいものになることを祈っている 父より――

響は花束とカードを抱きしめ、震える手で眠り続ける父の手を握った。

ジャックが芸術祭の準備の最中、ニューヨークから戻ったのは響のバースデーパーティーのためだったのだ。響は父の思いを抱きしめた。



事故から1週間後の水曜日。

その日も朝から外は雨。

憂いたままの心で『雨人』のピアノを弾き、さすがはジャックの息子だと乾いた賞賛を受け、身も心も土砂降りの雨のままアパートに戻ると、ドアの前にサムが立っていた。いつものようにこやかな表情はなく厳しい目を響に向けている。

「これ...」

サムは響に一枚の写真を差し出した。

「これは...」

1週間前の響とニコルの写真だった。ニコルが響にキスをしているその一。

「ロジェが俺によこした...。『サム、いいのか？大事な恋人を手ごめにされてるぞ』ってさ...」

—ジェームスカ...。やっぱりあいつとロジェは繋がってたんだな...。

響は目を閉じた。

「見損なったよ、キョウ」

響は無言でサムを見つめた。弁解も言いわけもしたくない。全ては己の非。

「なんとか言えよ！」

サムは激昂して響に殴りかかった。ドアに激突し、そのまま倒れ、走る痛みを響は受け止める。だが立ち上がる気力がわからない。

サムは響の胸倉を掴み、ひきずるように立ち上がらせると、もう一度手を上げた。響は目を閉じサムの拳が己を打つのを待つ。サムは振り上げた拳を震わせたまま響を見据えて言った。

「気づいてたよ。ニコルの気持ちがキョウにあること...」

「サム...」

サムはゆっくりと手を下ろした。

「ひとりで日本からやって来て苦労してるちょっとイイ男に同情する気持ちを恋だと勘違いしてるだけだって...気づかないふりをしてた。けどさ、あいつ本気だった...」

サムの声が震える。

「俺が許せないのは...、許せないのは、お前がニコルを受け入れなかったことだよ！」

サムは、乱暴に響を突き放した。

「ロジェの言うことなんか信じちゃいないさ！あいつはずっとお前に対抗意識を持ってたし、そんな奴を信じて友を疑うほど、俺だってバカじゃない」

「サム...」

ロジェの言うことの半分は当たっている。あの時、激しい感情を押さえ切れずにニコルを抱きしめてしまったのは事実だ。もしもあのあとのニコルの言葉がなかったら、自分が次にどんな行動を取っていたかわからない。それほどあの時は優しくて柔らかな感触を心が求めていた。

だがそれはニコルへの想いじゃない。本当に抱きしめたかったのは――。

「あいつの想いを受け止めてやって欲しかったよ…。抱きしめたんなら離さないでいて欲しかった！そうだろっ？！じゃなきゃ、ニコルは…、俺は…！」

ただの道化だ…、と、サムはうなだれた。

「やめて、サムッ！」

ニコルが飛び込んで来てサムと響の間に入った。

「ニコル…、どうしてここに…？」

サムは目を見開く。

「ロジェに言われたの。今ごろサムとキョウが血の流し合いをしてるだろうって…」

「ロジェ…！」

響は怒りに拳を握りしめた。

「あの人、馬鹿よ…。キョウが私のことを愛していると思ってるんだから…」

ニコルはそう言って目を伏せる。

「サム、キョウには恋人がいるのよ。私が勝手にキョウに恋しただけなのよ。悪いのは…、私だけなんだからっ！だから、キョウを責めないで」

ニコルは叫んだ。

「やめろ、ニコル…」

響は力なく言った。

――ニコルが悪いわけじゃない。いや、ニコルは何も悪くない…。

「だからこそ責めたいんじゃないか！キョウがお前に向いていないから俺は許せないんだよ。どうせ失うなら…っ、」

サムは響を打つはずだった拳を思い切り壁にぶつけた。

「そんなことしないで！」

ニコルは傷ついたサムの手をとり、サムはそれを勢いよく振り払った。

「キョウ…」

ニコルは響に振り返り言った。

「何やってんのよ、あなた。あの子が好きなら、あの子を愛しているのならどうして放っておくのよっ！」

「ニコル…」

「あの曲だけは弾けない、だなんてカッコつけてるだけよ。自分の殻に閉じこもってるだけだわ。それほど大切なものならなりふりかまわず愛したらいいじゃない！情けないわよ、キョウ！」

響はうなだれた。ニコルの言う通りだ。情けない…。

「Rain man on Wednesdayが、Shine man になる日を祈ってる…」

ニコルは、はめていた指輪を外してサムに手渡した。

「ニコル…」

サムは手のひらの指輪を堅く握りしめた。

「ごめんなさい、サム...」

細い肩を落とし、ふらふらと歩き去るニコルの背中を見つめていた響の目から涙がこぼれた。

「キョウ...」

「すまない、サム...。ニコルを傷つけてあんなこと言わせて、でも今は...」

何も考えられない...。

何も出来ない...。

何をすればいいのかわからない...。

ただ...、

「俺はもう、ピアノは弾けない...」

世界のジャックが生きるか死ぬかの淵を彷徨っているというのに、マスコミが書くことはジャックの容態ではなく『隠し子』の話題ばかり。

刻々と過ぎて行く時間の中で、芸術祭の準備がジャック無しで進められている間もジャックの意識は戻らない。

ジャックも孤独だった、ということを響は思い知らされていた。ジャックは息子である自分の存在を公表したがっていた。それはきっと自分と親子として生きたかったからだ。自分でも忘れていたぐらいの誕生日を祝ってくれようとしていたジャック。内緒でパーティーの準備を進め花束を用意し、そして息子の為にニューヨークから戻り事故に遭い、生死の境にいながらさんざんなことを書き散らされて――。

ジャックの思いを分かろうとせず、やっぱり自分は己のことしか考えずに偉大な父親を疎ましいとさえ感じていた。ヒカルを放っておいて、ニコルとサムを傷つけ、己の心も満たされずにいったい何をしてきたのだろう...。今までの3年間は、何だったのか...！

溢れた涙はいつまでも止まらない。自分の気持ちしか大事にしてこなかった今までの全てが悔しい。

もう、ピアノは弾けない――。

雨に打たれ打ちひしがれた涙の中に、響はいつまでもたたずんでいた。

事故から10日が過ぎた。響は毎日病室を訪れ父の意識の回復を祈る。だが父は依然と堅く目を閉じ、横たわる姿は日に日に小さくなっていくように見えた。

ジャックの意識を呼び戻すようにどんなことでもいいから傍で話し掛けるように、と医師は言う。だが今の響にはその言葉すら見つけられず、ただ手を握って時間を過ごすだけしかなかった。

今朝、学長室のエバを訪ね音楽アカデミーの退校願いを出した。エバは厳格な目を響に向けた。

「辞めて、あなたに道はあるのですか？」

「...ありません。俺はもう、ピアノは弾けません」

エバは言葉を返さずに、なおも響を見つめた。

「毎日のようにここを去って行く連中と、俺も同じです...」

本当の挫折。

もうピアノの前には座れない。鍵盤を見るのが辛い。

「だから、どうか除籍を...」

エバは椅子から立ち上がり、デスクの背の窓際まで歩いた。窓から望む中庭の向こうから多くの記者、レポーター、カメラマンがこの窓に注目している。ジャックの事故以来、響が行くところには常にマスコミ連中がついて回っている。

「私はあえてあなたには何も言いません。ただ...、」

エバは外のざわめきを見つめながら静かに語り、響を振り返った。

「私はジャックよりあなたを預かっているのです。ジャックの同意がない限り、退校を認めるわけにはいきません」

「ジャックの意識はないんです！同意なんて...！」

響が叫ぶと、

「では、ジャックの意識が回復してからこの話は改めてすることにいたしましょう」

エバは穏やかに言った。

学舎を一步出た途端待機していたレポーターたちが響の元に走ってきた。瞬くカメラのフラッシュと回るテレビカメラが響の姿を捕らえた。

「音楽アカデミーを退校されるって本当ですか？」

「ピアノはもう弾かないのですか？」

レポーターたちを振りきりながら唇をかみしめて大股で歩く響を、彼らは執拗に追いかける。自分の歩く先に、ロジェの姿を見つけた響はその歩調を緩めた。

ロジェは口元を斜めに上げ、まるで響の挫折を楽しむかのような顔をして晒っている。数日前のサムとニコルに対する仕打ちが蘇り響の全身に怒りがほとばしった。

「やあ、キョウ。ひどい顔をしてるなあ。サムにやられたのか？」

ロジェは嫌味な笑みを浮かべて言った。

――今ここでこいつを殴り倒してやりたい！

響の中でロジェに対する激しい憎悪が沸き上がる。だが...

ロジェを殴ったところで今更何がどう変わるわけじゃない。鋭い目をロジェに向け握った拳に力を込めながらも、響は何も言わずにロジェの横を素通りしようとした。

「水曜日の雨人...か。客も騙されたもんだな。もうピアノは弾かないんだろ？あのライブハウスもわざわざキョウの枠を作ったってのに」

ロジェは響の腕をつかんで挑発した。

「...お前はそれを望んでこんな手の込んだことをしたんだろ？思い通りになってやったんだ。いいじゃないか、もう」

響はロジェを見ずに言い、そのまま手を振り切って歩を進めた。そこに再びレポーターたちがつめかける。

「水曜日の雨人もやめるんですか？」

「このまま日本に帰るのですか？」

彼らは一度にそれぞれの言葉を響に投げる。

――毎日毎日うんざりする。だいたいそんなに一度にたくさんの言葉を聞き分けられるわけもないだろ。

心で毒を吐きながら響はしつこいマスコミ連中の間を縫うようにして無言で歩き続ける。それはいつものことだった――。

「ジャックの遺志は継がないのですか？」

たくさんの言葉の中に混ざって発せられたジェームスの言葉が響の心を突き刺した。響は唐突に立ち止まり、

「遺志...？」

ジェームスに向かって呟いた。初めて自分たちに対して反応を示した響の鋭い表情をカメラは捕らえる。立ち止まった響の周囲を、瞬く間に報道陣が取り囲んだ。

「遺志ってなんだ？ジャックは生きている...」

響はジェームスの胸倉をつかみあげ、顔を間近に近づけた。

「ジャックは死んじやないんだ！遺志ってなんだよ！」

スキャンダルが公に発覚する前から響に張り付き、事故のおかげでスクープを手にしてからのBTMが書く記事は、ジャックを誹謗し名声を傷つけジャズ界のトップからひきずり下ろそうとする悪意に満ちた内容ばかりだった。そこに真実などひとつもない。

「これは失礼。ですが事故からもう10日も経ってますからねえ。あなたも意識が戻らないお父上

が全快されるとも思ってないでしょう？」

なおもジェームスは続ける。

「今ならこのスキャンダルを上手く逆手に取ってジャックの後継が出来ないこともない。23年前にお母上と共に捨てられたんでしょ？それぐらいの恩恵があっても良いと考えてもおかしくない」

ジェームスの口から出る言葉に容赦はない。挑発に乗るな、と冷静な部分が自分を諭すが、響の全身はあまりもの怒りに震えた。

「でもまあ、まだ遺志は早すぎましたか」

まだ、を強調するジェームスに感情を抑えていた響の理性が飛んだ。

「貴様はゴミだ。書くなら人間として恥ずかしくない真実を書けよっ！」

とうとう響は叫んだ。

「ゴミとはヒドイ…。ええ、書きますよ。世界のジャックのご息子はやんちゃでナンパボーイだという真実をね！」

ジェームスは不敵な笑みを浮かべて言い放つ。響はジェームスをそのまま地面に勢いよく叩きつけた。ジェームスは大げさなジェスチャーを加えて派手に倒れた。

その一瞬、無数のフラッシュがまたたき、テレビカメラは響の険しい表情のアップを捕らえた。

「ついでに暴力好きだとも書いておきますよ！何なら裁判に訴えてもいいんですよ？」

地面に尻をついた状態で、ジェームスは吼えた。

「暴力を振るえば思い通りになると思ってる甘ちゃんもいいところだ。あなたにピアニストは無理だ。ただの負け犬だ。さっさと日本のママのところに帰った方がいい」

響は唇をかみしめる。

「どうした？返す言葉もないのか？」

「…ないさ。あんたの言う通りだからな」

響はそう呟くと、取り巻く報道陣たちをひとりひとり押しのけながら歩いた。

屈辱には慣れている。蔑まれることにも慣れている。今までどんなことを言われても熱くなったりはしなかった。

けれど…！

事故から10日が経ち、意識は戻らないままとはいえ、生を失っていないジャックに対するジェームスの誹謗にだけは激しい憤りを感じた。

遺志――。

ジャックの遺志。

もしも、このままジャックが還ってこなかったとしたら…、

そこまで考えて響は激しく首を振った。今の自分にある夢と希望は、ただただジャックが死の淵から舞い戻ってくることだけ。音楽アカデミーも、水曜日の雨人も、ピアノを弾くことさえも今はそれ以上の価値ではない。負け犬でも何でもいい。

「ジャック...」

響は父の手を握り締めながら呟いた。

「ジャックは俺に、何を一番望む...？」

ジャックは答えるはずもなく目を閉じたまま。響は肩を落とし、深いため息をついた。

背後でドアが開く音がして、ビリーが入って来た。

「キョウ、ジャックの様子はどうか？」

響はゆっくりと首を横に振る。

「そうか...」

呟きながらビリーは響を見て愁う。ジャックと共に響までもが日に日に追いつめられていくようだ。いや、あるいはその逆なのかもしれない。意識のないジャックであっても、息子の精神的窮地を父親は命で感じているのかもしれない。

だから――。

今朝の音楽アカデミーでの響と記者の悶着がさっきからしきりに報道されている。記者は響に暴言と暴力をふるわれたとわめきたて、名誉毀損で訴える、とまで言っていた。

ジャックが23年前に身重の恋人を捨てた冷血人だった、というBTMの歪んだ報道のおかげで、神様とまで言われていたジャックのイメージは最悪まで墮ち、その息子は落第生でプレイボーイだとレッテルを貼られ、アメリカを代表する世界的ピアニストとその息子は、今はアメリカ中から敵意の目を向けられている。

「キョウ...、ピアノを弾かないというのは本当なのか？」

「...ああ」

答えながら、弾かない、のではなく、弾けないんだ、と響は心で呟いた。

3年前は、愛しい人を両手で包める男になることを目標にし、音楽を磨くことで己を磨こうとピアニストを志した。自分には音楽しかなく、音楽でしか己を磨くことは出来ないと思ったからだ。

あの時は確かにあった、希望と未来と愛という光――。

なのに、そのはじめの思いをいつからか見失い、ただ自分という存在を確かなものにするために父を越えたいという思いに縛られて、ピアニストは夢ではなく意地に変わり、その結果――。

ジャック、ニコル、サム、そしてヒカル――。

己の理解者たちの想いを踏みつけ、傷つけ、今、原動力となっていたはずの光もなくしてしまった自分にはもうピアノは弾けない。ピアニストになど、なれはしない。

「ジャックは...、」

何と言うだろう、という言葉がビリーは呑みこんだ。今の響にはきっと、どんな言葉も励ましも届かないだろう。

「今はただ、ジャックの回復だけを祈ろう」

ビリーは響の肩に手を置き、その手に力を込めて言った。



夕方、響がアパートに戻るとロジェが部屋の前に立っていた。

「おかえり、キョウ。ジャックの意識は戻ったかい？」

ロジェはいつもの嫌味な笑みを浮かべながらゆっくりと響に近づいた。

「...ロジェ、どうしてそんなに俺を憎む...？」

響はロジェを見据えた。

「勘違いしないでくれよ。俺は別にお前を憎んじやないさ」

「じゃあ、もうほっとけよ。俺はもうピアニストにはならない。お前と張り合うこともない。もう何の関係もないんだ」

響は吐き捨てるように言った。

「どうしてお前は俺に刃向かって来ないんだよ！俺を殴りたいとは思わないのか？」

「言ってる意味が分からないぜ。さんざん小細工をしておいて、いったい今更何が言いたいんだ？俺にどうしろっていうんだ？」

ロジェは一瞬言葉を失くしてすくんだ。

「お前の思惑通り俺とサムは仲たがいをしたし、ニコルとサムは別れたし、そして...、ジャックの『隠し子』だと世間に知れたし、これ以上、どんなことを俺が背負えばお前は満足するんだよ！」

自分に対してだんだん激昂する響に、どこか安堵したような表情を浮かべてロジェは言った。

「俺は、響のそういう感情の高ぶり...、感情の行方が知りたかったんだよ...！」

ロジェは叫んだ。

「なに?!」

「アカデミーでは俺たちがどんなに蔑もうがお前はいつも涼しい顔をしてさ。ピアノの基本は全くなっちゃいけないくせにお前の音色は透き通っていて耳から離れない。まるで想いが音になっているみたいにさ！なのに普段のおまえ自身にはそういった想いや感情は全く見えない。何を考えているのか分からない！俺は不思議でならなかったぜ！」

「ロジェ...」

「どうやったらお前のような、あんな音を出せるのか、あんなピアノを奏でられるのか、そればかり考えてたよ！」

「俺の音...だと？」

「ああ、そうだ！」

響はただ、自分のままピアノを弾いていただけでそこに意図したものや意識していたことなどは無いつもりだ。ロジェが何をもってそう言うのか理解が出来なかった。

「お前が感情を爆発させたとき、どんな奴なのかが知りたかった。お前の中身を見たかったんだよ。だが今朝の記者との一件で何となくわかった気がする」

「.....やんちゃでナンパなひとでなし...てか」

「それはあの記者の見解だろ...。俺は...、」

ロジェは最後まで言わずに口をつぐんだ。自分自身に対する中傷には一切反応しなかった響が感情を爆発させた一言は、父親への誹謗だった。

「いっそ本当のひとでなしだったら面白かったのにな....、」

...俺みたいに、とロジェは自嘲した。

「どうやったらあんなピアノが弾けるか、ってことだけどな」

響は小さく呟いた。

「憎しみを抱いてちゃ弾けないぜ、ロジェ」

「なんだと?!」

「だから....、もう俺は弾けない」

響は言った。

「憎しみ...俺か？」

「いや、俺自身...」

憎いのはロジェでもジェームスでもない、己自身。

「そういうことだ、ロジェ。もう、気がすんだだろ？」

ロジェは答えずに唇をかみしめる。

「...いいピアニストになれよ」

響はひとこと呟いてアパートに向かう。

「お前はどうするんだよ！このまま負け犬になるのか！」

ロジェが叫んだ。

その言葉を背中で受け止め、響は部屋のドアを開けた。

ポストマンがアパートのドアから郵便物をバサバサと投げ入れる音で響は目が覚めた。ベッドサイドの時計を見ると午前11時。ずいぶんと遅い朝だ。

ベッドの上に起き上がると、乾いた唇にピリッと走る痛みを感じ思わず触る。数日前サムに殴られた傷が乾いてはまた開き、未だに微かな血を滲ませる。少しずつ和らぎつつある傷の痛みではあっても、指につく赤い色を見るたびに鈍くて重い塊が胸に込み上げてくる。

アカデミーを休んで4日目。

単位を落としてもスキャンダルが噂されても、そしてジャックの事故があっても一度も休んだことがなかった音楽アカデミーだった。

エバは退校願いを保留にしたが、響はもう二度とアカデミーの門をくぐるつもりはなかった。

――ジャックの意識が回復してから、この話は改めてすることにいたしましょう。

穏やかに言ったエバの声が虚しさと同時に蘇る。ジャックの昏睡は2週間も続いている。これ以上の昏睡が続けばもう意識の回復は見込めないと医師は言った。

ジャックはこのまま、意識のないまま体中に管をさし装置によって心臓の動きを監視し生を永らえる一生を生きなければならないかもしれない。まだジャックとは親子の会話をゆっくりとしていない。もっともっと色々な話をしたい。だが今までそれを拒んできたのは自分だった。

今日もあの陽だまりの病室でジャックはひとり眠り続けるのだろう。ジャックの意識は今、何処で何を想っているのだろうか。暗い闇の中なのか、それとも少しは光がさしている場所にいるのか、響には分かるすべもない。自分の誕生日が芸術祭の後だったらジャックは事故に遭わずにすんだのに、いや自分がここに来なければ...と、考えても仕方のないことに響の思考は向いて行く。

重い心と体を起こし響はベッドを離れ、血の滲む唇を押さえながら床にバラバラと落ちている数通の郵便物を拾った。広告やDMを右から左にゴミ箱に入れながら、床の上の黄色い封筒が目にとまった。それは広告でもDMでもなく宛先には直筆の英語で響の名が書いてある。

裏を返して差出人の名前を見る――。

息と動き、全てのアクションが止まり、もう一方の手にあったDMたちは再び床にバラバラと落とされた。

浅倉ヒカル――。

懐かしい日本語で書かれた文字。3年ぶりに目にしたその名前の文字。しばらくの間その名前をじっと見つめていた響は、床に膝間づいたままの姿勢でゆっくりと手紙の封を開けた。

ヒビク先輩、お元気ですか？ヒカルです。

日本は桜の季節も終わり、入梅前の爽やかな日々が続いています。

先輩の住所、ずいぶん前に田村先輩から教えてもらっていたのだけど、手紙...、書かない方がいいのかな、って思って今まで我慢してきました。

ジャックさんのこと、今日のニュースで知りました。先輩のこともニュースでやってました。

きっと今ごろ先輩は毎日ジャックさんのことで、心配で辛い思いをしていることでしょう。

心ない中傷を受けながら、本当に辛いと思います。（私だったらあの記者、あの場でぶっとばしてます！我慢した先輩は偉いですよ！）

でもヒビク先輩、ジャックさんはきっと目覚めますよ！

世界中のみんなに愛されているジャックさんなんですよ？ジャックさんの回復を願う、世界中のみんなの祈りが届かないはずないですよ！

私は信じてます。

私のことをちょっと書きますね。

この春に短大を卒業して、幼稚園の先生になりました！

今、4才の子供たちと一緒に賑やかな毎日を送ってます。幼稚園の先生だなんて私らしいってみんなが言ってくれるんですよ！

それから、あかねちゃんと田村先輩がくっついて、今ふたりはとっても幸せそうです。毎日ラブラブ～！信じられますか？

一緒に旅行なんかもしちゃって、いいのかなあ～？ってちょっとひがみが入ってる私です。

そして、うちの隣の群竹くんは写真家を目指して目下修行中！出版社で見習いをしながらぶらぶら撮り（ぶらぶら歩いて写真を撮ること＝命名ヒカル）に精を出してます。

近所の珈琲ショップに写真を飾ってもらったり、ポストカードが売れたり、少しずつ写真家として歩きはじめました。

最近の私の写真を同封しまーす。

初めて幼稚園に出勤する朝に群竹くんが撮ってくれた写真です。

いらないや、こんなのっ！って思っても捨てちゃダメ！魔よけになりますから。（なーんて、この写真が魔だったりして？あ、今うなづいたでしょ？パーンチ！）

ヒビク先輩、負けないでくださいね。

先輩らしく堂々と、ヒビク先輩の音楽を響かせてくださいね！

私はいつまでも、ずっとずっとずーっと...、先輩を応援しています！いつまでもどこまでも味方ですから！

ジャックさんのことは、私も群竹くんもあかねちゃんも田村先輩も、みんなで祈ってます！

それでは、このへんで...

\*\*\*

まるで、手紙の中でヒカルが喋っているようだった。3年という時間を感じさせない、高校生の頃とまったく変わっていないヒカルをその文章の中に感じた。

封筒の中に残っていた写真を響は震える手でゆっくりと取り出した。

「群竹...、これ、修正したんじゃないか...？」

響は思わず口に出して笑った。捨てようとしたあの日から、ピアノの上に伏せられたままのヒカルの写真を手に取り、2枚を並べて見比べる。

満開の桜の木の下で柔らかな光を受けてヒカルは笑っている。おそらくヒカルの家の前の墨田公園だろう。

——いつか、ふたりでこの公園から夕日を見たな...。ずいぶんと、ずいぶんとキレイになって、大人っぽくなって...

けれど、変わらない笑顔。

ヒカルの笑顔は、響が知っている高校時代のヒカルとまったく同じだった。同じ笑顔を自分に向けている。何も変わらずに、あの頃の想いそのままに...

「魔よけか...」

と、響は笑った。その笑いの下から涙が溢れた。

——...ヒカルらしい。俺に負担をかけないように、自分の気持ちを隠している手紙。返事を求めてもいない。あんな約束をしておいて、3年もの間ヒカルを放っておいた俺に、文句のひとつも言いたいだろうに...

ヒカルの新鮮な笑顔に触れて、闇の底にいた自分の気持ちがぐんぐん引き上げられるのを響は感じた。

はやくジャックに会いに行こう！今、こんなにも心が軽い。

「ヒカルの魔よけはバスター効力もあるんだな！」

響は写真の笑顔に向かって言った。

そして——。

「ジャック！」

響はビリーと共に、廊下を走ってジャックの病室に向かった。途中ナースがとがめたが、今の響に走るなど言っても無理だった。

病室に飛び込むと、ベッドの上でジャックは目を開けて天井を見上げていた。

「ジャック！」

響はジャックの傍らに転がるように座り込み、その手を握った。

「...やあ、キョウ」

ジャックは顔をゆっくりと響に向け、かすれた声で言った。

「親父...！」

握り締めた手の上にポツポツと水滴が落ちる。

「親父...っ！」

ジャックは響の金色に輝く髪をそっと撫でた。

響が到着する寸前に、ジャックの意識は突然戻った。何ごともなかったかのように、傍らに  
いていたビリーに向かい、

「おはよう、ビリー...」

と、口を開いたのだ。医師、ナースが慌しくやってきてジャックの状態を見ている間、ビリー  
は響に連絡するためにロビーに走ったが、そこでちょうど玄関から駆けて来た響に出会ったのだ  
だった。

いつものうつむいた憂いた顔の響ではなく、何かを吹っ切ったような爽快な響の顔を見たビリー  
は、ジャックと響が親子である、という繋がりを改めて知った気がした。それは、世間で言わ  
れているような歪んだものではない、深く清らかな血の流れだ――。

「そうか...、キョウのおかげで私は助かったんだな」

力の入らない手で響の手を握り返しながらジャックは言った。

「私の中に、キョウの血が流れてるのか...」

ジャックは嬉しそうだった。

「世間はジャックに隠し子がいたって大騒ぎになってるけど、ね...」

「そんなこと、私は最初からどうでもよかったんだよ...」

「うん...」

ジャックはゆっくりと壁にあるカレンダーに顔を向け、

「キミの誕生日は過ぎてしまったんだね...」

と、目を閉じた。

「せっかく目論んでいたパーティーもパァか...」

「ビリーから聞いた...。親父の気持ちだけで十分嬉しかったから...。ありがとう...。そして、」

ごめん...、と響は俯いた。

「俺、悪い息子だな...」

ジャックはやや目を丸くしたあとに、それを半分以下に細めて微笑んだ。

「私がこっちでピアニストとして歩き出したのが22才の時だった」

響は父の顔をじっと見つめた。

「今のキョウのように、初めはライブハウスで弾いてたよ。日本に残してきたユリを、いつか  
はこっちに迎えられるピアニストになることを夢見て、ね...」

「おふくろを...」

ジャックはゆっくりとキョウに顔を向けた。

「だが、離れて暮らす時間が長くなるにつれて約束は遠のいていった。私はユリに一度も自分の想いを言わなかったんだ。約束は私の中でも日に日にあやふやなものになっていった」

「どうして...」

響は呟いた。

「自分に自信がなかったからさ。もっともっとピアニストとしての力をつけてから言おう、もっともっと己を磨こう、もっともっと...と思っているうちに、気がついた時には私は世界のジャックと呼ばれるようになり、キミと出会うまでの18年が経ってしまった」

時が経つにつれふたりの間の約束は風化し、今はもう互いの人生をそれぞれ生きているジャックと響の母。ジャックも母も23年前の恋愛を今は自分たちの胸にしまって鍵をかけている。

「キョウ...」

「ん？」

ジャックは響の目を見つめた。

「芸術祭で、私の代わりにピアノを弾きなさい」

響の瞼が大きく開かれ、息は止まった。

「無理だよ...。世界のジャック・ベリーの代わりなんて...」

それに、ピアノはもう...、と、響は心で呟く。

「無理は承知...。でも、やるんだ」

「ジャック...」

「いつになったら大丈夫、なんてものはこの世界にはない。本番は次の本番のリハーサルのようなものだよ。全てのことが永遠に続くリハーサルであり、その全てが難だ...」

永遠に続くリハーサル、という言葉が響の心のどこかで微かに響いた。

「実力がものを言うシビアな世界だが、難に飛び込む勇気も実力のうちじゃないだろうか」

ジャックはそう言って、響の手を握った。

「難に飛び込む勇気...」

もう二度とピアノは弾けないと思ったことが自分にとっての最大の難だとしたら、そしてそれさえも永遠に続くリハーサルのひとつだとしたら...、と、響は思いを巡らせる。

「キミの未来を輝かせるんだ。ジャック・ベリーの名前の下でカザマ・キョウを響かせてみなさい」

ジャックの言葉に響は目が覚めた思いがした。ジャックの名前があろうがなかろうが、自分に輝きがあれば自ら光る。そして自らの光を輝かせたときが本当のピアニストになる時。

それが、真実の意味での父を越える時――。

今、わかった。

3年間、くすぶっていたひとつの答え――。

ピアニストになる、という、本当の意味。自分が目指したかったもの。

――ヒビク先輩らしく、堂々と響いてる！

何年も前にヒカルが言ってくれた言葉を思い出す。

この言葉の本当の意味は――。自分らしく堂々と響くために、そしてこの言葉に応えるために、内なる雨人を捨て光の中に出ていこうと、キョウは心に決めた。

「わかった。やる。…芸術祭でジャック・ベリーの代わりに俺のピアノを弾くよ」

響は力強く言い切った。

ピアノを弾く。

二度と弾けないと思っていたピアノを、世界のジャック・ベリーの名代という大きなステージで…！

「それでこそ私の息子、響（キョウ）だ」

ジャックは満足気に微笑んだ。

世間ではまだジャック・ベリーの隠し子騒動がおさまらない中、渦中のふたりは陽だまりの病室で親子の時間を過ごしていた。

普通に、自然に、柔らかに――。

5月29日から31日。

ニューヨークKホールで芸術祭が開催された。

アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、日本、中国...、と世界各国から有名無名のアーティストたちが集まり、3日間の日程の間に音楽や演劇、舞踊など、それぞれの演目を披露するフェスティバルだ。営利を目的とせず純粋に文化芸術の国際的交流を目的とし、興行収入は全て途上国の文化向上に役立てられる。出演アーティストたちは有名無名を問わず無報酬。それでも各国の芸術家たちとの交流が広がるこの芸術祭には毎回多数のエントリーがある。しかし、今回は開催直前のジャックのスキャンダルによって芸術祭自体のイメージもかなりダウンし、エントリーをとりやめる有名アーティストが出るなど運営側は大きな痛手となった。

3日目の今日、響のエントリーがある。ジャック・ベリーがピアノを弾くはずだったプログラムだ。不慮の事故に遭い未だ入院中の父に代わり渦中の息子がピアノを弾く、ということで世間からの注目度も高いが風当たりが強いことも否めない。響のエントリーをスキャンダルを利用した売名行為だと受け止めている輩もいる。

そんな風評の中ではじめて立つ大きなステージ。

この重圧に打ち勝つことができるのだろうか、響は目を閉じゆっくりと気持ちを鎮める。

――先輩らしく堂々と、ヒビク先輩の音楽を響かせてくださいね！

ヒカルの声が聞こえたような気がして響は我に返りステージを見つめた。

舞台では、日本から来た劇団の芝居が行われていた。大戦中の強制収容所で暮らすことを強いられる子どもたちに絵を教えるユダヤ人教師。

太陽のように明るく、ひまわりのようにおおらかに、過酷な生活の中の人々に夢と希望を与え、権力に対する怒りを胸に秘めて静かに闘う教師を若い役者が好演している。

「たとえ現実が土砂降りの雨の中でも、心には輝く太陽を持ちましょう！」

教師は子どもたちに叫ぶ。

「さあ、みんなの太陽をこの真っ白な紙に描くのです！」

白い紙を子供たちひとりひとりに配る教師。その姿はまさに太陽のように輝いていた。究極の絶望の中でも自然な輝きを身から発散させているその教師。暗い背景の舞台の上でその教師の歩くところにはスポットライトではない、堂々としたオーラが光り輝いている。

子どもたちが描いた太陽はその教師自身だった。

「先生が僕たちの太陽だっ！先生と一緒に僕たちも雨の中で光り輝くんだ！」

子どもたちは教師の周りにどっと集まる...

響は不思議な錯覚を覚えた。舞台の教師がヒカルに見える。どんな時でも凜と背筋を伸ばし、周りにたくさんの人を集め、それを照らしながら昇っていく太陽...

「The sun in the rain」

生命の終着点に送られる列車に乗せられた教師と子どもたちが、土砂降りの雨が降る舞台の上で声を合わせて叫ぶ。

「The sun in the rain！」

たとえ未来に待つのが理不尽な生の終わりであろうと、最後まで、そして未来まで永遠に光り輝く太陽でいようと、教師と子どもたちは共に叫んで舞台は幕――。

「The sun in the rain...」

響はつぶやいた。

場内の整理が行われ、1時間の休憩のあとはいよいよ響のステージ。観客たちも入れ替わる。

響は芝居を終えた日本の無名劇団の楽屋を何気なくのぞいた。劇団長と思われる男の周りに集まる役者たちは皆歓喜に溢れていた。教師を演じた若い役者を劇団長は愛しむように撫でている。まるで、自分が昔、よくヒカルやあかねにしていたように。若い役者は顔中笑顔で泣いていた。この役者にもここに来るまでのドラマがあったのだろうと響は思い、楽屋をあとにした。

自分はこれから、水面は遥か彼方の飛び込み台へ――。

響がステージに上がると、観客たちはため息を漏らした。ジャック・ベリーを期待していた観客は落胆の、ジャックの息子がどれほどのものかを判定にきた観客は嘲笑のリアクションだ。二階席の左前列でニコルが、右後列でサムが、そして一階席の中央でロジェが、それぞれの想いで響を見守っていた。

何千人という観客がステージのカザマ・キョウに注目している。『ジャック・ベリーの息子』カザマ・キョウを観察している。熱いスポットライトに目がくらみ息がつまる。全身に焼けるような視線と重圧を感じる。だがそんな中に立ちながらも、響の目に映るのは暗い客席でたったひとりでこちらを見つめている懐かしい顔だけだった。

心の底から映し出される幻の笑顔――。

グランドピアノの前に座り、ひとつだけ息を吐き、首に下げた8分音符のペンダントを締めたタイの上からぎゅっと握り締めてから響の指が鍵盤を滑り出した。

響くメロディーは『The sun in the rain』。雨人の中で光を放ち輝く太陽。どんなに遠く離れていても効力を失わない、その存在自体が光の笑顔――。

閉じ込めていた想いが爆発しジャックの事故が起こったあの雨の夜に突然生まれた曲『The sun in the rain』を響は力強く奏でる。高音でキラキラと響く激しい三拍子の旋律と、まばたきをする暇もないほどに次から次へと追いかけてくる音符に人々は息を呑み込んだ。

そして、余韻を残しながら次の曲へ――。

せつなく甘く優しい旋律が静かに会場を包んだ。

「この曲...」

ニコルは呟いた。

「...」

サムは目を閉じた。

「キョウ...」

ロジェはうなだれた。

Shine――。

――ヒカル。

学校の廊下の水飲み場。

『軽音楽部の部長さんの風間ヒビク先輩ですよ？』

あれが俺たちの出会いだったよな。水が滴る向こう側に初めてお前を見た時、心の奥がうずいたんだ。お前は俺のこと興味津々といった目で見つめてた。俺はいつも周りの連中からそういう目で見つめられてきた。おっかないものを見るような興味の目。派手な金髪の校則破りの常習犯だったからな...。けど、お前の目の中には怖気がまったくない、無邪気でいたずらな輝きがあった。

からかってやりたい、って思ったの、はじめてだったんだぜ。

『さあ、俺そんな名前だったか...？』

今思えば、俺はきっとあの一瞬からお前に惚れてたのかもな...。

初日の音楽室で――。

『普通、響ってあれば素直にキョウって発音するだろう、名前なんだから。ヒビク...なんて、クゥ...と鼻から息が出て行きそうな間抜けた名前ないだろう！』

『別に間違った読み方じゃないんだから、そういう名前の人だっていると思いますよ！第一、ヒビクって鼻から息なんて出て行きませんか？クッ！とちゃんとスッキリ閉まってるじゃないですか。先輩の鼻の穴が大きすぎるんじゃないですか？』

『生意気な1年生だなあ！』

ほんと、お前は生意気だったぜ。何でも思ったことを口にする快活な後輩でさ...。でも、本当はヒビクってという呼び方、かなり気に入ったんだ、あの時...。

それまで、俺は『響』って名前が好きじゃなかった。おふくろから親父がピアニストだって聞いてからは、俺の名前に親父の影がある気がしてっそう好きになれなかった。でも、お前の口から飛び出した『ヒビク』って言葉は、そんな俺のちっぽけなこだわりをすっ飛ばすほど、俺にとって新鮮な響きだったんだ。お前にヒビク先輩って呼ばれるのが嬉しかったよ。お前以外の奴がそう呼ばないのも特別感があってよかったぜ。田村...以外はな。あいつはほんと、デリカシーのない男だよな...。

夏の合宿――。

お前たちに言われなくたって俺は実現したいと思っていたんだぜ。お前が演劇部とのコラボ話を持って来た時から、さ…。予感…、があった。俺にとって、大きな何かが始まる予感。

そして、お前と過ごした湖での時間――。

『ピアニストのお父さんは素敵なピアノの音色を響かせていたんだと思います。だから、先輩の名前は響なんじゃないですか？』

あれは俺の原点。たとえ、本線から外れローカル線に行っちまってもまた元の俺に戻る事が出来る魔法だ…。

ジャックの楽屋を一緒に訪ねたあの時、お前は言ってくれたな。俺らしく響いていたって…。

もしもあの頃、俺が俺らしくいられたとしたらそれはヒカルがそこにいたからだ。ヒカルが俺の傍であったかい光を発散させてたからなんだ。お前に出会ってからの俺は、分厚く纏っていた何枚もの衣を、一枚一枚脱ぎ捨てて、裸の、一番俺に近い俺になれた。

それを、あの頃はカッコ悪いなんて思ってた。俺がお前を守ってやりたかったんだ。いつもお前の笑顔に救われてばかりじゃなく、お前が安心して昇る太陽になれるように、太陽よりも大きな宇宙にでもなる気でいたんだ、俺…。

なのに、

『先輩、大好き…！だいすき！』

お前が心から叫んでくれたあの時、俺はお前に自分の気持ちを言わなかった。帰ってくるから、という漠然とした約束の言葉だけを投げて…。抱きしめてキスをしてその言葉だけは言えなかったんだ。

いつも、曖昧な言葉しかヒカルには言ってやらなかった、な…。ずるい、な…。みんなに愛されている太陽のお前を俺が縛っちゃいけない、なんてカッコイイこと思いながら、本当は自分が傷つくのが一番怖かった。ガキだったよ、ほんと…。

手紙、勇気がいったことだろう…。3年も便りをしなかった俺なのに、その空白の時間さえも恐れずに、俺を励まそうと精一杯のお前の心をあの手紙にしたためてくれたんだな。魔よけの写真と共に…。

空よりも星よりも

光輝く僕のShine

I love you

I love you ヒカル…。

ヒカル――。

演奏が終わり、観客は一瞬の間水を打つ静寂を保ち、一斉に惜しめない拍手を響に送った。

バックヤードに下がった響に、芸術祭の運営を進めていたジャックの仲間たちは次々と手を差し出す。

「素晴らしかったよ、キョウ！さすが、ジャックの息子だ！ジャックが聴いていたらさぞかし鼻を高くしたことだろう！」

ジャックの息子、と言われることにもう何の抵抗もない。響は差し出された手をひとつひとつ握り返した。

響が視線を前に移すと、会場と楽屋を隔てるドアの前にロジェが立っていた。ロジェはしばらくの間、腕を組み響をじっと見据えていた。そして、組んでいた手をゆっくりとほどくと、両手をパチパチと合わせて打った。

「ロジェ...」

「...己に憎しみを抱いてる奴が弾くピアノじゃなかったぜ...」

ロジェは呟いた。

「そうか...」

「ああ。心に...、憎しみがあっちゃあの音色は出ないな」

「.....、」

響が何かを言おうとした時、

「言葉を...聴いていた気がした」

ロジェの後ろから歩いてきたのはニコルだ。

「来てくれたのか...」

ニコルはゆっくり頷いた。

「でも、ここであなたが『Shine』を弾くとは思ってなかったけど...」

興味と敵意の目に溢れたあの空気の中で、一番大切にしている曲を弾いたキョウの愛と勇気。それはまるでメロディーに乗った言葉のようで。会場の聴衆を越えた場所に、ステージのキョウから真っ直ぐに繋がっていく言葉。時に優しく、時にせつない愛の言葉...

「聴けて嬉しかった。ずっと聴きたかったから」

そしてわかった。キョウの中にずっとある光。

Shine。

それは、誰も遮ることができない光――。

「まいったね...」

ニコルの後ろから声をかけたのはサムだ。

「サム...！」

ニコルは振り返り、別れた恋人を見つめた。

「ニコルに、そしてロジェまでここに集まっているなんてね」

ロジェは、ふん、と顔を背けてやや赤くなった。

「アメリカ中に苛められてるキョウのステージを見守ってやろうって思ってたのは俺だけじゃ

なかったんだな」

サムは笑った。

「サム...」

響の胸に熱いかたまりが込み上げる。

「ニコル...」

サムはニコルに顔を向けて言った。

「これじゃしょうがないよな...。お前の想いが届かなくても」

「...こんな時になに言ってるのよ、サム...！」

「あきらめるしかないぜ。あきらめて...、俺んところに戻ってこいよ」

「サム...」

思いもしなかったサムの言葉に、ニコルは驚いて目を見開いた。

「さっきまではこんなこと考えてもなかった。けど、今は何だか全てのことが許せる...」

目を閉じて響の演奏にじっと耳を傾けながら、心に浸透してきた深い優しい想い――。全ての煩悩が消えていった。

つーと涙がニコルの頬を伝った。サムは、ニコルから返された指輪を、再びかつての恋人の掌に乗せた。

「それをもう一度指にはめて俺のところに来るのを待ってる」

サムはニコルにそう言うと、響に顔を向けた。

「お前のShine... 恋人に聴かせてやりたかったな...」

「...ああ、俺も聴いてもらいたい...」

だから....

響は楽屋の前で3人と別れ、長い通路の先の目的に向かって歩く。今、自分がすべきこと、それは――。

さっきの芝居で主役を演じていた役者がひとり、廊下の突き当たりに設置されているひとつの電話ボックスを使っていた。興奮したように顔を紅潮させながらしきりに話をしている。歩く響の歩調がやや遅くなった。

「ミスターカザマ！」

後ろから呼び止められ振り返ると、さっき楽屋を覗いた劇団の劇団長が立っていた。

「How do you do. My name is Samezima...」

英語であいさつをする劇団長に、

「あ、日本語で大丈夫です、鮫島さん」

と、響は笑った。

「よかった」

鮫島はほっとしたように息をつき、

「ピアノ演奏、素晴らしかったですよ。『The sun in the rain』、偶然にもうちの芝居と同じタイトルで」

響に握手を求めた。

「ほんとに...」

響はその手を握り返し笑った。

「あなたのピアノと僕らの芝居、どこか波長が同じ気がして、ひとことご挨拶がしたかったんですよ」

「それは俺も感じました」

不思議な錯覚――。

芝居の中に感じたヒカルの面影を響は思い出す。雨の中で光り輝く太陽の笑顔を一。

「僕らの劇団はまだ駆け出したばかりで、この芸術祭へのエントリーは大きな冒険だったんですが、あなたのピアノをはじめ、多くの一流のアーティストたちと交流できたことを幸せに感じています」

「俺は一流なんかじゃないですよ。ただの学生ですから。鮫島さんの劇団とは違いまだ駆け出してもいません」

エバに除籍願いを申し出たままになっているから学生というのも微妙だ。

本当に、まだ何も始まっていない。今やっと、自分の素の気持ちに向き合ったばかりだ。この、芸術祭で――。

「...あの役者さん、とてもよかったです。太陽の教師を見事に演じてました」

響は電話ボックスの役者を指した。舞台ではあの役者が演じる教師がヒカルに見えた。今、こうして見ると、背格好も顔も雰囲気も、ヒカルとはどこも似たところは見当たらないあの役者が。

「あれは...、僕の妹で、あまり褒められても照れてしまいますが...」

鮫島は頭をかきながら、とてつもなく照れくさそうに笑った。

「妹さんですか...」

「今日は...、文句無しの芝居をしてくれたと僕も思ってます」

響は大きく頷いた。

「身内というのはなかなかやりにくいものです。色々な意味でね。だからあまり褒めたくはないんですけどね...。カザマさんもさぞかし大変でしょう...」

鮫島は響に同情するような目を向けた。

「そうですね...。俺の場合は父がデカすぎますから...」

鮫島が、うんうん、と頷く。

「...でも、今自分がいるこの現実（ばしょ）が俺のステージですから。ここで精一杯輝いてこそ俺だって最近分かったところです」

鮫島は嬉しそうに響を見つめた。

「いつか、あなたの音楽とコラボレートができたらいいと思いますよ」

「是非。この芸術祭は文化交流が目的ですから、いつか実現できるよう俺もこれから頑張ります」

響と鮫島は再び握手を交わしそこで別れた。

電話ボックスまで歩くと、鮫島の妹が電話を終えて出てきた。妹は響に軽く会釈をし、「さっきのピアノ、ほんと、素晴らしかったですよ！」

と、ひとこと言って兄の背中を追って行った。響はしばらくその背中を見送り、空いた電話ボックスの扉を開けた。

東京――。

夕方、ヒカルが勤め先の幼稚園から戻ると、隣の家では颯土が自宅の駐車場に車を停めている最中だった。家の前の道幅が狭いため車の出し入れはかなり難儀であり、免許を取ったばかりの颯土はいつもヒカルの家の門の前まで占領しながら四苦八苦している。

「あー、ぶつかるよ！ダメだよ、それじゃあ！」

ヒカルは小走りに車に近づき、颯土に指図した。

「ハンドル、こっちに切るんじゃない？」

「うるさいなあ！免許も持ってないくせに」

「だって、危ないんだもん」

「お前が横からごちゃごちゃ言うから、余計に入らなくなっただろ！」

「あたしのせい？違うでしょ、それ！」

「気が散るからちょっと離れててくれる？」

ヒカルは仕方なく車から離れた。そして、黙って見守ること数十秒――。

「まったく、倍の時間がかかったぜ...」

ようやく駐車に成功した颯土が車から降りてきた。ヒカルもやっと自分の家の門に入ることが出来、いつものようにポストを覗いた。

夕刊が入っているだけだった。

ヒカルは肩でため息をついて夕刊を抜き取った。垣根ごしにヒカルのそんな様子を見ていた颯土は、

「やっばさ、あの写真がまずかったんじゃないか...？」

と、笑った。

「だとしたら、颯土くんの腕が悪いんだ！」

ヒカルは思わず反論してから、

「べ、別にヒビク先輩からの返事を待ってるわけじゃないよ、私は！」

と、いい直した。

「へえ？待ってないんだ？」

颯土は目を細めて意地悪を言った。

「ま...待ってないよお？へ...返事が欲しくて手紙出したんじゃないしい...」

「ふーん...」

「な、なによ？」

「いや、べつに...」

颯土とヒカルと一緒にテレビを見たあの日のニュースは、『ジャックの隠し子』が、取り巻く報道陣を振りきり、ついにひとりの記者を突き飛ばし地面に叩きつける瞬間映像が何度も繰り返して報道されていた。ジャック・ベリーの隠し子は手が早いプレイボーイで少しの評判に思い上がっている乱暴者だと、突き飛ばされた記者がインタビューでわめいていた。世界のジャックに隠

し子が存在し、しかもそれは日本人女性との間に生まれた息子で、その息子が海外で暴力沙汰を起こしあわや裁判にまで発展するやもしれない、ということで夜10時のニュースの海外コーナーは沸いていたのだ。

ヒカルはわずかに映った響の顔から響の苦悩を瞬時に悟った。父親が事故で意識不明、そして、スキャンダル。苦しいに決まっている。いつか響と一緒に楽屋を訪ねた、あの優しいジャックが意識不明の重体で10日もの長い間、生死の間を彷徨い続けているのだ。

『ヒビク先輩はそんな人じゃないよっ！何も知らないくせにっ！』

テレビでまくしたてる記者に向かってヒカルは叫んだ。

『私、どうしたらいい...？何もしてあげられないの...！？』

そう言いながら泣くヒカルを、颯土はただ抱きしめるしかなかった。

『手紙、出しちゃったよ。颯土くんが撮ってくれた写真も入れちゃった！』

颯土に事後報告があったのは3週間前のこと。

『写真を入れた？！3年も会ってない相手に？』

『だって...、あの写真なかなかよく撮れていたし...』

言い訳するようにブツブツ言いながらヒカルはうつむいていた。言葉で色々書くよりも一目瞭然だいろいろな意味で...、と颯土は思ったのだった。

だが、3週間経っても響からの返事は来ていないらしい。テレビで報道されていた内容を信じるはずもないが、それでもプレイボーイと言ったあの記者の言葉にヒカルが動揺していないはずがない。自分の写真を手紙に入れたのはきっと、ヒカルの精一杯のアピールだったに違いない。

「で、でも...、もしかしたら本当に...あんな写真入れちゃったからヒビク先輩に呆れられちゃったのかも...」

うう...自己嫌悪...、とヒカルは沈む。

「まあ、あの写真のヒカルはいい顔してたぜ？撮った俺が言うのもなんだけど今までの中じゃ最高のヒカルだったはずだ」

満開の桜の下でヒカルにカメラを向けた時のことを颯土は思い出す。

この笑顔をずっと守りたい。

ヒカルの想いを叶えたい――。

シャッターを切る瞬間にそう思った。それほどの笑顔だったから。

「...あんまり落ち込むなよな」

垣根越しに言って、颯土は自宅に入る。

「うん...。ありがと」

ヒカルは微笑んだ。

翌日。

ヒカルは朝からピアノの練習に励んでいた。明日の日曜日に幼稚園で行われる保育参観でピアノの伴奏をする役目が回ってきたからだ。

「何だってよりによってあたしかなあ...」

先生は4人もいるのだ。ピアノが得意な先生だっているのに...、とぼやきながらキーボードに向かっている。初めて保護者たちの前で弾くピアノだ。間違えたりなどしたら、たちまち『ヒカル先生はピアノが下手だ』という噂がお母さんたちの間に広まってしまう。

音量を一番下まで下げ、ヒカルは『手のひらを太陽に』を何度も練習したあとに、そつと『Shine』の楽譜を出した。去年の春から練習をはじめ、今ようやくつかえずに弾けるようになった。難しい記号の羅列も『Shine』に限っては理解できるようになった。だからといって、『手のひらを太陽に』がスラスラ弾けるかといったらそうではないのだが...

てのひらの楽譜を閉じ、『Shine』を弾く――。

『Shine』がこんなにも優しい旋律で綴られている曲だったなんて...、と、ヒカルは自分が弾けるようになった最近になって改めて知ったばかりだった。

卒業式の日、音楽室であかねが弾いた同じ曲は甘い旋律がせつなくて胸が苦しくなるほどだったが、今自分が奏でる旋律はただただ優しい。響の低い声が耳元で囁くいくつもの優しい言葉たち――そんな旋律に聴こえる。

「ヒビク先輩...」

今日は何故かこのメロディーが、よりいっそう心の奥に浸透する。甘くて優しいメロディーが、自分一杯に響き渡る。ヒカルは、自分で弾きながらこんな風を感じられるなんて奇跡に違いない、と思いながら音符を追っていた。

午前10時。階下で電話が鳴った。家族たちが誰も出る様子がないので、ヒカルは仕方なく降りて行った。リビングはしんとしている。母も久美子も哲平もいないみたいだ。

「はい、浅倉です」

ヒカルはコードレスの方で受話器を取りそのまま再び二階に上がる。

『ヒカル、オレ、オレ!』

受話器から聴こえた元気な声は海だった。

「海ちゃん？朝からどうしたの？」

『ばーか、こっちは夜なんだよ!』

あ、そうか。海ちゃんは今ニューヨークなんだ、とヒカルは思い出した。

『さっき公演が終わってさ、それでな、聞いてくれよ!』

海は凄く興奮している様子だ。声に張りがあり、生き生きして嬉しそうだ。

「何かとってもいいことがあったみたい？」

『兄さんが...、兄さんがはじめてオレを褒めてくれたんだ！みんなの前で、海、上出来だったぞ！って!』

「本当なの...？」

『嘘言ってどうするよ！』

電話にかじりついて自分に話す海の姿が目には浮かんだ。

「海ちゃん、やったね...！」

『『The sun in the rain』のおかげ...、ヒカルのおかげだよ！』

「なんであたし？私は何もしてないよ」

『オレはこの役、ヒカルをお手本にしてやったんだ。ヒカルならこうだろうって、こう輝くな、ってさ。気持ちがいつもヒカルだった』

「そんなぁ...」

『いつかヒカルが稽古場に来てくれた時のあの雰囲気、オレ、あの時に肌でわかったんだ。The sun in the rainの意味』

「うん...」

『兄さんの太陽になりたいって、ずっと思いながらこの役やりきって、やっと褒めてもらえた...』

海の声が鼻声になる。ヒカルもつられて涙が溢れた。

『オマエ、ほんと太陽だよ！毎日ヒカルになりきってて思ったぜ！』

「やめてよ、海ちゃん。私はごくごくフツの女の子だよ。きっとさ、誰もが心には太陽があるんだよ。私じゃなくて海ちゃんの太陽が輝いたんだよ！」

『そっか...。オレ、また頑張ろうって...、もっと頑張ろうって思う』

「うん...」

『じゃあな！帰ったらまた電話する。おやすみ！』

海はそう言って電話を切った。

「おやすみって...、こっちは朝なんだって...」

でも嬉しいね、海ちゃん...と、ヒカルは沈黙した受話器に向かって呟いた。『ロミオとジュリエット』から1年半。相変わらず鮫島には怒鳴られながら稽古を積んできた海だった。ヒカルをモデルにした（と、ヒカル自身は思ってないが）『The sun in the rain』は、日本では既に公演済みで、芝居の内容も役者の海も高い評価を受けている。だがやはり鮫島から海への褒め言葉はなかった。

「海ちゃん、ニューヨークのお客さんを前にしても、きっと堂々と等身大で演じたんだね...」

ヒカルが思わず涙ぐんだその時、手に持ったままのコードレスが再び鳴った。

「はい、浅倉です...」

涙声のまま、ヒカルは電話に出た。

息を呑みこむような間の後に、

『ヒカルか...？』

低い声が囁いた。

どくん――。

心臓が大きく跳ね、低い声がヒカルの体中を光の速さで駆け巡った。

胸の中で『Shine』のメロディーが響く。走る。こだまする。

――ヒビク先輩……！

まだ何も話していないのにもう涙が溢れていた。

『…手紙、サンキュ…』

響の声が命に染み込んでいった。それは、深い海の中で抱かれているような感覚。せつなく、甘く、優しく――。

声が出て来ない。言葉にならない。

『幼稚園の先生になったんだな…。ヒカルらしいよ』

ヒビク先輩！と声に出して叫びたいのに言葉が喉に引っかかっている。今声を出したら、おもいきり泣いてしまう。

ヒカルはただ、嗚咽を漏らすだけの返事を返した。

『ヒカル？聞ってるか…？』

響が不安気な声で言った。

――聞ってる、聞ってるよ…！

ヒカルは何度も何度も頷いた。

響は、電話の向こうで何度も頷くヒカルの気配が分かった。目を閉じるとヒカルが今どんなふうに自分の電話を受けているか目に浮かぶ。

「…ごめんな、ヒカル――」

響は呟いた。

ごめんな、ヒカル、と呟いた響の声は昔と変わっていない優しい響きだった。

「――…ヒビク先輩」

やっと声になってヒカルは響の名を呼んだ。だが、次に出す言葉が浮かばない。ただただ、胸の中で鳴り続ける旋律と同じ優しい声に包まれて、受話器を強く耳に当てたまま立ち尽くすだけだ。

『ずっと便りをしなくて、ごめん…』

うん、とひとつ頷いてからヒカルは言った。

「私、もう先輩に忘れられちゃったんだって思った…」

言いながら、ヒカルの声は涙声に変わっていく。

「あんな写真も送っちゃって、先輩に呆れられちゃったのかもしれないとも…」

『そんなはずないだろ…！』

響が電話の向こうで叫んだ。

『ヒカルのこと、忘れたことなかったぜ...』

「...ほんとかなあ？」

『俺がヒカルに嘘を言ったことあるか？』

——ない。先輩が私に嘘をついたことは一度もない。本当のことも、言ってくれなかったけれど...

——ヒカルに嘘は言ったことなかったけれど、真実の想いも言葉で言わなかったな...。あの粉雪の卒業式に言えなかったふたつの言葉...

「...ヒカル、もう一度約束のしなおしをしてもいいか？」

響は耳に当てた受話器を抱きしめるようにして抱え目を閉じる。

——もう一度、あの約束を。そして——。

『約束のしなおし...？』

ヒカルが呟いた。

「...俺、ヒカルのところに帰るから...」

3年前の卒業式に言った約束と同じ。あの時は、ただそれしか言わなかったけれど...

「音楽学校のカリキュラムを終えたら、絶対にヒカルのところに帰るから...」

——だから、ひとつめの言葉——。俺の望み——。

「...俺を、待っていて欲しい」

——ヒカルを俺に縛ってしまう言葉を今、あえて...

「あと半年、待ってて欲しい」

響はもう一度ハッキリと言った。

さっきから何度も頷いているヒカルだった。喉に涙と言葉と3年分の想いが引っかかって言葉が出て来ない。

『ヒカル...？』

響が不安な声で名を呼ぶ。

——早く言わなきゃ。返事を言わなきゃ...！

「うん。待ってる...！」

——待ってるに決まってる。今までだってずっと待っていたんだから！

響とヒカルは長い間足りなかったものが満たされた瞬間を、電話線で繋がれたニューヨークと東京でかみ締め合った。遠くても離れていても、今ヒカルと響と本当にひとつに繋がった。これは風化などしない確かな約束。

「ありがとう、ヒカル。俺...、」

響がふたつめの言葉を言おうとしたとき、

『でも...、』

ヒカルのためらうような言葉が切れた。

「ん？どうした？」

ヒカルはすうっと深呼吸をしながら思った。今ここで言ってしまおう。ずっとずっと、言わな  
いできた望み——。

「もう...、もう、ただ待っているだけじゃいや！」

ヒカルは叫んだ。

「私、ずっと...、3年間ずっと待ってた。先輩からの連絡を待ってた。凄く長かった！」

長くて、寂しくて、泣きたい夜を幾度となく越えて、今、やっと...！

「これからのヒビク先輩の半年と私の半年と一緒に流れなきゃいや！先輩の夢、悩みや苦しみを私にも分けて欲しい！先輩と同じ想いで過ごしたい！先輩のこと色々知りたい！私のこともたくさん話したい！朝でも夜中でもいいからヒビク先輩の声が聴きたいの！」

3年の間、堰き止めていた想いが決壊したかのようにヒカルの口から流れ出た。

「ヒカル...、ごめん...」

ヒカルの想いの洪水を耳から全身に注ぎ込んだ響は、喉に込み上げる熱い塊を必死に呑み込み、言った。

「今日から...いや、今から一緒に生きよう。朝でも夜中でも電話をするよ。約束する...」

『絶対ですよ！約束破ったら...』

「破ったら...？」

『...ジャックさんに言いつけるっ！』

——...はっ...、ヒカルだな...。

「それは困る...！」

——困るよ、それは。だから、だから...、今、この一言を。

言えなかったふたつめの言葉、俺の想いを——。

「ヒカル、愛してる」

愛してる——。

初めて聞いた響の想い。

離れていた長い時間が埋まっていく。

昼も夜も想いつづけて、一度は諦めて、でも忘れられなくて、焦がれる想いで過ごしてきた3年の時が月が満ちたように。

「...やっと、言ってくれたね、先輩...」

また電話する、と、遠い国際電話が途切れたあとも響の言葉の余韻が耳に残る。『Shine』のメロディーと「愛してる」と言ってくれた真実の声がここに重なっている。

——やっと、やっと...！

ヒカルは受話器を握り締めたまま十何個のビービー弾をつかむと、まだカーテンが閉まっている向かいの窓に投げつけ、

「颯土くん！颯土くん、起きてっ！」

と、叫んだ。

「...ったく、朝でも夜でも騒がしい奴だなあ...」

颯土はベッドから起き上がり面倒くさそうに窓を開いた。向かいの窓に立つヒカルの顔が朝日を浴びてキラキラと輝いていた。

「...ん？」

輝いていたのはヒカルの頬をつたう涙だった。だが、今日の涙は明るい色をしている。

——こいつのこんな顔見たの久しぶりだな...。昔、風間先輩が隣りにいる時にはいつもこんな顔してたっけ...。太陽のように眩しくて、ひまわりのように大らかで、そして、美しくて...。

颯土には涙の意味がわかった。だから、言った。

「ヒカル、よかったな」

「え...？何で...？」

まだ颯土に何も言ってないヒカルは首を傾げた。

「顔...見りゃわかるさ！」

——こんな朝っぱらから叩き起こして、そんな顔見せやがって...。よかったな、ヒカル——。

届いたな、想い…。

いつか、自分が写したひこうき雲の写真が風景になって颯土の頭に浮かんだ。青空に伸びた一筋の線に、精一杯背伸びしていっぱい伸ばしたヒカルの両手。

しっかりと届いて。

そして掴んで――。

――ヨカッタ…ナ…。

ヒカルの真夏の太陽のように輝く泣き笑い顔を見つめながら、颯土は少しだけ寂しげに微笑んだ。

『きみにとどくまで～Dolce』完

『きみにとどくまで～Adajio』へつづく

## 番外編 見つけた。

---

今日は7月7日、颯士の誕生日だ。

ヒカルは海に付き合ってもらい、誕生日プレゼントを選びに新宿駅のファッションビルに来ているのだが――。

「.....颯士くんって、どんなのが好みなのかぜんっぜん分からない...」

今更ながらにそこに気づいたヒカルは頭を抱えた。

最初に見たのはデザイナーズのTシャツだった。ショーウィンドウでは少し派手めのプリントシャツとハーフパンツを着せられた美形のマネキンが、キマッタポーズを取っていた。確かにカッコいい。そのハンサムなマネキンにはよく似合っていた。

だが、顔を颯士に置き換えてみるとどうも違う。ファッションに無頓着な颯士は普段、ほとんど無地のTシャツに色あせたジーンズというのが定番だから想像できないというのもあった。

「ソージにはこんなチャラチャラしたシャツは合わないんじゃないか？」

という海のひとつことに妙に納得したこともあって、プレゼントにTシャツは却下した。

次に見たのはバッグだった。だが、やはりTシャツと同じような理由で却下となり、その次に見たシューズはサイズが不明だということでこれまた却下となり、歩き回るだけ歩いて足が棒になった時に、やっとヒカルは颯士の好みを認知していなかった自分に気がついた、というわけだ。

「ていうか、男の子にプレゼントなんかしたことがないし、そもそもどういふものを贈れば喜ばれるのかが分からない...」

高校生のとき、沖縄に行く颯士に餞別としてトランクスをあげたことはある。

でもあれはプレゼントとして選んだわけじゃなく、たまたまいつも行くコンビニに売っていたから思いつきで買っただけだった。確か、自分のことを「オラ」と呼ぶアニメキャラクターがプリントされていたトランクスだったが、あれが颯士の好みとは決して思っていない。その証拠に、あげたときはずいぶんと目を丸くし、絶句していた颯士だった。

「何をあげればいいんだろう...？」

「おいおい、ヒカルう...」

海はため息をひとつ吐いて、ちょうど目の前のブックショップにヒカルを引っ張って行った。

「ここでリサーチすんぞ！」

海がヒカルを連れて行ったのは、男子&男性専門の雑誌が並んでいるコーナーだ。棚にある数種類の雑誌の表紙をサラッと目でなぞり、海は参考になりそうな記事がないかを探す。

――って、海ちゃん！ぼよよんだよっ！ぼよよんっ！谷間が...っ。うぎゃ！こっちはモロじゃないの！

ヒカルは周囲にいる男子または男性たちと、並んでいる表紙がキワドイ雑誌を見比べながら海の肘を激しくつついた。

海は、ん？とヒカルに顔を向け、

「ここにありそうだぜ？ `オトコの本音！女の子からもらって嬉しいプレゼントトップ3、って書いてある」

と、ヒカルに一冊の雑誌を渡した。

が、ヒカルは、表紙にいる女性が艶かしい視線をこちらに向け、つややかな唇を突き出しているそれを手にする勇気は、さすがに持てなかった。

「い、いいよ、その本戻してよ！あたしには刺激が強すぎるっ」

第一、オトコの本音をオトコの雑誌に掲載して意味あるのか、それ！とヒカルは激しくツッコミも入れる。

「あはは。そういえばそうだな？女の子には言えない本音が書いてあるんじゃないか？」

海は可笑しそうに笑いながら、ためらいもなくその雑誌を開く。周囲の男子たちと同化し、堂々と違和感なく――。

――さ、さすがは、海ちゃん…。

リサーチは海に任せ、ヒカルはそーっとその場を離れ、入り口で待つことにした。

今日は颯土の二十歳の誕生日だ。

やっぱり何か記念になるものをプレゼントしたい、とヒカルは思った。今の、颯土に対する想いを伝えられるような、そんなものを――。

「女の子にもらって嬉しいプレゼントトップ1は、 `キミ自身、だった」

リサーチが終わった海は、ヒカルの耳元で唐突に内容を告げた。だが、言い方は海なりに優しく翻訳してある。

「えええっ!？」

「どうする、ヒカル？お前をソージにやる？」

「じょ、じょ、じょーだん言わないでよ！あげられるわけないでしょ?!」

ヒカルは真っ赤に赤面して、さっさと本屋を出た。海が続けてトップ2を告げようとしたが、それはもういい、と聞かずに、スタスタヒカルは先に行く。

「おい、なんだよ、せっかくリサーチしてやったのに…」

後ろで海がぶつぶつ言っているが、構わずヒカルは歩いた。そして、通りがかったアクセサリーショップの前で唐突に立ち止まった。

後ろをついて来た海がコン、とヒカルに追突し、いきなり止まるなよ...と文句を言ったが、ヒカルの目はある一点に向けられ、追突されたことも海の文句も気にしていない様子だった。

「見つけた！颯土くんへのプレゼント、これにする！」

ヒカルが手に取ったのは、星の形をしたキーホルダーだった。素材はシルバーで、ふたを開けると中に写真が入れられるようになっているロケットだ。握った手のひらにすっぽり収まるぐらいのサイズだから、普段持つのにもちょうどいい。

「7月7日は七夕だし、颯土くんに星のイメージは合ってる気がする。ていうか、これしかないって思った！海ちゃん、どう思う？」

「ヒカルがこれしかないって思うなら、それにすればいいんじゃないか？きっとソージも喜ぶぜ？」

「うん！これにする！すみません、これ、ください。プレゼントにしたいんです！」

早速ヒカルが店員にロケットを持っていくと、プレゼントにするなら記念の文字入れはどうかと勧められた。

「この紙に入れる文字を書いてください」

店員から文字入れオーダー用紙を受け取り、ヒカルは考えた。

――颯土くんへのメッセージ...

言いたいことはたくさんあるが、どんな言葉にしたらいいのかまとまらない。

恋人ならきっと、`I LOVE YOU、とか、`My Love、とか書くのだろうが、自分と颯土は恋人ではない。

――やっぱり、お誕生日おめでとう...ぐらいがいいのかな？

ひらがなとか漢字じゃちょっと格好つかないから、アルファベットを並べて。

ヒカルは用紙に、彫ってもらおうメッセージを書き込んだ。

Dear SOUJI

Happy Birthday 20th

From HIKARU

1995 7 7

「これでお願いします」

「はい。では10分ほど待っててくださいね」

店員はドリルのようなペンを持ち、ふたの裏側に文字を彫ろうとした。

だが、ヒカルは今書いたメッセージが、やっぱりどこかしっくりいかず、何かが足りないと思ひ、ちょっと待ってください、と店員を止めた。

足りないものは颯土への想ひ。

ずっと、言いたかった颯土への――。

「Happy Birthday 20thのあとに、カギカッコをしてカタカナで `アリガトウ、と入れてもらえますか？」

「え？アリガトウ？Thank Youじゃなくて？」

「はい。アリガトウがいいんです」

分かりました、と店員は文字を彫り始めた。

「ヒカルはソージに `アリガトウ、なんだ...」

店員の手元をじっと見つめながら海は感慨深げに呟いた。

「うん...。あたし、颯土くんには高校の時からずっとそう言いたいって思ってたんだ。隣にいてくれてありがとう、友達でいてくれてありがとう...。いっぱいありがとうって思ってる」

それは、`Thank You、では少し軽すぎて、`ありがとう、だとちょっと堅苦しい。だから、アリガトウ――。

今、見つけた。

颯土への言葉。

ヒカルは、それが、なんだかととても嬉しかった。

了

\*\*\*

むかしむかしのお話です。

村にオリヒメとヒコボシという名前のとても仲の良い夫婦が住んでいました。

オリヒメは機織で布を織り、ヒコボシは畑で牛を引いてふたりは一生懸命働いていました。

ところがあまりにも仲が良すぎた二人は、いつの間にか仕事を怠けるようになってしまいました。

神様はそんな二人のことを怒り、罰として天の川を挟んだあちらとこちらに二人を離れ離れにしてみました。

けれど、ふたりがあまりにも嘆き悲しむので可哀想に思った神様は、1年に1度だけカササギという鳥の案内で二人を出会えるようにしてあげました。

けれど、その日に雨が降ると天の川の水かさが増し、カササギは二人を案内することができません。

そういう年はオリヒメとヒコボシは逢うことができず、次の年まで天の川のあちらとこちらでお互いを想いながら待たなくてはならないのです。

\*\*\*

幼稚園の時、七夕にこんな話を先生がしてくれた。

その日に逢えないなら次の日に逢わせてあげればいいのにカササギも意地悪な鳥だな、と、子どもながらに思ったことを覚えてる。

そして、

――七夕...、織姫と彦星...、天の川...、サマーバレンタイン...。ぶわっはっはっ！！全然似合わないーっ！！

いつだったか、俺の誕生日をそう言って笑ったのは隣んちのあいつだ。

あの頃のあいつの、はちきれそうな笑顔が頭によぎって夜空に輝く天の川をもう一度見上げた。

巷じゃ今夜は七夕。織姫星と牽牛星が1年に一度天の川で逢うことができる日で、最近じゃサマーバレンタインとかって言うヤツもいるらしい。

七夕もサマーバレンタインも俺にはあんまり関係ないお祭りだけど、一応俺が生まれた日でもある7月7日だ。日付はもう変わってしまったけど。

さっきまで明かりが灯っていた向かいの部屋も今はもう真っ暗。

あの窓の向こうで、夜更かしが苦手なあいつは今頃もう夢の中に行っちまってるだろう。こんな風に、俺がいつまでも掌の中にあるものの余韻に浸ってるなんて思いもしないでさ....

1995年7月7日23時59分に向かいの窓から飛んできたものは星の形をしたロケットキーホルダーだった。

あいつはきっと、俺の誕生日を七夕にちなんでこんなものを選んでくれたんだろう。まさかあいつから誕生日プレゼントをもらえるなんて思ってもいなかった。

それよりも何よりも、さっきまで今日が誕生日だっていうことさえも忘れていた。昔からイベントに疎い俺だったけど、自分の、しかもハタチの誕生日を忘れてるなんて、いろんなヤツに老成してるって言われるのも仕方ないことだよな。

けど、この星のロケット。

ふたを開いたところにあいつからのメッセージまで刻まれている。

Dear SOUJI

Happy Birthday 20th

「アリガトウ...」

From HIKARU

1995 7 7

——アリガトウ...。

あいつに感謝されるようなこと、俺は何にもしてやってないのにあいつはずっと言いたかった言葉だった、なんてことを真顔で言いやがった。

——ずっとね、言いたかったんだ、私。高校の時からずっと。私達、親友になれるような気がしてた...。

親友——。

そうだよな。

俺とあいつは今までもこれからもずっと親友。それ以上でも以下でもない。

隣りに引越しのトラックがやって来た5年前の春から、少しずつ確実に積みあがってきた今の俺とあいつの日常だから。

ここに、あいつの名前が刻んであるのがくすぐったくて、そして風間先輩には申し訳ないような気がしないでもない。あいつはそんなことちっとも考えずにいるだろうけど、俺としちゃやっぱり胸のどこかが痛いのも確か。

昔から、いつも俺の傍にいて俺の傍で笑っているけど、あいつが想っているのは風間先輩ただひとり。3年近くも音信不通でいる風間先輩を心の底から信じて待ち続けている。

晴れた七夕の今日は織姫と彦星が天の川で出逢えたように、風間先輩からの音信を願っていた

だろうに俺の誕生日なんかを祝ってくれてさ。

あいつが織姫だとしたら牽牛はやっぱり風間先輩。俺は...カササギってとこか？でも、決して意地悪じゃない...だろう。ああ、意地悪なんかじゃないぜ？

あいつがそこで笑っているこの時間を永遠にするためには、今のポジションがベストだってこと。

これ以上を望んだら、そこからたちまち崩れてしまいそうだから...。

――ヒカル。

アリガトウって言葉、本当は俺が言いたいくらいなんだぜ...。

今、昔からのいろんなことが頭の中を駆け巡っている。

笑って泣いて喧嘩して過ぎてきた俺とヒカルの時間だけど、そこには必ず風間先輩の光も存在してた。

それは、これからもずっと変わらない。

風間先輩を想ってるヒカルがそこにいればいい。

さっき水月さんにだけは白状してしまったけど、たった三文字の言葉は胸の中に閉じ込めておくさ。

だからこのロケットには、ヒカルの想いが風間先輩に届けと祈りを込めてシャッターを切ったあの一枚を入れておく。

あの時の想いとあの時の俺が、これからもずっとヒカルの傍にいる俺だから。

――サンキュー、ヒカル。

大事にするよ。

ヒカルのハタチの誕生日、何か返さないといけないな。

◇

.....と、思いながらも、何を返したらいいのか考えつかなくて正直参った。

毎日のように街の中を見回しながらあいつに合うものを探してみているけれど、お洒落なものには疎いし流行もわからないし、`あんまん、`をやるのが一番喜びそうな気がするし。

あいつの誕生日は9月12日。

何でもない日だから教えても忘れられてしまうって、いつかあいつは言ってたけど、俺がこうやってしっかり覚えているのは...

――お前らしい日にちじゃん！

――あたらしい？ほんと？どんなところが...？

――9（ク）・1（イ）・2（ニゲ）。ク・イ・ニ・ゲ（食い逃げ）～！

――...ひっ、ひどいっ！それ、ヒビク先輩が言いそうな意地悪だっ！

俺の誕生日が七夕だなんて似合わないって笑った仕返しに言った`クイニゲ、だったけど、我ながら見事な語呂合わせだと思ったぜ。あの頃のヒカルはほんと、色気より食い気だった。

けど、今は――。

ガサツなところも煩いところも昔とたいして変わっちゃいない。

なのに、昔とは明らかに違ってる。何かが少しずつ変わっていく。

.....何て悠長に考えているうちに、あいつの誕生日はもう今日だ。いいかげん何かを思いつかないとヤバイ。

立ち寄った本屋でたまたま目が行った情報誌の表紙に、

[女の子がもらって嬉しいプレゼントベスト10！]

という見出しを見つけてこっそり開いてみた。

第1位には指輪が上がってた。

けど、これは俺があいつにあげちゃいけないものベストワンだろう。

第2位のペンダントは、昔沖縄に行った時の土産でやった。あの時は大サービスして風間先輩とペアーにしてやったんだ。

そして第3位は....

――花束....

俺があいつに花束なんて笑われそう。いや、絶対に笑われる。

でも、今のあいつにはきっと花束も似合うだろう。

俺としては....、いつまでも、あんまんが似合うヒカルでいて欲しいけどさ。

仕事の帰りに駅前の花屋に寄った。

花を買うなんて生まれて初めてだし、色とりどりの花の中からいったいどんなものを選べいいのか、花を買う理由を店員に何て伝えればいいのかさえもわからなかった。

――やっぱ、花はやめるかな....

と、弱気になったとき、

「どんなお花をお探しですか？」

奥にいた店員が声をかけてきた。

「どんな花って...、」

それがわからないから困ってるわけです。

しどろもどろの俺に、店員はニコニコと微笑んで、

「プレゼントですか？」

と、訊く。

「...ええ、まあ...」

「彼女さん？」

「.....はっ!？」

顔がカーッと赤くなったのが自分でもわかった。

「いや.....?! 彼女じゃないけど.....っ」

全身には冷や汗まで流れるしサイアク。

店員はますます目じりを下げて笑い、

「じゃあ...、薔薇で花束を作りましょうか。きっと喜んでもらえますから」

ショーケースを開いて淡い桃色の薔薇を手にして見せてくれた。

「...お、おまかせします...」

「じゃ、そちらにかけてお待ちください」

俺は案内された椅子に座り、店員の手の中で魔法のように出来上がっていく花束をじっと見ていた。

——もしも、あいつが俺の彼女だったら...、もっと器用にプレゼントも選べたかもしれないな...

指輪もペンダントも、本当は花束だって俺があいつに贈るもんじゃない。

今日はあいつのハタチの誕生日だ。

もしかしたら、風間先輩から何か連絡が届いているかもしれない。

いや、届いていてほしい。

あいつが一番欲しいのは、それだから——。

目ではぼんやりと店員の手先を見つめながら、頭の中で意識した言葉を並べてると、店員の手が俺の目の前までやってきて、

「こんな感じでいかがですか？」

出来上がった花束の確認を求めてきた。

「はい、いいです...」

薔薇の花オンリーだけのもので、すごく豪華に見えて、また照れくさくなった。

こいつをどうやって渡せばいいんだろう...？

まさか、あいつがいつもやるみたいに窓から向こうに投げるわけにもいかないだろうし、かと言って改まるのも何だし。

家路をたどりながら、こいつがヒカルの手へ渡す場面をあれこれ考える。

花束ひとつ買うのが渡すのが、これほどエネルギーがいることだったなんて思わなかった。

家の前まで来ると、たどたどしいピアノの音があいつの部屋から聴こえていた。

ヒカルが不器用に弾いてるのは風間先輩がヒカルに贈った曲だ。

あいつ、この曲が弾けるようになったら風間先輩に会えるって信じてるらしく、毎日練習しているけど、俺が聴いてる限りあんまり上達してないようだ。

それはそれで、俺にとってはいいのかもしれない。

けど、あいつは1日も早く弾けるようになりたいのだろう。そういう一途でひたむきな想いが奇跡を起こしそうで怖いような気もする。

――いや、奇跡は起こっていいんだ...ぜ？俺は意地悪なカササギじゃない。あいつの想いが届くことを一番に.....。

おふくろに花束を見つけてなんだかんだ訊かれるのも面倒だから、こっそりと家の中に入ってそそくさと部屋に上がった。

ピアノの音はまだ鳴り続けていたけれど、ビービー弾をあいつの部屋の窓にぶつけると、「颯土くんっ！」

すぐさまあいつが顔を出した。

毎日のことだけど、窓越しにヒカルの顔を見る瞬間は俺のどこかがうずく。

「あのさ...」

後ろ手に隠している花束を持つ手が汗ばんできた。

緊張しているようだ、俺。

相手はヒカルだっていうのに。

「どうしたの？」

「いや...、今日はヒカルちゃんの誕生日だなあ〜と...、」

言いかけると、全部喋り終わらないうちに、

「覚えててくれたのっ!？」

ヒカルは窓から身を乗り出して叫んだ。

「颯土くんのことだから、絶対に忘れてるって思ったた！」

「こんな強烈な日にちを忘れるわけないだろ？」

「強烈……？」

「…クイニゲっ！」

「…あっ！」

いつものように10の文句が飛んでくるだろうと受身態勢を整えたけど、ヒカルはプツと噴出してから笑い出した。

「そんなこと言ってたことがあったね～。ヒビク先輩が言うみたいな意地悪だって、あたし怒ったよね～」

今までとは違うヒカルの反応に少しだけ胸のどこかがきしんだけど、

「その…、ヒビクセンパイからは何か連絡あったか…？」

「ないっ！！」

と言って膨れた顔は昔のままのヒカルだった。

「…風間先輩はヒカルの20回目の`クイニゲ、がわかってないのかなあ？」

「最初から期待してない…。ヒビク先輩は今それどころじゃないんだもん」

そう言ってヒカルは微笑む。

ほんの一瞬、いつまでも変わらない想いで、ヒカルにこれほどまでに愛されている風間先輩に猛烈に妬けた。

けれどそれはすぐに沈めた。

「ヒカル…、あのさ…」

花束を持つ手に力が入る。

「ちょっと外に出て来いよ。そこの墨田公園で待ってるから」

「え？」

「先に行ってるからな！」

「え？何で？」

ヒカルの問いには答えずに窓を閉め、そのまま再び階下に下りた。

「あれ？颯土？帰ってたの？」

おふくろがりビングから顔を出したけど、そのまま外に出てヒカルが出てくる前に墨田公園に向かった。

◇

すぐに通りの向こうから走ってきたヒカルが、

「颯土くん、どうし…、」

全部喋らないうちに、後ろに隠していた薔薇の花束を顔先に突き出した。

「…これって？」

ヒカルは目を丸くして呟いた。

「受け取れよ」

「...花束？」

見ればわかるだろ。

「いいから受け取れって！」

「...颯土くんが花束...？あたしに...？」

やっと花束を手を取ったヒカルは、花に顔をくっつけるようにして見入った。

「可笑しいか...？」

可笑しくないよ、と言ってくれるだろうという少しの期待は当然裏切られ、

「うん。凄く可笑しいっ！！」

と、ヒカルは顔中を笑顔にして笑いやがった。

大いに予想はしていたけれど、ちょっとばかりショックだったのも否めない。

「これ、颯土くんが買ったの？何て言って買ってきたの？」

「...何だっていいだろ、そんなの...！」

「ダメ！教えて！知りたいんだもんっ！」

「やだね！100万光年ぐらい経ったら教えてやる」

「なにそれ...。でも、花束なんて凄く嬉しいよ！ありがとう！」

——その...、ヒカルのその笑顔が見たかったから...、照れくさい花屋にも行ったのさ。

「...こいつのお返しだよ！」

ポケットから家の鍵をつけている星のロケットを取り出してヒカルの目の前で揺らすと、今までケラケラ笑ってたヒカルは急におとなしくなった。

「あ...それ、使ってくれてたんだ...」

小さくうつむいた顔がヒカルらしくなく、俺はちょっと不安になった。

「あたりまえだろ？何で...？」

「だって、あれから颯土くん何にも言ってくれないから気に入らなかったのかなって思ってたんだもん」

——は？

「颯土くんの誕生日って七夕でしょ？それを見つけた時は、これしかないっ！って思ったんだよ？でも、あとで考えたら、颯土くんにはかわいすぎちゃったかなって...」

ヒカルは首をすくめて笑った。

「ちょっと後悔してたの。もっと違うのにすればよかったかなって」

「...普通、いちいち言わねえだろ...」

でも、コイツは俺の宝物。こんなこと、口が裂けたって言えねえけどさ...

「そうなの？男の子にプレゼントなんてあげたことないからわからなくて。でも、よかったよ！使っててくれて！」

月明かりの下で、太陽のような笑顔が輝いた。

見慣れているはずのヒカル笑顔は、俺たちが`親友、だからこそそのもの。

この笑顔はずっとこのポジションから守っていきたいというのが、偽りのないはずの俺の望み

。

でも――、

――風間先輩。

こいつの笑顔、俺が独り占めしてもいいですか？

こいつの声、俺が独り占めしてもいいですか？

こいつの全て、俺が。

先輩のヒカルは今日でハタチになりました。

先輩と一緒に祝ってやれない分まで、俺がここでこいつを…。

風間先輩。

早く帰って来てくれないと、俺、困ります。

凄く…、困るんです――。

親友って立場が俺にとってはたぶん永遠のポジションだろうけど、親友のままじゃつらくなる時がやって来そうだ。

いや、もうやって来ている。

でも今はまだ、ギリギリのところ抑えはきく。

まだ、風間先輩を想っているヒカルを見てられる。

だから…、

来年、天の川のふたりが出逢う頃までに風間先輩とヒカルが出逢えたら俺のポジションは永遠の親友のままでいい。

でも、もしも出逢えなかったその時は、胸に閉じ込めた三文字を解き放つ。

それまではこのまま胸の中で――。

「ハタチの誕生日おめでとう、ヒカル」

「ありがとう、颯土くん。こんな花束もらっちゃって…何か照れちゃうけどね」

「...だろ？俺もさ。だから、コンビニ行こうぜ？」

「コンビニ？」

「あんまん買いに！」

「...うんっ！」

——ヒカル。

す・き・だ——。

了

颯士が仕事の合間を縫って自動車教習所に通い、半年をかけて免許を取得したのは、ちょうどヒカルが幼稚園への就職が決まった頃だった。

今、群竹家は父親が単身赴任中であり、男手は当然颯士ひとりであるため、休日は母親の買い出しに車ごと駆り出されることもしばしばだし、そこにヒカルの母親までが便乗してくる時もある。

そんな時、母たちの買い物はやたらと長いから、颯士は母たちが大きなカートいっぱい荷物積んで戻ってくるまで、延々とした時間を駐車場で待つことになる。車の免許を取ってから、せっかくの休日に朝寝坊も許されずに買い出しに付き合わされる最近の颯士は、少々やさぐれている。オバちゃんたちの足になるために免許を取ったわけではない。だが、

「あら、だったらドライブに誘う相手でもいるの？」

こう言われてしまっては、返す言葉がない。

放っておけば、昼過ぎまで寝ているだけ、という休日の息子をよく知っている母親は、免許も車もひっくるめて有効利用させてくれているつもりらしい。

――勘弁してくれよ……。

ハタチの若者が、彼女ならまだしも、母親のアッシーになって終える休日なんて空しすぎる。所帯くさすぎる。若々しくない。

だが、「今度の休みは予定あるの？」と訊かれれば、そんなものはないのだから返答が曖昧になってしまい、ショッピングヘレッツゴー！となるわけだ。

そして、今日は休日。

寝起きに窓を開けると、外はうらかな春。

墨田公園の桜はもう満開も過ぎ、桜祭りも日曜日の今日がピークなのか、大勢の人がざわざわと動いている気配がここまで伝わってくる。

これでは、ぶらぶら撮り、も出来ないし、もちろんドライブに誘う相手などいないし、やはり今日も無理やりな親孝行で終わってしまうのか...とため息が出そうになったとき、ふいに向かいの窓が開いたので、颯士は思わずそのまま息を止めた。朝からため息を吐くと幸せが逃げるからダメ、とうるさく言うヤツがもうすぐ窓から顔を出してくると分かっているからだ。

「あれ、おはよう、颯士くん！いいお天気だね！今日は休みなの？」

おはようと挨拶を返したらいいのか、いい天気相槌を打てばいいのか、今日は休み？に答えればいいのか、寝起きの頭では考えられないから、颯士は止めたままだった息を吐き出しながら

、ただ、おお、とだけ答えた。

ヒカルはそのひとことだけで満足してくれたようだ。にっこり笑って話を先に進めた。

「颯土くんの顔見るの、ずいぶん久しぶりのような気がする」

「そうだったか？」

「そうだよ？あたしが幼稚園に初出勤した日に、あそこで写真撮ってもらって以来です」

ヒカルは窓から身を乗り出して、墨田公園を指差した。

が、ヒカルが言うその日は、まだほんの4日前の話だ。

「ねえねえ、今日は予定ある？」

予定...、と颯土は思わず窓の下を見た。視線の先にあるのは黒い車の屋根。

「あるといえばあるんだろうし、ないといえば全然ないし...」

「どっちなの～？」

ヒカルが呆れた口調で言う。

「とりあえず、今のところ予定は入ってない」

この後、階下に下りた途端に入るだろうけれど...

「じゃあさ、これから一緒に水月さんの珈琲を飲みにいかない？」

「マジ？」

頭の中で、キラン、と音がなった気がした。

これは天の助けなり！休日に予定を作ってくれた目の前のヒカルが太陽の妖精に見える。

「行く。絶対行く。何が何でも行く」

「ず、ずいぶん力入ってるね.....」

思わず、窓から身を乗り出していたことに気づき、颯土は、寝癖の頭をかいた。

「颯土くん、寝起きみたいだから30分後に出よう？桜祭りをぶらぶらしながら行こうよ」

「いや...、」

颯土は目線をチラリと下に向けた。

「水月さんのところには車で行こう」

「どうして?!車出して信号待ってパーキングに入れて...なんてやってる間に、歩いていけちゃうのに？」

ヒカルの言うことはもったもなのだが、隣んちのヒカルとぶらぶら珈琲を飲みに行く、というよりも、ドライブの方が、アッシーを断る理由の格好がつく。

「とにかく、車をここから出したいの、俺は」

「ふーん。どうして？」

首を傾げるヒカルに適当な理由で誤魔化し、階下に下りると案の定、母親が買い出しに付き合ってくれと言ってきた。

「今日は無理。これから出かけてくるから」

「うそー。今日は油とかお醤油とか買いに行きたかったのよ」

「.....それ、べつにどこでも買えるだろ？俺が車出さなくても」

「そうだけど、息子が運転する車で買い出しに行く、っていうのが楽しいんじゃないの」

俺はちっとも楽しくないんだけど...、と颯土は、さっき吐きそびれたため息を出した。

おもむろにガッカリする母親をその場に残し、颯土が家を出ると、ちょうど隣の家からヒカルも出てきた。もたもたしていて母が出てくると面倒だから、颯土はすばやくヒカルを助手席に乗せ、車を発進させた。

◇

水月の珈琲ショップ『Deja-vu』は、言問橋のたもとにあり、颯土の家からはほんの1kmほどの距離だ。

通りに面した小さな店にはもちろん駐車場などないから、200mほど離れたパーキングに車を停めた。

「ずいぶん短いドライブだったね～」

「いいの。車に乗れたかったの！」

ケラケラ笑うヒカルを横にして、颯土は少しバツが悪い。

それでも、母との買い出しよりも、たとえ1kmであってもヒカルとのドライブ、そして珈琲タイムの方が100倍も1000倍も有意義な休日になることだけは間違いない。

休日の朝の珈琲ショップに客はいなかった。

カウンターの中で、ドアに背を向けていた水月が、カランと鳴ったベルの音でこちらに振り向き、いらっしゃいませ、と声をかけてくれた。

「水月さん、おはようございます」

「おやおや、今日はおふたりお揃いで」

水月はにこにこ微笑みながら、いつもと同じ穏かな口調で言った。

「どうしたんですか？何か考え事でも？」

右手の人差し指をこめかみに当てたままでいる水月のポーズを見て、ヒカルが訊くと、水月は、ん？と訊き返し、

「ああ、すみません」

人差し指を放して笑った。

「サンドイッチ用の食パン、これで1日もつだろうか...と考えていたんですよ」

水月は細長い袋の中で、残りが3分の1ほどに減っている食パンをヒカルに見せた。

「私としたことが、ストックを考え違えてましてねえ。今朝、仕入れをしてこなかったのですよ」

今日は日曜でお客さんも少ないから大丈夫だと思うのですが...、と水月。

「颯土さんと私で行ってきませんか？ね？いいよね、颯土くん？」

颯土はひとこと、ああ、と答えた。

「他にも何かあったらササッと買い出しに行ってきますよ？私たち、今日は車で来たんです」

「いやでも...、おふたりに買い出しをお願いするわけには...」

水月は右手を振ってにこやかに遠慮の意を示す。が、ヒカルは当然、「気にしないでください。行ってきますから」と、にっこり笑う。

――やっぱり買い出しになるのか…。

そう、心で呟いて颯土は可笑しくなった。だが、ヒカルと行く買い出しなら…、

――全然オッケー。

「俺たちで行ってきますよ、水月さん」

「群竹さんもそうおっしゃってくださるなら、お願いしてもよろしいですか？」  
もちろんです、とふたりは同時に声にして、顔を見合わせ笑った。

◇

商店街のパン屋で食パン1本（二斤半）と、スーパーマーケットでたまねぎ、じゃがいも、レタスにトマト、そしてハムの買い出しを頼まれた颯土とヒカルは、パーキングからふたたび車を発進させた。

ふたりは先に、駐車場があるスーパーへと向かった。いつも、颯土が母をそしてたまにヒカルの母も乗せて連れてくるスーパーだ。

水月に頼まれたものは野菜とハムだけだったが、颯土はさっき母が油と醤油がどうの、と言っていたことを思い出し、ついでにそれらもカートに入れた。すると、ヒカルが、あれ？といった目を向けてきたので、颯土は、

「これは、自宅用…」

無愛想に説明した。

スーパーでの買い物はこれでお終いだから、ふたりはそのままさっさとレジに並ぶ。

今日は日曜市の広告デーらしく、レジは長蛇の列。混雑したスーパーで買い物などしたことがない颯土は、ややうんざりとした顔で、前に並んでいる人たちの背中を見つめていた。

その時、ヒカルがふいに言った。

「おうちの買い物にまで気が回るなんて…、颯土くんって、きっといい旦那さんになるね」

――は、はあ？！

「油とお醤油、本日の特売だって」

ヒカルが指差したレジ前の広告に、油と醤油の特売価格が大きく掲載されていた。

「マ、マジですか……？」

「颯土くんって意外と細かなチェックをしてるんだねー。びっくりしちゃった。私も、自宅用に油と醤油買って行こうかなー。颯土くんに負けてらんないもん」

何言ってるんだよ…、と、颯土が反論したときだ。

「あれ？群竹くん？」

後ろに並んでいた人から声をかけられ、颯土は振り向いた。ヒカルも一緒に振り向いた。

「やっぱり群竹くんだ。私、覚えていない？中学の時、担任をしていた…」

あっ、と颯土は声を上げた。

名前は思い出せないが、声をかけてきたのは、中学3年の時にクラスの担任だった先生だ。

「ずいぶんと雰囲気が変わったわね、群竹くん？」

先生は、にこにこ笑いながら、颯土とヒカルを見比べる。

「いや…、そうかな…、そんなことは…」

日本語になってないよ、ヒカルに小声で諭され、颯土は、うるさいなあ、と反論した。先生がくすくす笑った。

「この方は群竹くんのお嫁さん…？」

一瞬。

颯土もヒカルも硬直一一。

「……のわけ、ないわよねえ？」

「せ、先生！」

颯土は、隣でまだ固まったままでいるヒカルと、くすくす笑っている先生を交互に見て滑稽なぐらいに動揺した。

「ごめんね。ふたりがあまりにも楽しそうだからつい、言ってみたくなっちゃったの。私、ちょっとだけ心配していたの。あなたのこと」

レジが進んだので、颯土もカートを前に押し出した。ヒカルがレジ台に買い物カゴを乗せた。先生は、ふたりのその様子を見つめながら、

「ほんと、よかったわ。ここで会えて嬉しかった」

と一一、また笑った。

会計が終わってセルフ台で袋詰めをしていると、ふたたび先生が後ろから声をかけてきた。

「これ、ふたりにあげるわ」

先生が颯土に手渡したのは、商店街の福引券だった。

「5枚で1回できるらしいわよ？そこに4枚あるからあと1枚足して使って？」

いや…、と遠慮しようとする颯土を横に押しのけ、ヒカルは、

「ありがとうございます、先生！」

それを颯土の手から受け取った。先生はそのまま別の台に行ってしまったが、ヒカルは今もらった福引券の中にもう数枚を加えた。

「今、こっちも5枚もらったの。だから、あと1枚もらえれば2回引けるよ」

「福引なんてべつにいいだろう…。どうせ当たらないし…」

「ダメ！福引は乙女の夢なのよ！！」

オバサンの夢、の間違いだろう…と颯土はぼそりと呟いた。

パン屋で買い物を終え、ふたりはスーパーに停めてある車に向かう。ヒカルは辺りを見回しながら、時々人にぶつかりそうになって歩いている。パンを買って福引券を1枚もらえたので、2回の権利を得たわけだが、肝心の福引会場が分からないのだ。

「ガラガラ～って音、どこかで聴こえない？」

「さあ…」

燃えているヒカルに対し、福引なんてどうでもいいと思っている颯土の返答はそっけなく、ヒカルはややムツとした。

「特売の油とお醤油はすかさずゲットした主夫のくせに、福引に興味ないなんてどういうこと～？」

「しゅ、主夫?!冗談!あれは、たまたま!おふくろから言われてたの思い出しただけなんだよ!」

「ふ～～ん…」

ヒカルが疑わしげな目で颯土を睨んだとき、近くで、カランカランと勢いよく鐘が鳴る音がした。

「うそー!誰か当てちゃったの?!」

ヒカルが音がした方に向かって走り出した。

「あ、おい、ヒカル!」

どうやら福引は、スーパーの駐車場前で行われているようだ。

――買い出しで特売品買って、その上福引かよ…。

所帯くさい。

若々しくない。

けど――。

颯土は荷物を腕に提げて走るヒカルの後姿を見て笑った。

――あいつとだったら、こんなのも有り…だよな。



颯土とヒカルが福引会場を目指して歩いていると、自分の体よりも大きなクマのぬいぐるみを両手で抱えたオバさんとすれ違った。どうやら、さっきのランラン、はこの人だったようだ。

ヒカルは去っていくオバさんを振り返りながら、いいなあ...、と呟く。

あんなデカイぬいぐるみが部屋にあったら、それだけで狭いスペースが一杯になっちまうだろうに、と颯土は思うが、口に出すとヒカルにまた怒られそうなので、ただヒカルの後をついていく。

駐車場前に設置された福引会場。

ずいぶん盛り上がっているようなのに、箱を回すガラガラという音がまったく聴こえていない。人の山でどんな賞品が出ているのかも分からない。

「全然見えないよ...。どんな賞品があるんだろう？」

ヒカルは人山を掻き分けて、ずんずん奥に進んで行った。

――やれやれ...

そんなヒカルの勇ましい後姿から、颯土は高校時代のひとこまを思い出した。

購買部で、ハムカツパンをゲットするために、売り台を目指して勇ましく人山を掻き分けるヒカルをよく目撃した。だが人気商品は普通に買いに行っても買えるものじゃなく、もみくちゃにされ損が常。売り台にたどり着いた時には既に売り切れた後で、

「ええー？！」

と、ヒカルは購買部中に響き渡るぐらいの声で叫んでいた。

そんな時、颯土は遠目でヒカルの様子を、よくやるよ...と、半ば呆れ半ば感心しながら眺めていたが、そこにいつもどこからともなく現われたのは響だ。響は争奪戦に敗れたヒカルをさんざんからかった後に、既にゲットしてある自分のハムカツパンをさらりと与える。頑張りが報われずガツカリの極致にいるヒカルは飛び上がって大喜び。`ヒビク先輩、だーい好き、と、これまた大声で言葉にしていた。

「ん？」

今、人山の向こうで確かにヒカルの`ええー？、が聴こえた。

「あいつ、なにをひとりで騒いでるんだか...」

既に見えなくなっているヒカルの姿を探しながら颯土も人の山を掻き分けていくと、

「あ、颯土くん！来て来て！」

テントが張られた福引所の前にいたヒカルが、颯土を見つけて手招きした。

そのヒカルの手にはダーツが2本握られている。どうやら福引はガラガラ箱を回して玉を当てるのではなく、回転する丸板にダーツを投げるものだったらしい。2回分の福引券を係員に渡したヒカルは、2本のダーツをもらい、あと3人待って順番が回ってくるのだが――。

「あたし、これダメだよ。どうしても狙ったところを見ちゃうから目が回っちゃって…」

ガラガラが良かった…、とヒカルは口を尖らせた。

「あの1等賞品見てよ！」

テントの中に展示されていた1等賞品は電子ピアノだ。

「へえ～、すごいな」

「でしょ？あの電子ピアノは本当のピアノと同じタッチだっていうしちゃんと88鍵あるし…、あたしのおもちゃみたいなキーボードとはワケが違うんだよ。あれ、欲しい……っ」

ピアノのわけが違って、ヒカルのレベルが同じならあまり関係はないんじゃないか、と颯土は思ったが、これも口は出さないでおいた。

1等賞品だからさすがにダーツを当てるのは難しそうだ。直径50センチほどある丸板の赤い1等エリアはほんの2センチほどしかない。ヒカルは前の人たちがトライする様子を見ているだけで目を回してしまっただけ。

「さっきのオバさんがゲットしたぬいぐるみは2等賞品だったみたいだよー」

展示されている賞品の中で2等だけが抜けていた。

ちなみに3等は特選和牛、4等以下はしょうゆとか洗剤があり、その他はポケットティッシュだ。

とうとうヒカルの番が回ってきた。

颯土にバッグを預け、ヒカルは気合を入れて位置に立つ。

狙う場所は1等の赤。エリアはほんの2センチ。

丸板がゆっくりと回り始めた。赤がぐるぐる回る。

「ああ…。ダメ。目が回るう」

「狙ってるとかえって外すぜ？もう適当に投げろよ」

という、颯土の助言を素直に聞いて、ヒカルは勢いよくダーツを投げた。

が、

「はい、参加賞ですねー」

ダーツは素っ頓狂な方へ飛んでいき、丸板にあたりもしなかった。

「もう！颯土くんの言うとおりに適当に投げたら外れちゃったじゃないの～」

ぷーと膨れてヒカルは文句を言うが、本気で1等を当てようと思っていること自体無謀な話だ。

「今度は颯土くんが投げて！」

ヒカルは颯土に2本目のダーツを手渡した。

「俺?!」

「絶対に当ててよ?外したら絶好だから!」

「待て、無茶言うなよ!無理だから!」

「無理でもやるの!男でしょ?」

そんなふたりのやりとりに、係員のお兄さん、順番を待っているおばさん、ギャラリーの人たちが注目していた。

「おに一さん、彼女のために当ててやれ」

「ガッツリ当てて男の株を上げなさい」

「頑張れ!色男!」

当たるはずがないと思っているギャラリーたちは、にこにこ笑いながら無責任なことを次々に発言する。

「む、無茶言うなよ...っ」

第一、彼女じゃないし、株を上げたところでどうにもならねーし...、と颯土は心の中で呟く。だが、もしもこれが響なら、さらりと当てたりするのだろう。

ふと、さっき思い出していた購買部での光景が、また颯土の頭に浮かぶ。

――ヒビク先輩、だーい好き...か。

思わず、隣のヒカルを見下ろす颯土。

「なによ?」

「いや、べつに?」

「頑張ってるね、颯土くん!」

「.....」

――風間先輩はカッコイイよな。ほんと...。はっ。

勝手に妄想し勝手に気落ちする颯土は仕方なく位置に立つ。

丸板が回り始め、赤がくるくる回る。

「颯土くん、赤を見失わないで!」

「に一さん、頑張れ!」

「彼女にいいところ見せてやれー」

ヒカルと無責任な応援団に声援をもらい、颯土がいざダーツを投げようとしたとき――。

「当てたら彼女がちゅう~してくれるって言ってるよ!」

——ちゅ、ちゅうー？！

「あ、あたし、そんなこと言ってないっ！！」

「あっ！！」

ひとつのとんでもない声援に、ほとんど手が滑ったように颯土がダーツを投げたのと、ヒカルがそれを訂正したのと、ギャラリーたちの叫び声が同時だった。

颯土が投げたダーツは、丸板に深々と突き刺さったままぐるぐる回っている。

やがて、回転速度が徐々に遅くなり、完全に止まった時。

カランカラン～！！

係員が当たりの鐘を勢いよく振り鳴らした。

「えっ？！ピアノ、当たったの？！」

「うそだろ？」

ヒカルが目を輝かし、颯土が啞然とする。

だが、ダーツが刺さっているのは2センチの赤ではなく、さらに狭い1センチほどの白い域だった。

「おめでとうございます！！特賞、グアム3泊4日のペアー旅行券当選です！！」

係員が鐘を鳴らしながら声高らかに叫んだ。

「グ、グアムのペアー旅行券！？」

「特賞？！」

颯土とヒカルは顔を見合わせた。

「に一さん、やるじゃないの！グアム旅行当てちゃうなんてさー」

「カッコイイわあ～」

「ほれ、彼女！彼氏にちゅっとしてやれ」

ギャラリーたちの大拍手の中、颯土は係員から特賞の目録を手渡された。

◇

「これ...どうする？」

車に乗り込み、颯土はもらった目録をとりあえずヒカルに手渡した。普通だったら、特賞グアムペアー旅行券を当てれば喜んでしかるべき。

だが今、颯土は困っている。それはもちろん、これをヒカルとペアーで使うわけにはいかないからだ。ヒカルは颯土の彼女ではない。ギャラリーたちは勝手に盛り上がっていたが、たとえ1

センチエリアにダーツをぶち込んで特賞を当ててもヒカルに対して男は上がらないし、ちゅーがあるはずもない。ヒカルが欲しかったのは特賞ではなく1等の電子ピアノなのだ。

――特賞当ててもこれだもんな、俺…。

妄想の中にいる響にも及ばない間の悪さと、そんなことにひとりで落ち込んだりしてネクラもいいところだ。

「グアムかぁ。行きたいねー」

ヒカルは目録の中を確認し、本当にグアム旅行券と交換が出来るんだ、と目を輝かせた。

「行っちゃう？あたしと颯土くんで」

「……………」

人の気も知らないでまったく…、と颯土は心の中で呟いた。

一緒に旅行に行くというのは、商店街に買い物と一緒に行くのとはワケが違う。

「お前、本気で言ってる？」

「え？本気だけど？」

「……………」

――無自覚すぎるぜ…。

まったく男として意識されていないことを実感して、颯土はますますへこんだ。だが、これが自分とヒカルの当たり前の関係だ。そして、この関係だからこそこれから先も続いていける。

「ていうか、俺たちさっきから勝手に弾けてるけど、大事なこと忘れてるぜ」

「何？」

「水月さんの買い物をしてもらった福引券だったよな？勝手に福引やっちゃったけど、よかったわけ？」

あ…、とヒカルは口に手を当てた。

「とりあえず、旅行券は水月さんに渡そうぜ？」

まさか水月が私の券で勝手に福引して一、と怒るはずもないと分かっているが、颯土はあえて提案した。

「そうだね。それが一番いいね」

ヒカルは素直に納得し、目録を閉じた。

だが、水月はいともあっさりとおふたりで行って来てください、と特賞目録は受け取らなかつた。

話は振り出しに戻り…、

「これ、どうする？」

今度はヒカルが颯土に訊く。

「やっぱり、あたしと颯土くんで行っちゃおうよ？」

——出来るかよ、バカ。無茶言うな…。

「特賞が味気なくなっちゃうけど、換金して電子ピアノ買えよ。ヒカルはピアノが欲しいんだろ？」

「それはダメ。だって、これは颯土くんが当てた賞品だもん！」

颯土の提案を、ヒカルはすぐさま却下した。

「さっきの颯土くん、カッコよかったよ！あたし、見惚れちゃったよ。もしも彼女だったら、みんなの前でちゅーしてたかも！」

「うえっ?!」

あはは、と無邪気に笑うヒカルだが——。

——勘弁してくれよ…。

この隣人は無茶ばかり言う。

「人の気も知らないで…」

「ん？何か言った？」

いいや、と颯土はため息を吐いた。もう夕方だから、ひとつぐらいのため息を吐いてもいいだろう。

「でもさ、よく考えたらあたしも幼稚園があるし、颯土くんも忙しいし、グアムなんて行ってる暇ないよね」

「……そうだな」

だから換金して…、と颯土が言いかけると、ヒカルは、

「じゃあこれは、颯土くんのおばちゃんにあげよう？たまには単身赴任のおじちゃんと旅行に行ってもいいんじゃない？」

「……親父とおふくろで？」

「うん。もうすぐ母の日だし。ね？そうしよう？」

もうそれが一番落ち着くな、と思った颯土は、ヒカルの厚意を素直に受けた。

そして。

特売品の醤油と油、そしてグアムのペアー旅行券を息子から差し出された母は、

「……いつの間にか颯土もこんなに優しい子になって…。ヒカルちゃんのおかげね。颯土、ヒカルちゃんに早くプロポーズしちゃいなさい」

と、涙目になってのたまった。

一人の気も知らねえで、どいつもこいつも無茶言うなっ！

了

今、届いたばかりの花の束を愛しそうに抱え、その香りの中に顔を埋めるようにして目を閉じる父。

ついさっきまで、明日のニューヨーク芸術祭、そのステージに立つ自分にあれこれと細かいアドバイスを、やや厳しい顔つきで話していたというのに、ビリーが花束を抱えやって来て、その贈り主の名を告げた途端、父は芸術祭のことなど忘れてしまったかのように、花と父だけの世界の中に飛び込んでしまった。

花束の贈り主は母、ユリだった。

死のふちから生還した過去の恋人、そして響の父親であるジャックに、見舞いの花を贈って来たのだ。

「この花は、街の花屋から届いたんだらう...？」

響がビリーに小声で訊ねると、

「もちろん、そうだよ？」

という返事。

フラワーネットワークを介して届けられた花は、母が育てたものでも見つくりったものでもないのに、まるで愛しい人そのものを抱きしめているような父を見ていて、響の方がむず痒い。

だが、そんな父の母への想いを今ここで改めて知った時、それは自分が未だ連絡もせずにいる人への想いと重なり、響の胸の奥が熱くなった。

「なんだか妙に居心地もよくないから、僕はこれで失礼するよ...」

「じゃ、そこまで送っていくよ...」

視線のやり場に困ったビリーが退出し、響もそれに続いて病室を出た。

ビリーを玄関で見送った響がしばらくして病室に戻ったとき、正面の窓の外が紅くなっていた。父は花束をベッドに座った膝の上に乗せたまま、真横の窓からその夕焼け空を眺めている。

響は父のベッドに近づき、窓の正面に立って父と同じ方向に目を向けた。

夕焼けの紅と、まだ微かに残っている青空が微妙に混ざり合った空のところどころは、ラベンダーの花が咲いたような模様を作っている。昔見た、同じような空とその時の情景が響の胸に浮かび上がった。

「これ、花瓶に活けてくるよ...」

強烈なノスタルジーに呑まれそうになり、響はその感情にストップをかけるようにベッドの上の花束に視線を戻した。すると、父は穏かな目をこちらに向けて言った。

「今日は夕焼けが見事だ。昔、キミの母と一緒にこんな空を見たことを思い出すよ」

「おふくろと...？」

うなづく父の目はどこまでも優しい。

「それはどんな時の夕焼けだったんだ？」

思わず響が訊くと、父は、ふっと目を伏せ答えた。

「私が夢を追い、旅立つ決意をキミの母に告げた時...。その時に、結局は果たせなかった約束をしたんだ」

「おふくろは何て...？」

「一番星を見たと言って笑っていた。新しい命のきらめきを見たような気がして嬉しかったと.....、」

そうか、あの時...、と父はひとこと呟いて口をつぐんだ。

「どうした、親父？」

いいや、と父は首を横に振るだけだ。呆然としているようにも見えるが、やがて父はもう一度、花束を手にしてその香りを命にまで染み込ませるように深く深く吸い込んだ。

恋人に遠くに旅立つと告げられたというのに、一番星を見て嬉しかったなどと脈絡のない話をしていた母は、やはり昔からの天然だったのか...、と響はやや呆れもした。

だが――。

――先輩、あっちには月も見えるし一番星も！

学校の屋上から、ヒカルと一緒に見たオレンジ色の空の中できらめいていたひとつの星。

遠くの空に向かってフェンスから身を乗り出すようにして星を見上げていたヒカルの黒髪に、気づかれなほほど軽くくちづけた`最後のデート、。

あの日、

いつか、自分のメロディをヒカルに届けるために、ちょっとだけひとりで頑張ってくるからと声に出さずに呟き、その風景と石鱗のようなヒカルの匂いを胸に焼き付けた。

明日は父、ジャック・ベリーの名代として、芸術祭のステージに立つ。

そこで奏でるメロディは――。

――明日、ヒカルのために、ヒカルだけのために俺のメロディを奏でるから。

どうか、君に届いてほしい――。

昔、屋上で見た夕焼けをこの空に重ね、響は明日のステージとその後の決意に想いを馳せた。

了

# 1

俺が初めてレコーディングエンジニア見習い生としてスタジオ入りをしたのは8月の半ば。小さなミュージカル劇団のサントラアルバム制作でミキサーのアシスタントをやらせてもらった。プロのミキサーってのがどんな仕事をどんなふうになしてるのか、2週間という期間の間にできるだけ吸収してやろうと、夏休み返上で力を入れるつもりでいたけど、ガラスの向こうのグランドピアノに座る人を見た時は足元から萎えちまうんじゃないかねえかと思うぐらいに力が抜けちまった。

「あ...、あかね...？」

思わずガラスに張り付いてグランドピアノに向かう横顔を確認してみたけど、ガラスの向こうでは真剣にリハーサルをやって俺の視線になんか気がつかない。

「彼女は...？」

「劇団が雇ったアルバイトのピアニスト。音大生らしいよ？」

高校時代の軽音楽部で2年間を共に活動してきた後輩...、俺が2年間ひたすら思い続けて卒業と同時にその叶わぬ想いを無理やり断ち切った相手が今、手の届く場所でピアノを弾いている。

ふわふわの甘い砂糖菓子のような雰囲気は高校時代のままだった。

ピアノの弾き方も、しなやかな指の運び方も音楽室で見つめていた頃と変わっていなかった。

けれど、もう素顔のあかねじゃない。

ほんのりと化粧をした顔は少女を越えた女の顔になっていた。

「群竹とはうまくいってる？」

再会していきなりそんなことを訊いちゃったのはだからなのかもしれない。

記憶の中にいた少女のあかねを女の顔にしたヤツが俺の知らない男じゃないことを祈った。だから、

「はい。おかげさまで」

笑顔で答えてくれたことにホッとした。

今さらもう、昔のような変なジェラシーなんて沸かないさ。あかねを想っていたのはもう過去の話だ。思い続けていたアイツと今もううまくいってるならこれ以上のことはない。告げることもせずに終わった俺の恋も報われるってものだ。

「でも、群竹くんは神戸の大学に行っちゃったから遠距離恋愛なんですよけどね...」

「そりゃ寂しいなあ」

あかねは頷いてから口元で微笑んだ。

その仕草ももう、以前のあかねじゃない。

制服を脱いでまだほんの数ヶ月だったのに女の成長は早い。たぶん俺なんか1年半前とちっとも変わっちゃいねーだろうに...、なんてことを考えてると、

「田村先輩は？彼女いるんでしょ？どんな人なんですか？」

と、訊かれて、丁度口をつけたばかりのビールがグビッと変なところに入り込んでしまった。

「彼女なんていないっすよお？相変わらず非モテな田村先輩です」

「嘘でしょう？」

「いや、ほんと」

「私見ちゃったんですよ？去年の秋、先輩が女の人とディズニーランドで仲良くデートしているところ」

――えっ...？

言ったまましばらく二の句が出てこなかった。

確かに去年の秋、ディズニーランドには行ったさ。

っていうか、

「何でその時に声かけねーのよ...」

「だって、知らない女の人と一緒にだったから。先輩たちとても仲良さそうでしたよ？あの人彼女さんなんですよ？」

邪気なく言うあかねに、忘れてた胸の痛みを思い出した。高校の時も何度もこんなことをあかねには言われたさ。小早川先輩とお似合いですよね、とか唯子ちゃんって可愛いですね、とか、あかねにそうやって言われるたびに、

――俺が好きなのはお前なんだぜ！わかってんのかよ？！

と、叫んじまいたかった。

あの時、自分の気持ちを優先してたら今頃どうなってたかな、俺たち。

あかねは一途に群竹だけを見つめてたけど、そんなの関係無しに奪っちまってたらさ...

いや、こんなことは今になってだから言える話であの頃はもちろん、そんなこと一度だって思わなかったぜ。たぶん...

「先輩？どうなんです？」

と、あかねは俺の顔を覗き込む。

「...ま、まあな」

正確にはディズニーランドに行った去年の秋は彼女だったけど今は違う。けど、あかねにそこんところは言わないでおいた。付き合ったのも別れたのも、俺にとっちゃあんまりいい思い出じゃない。本当に心の底から好きだった人を...諦めることは出来ても忘れることは出来ないってことを実感したのが彼女と付き合ってた去年の秋頃のことだったから。

何にしても、こんなところであかねと思わぬ再会が出来たことは素直に嬉しかった。

たとえあかねの傍に未だアイツがいたとしても、それが俺にとっちゃ昔から変わらない当たり前のあかねとの距離、先輩と後輩の関係なのだから――。

## # 2

今年の夏は異様な猛暑で、一步外に出りゃ一発で熱射病になりそうだけどそんな中で毎日スタジオに通うのが楽しみだった。あかねはアルバイトでピアノを弾き、俺は見習いのミキサーだけど、あかねのデビューアルバムを俺が作ってるってのは凄い話だぜ。だからもちろん力が入るし、いい音作ってやりてえと思うから先輩エンジニアの技から真剣に学びもする。あかねがここにいるってことが、見習いレコーディングエンジニアとしての俺にとってもでっかいプラスになってた。

けど、楽しい時間ってのは長くは続かない。

あかねは1ヶ月近くこのスタジオに通ってきてたらしいけど、俺は途中からの二週間。最初からこのアルバム制作に携わってりゃその分あかねとの時間も長くあったのに、レコーディングは今日で終わり。ってことは、あかねともまたお別れで今度いつどこで会えるかわからない。こんな偶然もそうそう無いからもう会えないかもしれない。

「やっと終わったあ…。長かったな」

っていう、何でもないあかねの言葉にチクリと胸を刺されつつ、しょーがねえことだと諦める。

けど、最後の今夜は…、

「これから晩メシでもどう？」

「すみません。私、これから神戸に行くんです。群竹くんのところに…」

……最後の最後まであっさりふられる田村くんです。まあ、俺らしいって言えばそれまでだ。

あかねにしてみりゃ、長かったバイトがアップした日は田村先輩と晩メシよりも群竹クんのところに飛んで行きたいだろう。これも当然のこと。なのに、この胸の痛みは一体なに？まるで高校時代に戻っちゃった感じだぜ？いや、下手すりゃそれ以上。

「あ…、そ、そうか。じゃ、また今度にしような…」

今度なんてありやしねえのに、そんなこと言ってまともにあかねの顔も見られない。

「またどこかで会えるといいですね。今度はヒカルちゃんも一緒に」

「あ、うん、そうだな…」

「先輩がいてくれて楽しかったです。ありがとうございました」

「あ、うん。いや…、俺のほうこそ楽しかったよ」

「それじゃ先輩、また！」

あかねはそう言うてくるりと回れ右して行っちゃった。やたらあっけない別れだった。もうあ

かねの心はここにはなく、既に神戸のアイツのところへ飛んじまってるようだ。また会えるといいですね、なんて優しいこと言ってくれたけどそんなのは社交辞令だろう。会いましょう、じゃなくて、会えるといいですね、だったしさ。

やっばここまでなんだよな、あかねとは。

卒業しちまった今となっちゃ、これからも偶然に頼った再会を期待するしかないのか――。

「あ...、あかね！ちょっと待って！」

一瞬後に、俺は無意識にあかねを追いかけていた。

ちょうどビルの玄関を出ようとしていたあかねが足を止めて振り返ったけど、何がしくて追いかけたのか、何が言いたかったのかわかんなかった。

「なんですか？」

あかねはふんわりと首を傾けて言った。甘いフローラルの香りが漂った。

「あのさ...、たいしたことじゃないんだけど...」

ここまで喋っても何が言いたいのかわからない。ただひとつ言えることは、このまま別れたくないってことだけだった。一分でも一秒でも、引き止めておきたいという、筋がとおらねえ我儘だ。

「田村先輩？」

「なんていうか...、困ったことがあったらさ、いつでも俺に言ってこいよな！」

口から飛び出したのはこんな芸の無い言葉だった。我ながら情け無し...

あかねは目を真ん丸くして俺を見てる。そりゃそうだ。こんなこといきなり言われたってコメントのしょうがねえだろう。困ったことなんてこれっぽっちもなさそうな、今のあかねだし。

「いやなに...、ほら、昔みたいにさ！あかねはいつも俺んところに泣きながら走って来ただろ？なんか...懐かしくてさ...」

「先輩...」

「...だから、全然たいした意味はないんだぜ？先輩として、いつまでもあかねのことは可愛いつて思ってる...、っていうか、親みたいな...ちょっと違うか...兄貴だな？いや...、だ――っ！何言ってるんだ、俺！」

ほんと、何言ってるんだよ、田村優作！言葉が行方不明ってのはまさにこのこと！自分で自分がわかんなくなっただいに混乱した。けど、

「先輩、ありがとう...」

そう言って笑ったあかねの笑顔がどこか儂げだった。俺がよく知ってるあかねの顔。群竹に待ちぼうけ食わされてたときのあかねの顔――。

「あかね...、大丈夫か？」

思わずそんな言葉が出ちまった。あかねはニッコリ笑い、

「それじゃまた！」

と、今度こそ玄関のガラスの向こう側、通りを横切って消えちまった。

### # 3

時計の針が進むに連れてどうにも落ち着かなくなった。足は帰路をたどっているはずなのに気持ちはどうしても東京駅に向かっちゃう。矛盾してるってのは十分わかってる。あかねは過去も現在もそして未来までもずっと群竹の恋人で、二週間前の偶然の再会がなかったら今日も俺はまっすぐ家路に向かい晩メシ食ってシャワー浴びてテレビ見て寝て...のいつもと変わらない俺だったはずだ。あかねのことも思い出さなかつただろうし、こんなにも全身が焼けつくような思いだっしてしなかつただろう。

たまんねえぜ...

高校時代のあの頃、2年間も自制できていた想いにどうして今さらこんなにも焦られる？猛暑だからってわけじゃねえよな...

「柏木、付き合えよ！」

ひとりでいるとおかしくなりそうで、高校時代のバンド仲間たちに電話をかけた。花の金曜日だったのにアメリカに行っちゃってるヒビク以外の全員が捕まったってのにどこかで癒された俺だ。

柏木直弥に松山太郎、次郎兄弟。

「相変わらずみなさん、非モテライフを送っているようで...」

と、チャカすと、おめーもだろ！と、松山兄弟ふたりが同時に俺の頭をはたきやがった。

こいつらとみんなで会うのは去年の暮れに忘年会をやって以来だ。卒業しちまうとやたらめったら集まれないから今じゃみんな音楽はやってないようで、柏木はひたすら文学の道へ、松山太郎はガラにもなくサーフィンやダイビングといったサークル活動に全力投球、弟の次郎は体育会系まっしぐら。こいつらとバンドをやってたことがずいぶん昔に感じる。

けど、こうやって集まれば高校時代のまま。俺たちの繋がりはやっぱり音楽室が一番深いもんだから話題も自然とそこへいく。そうすると当然出てくるのは、

「ヒカルちゃんとあかねちゃん、元気にしてるかなあ」

という台詞だ。

「あかねとは一緒に仕事してた。今日まで...」

「まじー？あかね、歌手にでもなったのかー？」

太郎がカラオケのメニューを見ながら間抜けなことを言ったんであかねとの再会のいきさつを簡潔にヤツらに説明してやった。

「じゃあ、あかねも連れてくりゃよかったじゃん」

と、脳天気なことを言う太郎だけど、それが出来たらおめーらは誘っちゃいない。

「あかねいい女になっただろうなあ？」

「群竹とはまだ付き合ってるの？」

飲んで歌ってのドンチャン騒ぎで何とか気持ちを落ち着かせようと頑張ってるってのに、話題がこれじゃ元も子もない。飲めば飲むほど酔えば酔うほど頭の中はあかねでいっぱいになっちゃまって。神戸でアイツと一緒にいるあかねを考えちまって。

「田村くん、それでか…」

柏木が言った。

太郎次郎の兄弟は歌を『ピンクレディーメドレー』に決めたらしい。ふたりで『ペッパー警部』をノリノリの振り付きで歌い始めた。そんなヤツらに適当な声援を送ってから、

「それでかって…何よ？」

と、柏木に返した。

「盆暮れ正月でもないのに誘ってきたりしてどうしたのかなって思ってたんだ」

「盆暮れ正月じゃなきゃ誘っちゃいけねえの？たまにはおめーらの顔も見てやろうかと思っただけなのにさ」

「好きなんだから、あかねちゃんのこと。高校のときからずっとだよね？」

「…何言ってるの。そりゃ昔はそうだったけどもう過去の話だぜ…」

柏木に誤魔化しは通じない。

そうとはわかっていてもここで認めるわけにはいかなかった。認めちゃったら止まらなくなっちゃう。やっと諦めて今日まで来たのに。あかねだって群竹と幸せにいるってのに。

「キレイすぎるんだよね、田村くんも風間くんもさ。好きだっていう想いをキレイにしまいすぎてるよ。高校のときから俺、そう思ってた」

と、柏木は言った。

「惚れるって透明なガラスみたくキレイなだけじゃないよ。付き合いたい、奪い取ってやりたい、抱きたいって気持ちが自然に溢れて当然だぜ？惚れてるんだからさあ、そうだろ？なのに、田村くんも風間くんもどこまでも相手のこと考えて自分の気持ちを伝えもしなかっただろ？」

ヒビクは最後の最後で決めたま。粉雪舞い散る卒業式に公衆の面前でヒカルを抱きしめてキスをして。

「傷つけることよりも傷つくことが怖かったんじゃないの？相手に想いを知られていなければ、たとえ叶わなくても自分の心が受ける傷は伝えて拒絶されたものの半分ぐらいだと思うよ」

「…柏木…」

グサツときた。

たぶん凶星だ。

高校時代に俺が伝えられなかったのは拒絶されるってわかっていたから。その現実を目の当たりにしたくなかったから。田村先輩、と頼ってもらえるポジションを失いたくなかったから。きっとこれが正しい。柏木め、ほんと痛いところを突きやがる。

「伝えないままキレイなままフェードアウトしちゃったから田村くんの中にあかねちゃんがいつまでも余韻として残ってる。だから、偶然の再会でフェードインで元に戻っちゃったってとこ

でしょう」

どうでもいいけどこいつの言うことは文学的すぎる。それこそ、本当のところはそんなキレイにまとまっちゃいない。理屈なんてわからないけど、今俺の中はあかねだらけだということだけだ。それもどろどろとした想いが渦巻いてやがってどうにもならん。

「俺が勝手に思ったことだけど、高校時代のあの時、もしも田村くんがあかねちゃんに想いを告げてたら、あかねちゃんは受け入れたんじゃないかと思うんだ」

「...なっ！？そんなことねえだろ！あいつは群竹一途だぜ...」

「確かにそうだったけど、あかねちゃんはいつもどこかで無理をしてたよ。無理をしながら一途になってた気がするんだ」

そんなのは俺だってわかってたさ。

けど、あかねは一生懸命だったんだ。一生懸命群竹を想ってた。俺じゃなく。

「あの頃のあかねちゃんはいつも心が迷子になってた。その手を時々引いてあげてたのが田村くんだったでしょ？でも、今はどうなんだろうね？群竹くんとは仲良くやってるのかな？」

「ああ、上手くやってるみたいだぜ？」

今、迷子なのは俺だろう。

こうなっちゃった想い、どうしたらいいのかわかんねえ。

けど、やっぱり俺は、

「あかねの気持ち最優先...」

これだけは変わらない。臆病なのかもしれないけど、アイツから奪うなんてことは考えちゃいねえよ。昔も今も。

「おめーら全然聴いてねえじゃん！」

ステージで『カルメン77』をまるで空手の組み手みたく絡み合っただけで踊ってたブラザーズが、俺と柏木に向かって叫んだ。

#### # 4

ヤツらと分かれ、アパートにたどり着いたのは午前2時になる頃だった。

ずいぶんと呑んじまった。

締め切っていた部屋は蒸し風呂のような暑さでシャワーを浴びたいところだったけど、酔いが回っちゃってもう目も開けてられない状態。とりあえず窓だけは全開にしてそのままベッドに転がった。その直後、電話が鳴った。

たった今転がったばかりなのにまた起き上がるのは面倒だった。こんな時間に電話をしてるのはろくなヤツじゃない。どうせ野郎たちからの夜通し呑みの誘いに決まってる。けど無視して鳴り続けるのは煩い。仕方なく受話器を取った。

「もしもし？」

相手は無言だった。何かを飲み込んだような微かな息遣いだけが聞こえた。妙に静かだ。

「...もしもし？」

いたずらかよ、と受話器を耳から離そうとした時、相手の声を聞いて全身に電流が流れた。眠気も酔いもその一声で一瞬のうちに消滅した。

「.....先輩」

「...あかね！？」

こんな時間にどうしたんだ、神戸じゃねーのかよ、群竹と一緒にじゃねーのかよ、と、頭の中では色んな言葉が駆け巡ったけど、それが上手い具合に口から出てこない。

「すみません。声が...誰かの声が聴きたくて...」

泣いているのを誤魔化しながら普通に喋っている、そんな無理をしているあかねの顔が見えたような気がした。

「泣いてるのか？」

微かな嗚咽。その湿った息遣いでいてもたってもいられなくなった。煙草に火を点けて気持ちを落ち着かせた。でないとまともなことを喋れそうも無い。受話器の中であかねは何も言わず、俺の言葉を待っている。

もう2時だ。

あかねがこんな時間に泣きながら俺に電話をよこすなんて普通じゃないだろう。どうにもならねえ何かがあって、`田村先輩、を頼って来たってことだ。高校時代そのままに....

フーッと煙を吐いて言った。

「話してみる。何があった？今、どこにいる？」

「神戸のホテルです...。群竹くんを待ってるの...。雨が降ってて街の明かりが消えて...でも、群竹くんは来なくて...」

思いついた言葉を整理しないままあかねは俺に話す。あかねが整理できない言葉を俺の方で繋げて飲み込んだ。群竹と神戸で会う約束をしていたのは明日、いやもう今日...とにかく昨夜じゃなかったらしい。あかねは群竹を驚かせたいがために一日早く神戸に行った。けど、ヤツはあかねから電話をする約束をした時間に寮にいなかった。ホテルで待っていると伝言したけれど未だに来ないし連絡も無い、ということらしい。

「ここのところずっとそう。まともに連絡がとれたことないんです...。この間まで1ヶ月以上も音信不通だった。電話をしてもいなくて、群竹くんから連絡してもくれなくて...。だから今日はどうしても会いたかったのに...」

そんなところまで行ってまでも待ちぼうけを食わされているのか。

昔からずっとだな....

待って待って、追いかけて待って。

――もう、いいだろ。そろそろ楽になれ。

そう、言いたかった。

けれど、あかねが欲しい言葉はたぶんそんな言葉じゃない。

迷子になっちゃってる心を元の道まで戻す道案内が欲しいんだよな。

群竹を信じて待っていていいんだという確信が欲しいんだろ？

「群竹を信じろよ」

言って胸が潰れそうだった。

「今夜はもう寝ろよな。明日になれば群竹はちゃんとあかねのところに来るさ」

「...はい」

安心したのか、あかねは素直に答えた。

「群竹に会った時、目に隈なんか作ってんじゃねーぞ？」

「あ、そうですね...」

「それじゃ、おやすみ」

「おやすみなさい...。夜遅くに、ほんとうにすみませんでした...」

そんなことはどうでもいいんだよ、あかね...。

「あかね、」

「...はい？」

「...俺は、いつでもお前の味方だからな」

いつでも、どんなときでもこれだけは確かなこと。その想いだけは伝えておきたいと思った。

「...ありがとう、先輩」

その声を最後に電話は切れた。

よくもまあ、カッコつけたもんだと我ながら感心する。これじゃヒビクのことをカッコつけ  
しい、なんて言えないぜ？

出来ることなら今すぐ飛んで行きたいぜ。そんでもって連れて帰って来ちまいたい。普通はそ  
うするだろ。さっき柏木が言ってたとおりだ。

けど、俺はあかねの `田村先輩、。

あかねが望んでるのは男としての田村優作じゃねえんだ。

— 人生悟りきった大人みたいだ。欲しいものは欲しいって素直にダダをこねろよ。

以前、こんなことを俺はヒビクに言った。

「素直にダダをこねられたら...、どんなに楽だったかなあ、ヒビクよお...」

今さら考えたってしょうがねえことだ。

高校生のガキだったあの頃にダダをこねなかったんだから、ハタチを過ぎた今頃になっては尚  
更だ。

だいたい、もともとの原因はアイツ—。

「頼むぜ群竹え、しっかりしてくれよなあ...」

ほんと、お願いします。

あかねをこれ以上苦しめてくれるな。

俺をこれ以上――。

眠れなくなっちゃった。

ラジオをつけて缶ビールを開けた。

窓辺の風鈴がちりん...と微かな音を鳴らした。

## # 5

電話が鳴る音で飛び起きた。同時に時計を見ると午前11時にもうすぐなるところだった。

「もしもし？」

相手は無言だった。何かを飲み込んだような微かな息遣いだけが聞こえた。

「あかねか！？」

昨夜耳にしたと同じ空気が受話器を伝って俺の心の奥まで浸透した。

「おい、あかね？どうした？今、どこにいる...！？」

受話器からは風の音や何かの騒音が混ざった騒々しい音がしている。室内ではない、街の中なのか、とにかくあかねはホテルの外から電話をかけてる。

「何か言えよあかね！どこにいるんだ?!」

ガチャリと電話は切れた。あかねはひとことも声を発しなかった。けど、電話が切れる直前に聴こえたのは、`新神戸ー新神戸ー、という低いアナウンスと電車が通る轟音だった。あかねは今新神戸駅のホームにいるということがそれでわかった。

あかねは俺に何を求めて来た？

どうしてこんな早い時間に新神戸駅にいる？

群竹はどうしたんだ？会えなかったのか？それとも会って何かがあったのか？

考えられるあらゆることを頭の中で巡らせながらとにかく着替えをすませた。そして着替えながら思った。

――.....俺はどうしたいんだ？

あかねがどうのじゃなく、俺は今...

「会いたい」

今、あいつの顔が見たい。  
ならばすることはひとつだ。

――東京駅で待つ。

アパートを飛び出してすぐさま東京駅に向かった。

新神戸のあかねが電話を切ったすぐ後に新幹線に乗ったとしたって東京に着くまでには3時間以上もあるというのにやたら気が焦った。8月も終わりだということに相変わらず太陽は照りつける。ギラギラ輝く光を直下に浴びながら、流れる汗はそのままにして走った。そう言えば神戸は昨夜雨だと言ってたが、こっちはもう何日降っていないだろう。どしゃーっと夕立でもあればいいのに、と思いながら。

東京駅のホーム。

新幹線は次々と到着し、また折り返していく。俺は新しい列車が着くたびにホームの端から端までを走ってあかねを探した。

そんなことを何度繰り返したか、いちいち数えちゃいけないからわからないが、真上にあった太陽も今じゃずいぶん傾いてきた。ホームを何往復もマラソンしている変な男をじろじろ見ているヤツのことも気になんかしちゃいけない。このまま日が落ちて夜になっても最終が着くまであかねが来るまで、同じことを繰り返すのみ。そう、肚を決めていた。

そして、夏の陽が翳った頃――。

ホームに立つ俺の目の前を徐行しながら通過したこの列車にあかねは乗っている、と思った。前から3番目の車両のデッキに立っている。はっきり見えたわけじゃないのにそう確信した。

だから迷わず3番目の車両めがけて走った。列車が完全に停まりドアが開いた時、思ったとおりのドアからあかねは降りてきた。

後から降りてくる乗客に押され、ふらふらとよろめきうつむきながら頼りなくあかねはこっちに向かって歩いてくる。そして、ほんの1メートル前まで来たってのにあかねは俺に気づきもしないでいる。しょうがねえヤツ、と思わず笑っちまった。

「おい、あかね」

声をかけると、いきなり名前を呼ばれて驚いたのか、あかねはおもいきり肩をビクッと震わせて顔を上げた。

けど、真っ赤になってるあかねの目を見た時、俺の中から笑いが消えた。

「田村せんぱい...」

信じられないといった顔で、あかねは俺を見つめてやがる。俺がここにいるのがそんなに不思議なのか？

「どうして...」

「電話から新神戸駅のアナウンスが聞こえてた」

「たむら、せんぱい...」

そのままあかねの目が潤みだしたんで俺は慌てた。あかねの手首をつかみ、ホームの真ん中、ベンチがあるところまであかねを引っ張って行った。

「わたし...帰って来ちゃった...」

「ああ。わかってるよ」

あかねをベンチに座らせて自動販売機から出した冷たい紅茶をあかねに差し出すと、あかねは素直にそれを受け取った。

「群竹とは会えなかったのか？」

あかねはううん、と首を振る。

「今朝ホテルに来てくれた。昨夜は寮には帰らなかったみたいで群竹くん...、女の人と一緒にだったみたいで...」

――何！？

「群竹くんが一旦寮に戻ってる間に、何も言わないでホテルを飛び出して来ちゃったんです...」

――冗談じゃねーぜ?! 群竹よお!!

...と、一時は爆発寸前になっちゃったけど、よくよく考えたらあの群竹があかねとの約束を違えて夜通し女と遊ぶようなヤツだとは思えない。っていうか、そんなヤツならあかねは3年間も惚れ続けてなかっただろう。あかねを泣かす群竹は確かに気に入らねーけど、アイツがどんな男かってことは俺だってわかってるつもりだ。

だから....

「お前、群竹が本当にそんな奴だと思っているのか？お前との約束をすっぽかして別の女と夜を明かすような奴だって、本気で思って帰ってきたのか？」

あかねは答えずただうつむいている。

「どうしてヤツに言い訳させてやらなかった？きっとわけがあったはずだ。あかねが、ちゃんと納得する理由があったはずだ。今からでも遅くないから、群竹のところに...帰れ！このままじゃお前たち、本当に終わっちゃうぞ?!」

待って待って、追いかけて待ったあかねの恋が、終わっちゃうぞ.....。

「...いいの。もう、終わりに...する...」

小さく呟いたあかねの言葉に、真夏だというのに背筋に冷たいものが走った。

「あ...あかね!？」

いいのかよ?! 誤解で終わらせていいのかよ?!

「昨夜の群竹くんのごことは私だって疑っていない...。でも...」

あかねはふう...と息を吐く。華奢な肩が一段とか細く見えた。

「田村先輩...」

「ん?」

「私、群竹くんの理想の女の子になろうって頑張った。ずっと高校の時から頑張ってきた。でも、もうダメ。私は...」

俺を真っ直ぐに見つめるあかねの目から大粒の雫がこぼれた。

「あかね...?」

スクッと立ち上がり、あかねは叫んだ。

「...私は、やっぱりヒカルちゃんみたいにはなれない!!」

「あかね...」

「ヒカルちゃんのような女の子になりたかった。明るくて強くて優しい女の子...。だから、ヒカルちゃんの真似をして生きてみた。ヒカルちゃんのようになれば...って頑張ってきた。けれど...!」

「...真似する必要なんかない。ヒカルはヒカル、あかねはあかねだ」

高校時代もこんなことを何度もあかねには言ったことがある。

「でも...! 群竹くんはずっと...、ずっとヒカルちゃんを...!」

「...群竹...が?」

あかねはヒカルに恋をしてるって言ってたこともあった。憧れるヒカルのような女の子になりたいと、あかねはずっとヒカルを目指していた。泣きたいときに泣かないで、笑いたくもないのに笑って、アイツを待って待って追いかけて一生懸命に。

俺はそういうあかねそのままでいいと思っていたけど、あかねがそれじゃいやだったんだ。そこまで自分を変える無理をしなきゃならなかったのも群竹のためだったのか...? 群竹がヒカルを...? そうだったのか...? あかねはそれを知りつつずっと群竹を待ってたのか...?

「ヒカルちゃんを見る目と同じ目で群竹くんに見つめて欲しかった。愛して欲しかった...! でも、やっぱり私は...」

「...わかった。もういいよ」

あかねの頭を俺の胸の中に抱き寄せた。

もう、限界だぜ、俺もさ...。

「よく...、がんばったな、あかね」

——よく頑張ったな、俺...。

「...田村先輩」

あかねの柔らかい髪をそっと撫でる。

フローラルが香る髪に顔を近づけ、その甘い香りを全身に浸透させてから俺は言った。

「俺はな、そんなふうに頑張っていたあかねが高校の時からずっと好きだったよ...」

もう後には引けない。

そのまま力の限り抱きしめた。

欲しくて欲しくてたまらなかった人。

ずっとアイツのものだった人を、今ここで俺がアイツから奪い取ってやる――。

「これからは俺がずっとあかねの傍にいる...」

この、たったひとことが言えないでいた高校時代が嘘のように、一度口に出してしまっただけもう止まらない。溢れる想いの洪水で溺れそうなくらい、愛しくて愛しくてたまらない。

俺の胸の中で息もしてねえんじゃないかと思うぐらいにじっとしていたあかねが、ずいぶん経ってからポツリと言った。

「...田村先輩の傍に...私がいいんですか...?」

「あかねがいいんだ」

「でも、私は...ずっと先輩の想いも知らないで...群竹くんのことを先輩に...」

あかねの涙声が震えていた。

「そんなことはいいさ。俺はあかねの頼れる先輩でいられたんだから。けど、これからは先輩じゃなくて...」

「でも...私...、」

あかねは混乱しちまったようだ。

群竹のどこ飛び出してきたばかりだし当たり前だろう。今すぐ返事なんて出来ねえだろう。そんなこと百も承知してるけど、もう引けない。たとえ拒絶されたとしても傷ついても、今ここで全部言っちゃまわないと。

「...俺は、あかねじゃなきゃイヤだ。たったひとりのここにいるあかねが好きだ。高校2年の時からずっとそう思って来た。だから...もう、」

二度と離さないぞ、という思いでさらに抱きしめた。強く。強く。

これまでの想いを全部込めて。

ハタチを過ぎてダダをこねたぜ。

欲しいものを欲しいんだと、偽り無くありのままに初めて――。

「ありがとう、田村先輩...」

あかねの腕が俺をそっと抱きしめ返してくれた。

「あかね...？」

あかねは黙って俺の胸の中に顔を埋めた。肩が震えていた。

――やっと、コイツを腕に抱くことが出来た...。

今頃になって実感した。

その実感をもっと味わうために、さらに腕に力を込めた。

あかねにとって、`田村先輩、から`唯一の男、に俺が変われるのはまだ先のことだろう。

群竹のこと、簡単に忘れることだってできやしねえよな。

でも、それでもいいさ。傍にいれば。

ゆっくりと時間をかけて確実に積み上げて行こう。

俺とあかねで歩いていくこれからの時間を――。

東京駅の新幹線ホームのど真ん中で、俺たちはいつまでも抱き合っていた。

了

あかねがピアノを弾き、田村がレコーディングを手伝ったミュージカルのサントラCD『青い鳥』。

今日は都内でその公演があり、田村とあかねはふたりで観劇に行き、当然CDも一枚ずつ購入した。

「おお。すげえ。ちゃんと水沢あかねって名前が書いてあるぜ？」

劇場のロビーで早速パッケージを開いた田村は、ライナーノーツを引っ張り出して感嘆の声をあげた。

「ヒビクよりも先に、CDデビューしちゃったな、あかね！」

「田村先輩ったら...」

レコーディング協力者として多数並ぶ名前の中に、ほんの小さく掲載されているだけなのに、自分のことのように喜んでいる田村がおかしくてあかねは笑った。

「CDデビューっていったって、私は本当にただピアノを弾いただけで、劇団員さんと面識さえもないんですよ？」

ミュージカルとサントラCDは完全に別物扱いで、今日のチケットも自腹だし、もちろんCDも自分で買わなければ手に入っていない。あかねはただ、本当にアルバイトでピアノを弾いた、それだけだった。

「それに...、ミュージカルもなんだか青い鳥っていうタイトルに合ってなかったし...」

「ま、それはそうだったなあ...」

青い鳥とくれば、幸せの、と前がつくと想像するが、今観たミュージカルは決してハッピーなものではなかったし、シリアスなのかコメディなのかも分からない、ようするに、意味が分からないものだったのだ。

「けどさ...」

田村はサントラCDをしみじみと見つめて呟いた。

「これがなきゃ、俺はあかねと再会してなかったし、再会がなけりゃ、今俺たちはこうしちゃいないんだぜ？」

「それは...、そうですね」

夏の東京駅で、高校時代からの想いを田村があかねに告げたのはひと月前だった。

そして、あかねが神戸の颯土にさよならの手紙を出したのは二週間ほど前のこと。

今はまだ、颯土への想いが整理できず、それでも傍にいてくれる田村に時々罪悪感を感じてしまうあかねだ。そして、そんなあかねを分かりきっている田村はいつも言う。

『群竹のこと、無理して忘れなくてもいいんだぜ？』

それから、

『高校の時から、群竹を想い続けるあかねを想い続けてきたんだからさ！あかねの気持ちがちゃんと整理つくまで、いつまでも待てるし、俺！』

こんな風にも言う。

そんな田村に、初めのうちは甘えていたあかねだった。

けど、それも今は少しづつ――。

CD『青い鳥』を眺めてニコニコ笑っている田村。その横顔を見つめるあかねには、穏やかな微笑が浮かんでいた。

劇場を出た外は秋――。

街路樹がうっすらと紅く色づき始めたばかりでコートはまだ必要ないがブラウスだけでは肌寒い、そんな夕暮れ時だ。

くっつき合わなければ暖がとれない、というわけでもないから、ふたりが並んで歩く間は30センチぐらいの間が空いている。それは、高校時代と変わらない。

それでも、どちらともなくその距離を縮め、ふとした弾みで肘と肘が触れてはまた放れる、そんな時――。

どこからか、祭囃子のような太鼓の音が聴こえて来て、ふたりは足を止めた。

「この奥から聴こえるみたいだ」

通りに面した奥に階段が続いている。その階段を、りんご飴や水風船を手にした人たちがチラホラと行き交っていた。

「お祭りみたい...ですね？」

「行ってみよう！」

言うが早いか、田村はあかねの手をつかみ、その階段を上り始めた。

階段の上には神社があり、祭囃子が境内いっぱいに響き渡り、多くの屋台が並んでいた。

「神社の秋祭りか」

焼きとうもろこしやたこ焼き、焼きそばの匂いが充満する中を、ふたりはしばらく屋台を覗きながら歩いていた。そして突然、手を繋いだままにふたり同時に気がついて、

「あ... はは」

「...あ、あの...」

と、ややうろたえた。

ずいぶんとぎこちないが、それでも30センチ開いていたふたりの間は今は15センチほどに縮まり、一旦放した手を再び繋ごうかどうしようか互いに迷ったまま、下げた手が触れたり放れた

りを繰り返しながら境内を歩くふたり――。

「おに一さん、おに一さん！」

声変わりを仕切っていない少年の声で呼ばれ、田村は、ん？と立ち止まった。

「どう？射的やっていきなよ！今ならちょっと粋な的があるぜ？お隣の綺麗なおね一さんにバッチリ似合いそうなさ！」

田村より頭ひとつ分小さな少年が、やたら大人ぶった口調で営業をかけてきたのは、射的の屋台だった。

「粋な的ってどれだ？」

田村は並ぶ的を覗き込んだ。すると、少年は真ん中にある小さなケースを指差した。

「あ・れ！中身は紅水晶のリングだよ？」

「紅水晶？」

田村とあかねは顔を見合わせて首をかしげた。

「なんだよ、おに一さん！紅水晶を知らないのかい？ピンクの石は、愛と美を育むんだ。そして紅水晶は女性の愛と魅力を高めて、女性を...、」

「あー、分かった分かった！！それ以上説明しなくていいよ」

あまりにも悦に入って愛と美の魅力についてを述べる少年に、聴いている方が恥ずかしくなった田村はその演説を途中で止めた。

「じゃ、やっていく？おね一さんにプレゼントしてあげなよ」

分かったよ...、と田村は少年から鉄砲を受け取った。

そして――。

「おに一さん...、もしかして射撃のプロ...？」

と、少年を呆然とさせた田村は、一発で`紅水晶、の的を撃ち抜き、その隣の`ポッキー、までも撃ち落としたのだ。

「射的は昔から外したことないの、俺」

ニッコリ笑う田村に、少年は`営業かける相手間違えちゃったよ...、と、ぼやいた。

「田村先輩、すごい！すごいです！」

あかねは目をキラキラ輝かせて感心している。

「持ってけドロボー。ちきしょーめっ」

少年は田村が射たものたちを手渡してくれたあと、次のカモ...、いかにもチャラチャラした男に今ならいい的があるよ！と営業をかけ、紅水晶についての演説を始めた。

田村は、そんな少年を横目で見て言った。

「は...っ、ガラス玉か」

そして、ケースの中から`紅水晶、を取り出して笑う。

「あかねの素敵な指に、こんなオモチャはプレゼントできねえよなあ」

見せて、とあかねがそれを手に取った。

「でも、これとっても綺麗です…。プレゼントしてもらっても…いいですか？」

あかねは田村の前に、スッと左手を差し出した。

「い、いや…。どうせなら、ホンモノをプレゼントしたいし…」

「じゃあ、それは誕生日にお願いします。それまで、私、この`紅水晶、をはめていたい」

田村先輩、カッコよかったから…、とあかねは、次のカモが的を外しまくっている射的場をチラリと見て笑う。

「そ、そうか…？」

田村は嬉しそうに、照れくさそうに鼻をかいたあと、

「では、謹んで…、」

ややかしこまって、あかねの左薬指に`紅水晶、をそっとはめた。

あかねも嬉しそうに頬を紅くして、左指を空にかざす。

神社の境内。

射的場のまん前。

りんご飴や水風船を手に行き交う人々の間に立って、ふたりぎこちなく笑いあう。

「ほらほら、に一さん、見てみなよ！あっちのおに一さんたち、幸せそうだよ～？どう？もう一回挑戦してみなよ！」

外しまくりのチャラ男とその彼女が、羨望のまなざしでふたりを眺めている。

射的場の少年の言葉にハッと我に返った田村とあかねは、そそくさとその場を去った。

「幸せの青い鳥に愛の紅水晶…、どっちも`もどき、だけど…、」

できればこれからもよろしくな、と田村はあかねに告げる。

「こちらこそ…、こんな私でよければこれからも傍にいさせてくださいね」

あ、はは…と、照れ笑いをして、田村は戦利品のポッキーをあかねに差し出した。

あかねは箱の中から一本を取って、それを田村の口の中に入れる。

ふたりの距離はいつの間にか0センチ。

しっかりと手を握り合っていた。

了

# 1

—あかねちゃん、田村先輩のこと本当に好きなの？

—これでいいの？

ヒカルちゃんにそう訊かれた時、ひとつの方にはすぐに答えを返せなかった。

8月のあの日、東京駅のホームで田村先輩の想いを知って、11月の今、私は先輩と一緒にいる。

神戸のホテルを飛び出して帰ってきたこともその後群竹くんの手紙を書いたことも自分で決めたことで、もしもあの日、ホームに田村先輩がいなかったとしても、群竹くんと恋愛に私は同じ結末を選んだ。そして、終わらせた恋の、群竹くんと一緒に通り過ぎてきた時間の重さに潰されて、今きっと笑ってはいなかった。それほどに群竹くんのことが好きだった。

それでも—、

東京駅で田村先輩が言ってくれたことを自然に受け入れられたのは、高校のときからいつも私のすぐ傍に先輩がいてくれた空気を、私自身が知って覚えていたからだと思った。抱きしめられたとき、田村先輩の想いがとろけるように全身の中にすんなりと溶け込んで来たから私はそのまま先輩の胸に飛び込んで行けた。まるで迷子になって彷徨っていた心が自分の家に帰りついたような不思議なキモチに包まれて、あの日の私はいつまでも田村先輩の胸の中にいた。

立ち直れなかったはずの失恋から私をすくい上げてくれたのは田村先輩。

二度と取り戻せないと思っていた自信を持たせてくれたのも田村先輩。

でも、だからこそ、これでいいの？という新しい心の迷い道に入り込んでしまった。

群竹くんと別れたからってすぐに田村先輩のもとへ、という自分が許せないと思った。

田村先輩の想いを素直に受け取ってしまうには、あまりにもそれまでの私は先輩に対して身勝手だった。群竹くんとのこと、高校時代から何度先輩に相談したかわからないよ。先輩のキモチ、知らなかったとはいえ、甘えてばかりいた私はどれだけの傷を先輩に与えてしまっていたのだろう？それでも先輩はいつだって全身で私を受け止めて見守ってくれていた。

「群竹のこと、思い出したってかまわないんだぜ？」

そう先輩は言ってくれた。

これ以上、心に無理はひとつだってするな、って先輩は言いながら私の傍にいてくれる。

でも、それは私だけじゃないよ。

田村先輩だって、私のためにどれだけ無理をしてきたかわからないのに。今だって無理しているはずなのに。

群竹くんのこと、全然思い出さないかって言ったら嘘になる。でも、田村先輩にそう言われるのはものすごくせつない。田村先輩の想いを失恋の傷を癒す道具なんかにしたくないよ。

8月のあの日から毎日のように、まるで散らばっていた思い出の欠片たちを拾い集めるようにひとつひとつ蘇る高校時代の田村先輩がいる。昨日より今日は先輩がもっと好きになっている。毎日新しく好きになっていくのに――。

ずっと、変わらない想いで私を見ていてくれた先輩の愛に、私はどうしたら応えられるのだろう…。

「珈琲でも飲んでいく？」

「うん」

ヒカルちゃんが駅の改札を潜るのをふたりで見送ってから、私と田村先輩は近くの珈琲ショップに入った。

「ヒカル、俺たちのこと何て言ってた？」

テーブルに着くと、田村先輩は少し照れくさそうに赤い前髪を触りながら言った。

「よかったねって…」

「そっか」

田村先輩は安心したように笑った。

本当はヒカルちゃんに言われたことはそれだけじゃなかったけれど。

――あかねちゃん、田村先輩のこと本当に好きなの？これでいいの？

――田村先輩は群竹くんじゃないんだよ？

田村先輩は群竹くんじゃないよ、ヒカルちゃん…。そんなこと最初からわかっている。

「なあ、あかね？今度の休日予定ある？」

田村先輩がちょっとわざとらしい咳払いをした。

「その日はピアノのレッスンです」

中学生の時からずっと個人レッスンをしてもらっている先生に、私は今もひと月に二回のレッスンを受けている。そのレッスン日が次の休日だった。

田村先輩は、

「…そっか」

と、呟いてひとりで含み笑いをしている。

「なんですか？」

「いや、昔あかねをデートに誘った時、今みたいな感じでふられたからさ、思い出しちゃって」

「田村先輩にデートに誘ってもらったことなんかありましたっけ？」

「やっぱ全然本気にしちゃいなかったのね…。誘いましたよ？」

あ…。確か…、

「しりとり特訓の頃…？」

「覚えてた？」

高校1年の時、演劇の発声がうまくいなくて悩んでいた私に田村先輩は「しりとり発声特訓」をしてくれた。昼休みの音楽室でみんなにはナイショの特訓だった。今思えばものすごく珍妙な特訓だったけれど、あのおかげで私は発声のコツをつかむことが出来た。高校のときは数え切れないほど田村先輩に助けってもらったけれど、たぶんあれがそのはじまりだった。

「覚えてます。牛乳屋さんで誘われましたね。でも、冗談だと思ったから…」

「今度また誘ってください、のゝい、！なーんてかわされちゃって、俺」

と、田村先輩は可笑しそうにあはたと笑った。

先輩とふたりでしりとり特訓をした3日間が蘇って熱い何かが込み上げてきた。

「でも、まあいいさ。あの頃とは違って、もういつでもあかねとはデート出来るし」

と、先輩は珈琲をすすって笑う。

「いいえ、先輩。レッスンは休みます」

「おいおい、いいって…」

「ピアノのレッスンはいつでも出来るから！」

これからはどんな小さなことでも、田村先輩がしたいと思ったことを出来る限り叶えたいって思った。もう、先輩に我慢をして欲しくない。

「そう？じゃ、どこに行きたい？あかねの行きたいところに行こう。映画でもコンサートでも」

「先輩が行きたいところでいいですよ？」

「いや、やっぱ記念すべき初めてのデートはあかね優先ってことで！」

そうじゃないと何か落ち着かねえ…と、先輩は頭をぼりぼりかいた。そんな先輩を見ていて思ったことがある。私と田村先輩の初めてのデートは…、

「…ディズニーランドがいいかな」

…え？と先輩は珈琲カップを持つ手を中途半端に止めて訊き返した。

「ディズニーランドですかい…？」

と、先輩はバツが悪そうに目を泳がせている。たぶん、去年の秋のことを考えているのだろうと思った。先輩が彼女さんと一緒に仲良くデートしているところを私が見ちゃったから。

でも、

「あかねはあの時…、」

田村先輩はいつもの優しい眼差しで私の目を見ながら言いかけた。

「はい？」

「いや…、わかった。ディズニーランドにしような」

どこか歯切れが悪く言う先輩が気になったけれど、

「あ、この曲...」

今まで歌謡曲が流れていたお店のBGMが知っている洋楽に変わって、私も田村先輩もその曲に耳を傾けた。

「ずいぶん懐かしい曲がかかっているなあ？」

「そうですね」

部活のバンドで演奏していた洋楽だった。

「この曲のイントロ、あかねのピアノと俺のギターで始まったんだよな」

「そうでしたね。私、この曲を知らなかったから先輩にCD借りたこと覚えてる」

洋楽音痴だった私は田村先輩からCDを借りて色々な曲を覚えてた。

「『変わらぬ想い』か...」

そう呟いた田村先輩が、どことなくさっきまでの先輩とは違うような気がした。

## # 2

ここに来たら、1年前のことを思い出してしまうのはわかっていた。

入場ゲートを潜ったその場で群竹くんは目を見開いて固まっていたことや、着ぐるみに握手してもらって戦慄してたこと、コチコチに硬くなって歩いてたこと、笑顔が引きつってたこと...

そして、私はそんな群竹くんの気を和らげようと、機関銃のように喋り続けて笑ってはしゃいで――。

――おバカさん...

1年前の自分がそこに見えた気がした。

らしくもなくテンションをハイに持ち上げて必死にその位置を保っていた。ここだけじゃない、いつだって群竹くんと一緒にいる時はそういう自分でないといけないって思っていたから。

「あかね、走るぞ！」

「え...っ!？」

言うなり田村先輩は私の手を引いてワールドバザールからシンデレラ城へと駆け抜ける。

「先輩...っ!？何で走るの？」

「時間がもったいないだろ！のんびりしてたら閉園までに全部見て回れないぜ？」

「全部回る気なの!？」

「とーぜんでしょ！」

完全に先輩のペースで私は連れまわされることになった。

先輩は、どのアトラクションでもその世界の中にはまり込んではいやいで、それがあまりにも大真面目だから、

「先輩、ここ、初めてじゃないですよね...？」

と、確認してしまった。

「12回目、ぐらいかな？」

「.....ネタ、思いっきりわかってるのにあのノリ出来るんだ...」

「だってここは夢の国、ファンタジーなんだから、そういう楽しみ方しなきゃ来た意味ねーじゃん？」

と、先輩は当たり前のように言う。

そして辺りも暗くなった頃、

「次、これ乗るぞ？」

と、私の腕を引っ張って連れてきた場所は、

「ダ、ダメです！私、ジェットコースターはダメなんです！」

スペースマウンテンだった。

「大丈夫！俺がついてっから！」

「でも〜...」

「ここにしがみついてキャーってやって欲しいなあ...」

って、腕を差し出しながら言われちゃったら、いやとは言えない。

これとまったく逆なことを、私は去年群竹くんに行って無理やりこの絶叫マシンに乗せた。その時の自分がまた見えた気がして苦しくなった。ダメなのに無理をして、足が震えているのに平気な顔をして、群竹くんにつまらない思いをさせないように頑張って、結局そのあと大喧嘩した。

何をしても空回りばかりしていたのは繕った水沢あかねを演じていたからだって、あの頃は気づくことが出来なくて勝手に傷ついていた。

「先輩と一緒に大丈夫かな...」

「おお！しっかり捕まえてやるから！」

「気絶しちゃったら介抱してくれます？」

「任せとけっ！.....って、そんなにダメなわけ？だったら無理しねーでもいいぜ？」

先輩は不安な顔で私の顔を覗き込んだ。

「...先輩は本当にこういう絶叫系って大丈夫なんですか？」

「俺は全然OK」

「嘘じゃないですか？」

「何で嘘つく必要あんの？」

と、先輩はハテナ顔。

「じゃあ、乗ります！」

——田村先輩と一緒になら…。

群竹くんとの思い出の場所で心の底からそう思いたかったから私は今日、先輩とここに来たの

。  
.  
.  
.

「あかね…ごめんなあ？マジでダメだったんだなあ？」

スペースマウンテンから降りた瞬間、私はその場で腰が抜けてしまった。

退場ゲートをひとりで歩くことも出来なくて先輩に支えられながら外に出て、ベンチに座らせてもらってからも胃がキリキリしてどうにもならなくて。でも、ありのままの私だと、こんなふうになっちゃうんだ、と変に嬉しくて。

「大丈夫ですよ。ちょっと休んだら治りますから」

「何か飲み物買ってくるよ」

先輩はすぐその売店を指差して駆けて行こうとした。それを私は、

「いいの。飲み物は今はいらないから…」

先輩の腕を掴んで止めた。

そして、先輩に隣に座ってもらってしばらくじっとしていた。胃は痛かったけれど、それ以上に心がいっぱい、田村先輩の腕が私の肩に触れている感触が嬉しくてたまらなかった。

「あの売店…」

さっき、先輩が駆けて行こうとした売店を指差して私は言った。

「あそこで去年、先輩を見かけたんですよ」

「…そう…か…」

先輩は鼻をぽりぽり。目はキョロキョロ。

「私、その時、ここで群竹くんとは大喧嘩してたんです」

「…マジ？」

ムツリの群竹とほにゃらんのあかねがどんな大喧嘩なんだ…と田村先輩は独り言のように呟いた。

「キッカケはたいしたことじゃなかったけど、もともとは私が原因」

「そうか」

「その時ね、田村先輩のことを思い出したの。田村先輩が私に言ってくれたこと」

「俺が？」

「あかねはあかねらしくしてればいいんだぜ？…って言葉」

ああ…、と田村先輩は空を見上げて呟いた。

「そしたらそこに先輩がいて、私声をかけようって駆け寄ったんだけど…」

ああ...一一、と先輩は目を泳がせてバツが悪そうに鼻の下をかいた。

「もう昔のままじゃないんだなあって思った。いつまでも先輩に頼ってられないんだって...」

「...俺は頼ってもらいてえな...」

田村先輩は私を見ずに言った。

ベンチの上で体育座りをして体を丸めた先輩は、さっきまでのはしゃいでいた先輩とは違う。

「んで、群竹とは仲直りしたの？」

「うん...」

よかったな、と先輩は言ったけど、その言葉が胸にチクリとした痛みをもたらした。

「1年前のことです...よ？」

「ああ...わかってる。けどさ、ここは群竹との思い出の場所なんだろう？喧嘩したままの思い出じゃ辛いじゃん？」

と、田村先輩は私を見た。

いつもの優しい眼差しだったけれど、その奥のほうで何かが翳っていた。おんなじ眼差しをつい最近も見た気がする。

「あかね」

「はい...」

先輩は私の前髪をそっと持ち上げて瞳をのぞきこんだ。じっと私の目を見る先輩が何を言おうとしているのかわからなくて不安になった。

「群竹のこと、思い出したいときに思い出してかまわないんだぜ...。あかねの心の中までは俺は縛ることはできないから」

「...田村先輩...」

「心の底から惚れた人のことは諦めることは出来たって忘れることは出来ない。それは俺が一番よくわかってるから...」

先輩は肩を丸くしたまま首だけを伸ばして辺りをぐるりと見回した。

「1年前さ、付き合ってた彼女とここに来た時、俺が何を考えてたかって言ったらお前のこと。彼女と一緒にいながら、手が届くはずがねえあかねのこと考えてた。そもそもその彼女と付き合い合ったのがお前を忘れるためだった。けど、諦めても忘れることは出来ないってことを思い知っただけだった。だから彼女とはここに来たすぐあとに別れた。あかねが見た俺は、もう腹の中でそれを決めてて、最後のつもりで彼女とここにいたんだ。傷つけちゃったよ、ものすごく一一」

先輩は苦しそうに、ひとつひとつを搾り出すように話す。

「だから、仲良く見えたのは俺の偽り。変なところ見られちゃったよな...」

一一と、先輩は膝を抱えてうずくまった。

田村先輩が今日、あんなにはしゃいでいたわけがわかったような気がした。

この夢の国は先輩にとってはただただ苦しい場所だったんだね...。

傷つけてしまった彼女のことと群竹くんを思い出している私と...、先輩は、今日の私に1年前の自分を見ていたんだね。

私は田村先輩を傷つけてたんだね…。

「田村先輩、ごめんなさい…」

丸くなってる先輩の背中にそっと手を乗せた。

「何であかねが謝る？」

先輩は目を丸くして私を見た。

「私、今日ここで何度も群竹くんを思い出してました…。そして…、」

「ああ。そうだって思った。さっきも言ったけどそれはいいさ。あかねの心の中はあかねの自由だ」

…そういうことじゃないのに、どうやって自分のキモチを伝えていいのかわからない。諦めることは出来ても忘れることは出来ない、そうかもしれないけれどちょっと違う。諦めたから群竹くんと別れたわけじゃないし忘れるために田村先輩と付き合ってるんじゃない…。

「先輩、私、群竹くんのことは忘れることは出来ないかもしれないけれど…、それ以上に…、」

それ以上に何なの？

言葉が見つからない――。

「どんなあかねだって俺はオッケー。何度も言うけど、俺がお前の傍にいることに変わりはないんだから」

「…先輩、違うんです。私は…、」

私の何もかもを全部まるごと受け入れて包んでくれている田村先輩を、私も全部包みたい。

でも、そのやり方がわからなくて。

「先輩、もう無理しないで……」

私のために我慢しないで。

ありのままの田村先輩でいて――。

「俺？してねーよ？」

田村先輩はそう言って笑った。

### # 3

12月は田村先輩の学校が忙しかったことと、私もテストやその練習などに時間を取られ、ほとんど会う時間がなかった。

だから、クリスマスはどうしたい？と先輩が訊いてくれたときは、どこに出かけていくよりもゆっくりとふたりの時間を過ごしたいと答えた。

田村先輩は、

「もう～、あかねちゃんったら！嬉しいこと言ってくれちゃって！」

と、顔中を真っ赤にして照れまくっていけれど、だってそれが私の素直なキモチだったから。

田村先輩のアパートに初めて招待してもらい、今日はふたりのささやかなクリスマスパーティー。

途中でプレゼントを買って、駅の改札を出ると先輩が待っていてくれた。

ジングルベルが鳴り響く商店街を一緒に歩きながら、お肉屋さんでお惣菜を買って酒屋さんでシャンペン買って最後にケーキ屋さんでクリスマスケーキを買った。

「おねーさんキレイだから口ウソクいっぱいつけとくよ！」

サンタクロースの洋服を着たケーキ屋のお兄さんがそう言って私にウィンクをすると、それまでただ隣に立っていた田村先輩は、

「あ、あかね、いくぞ」

と、変な低い声で言って、強引に私の手を先輩の腕に回した。

「何だよ、アイツ。色目使いやがって…。まだこっち見てやがるし」

「お客さんにはみんなあんなこと言うんだよ。クリスマスだもん」

さっさこの場を離れるぞ、と田村先輩は足早に歩く。

クリスマスの街でサンタになったケーキ屋のお兄さんにやきもちを妬く田村先輩。

そういうちょっとしたことがひとつひとつ、私の中に昔からあった田村先輩の場所に新しく積み重なっていく。

先輩の腕に回る手はそのままにして、足早な歩調に合わせて歩いた。

「…パンプキンハウス…？」

アパートの前に着いたとき、山吹色の、あまりにも可愛らしい外観と名前に思わず見とれてしまった。門の表札はかぼちゃの形をしている。

「ここが…田村先輩の…？」

何かの間違いじゃないかな、と思った。でも、

「そう。この103号室」

先輩は普通に言って私の手を引いてくれた。

「すごく可愛いアパート…ですね」

「そうだろ？」

ニコッと笑った先輩の顔、子どもみたいだなって思った。

外観とは違い、部屋の中はモノがほとんど置いてなくシンプルだった。真っ白な壁にモノトーンの家財たちが殺風景すぎて部屋の中に足を踏み入れることに一瞬のためらいを感じた。でも、壁際に立てかけてあるギターを見た時にそんな気持ちもどこかに飛んで行った。

「あのギター、高校の時に使っていたギターですね？」

「そう。ずっと使ってる愛用品」

ネックにぶら下がっているマスコットは、高校2年の校外学習で山中湖に行った時にお土産に買ってきた`赤髪のツッパリカエル、だった。赤い髪でつぶっているカエルくんが田村先輩っぽくて思わず買ってしまったものだったけれど、これをあげた時、先輩はすぐにギターのネックにつけてくれた。

「キミはずっとここにいたんだね...」

――ずっとここに...

「こんなちっこいテーブルしかないんだけどいいよな？」

先輩は小さな丸いガラスのテーブルの上に買ってきたものとグラスを並べた。それだけじゃなく、

「このフルーツポンチ、先輩が作ったの...？」

「ああ。上手いだろ？」

「林檎がうさぎだ...」

先輩はポリポリと鼻の頭をかいて、照れくさそうに目だけを動かして上を見て、はは...と笑った。

「これ、どうやってむくんですか？」

「知らねーの？最初に皮に切り込みを入れて普通にむくだけ」

どうしてそんなこと知ってるの...？と私は思う。

でも、カエルくんをずっと傍に置いてくれていたり林檎をうさぎの形にむいちゃったりパンプキンハウスに住んでたりする田村先輩が、またひとつ、私の中に積み重なった。

「あのケーキ屋サンタ、こんなにロウソク入れやがった...」

「ほんとだ...」

ロウソクは20本以上あった。

「どうするよ、これ？」

「せっかくだから全部立てよう？私が立てるから先輩は火をつけてね？」

「ケーキが見えなくなっちまいそうだ...」

先輩が言うとおおり、小さなケーキはロウソクで埋まってしまった。先輩が端からライターで火を灯していく。

先輩の骨ばった手が灯すロウソクひとつひとつの中に、高校の時から田村先輩との出来事が映って見えるような気がした。

「先輩、ゆっくり火をつけて。ひとつひとつの炎を見たいから...」

「ロウが垂れちまうぞ？」

そう言いながらも先輩はゆっくり火を灯してくれる。

購買部でハムカツパンを取ってくれたり、昇降口で慰めてくれたり、放課後の中庭で励まして

くれたり、ペットショップでサスケと遊んでたり、音楽室では……、20本のロウソクじゃ映しきれないぐらい私の中には田村先輩がたくさんいる。

「あかね、どうした...？」

全部の火が灯ったロウソクたちをじっと見つめている私に先輩は不思議そうに首を傾げながら言った。

「田村先輩を見てた」

「...俺？」

「このロウソクの中に、高校の時の先輩をたくさん」

「あかね...」

「先輩、好きですー」

は...?と言ったまま、田村先輩は固まって動かなくなってしまった。

そして、ずいぶんたってから目をパチパチとしばたいて、

「俺...？」

と、もう一度言った。

「田村優作さんが好きです」

「なな...、何だよ急に改まって...まったくもう...」

と言いながら、先輩はすぐ目の前にあったフルーツポンチから慌しく林檎のうさぎを手にとってシャリッと噛み砕いた。

「でも...、」

先輩は半分かじりかけの林檎を手にしたまま私を見て、

「あかねがそう言ってくれたの、初めてだな...」

と、照れくさそうに笑った。

そして、落ち着きなく半分の林檎を口に放り込んで、あかねにプレゼントがあるんだ、と言いながらローボードの引き出しからラッピングされた小さな四角いものを取り出した。

「私も先輩にプレゼントがあるんです」

先輩がくれたものと私が先輩にあげたものは同じ形をしていた。

ふたりで顔を見合わせながら包みを開けると、

「あっ」

「あれっ!？」

ふたりの手にあるものは同じCDアルバムだった。

『変わらぬ想い』や、高校時代のバンドで演奏していた洋楽のベストアルバムが最近発売された時、田村先輩へのクリスマスプレゼントにしようと密かに決めていたのだけど、

「俺も同じく...」

...だったらしい。

「...ま、昔からあかねとは音楽的フィーリングバッチリだったもんな...」

「そうでしたね...」

ふたりで顔を見合わせて笑った。

「でも、これじゃなんだか自分で買ったみたいな感じですよ？先輩にプレゼントあげたかったのに...」

「俺はこれで十分だぜ？十分だけど...」

先輩は、コホン、とわざとらしい咳払いをした。

「もしも他に何かくれるってんならもらう...けど？」

「何がいいですか？」

「ここにチュッと...がいいかな」

先輩は自分の頬を指差した。

目を閉じて差し出された先輩の頬を、ロウソクの灯がだいたい色に照らしている。

「...ダメ？」

先輩は片方の目をうっすらと開けて言った。

私は首を横に振り、

「目、瞑っててください...」

と、両手を後ろの床について頬を突き出している先輩の前に立った。すると、先輩はまた薄目を開けて私を見る。

「目...！」

「あ、ああ...」

ぎゅーっと両目を瞑った先輩の両肩に手を乗せて私はゆっくりと顔を頬に近づけて、

田村先輩の唇にキスをした――。

テーブルの上で20本のロウソクに映し出された過去の田村先輩が揺れている。

でも、全部の火に照らされた今の先輩が一番好き。そして、明日の先輩を私はきっともっと好きになっている。

ガクン、と体が揺れたのは、床について自分を支えていた先輩の両手の力が抜けたから。

先輩はそのまま全身脱力で床の上に転がってしまった。

「...大丈夫ですか...？」

「...ダメ.....」

転がったまま目を見開いてはあはあしている先輩の両手を引いて起こそうとした時、逆に先輩に両手を引かれ、私はすっぽりと先輩の胸の中に抱きしめられていた。

「なんてことしてくれるのさ、あかね…。心臓が止まるかと思ったぜ…？」

「だって…」

私を抱いたまま、先輩はフーッとロウソクの炎を吹き消した。

街のジングルベルは聴こえないけれど、先輩と同じ音楽を心の中で響かせたサイレントナイトの帳が下りる。

これからは、私だって先輩を抱きしめていきたい。

先輩が私にくれた、今までの優しい時間以上にたくさんのものをあげたい。

ずっと、傍にいたいー。

先輩の腕の中で甘い林檎の香りを全身に染み込ませながら、そう、思った。

了

きみにとどくまで 3 Dolce

<http://p.booklog.jp/book/78366>

著者：笹竹颯夜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/souya610/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78366>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78366>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ